

---

# 閃光のアシュマ 第四話 スコラ

高岡 佳史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

閃光のアシユマ 第四話 スコラ

### 【Nコード】

N5571F

### 【作者名】

高岡 佳史

### 【あらすじ】

アシユマ達一行は、オロ財団のTOPオロ・エバスよりスコラなる魔導法術専門学校が『七賢人』の息が掛かっているとの情報を得て、スコラに潜入。そこで繰り広げられる学園生活とイレギュラーナンバー『蜘蛛』との対決。スコラとは一体何なのか？アシユマと蜘蛛との決着は？陰謀渦巻くスコラの運命は？SF剣戟冒険アドベンチャー第四弾！デュエリストアシユマ『第四話スコラ』ただ今参上！

## 主な登場人物

### 主な登場人物

アシュマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシュマ・アトー・シヨアク・アシュオンと言う。

オリジナルナンバーと呼ばれるイムフレーレの残した生命体。

イムフレーレとは過去地球に訪れた来訪者。

年の頃は二十三丁四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

先のイルドリア武道大会で非公式ながら優勝し、世界の三指に入る程の剣の達人。

アーチエルとは恋仲。

アーチエル・ナヴィア・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れた様な桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと見まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形の様にと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

弱点といえば、戦いにおいて敵味方構わず、極端な程血を見るのと死人が出るのを嫌う。

やはり、イムフレレーレの残した生命体。

アシユマとは恋仲。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ナル・テルドリニアナと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今はこの銀龍で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮しまた、魔導機兵に乗らせれば右に出る者がいない程の腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨデイ・ヨフル

サイコ・フライヤー『銀龍号』の艇長。

年の頃は二十五、六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちをしている。

この若者普段は馬鹿な事ばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事

を言っでは皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ、身の丈程の大剣使いの少女である。顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れる筈である。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

エファール・マーヤ・ソーフア

年齢は二十三。

アシユマの事を好いているがアーチェルがいて思う様に手が出せない。

時には恋敵に塩を送る事もある。

剣の実力は折り紙付き。

玉に瑕なのが怒りに任せると周りが見渡せなくなると言う事。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えるよう。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スパイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あつて銀龍号にいて、ヨディ付きの間者になっている。  
皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目  
であるといって喜んでいる。

色々と重宝している様だ。

エドス・マニユア・アップルトン

レキシタニア王国の国王。

アーチェルの父。

エースティ・イーニア・アップルトン

レキシタニア王国の第一王子で第一位王位継承者。  
アーチェルの実兄。

キュポア・メロディア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチェルの実妹。

社交的な性格。

アン・デボン

アーチェルより三つ年上。

いわばアーチェルの姉的存在。

元々はアプルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチェルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチェルのお側にいられるだけで幸せらしい。

ルーラン・ナル・テルドリニアナ

ノリトレア王国国王。

実際はガルマインに仕立て上げられた偽りの王。

ひよんな事から銀龍に加わった者である。

顔かたちがオルバニアンに似ている物の線の細い美少年である。

ミカ・タキオ

アーチェルのスコラでの学友。

アーチェルと仲が良い。

サクラコ・セタ

アーチェルの御学友。

イーハン国の家老の娘。

リイナ・アナ

アーチェルのスコラでの学友。

エミル・フォルテ

アーチエルのスコラでの学友。

フェリア・ファソーイ

ノリトレアのファソーイ家の者。  
ルーランのパートナーになる。

ミス・ケリー・サトウ

スコラの教頭。  
規則に厳しい。

スチナ・アガネ

スコラの召喚士教諭。  
アシュマに想いを寄せる。

タルヤ・アガネ

スコラの生徒。  
アーチエルに想いを寄せるが……。  
スチナ・アガネの実弟。



ロミナ・アニタ

スコラの生徒。

アーチエルが来るまでは学園のアイドルNo.1だった。

オロ・エバス

汎用型電腦装置等の基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器等も取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一ドートネーゼと対等に渡り合っていける数少ない人間。

アリア・エバス

オロ・エバスの実妹。

オロはいたく彼女を可愛がる。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらうドートネーゼ、ネルファベーゼ配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

ネルファベーゼ四人衆の内の一人。

アシュマ最大のライバル。

ウルク

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。  
大剣遣い。

カフル

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。  
細身の剣を遣う。

カシア

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。  
女性型。  
鞭を使う。

蜘蛛

イレギュラーナンバー。  
アシュマを苦しめる程の腕の持ち主。

アビス

イレギュラーナンバーズ統括者。

## 第一節 レキシタニアへ

アーチエルはサイコ・フライヤー銀龍号に乗って夕焼けの中、何処と無く懐かしい風景を目の当たりにしていた。

夕日に燃える真つ赤な山肌、深い影を落す谷あい。見慣れた様な風景。

アーチエルがヨデイに訊いてみた。

「今度は、何処へお行になさる、おつもりですか？」

「内緒ですよ、アーチエル王女様」

ヨデイは意地悪を言ってみる。

「意地悪です。ヨデイ様」

少し膨れて、アーチエルは訴えた。

「アシュマさま。聞いて下さいまし。ヨデイ様が意地悪なんですの。成敗してやって下さい」

アーチエルはアシュマに、本気でヨデイの成敗を、お願いしている訳ではないのだ。

ただチョツと甘えてみたくなつたのである。

「そうか」

アシュマは、そう答えたのみであった。

「もう、アシュマさまったら、少しは付き合ってくれてもいいのに……」

アーチエルの甘えは、見事に跳ね除けられた。

「もう、ヨデイ！ 前を見て操縦してよね」

エファールがヨデイを隣で注意している。

「ヨデイ！ 炎龍の整備終わってたぜ」

オルバニアンが整備から降りて来た。

「ヨデイ、はらへった」

アルミナが言う。

「余も腹がすいた。誰ぞ、何ぞもってきやれ」

この横柄な物言いの少年は、現在のレキシタニア王国の王、ルーランである。

悪気は無い。

王故の言葉遣いである。

「若、ワシも腹が空き申した」

アベニも言う。

いつも控えめのこの老人が言う言葉である。

本当に腹がすいたのだろう。

「はいはいわかりました。皆さん。これから行く所は、食べ物を持たなく食べられます。ですがマナーが肝心……。と、言ってもマナー等知らぬと言う物が約三名。あなた方は、せめて静かに食事をして下さい」

そう言つて、ヨデイは、オルバニアンと、アルミナと、最後にアシユマを見た。

「何言つてんだよ俺はこう見えてもなあ」

オルバニアンが何か言いかけるのを、ルーランが横から入り、

「お主、マナー等知つておるのか？」

そうヨデイに言つた。

「勿論ですとも陛下」

ヨデイは言い切つた。

「それにしては、いつもの食事に、反映されていないが？」  
腕を組んでヨデイを流し見る。

「あれが本来の私と思つたら、大間違いですよ？ 陛下」  
にやりと頬を緩める。

「言いおつたな？ 見ておるぞ？」

こちらにもにやりと笑つてみせる。

「構いませんよ。陛下」

ヨデイは顔を澄ませた。

「よう、ヨデイ。で、これから、どこへ行くんだよ？」  
オルバニアンが訊く。

こんな辺ぴな山間を飛ぶ理由が分からなかった。

「レキシタニアです!!」

と、ヨデイが答える。

「わっ!!」

と、船内が沸いた。

行く事を知っていたヨデイ（は勿論）、アシュマも皆の喜びようを見て、行く事を決めてよかったと思っていた。

そこへアーチエルがやってきて、

「ヨデイ様、有難う御座います」

そう言った。

そして、

「アシュマさまは、あまりお喜びになりませんか？」

少し残念そうにした。

そんなアーチエルにアシュマは微笑で返した。

「違いますよ、アーチエル様」

ヨデイが言った。

「？」

アーチエルが疑問に思う。

何が違うのか？

「今回のレキシタニア行きを考え付いたのは彼、アシュマ君ですか」  
「ら」

答えをヨデイが言う。

「!!　そうでしたの!？　うれしゅう御座います。アシュマさま  
!!」

アーチエルはアシュマに飛びつき、頬にキスをした。

「おいおい……今から喜びすぎると、御家族の方々にお会いした時、  
嬉しさが半減するぞ」

アシュマが言う。

「大丈夫で御座います」

アーチエルがアシュマに寄り添う。

「そう、大丈夫だよ、アーチエル様はね。覚悟しておくんだよ、アシユマ君」

ヨディがそう言う。

そんな皆が喜んでいる中、唯一人、喜んでいない者がいた。ルーランである。

アーチエルは、ルーランの所へ行き、どうしたのか尋ねた。

「陛下、どうなされたのですか？」

「余は……余はレキシタリアに行ってもいいのだろうか？ いや、駄目だ！ とても顔を出せた物じゃない！」

そこにいる全員が、瞬時に理由を理解した。

つまりこうである。

そもそも、この一連の騒動の発端はガルマインをはじめ、ノリトレアの一部の軍属が、アーチエルを拉致・誘拐した事に始まりがある。

つまりはノリトレアが、レキシタリアの地を蹂躪した事から、全てが始まっているのである。

当事者でなくとも、例えその当時、王でなくとも、たとえ傀儡でも、ルーランはノリトレアの王なのである。

この事実が彼をして、レキシタリアに行く事を躊躇<sup>ためら</sup>わす理由であった。

「大丈夫ですよ。向こうは了承済みです！。当時の事は全て、ガルマインが悪い事になってますから。当たり前っちゃあ、当たり前なんすけどね。まあ、陛下が皆の前で懺悔したいってんなら、構いませんが。しかし、当時のお話は、あまり蒸し返さない方がいいかもしれないですよ？」

ヨディがルーランを慮<sup>おもひよ</sup>つてそう言った。

話の後半からルーランは、人の話等聞いておらず、

「そうか！ 大丈夫なのか！ 良かった！ 良かった！」

涙を流しながら喜んでいた。

「陛下……」

アーチエルも、もらい泣きしてしまった。

そして、もう一人塞ぎこんでいる者がいた。  
オルバニアンである。

彼は、先日、愛する歌姫、ノナ・イルマを失って失意のどん底にいた。

それを密かに心配する者が一人。  
いや、心配しているという感情すら、自分では分かっていないかもしれないなかった。

それは、アルミナ・ラ・シアである。

ぼーっ、としている彼を見て、アルミナは思わず背中を、  
ばん、ばん！

と、叩いていた。

「いつてーなあ、何すんだよ！」

当のオルバニアンは、多少怒りを顕にした。

「いやさ、元気が無いなと思ってさ」

「ほっといってくれ」

「それでも良いんだけど、あんたの取り柄って元気な事じゃん？」

「なんだよ。元気だろうが、落ち込もうが俺の勝手だろ？」

「まあ、まあ。そう落ち込むと、良い男が勿体無いよ？ それにノナさんだって、今のオルバニアンの姿を見たら、心配するんじゃないかな？ 元気出しなよ」

「……そうだな。難しい事考えるのは、俺の性に合わないしな。いっちょ元気を出しますか」

「そのとおり！ よっ！ 大統領！」

アルミナが声をかける。

「すまねえな。アルミナ。要らぬ心配を掛けちゃったみてえだな。ありがとよ。それよりお前、アシュマの所に行かなくて、良いのかよ？ あれ程『アシュマ、アシュマ』って言ってたじゃないか？」

「あー、駄目、駄目。アーチエルのお姫さんがべったりくっ付いて、あたしの入り込む余地無し」

「それで、こっちに來た訳だ。ま、俺も中々美男子だからな」

「なっ、何、言ってるのよ！ そろそろ着陸よ」

アルミナはまた、オルバニアンの背中を、ばん、と叩いた。

オルバニアンは、アルミナを満更でもないと思った。

アルミナも、オルバニアンの事を気に掛け始めていた。

この時、二人の間に、何かが生まれ芽吹いていた。

『あー……あー、あー。こちらレキシタニアコントロール、聞こえるか？ 銀龍号』

管制誘導の音声が入る。

「あ！ 兄様の声！？」

アーチエルが反応する。

『アーチエル？ アーチエルなのか！』

「はい！ エースティール様」

どうやら相手はエースティールと言う者らしい。

それもどうやら、アーチエルの兄と言う事らしいが……。

『無事か？ 元気か？』

「はい……」

『……………』

そう言っただけ、アーチエルは涙を流し、双方押し黙ってしまった。

『…………… 済まなかった、銀龍号。これより誘導に入る』

エースティールと言う者が、誘導を始める。

「気にしないでいい。誘導を頼む」

と、ヨディ。

『王宮が見えるか？ 銀龍』

「見えるぞ」



『王宮の真ん中の広場が、あるのが分かるか?』

「ああ、みえてきた」

『そこに降りてくれ』

「随分と大雑把な誘導だが、了解した」

『それは勘弁してくれ。こちらでも慣れてない』

「それも了解済みだ。気にしないでくれ」

銀龍号は、王宮の真ん中の広場に、着陸した。

王宮は古く、歴史がありそうだった。

だが、お世辞にも大きいとは言い難かった。

これが世界に冠たるレキシタニア公国の王宮とは誰しも想像できなかった。

そして、王宮と言うよりは、役所に近かった。

後部カメラから見ると、王宮広場には男二人に少女が一人。

これがアップルトン一家だろうか?

アーチエルは、ハッチの所まで行き、ハッチが開くのを待っていた。

それはアップルトン家の人達も同じで、今か今かと、ハッチは開くのを待った。

アーチエルは待ちきれずに、ハッチを潜り抜けて、家族の下へと駆けて行った。

「おとうさま!」

「アーチエル!」

家族、全員がひしと抱き合い、お互いの存在を数ヶ月ぶりに確認しあった。

暫くして銀龍の乗組員全員が降りてきた。

次々と握手をして行く、乗組員とアップルトン家の人々。

その中でキュポア・メロディア・アップルトンは、姉のアーチエルより二つ程年下だった。

目鼻立ちが、はつきりして整っている。

これもまた美形だった。

特に特徴的なのが、大きい栗色の瞳だった。

髪の毛は、いわゆるプリンセスカットと呼ばれるボブヘアで、色は姉より濃く、黒に近い、栗色だった。

社交的な性格で、誰とでも話し愛される少女だったが……。

「わらわは、キュポア・メロディア・アップルトンというのじゃ。以後お見知りおきを」

「あ？」

キュポアはぎくりとした。

夕闇の逆光が作る出す闇とあいまって、ざんばら髪から覗くその眼は爛々と輝き、その口は闇に溶け込み、開いた部分の赤が怪物を連想させた。

そうやって見ると異様に長く見える手足、異様にやせこけたからだ、体の割りに異様に大きい刀。

そう、キュポアの見た人物とはアシュマ・アトーその人だった。

「い、嫌あ……」

キュポアが後ずさりをする、誰か人にぶつかった。

思わず振り向きそして見上げると、夕日に照らされた笑顔をみた。それは人懐っこく、自然で、優しい笑顔だった。

「どうしました？ ミス・キュポア」

おびえる少女に、優しく微笑みながら、

「僕はヨディ・ヨフルと申します。どうぞ宜しく」

そう声をかけ、彼女の目線まで自分の目線を落とし、優しく微笑んで、ヨディは彼女の手を取り、手の甲に軽くキスをした。

キュポアは軽い眩暈を覚えた。

ああ、これが恋なのかしら？

とも思った。

（手の甲にキス等されるなんて、まるで、御伽噺に出てくるお姫様の様）

等とも思った。

ヨディはゆっくり立ち上がり、彼女の身長にあわせる様にややか

がんで、彼女をエスコートでもする様に軽く腕を組み、歩調を彼女のそれに合わせた。

「ワルツはお好きですか？」

ヨディは尋ねた。

「あ、あの……まだ、知らないんですの」

キュポアが恥かしそうに応えた。

（ああ、これでこの優しい微笑を持つ人から軽蔑されてしまうんだわ）

そう思ったその時、

「ああ、良かった。では、是非一番最初に私と踊っていただけませんか？」

と、問うてきた。

「ええ。わたくしでよければ」

「では約束ですよ」

「はい」

「キュポアー！」

キュポアはその声で我に返った。

声のする方を見ると、アーチエルとあの怪獣がいた。

キュポアは警戒しながら、近付いて行くと、さっき見たのと印象が違う。

（アーチエル姉様！ 何であの怪獣の側にいるのじゃ？）

キュポアはアーチエルの耳元で、囁く様に言った。

「怪獣？ あは。確かにそれは言いて妙かも。うふふ」

対してアーチエルは普通の声音こわねで返す。

「姉様！ 何で伏せてお話下らないのじゃ！？」

「だって、アシユマさま地獄耳だから、伏せて話しても意味無いんですもの」

「『アシユマ様は地獄耳だ』……え？ アシユマ様？ それが、姉様の？」

（確かに良く見ればかつこいいけど、エースティーお兄様の方が三

十倍ぐらいかっこいいのじゃ。それに何か怖いし。何か嫌じゃのう。  
ヨディ様の方がエースティーお兄様と同じぐらいかっこいいわい。  
……でも姉様の危機を、何度も救ってくれたナイトだって言っし、  
まあ、ちよつとぐらいは認めてあげようかの？

そう思っていると、

「キュポアー！ 早くしないと晩餐会に遅れるわよー」

アーチエルがキュポアへと振り返り言った。

キュポアがよく見てみるとアーチエルとアシュマの手は繋がれて  
いた。

「ま、まあ、姉様、不潔！」

キュポアにとって見れば、アーチエルの手がアシュマに繋がれて  
いた事は、とてもふしだらに見えたし、不潔にも思えた。

所謂思春期の潔癖症と言う奴である。

一行は部屋を割り当てられ、しばし休息する。

アシュマも部屋を割り当てられた。

しかし、する事が無い。

ボーっとしていると、人の気配を感じた。

悪意は無い。

アシュマがドアの方に歩み寄っていく。

ノックする音が聞こえる。

すかさず、アシュマがドアを開ける。

壮年の男性が少し勢い余る。

「……あなたは、さっきの……アーチエルのお父上ですな？」  
アシュマが問う。

「はは……。エドス・マニユア・アップルトンと申す。一応この国  
の王じゃ……」

「これはとんだ無礼を」

アシュマはそう言ったが、あまり無礼に思っていないらしい。

だが、エドスはお構い無しに、この青年に、

「アシユマ・アトー殿ですな？」

と、訊いていた。

「はい」

「リクシル・ウオレウオリン殿は元気かな？」

「養父は二十年前に死にました。養父をご存知なのですか？」

「そうか、リクシル殿は無くなられたか……。それからアシユマ殿はどのように？」

「はい。ヒョウエ・シバと言う武芸者に預けられ、十四歳まで一緒に暮らしていました」

「それから？」

「武者修行の旅です」

「して、ヒョウエ・シバ殿は？」

「今年の頭になくなりました」

「……苦勞なさったのう」

「いえ……で、ご用件は？」

「そうじゃ」

そう言つてエドス王は扉を閉めた。

「アーチエルの出自は知っておるかの？」

「ドートネーゼの……イムフレレーレの遺児……胎児だったと……わたくしもそうですが」

「そこまで知っているなら話が早い」

「アシユマ殿とアーチエル。二人に生を与えたのは儂なのじゃ」

「え？」

アシユマは軽い混乱を呈した。

「まあ、座つて話そう」

エドス王はベッドを指し示した。

アシユマとエドスがベッドに座る。

「アシユマ殿は二十五年前、リクシルとワシの手でドートネーゼの手から連れ去られたのじゃ」

「……………」

「その昔、恐ろしい計画が進行中での。いや。それは今も続いておるじゃろうが、アシュマ殿はその為に生み出されようとしておった」  
「それは？」

「儂も全容は知らん。ただ、全人類の存亡に関わる計画じゃった。二十五年前、アシュマ殿はリクシルに、鬼虎はエヴァイブ・エブル殿に託された。そして儂はおぬしをリクシル殿の妻女アネーゼ殿の腹に移植したのじゃ」

「……」

「儂は、こう見えても生物学者でな。だが、胎児のなりをしたお前様が上手く生まれるとは思っておらなんだ。死産するだろうと思うておった。リクシルから便りがあつたのは一年後じゃ。生まれたとな」

「俺の名前はプレートから……？」

「そこまで知っておるか。解読したのはリクシルじゃ。また、リクシルしか知らんことじゃった」

「アーチエルは何でまた……」

「アーチエルか。やはり、当時計画が進んでおつてのう。バヴェルを使って恐ろしい事をたくらんでおつたのじゃ。そこで儂は密かにアーチエルを運び去った。そして……殺してしまえばよかったんじや……。さすれば、バヴェルの計画等……。だが、出来なかった。イムフレールの胎児とはいえ、命は命。儂は妻のイネアにアーチエルを移植した。悪魔の所業といわれても構わなかった。失敗したのはその後じゃった。プレートの名前をそのままアーチエルの名前に使ってしまった事じゃった」

「ガルマインに見付かってしまったのですね？」

「その通りじゃ。プレートは四枚あつた。それぞれ書かれている事は分かるかな？」

「俺の名前、アシュマ・アトー・シヨアク・アシュオン。アーチエルの名前。そして、『番い』。最後は知りません」

「鬼虎じゃ。オウガ・タイガーじゃ。発音はハムググレ・ケアルグ」  
「そうですか」

「『番い』の事まで分かっているなら、話は早い。僕は、何時ドートネーゼの手によって命を落とすかも知れん。その時、心残りはアーチエルじゃ。娘の事を……アーチエルの事を頼む。婿殿……」

「む、むこ……？」

「つまらぬ話をしてしまったの。僕はこれで去る」

「いえ。つまらぬ話等とは……」

「また、夕食時にな」

「はい」

エドスはアシュマの部屋を出た。

アシュマは複雑な思いをした。

久しぶりに我が家に帰ってきたアーチエルは、感無量になっていた。

特に、自分の部屋に戻って来て、それはまた一人ひとだった。

この王族の使う部屋としては、絶対に狭いこの部屋で、ついこの間まで平和な暮らしを続けていたのだ。

机も、ベッドも、小さめの洋服ダンスも、少し古い鏡台も、そのままだった。

悔やまれるのは、侍女のアンだった。

ここから連れ去られる時に無理を承知でついて来たのだ。

戦艦ハーティアーの中では、ガルマインに向かって、銃も向けたのだ。

あの、ノリトレア脱出以来、会っていない。

おそらくもう、この世には……。

今も耳を澄ませば、彼女の声が聞こえてきそうなの……。

「アーチエル様、失礼します」

そう、丁度この様な感じで……。

「え？」

アーチエルは驚いた。

聞き覚えのある声、今の今まで考えていた人。

「ど、どうぞ」

恐る恐るアーチエルは、声をかけた。

「失礼します」

部屋に入ってきたのは侍女のアンだった。

侍女のアンは、部屋に入ると態度を一変させ、眼には涙を一杯に溜め、アーチエルの所へ行き、

「アーチエル様、お久しぶりでございますう！」

泣き出してしまった。

「ア……アン、アン！」

アーチエルもアンを抱き、一緒になって泣き出してしまった。

アンは、アーチエルより三つ年上。

いわば、アーチエルの姉的存在だった。

その後、晚餐会用のドレスに着替えながら、

「あの後が、酷う御座いましたのよ？ 金子を用意してくれたまでは良かったのですけれど、後は自力で帰れ、ですよ？ 酷いと思いません？」

そうアンが言った。

「でもまあ、帰ってこれたから、良かったじゃない」

と、アーチエルが受けた。

「よう御座いません！」

アンが怒りを顕にする。

「途中巨大な蛇に襲われるわ、ドラゴンに襲われるわで、散々な眼にあいました。ドレスはこれでしょう御座いますわね？」

アンが愚痴を零しながらドレスを用意する。

それでも楽しそうである。

鏡の前でアーチエルにドレスを合わせる。

「それは、派手すぎるわ。もう少し控えめなのを……」



アーチエルが少し困った顔をする。

「好いた殿方がいらつしやるんでしょう？　なら、もう少しアピールをした方がよう御座いませんか？」

アンがビククリする様な事を言った。

「な、何故それを！？」

実家には秘密の筈なのに、何故知っているのか？

アーチエルは、驚きと動揺を隠せなかった。

「今や公然の秘密ですわ」

アンはそう言った。

少し悪戯っぽい笑みをしている。

「じゃあ、お父様は？」

「はい」

「じゃあ、お兄様も？」

「はい」

「キュポアも？」

「はい」

「~~~~~」

「ドレスはいかがします？　アーチエル様？」

アンが流し目でアーチエルを見る。

「それなら、尚更控えめな方がいいわ。地味なやつ」

「ではこれにしましょうね？」

そう決めたのはシンプルな中にも華があるドレスだった。

「お化粧は？」

「ドレスに合わせて地味に」

「はい、はい」

化粧はナチュラルメイクにもらった。

髪の毛はアップにして、ドレスはシンプル、しかしその中でも、

凛として可憐で、華があるイメージとしてまとまった。

一方こちらのルーランは、未だに出席をするかどうか、迷っていた。

果たして、列席が許されるのかどうか、思い悩んでいた。

「ルーラン様、お召し物を……」

アップルトン家の侍女が、部屋の外で待っていた。

「暫し待たれよ」

ルーランが頭を悩ませていた。

「晩餐会までお時間が」

「分かつておる!!」

ルーランは、態度を決めねばならなかった。

「ええい、分かった。侍女の方、入られい」

と、言って侍女を中に、招き入れた。

「それでは、お召し物をお取替え……」

「いや、後は余が自分です。侍女の方はお引取りを」

「それでは余りに……」

「侍女の方は、お引取りを」

「あの、ルーラン様……何か不都合な所でも」

「ない。さあ、お引取りを」

「あ、あのっ……」

ルーランは頑なに、侍女の手伝いを拒んだ。

そして侍女たちを押し返すように部屋の外へ出した。

冒頭の理由以外にまだ、ルーランをそうさせる理由があるのだろうか？

急ぎルーランは衣服を着替え、部屋を出た。それは、貴公子然とした美青年であった。

晩餐会である。

皆それぞれ、侍女に連れてこられ、それぞれ席についた。

席次は中央にエドス・マニユア・アップルトン、レキシタニア王。

エドスから見て、右側から順にルーラン・ナル・テルドリニアナ王、続いてアーチエル・ナヴィア・アップルトン第一王女、順に続いてアシュマ・アトー・ショアク・アシュオン、エファール・マーヤ・ソーファ、アベニ・ロー。

左側にはエースティ・イーニア・アップルトン第一王子、キュポア・メロディア・アップルトン第二王女、ヨディ・ヨフル、オルバニアン・マグマイヤー、アルミナ・ラ・シア、と、並んでいた。

「さて今宵は、至らない娘アーチエルを、命を張って守って頂いた皆様への、感謝の宴で御座います。皆様どうぞ、御ゆるりと御歓談等されながら、楽しんでくだされ」

エドス王の言葉のもと、宴は開始された。

が、最初に口を開いたのはルーランで、

「王よ、その様に仰つてはくれるが、私は王よりアーチエル様を攫<sup>さら</sup>いし国の王！ その私が、このような晴れがましい席にあつてよいのでしょうか？ 王よ！」

ルーランは、自分が王という身分を忘れたかの様に、涙を零しながら、エドス王に訴えかけていた。

ハラハラしたのはヨディで、事の行方を気にしていた。

エドス王は、泣いて目を瞑るルーランの肩に、優しく手を置いた。「ルーラン王よ、そなたは当事者でもないお人じゃ。憎むべきはあのガルマインじゃ。そなたには何の罪も無い。そなたもガルマインの元でさぞお辛かった事であろう。そなたは優しい御方じゃ。平時なら、きっと名君と呼ばれた事であろうに。重ね重ね憎いのはガルマインよ。さあ、そなたも輪に入り、共に今宵の宴を楽しもうではないか」

「は、はい。エドス様」

「皆様方。今宵は慶事があつた。皆、共に食し、話し、楽しもうではないか」

低いどよめきが漏れる。

皆は宴を始めた。

さて、この場で驚かされたのは二つあって、まず、アシュマのフルネームである。

正式名称はアシュマ・アトー・ショアク・アシュオン……と、言う。

発音的に珍しいとの事。

これには、皆、驚かされて、皇太子エースティーが、  
「あなたの名前のいわれは？」

直々に聞いてきた事である。

「養父によれば、この名の由来は、古い伝承から取られてきて、その意味は『我、汝ら魔の者を、力を以って封印す』だそうです」

「嬪殿に相応しき名じゃ」

エドスはさり気無く言った。

「は？」

アシュマは聞き返していた。

嬪殿？

アーチエルも驚いた顔を、少しの間だけした。

王は咳払いを一つして、何も無かった風を装った。

次に驚かされたのは、アルミナの変貌振りである。

いつもは頭髪の色もあいまって、燃える様な髪（型）と、言われているアルミナが、綺麗に櫛で梳かれ、髪の毛を降ろし、眼帯をせず、惜しげもなく、右の黄金色の瞳をさらけ出していた事である。

綺麗に整われると、この様な美少女になるとは、皆、思わなかった様で、髪の毛と同じ色のドレスと相まって、華やかで、煌びやかな印象を皆に持たせた。

「そんなに見られると、照れる」

小声で言ってアシュマの方をみた。

アシュマは少し微笑むと、眼を正面に戻した。

あんぐり、口をあけていたのはオルバニアンで、さも、こんな美少女、見た事無いと言った表情をしていた。

そのアルミナが、

「なにぶん、世間を知らぬ不調法者。多少の無作法はお許し下さい」と、言った。

そして、それでも、アルミナは彼女なりに無作法にならない様に努力した。

いや、努力している事が分かった。

いつもに無く美少女然とし、努力している姿は、いじらしいまでに健気で愛らしかった。

アシュマも例外ではなく、そんなアルミナを好ましく思っていた。アーチエルはそんなアシュマを見て、多少恠気を起こし、アーチエルがアシュマの左の二の腕を少しつねった。

「いたっ！」

アシュマは声を立てた。

それを見ていた、王は笑った。

「アーチエルよ、そなたも恠気持ちか。血は争えんのう。お前の母者がそうであつたわ」

「あ、い、嫌ですわ。そんな恠気だなんて……」

珍しくアーチエルはうるたえて、真つ赤になり、下に俯いてしまった。

そう、所で、食事のマナーと言えば、アルミナや、オルバニアンが四苦八苦しているのに対し、アシュマは堂々とそれを、破って見せた。

出てきたスープは皿ごと引つ掴んで飲み干す。

パンは直接手で食べる。

流石に肉類はフォークとナイフで食したが、手で引つ掴んで食べられる物は、全て手で食した。

マナー違反をしているのにも拘らず、それがあまりに堂々として流れる様に隙が無く、また遅滞無く進む物だから、皆何もいえないでいた。

「ヨディ様。怪獣さんって、食べ方も怪獣さんののね？」

その様子を見てキュポアは言った。

「そうですね。キュポア様」

それに対してヨディはそう返した。

「この、ロリコン!」

それを見ていた、エファールがそう言い、ヨディが固まった。

「ロ、ロリコンって、僕あ別に……」

ヨディが何かを、言いかけた。

「あゝら、良くってよ。私はアシユマ一筋なんですから。ねえ？  
アシユマ」

「な、何を言いたいんですか？ エファールさん？」

「べつ に」

エファールの言葉には、どこか棘があった。

エドス王がアシユマに、

「時に婿殿は御流儀は何になりますかな？」

そう言うのに対して、アシユマは、

「婿殿？」

怪訝な顔をした。

「お父様。その婿殿と言うのは、アシユマさまの事でしょうか？」

と、アーチエルも言い出す始末。

「そ、そのつもりじゃが、な、何か問題でも？」

「も、問題云々よりも、先にどなたが言い出したのですか？ それ  
は!？」

アーチエルが困惑する。

「そ、そこにおけるヨディ殿じゃが……二人は将来を誓い合ったので  
はないのか？ アシユマ殿が……自分が婿になりたいと言っていた  
と……」

「嫌ですわ、お父様、私達その様な仲では……。まだ、将来を誓い  
合っておりません故……」

そして、アシユマが、

（ヨディの言っていた『覚悟』とはこの事か）

そう思い至り、

「ヨデイ、後で話がある。訳は解っているな？」  
と、言った。

「ひえ〜。だっていずれそうなる仲じゃん」

ヨデイはそう言ったが、アシュマが、

「ヨデイ」

と、睨んだ。

「でも実際、どこまで進んでおるのだ？ 二人は。それ如何によつては、それ相応の責任をとってもらわんといかん。王としてではなく、人の親としてだ」

エドス王が言った。

（さっき言ったことと違う。娘を頼むと……王は確信的に言っているな？）

アシュマはそう思った。

「ええっ！？ キュポアの前で話せと言うのですか？」

アーチエルが叫んだ。

「何？ キュポアの前で話せない所まで、仲が進展していると申すか？」

エドス王は先走った。

「父上。何を想像なさっているのですか？ 妹の……アーチエルの話を、最後まで聞いてやって下さい」

エースティ・イーニア・アップルトン王子が言った。

「おお、そうか。これはワシとした事が……迂闊であつたわい」

エドス王が言った。

いつの間にか皆はシンとなり、アーチエルの言葉に耳を傾けた。

アーチエルは消え入りそうな声で、

「お父様、まだ私達は、キスしかしておりません」

そう言った。

その隣でアシュマは、困った様な表情をしていた。

「真実かな？」

エドス王が訪ねた。

アシユマは、

「真実です」

と、静かに言った。

「何だ、アシユマとアーチエルがいつもしてる事じゃん。つまんねえ」

オルバニアンが、面白く無さげに言った。

「姉様、不潔ですわ!!」

キュポアは叫んだ。

「将来もまだ決めていないのに、お、男の方とキ、キ、キスをするなんて!」

「これ、キュポア、少し慎みなさい。父上も先走りすぎです。この様な事は当事者の二人で決めるべき事であって、我々はそれを見守って行くべきでしょう」

エースティーは二人を窘めた。

「有難う御座います。エースティ兄様」

アーチエルが謝意を表した。

「時に王女!」

突然ルーランが喋り始めた。

「何で御座いますしょう? ルーラン陛下?」

アーチエルが聴いた。

「真に失礼とは存ずるが、王女がわが国に来られた経緯を知りたい」  
ここで、ヨデイが、

(一番訊いてはいけない事を、訊きやがった。あの馬鹿、人の忠告、全然聞いて無いじゃないか!)

内心舌打ちをした。

「私は訊かねばならないのだ。いつかガルマインを糾弾する為にも!」

声高に話していた。

誰が見ても酔っていると一目でわかった。

エドス王が窘め様とした時、アーチエルがそれを眼で制した。



「いいでしょう。話します」

アーチエルはナプキンで口を拭いてから、そして話し始めた。

「わたくしが虜の身となったのは今日の様な月夜の晩でした。村々が静かに眠る静寂を突然破るが如く、戦船いくばいねでこの王宮に乗りつけ、影の者を何人も引きつれ、ガルマインは無体を働こうとしたのです。そして、ガルマインは私の身を要求しました。上辺は外交上ノリトレアに招待すると言っておきながら……。当然、父上をはじめ、兄様も必死に抵抗してくださったのですが、あろう事か、卑怯にもガルマインは村人を人質に取り……」

アーチエルは言葉に詰まった。

その言葉をルーランが引き継いだ。

「ガルマインが村人を人質に取り、アーチエル様を、無理矢理連れ去ってしまったのですね？　なんと卑劣な！」

「はい。私は勿論、嫌だったのですが、人質をとられては致し方ありませんでした」

アーチエルが目潤ませる。

「なんと愚劣な男よ、ガルマイン！　きつと余、自ら成敗してくれる！」

ルーランは声高に宣言した。

「その言や良し！」

エドス王も、酔いが回ってきているのか、その言葉に乗ってしまった。

そして、

「ガルマインさえおらねば、罪も無い人々をあそこまで無用に傷つける事等、無かったものを……」

ルーランもかなり酩酊状態である。

「王よ。ルーラン陛下は、かなり酔っておいでのお様子。陛下を部屋までお送りしたいが、宜しいか？」

アシュマが、エドス王に許可を求めた。

「嬪殿。何も嬪殿が……」

エドスが申し訳ないような顔をする。

「いえ、大丈夫です。お気になさらずに。では、失礼」

アシュマはルーランの手を引き、

「さ、陛下。行きましょう」

と、言った。

「アシュマさま。お待ち下さい。アーチエルも参ります故」

アーチエルも席を外した。

「では、皆様、失礼致します。この後もどうぞお楽しみ下さい」

そして頭を下げる。

「済まんのう。嬪殿」

エドスも頭を下げる。

「嬪殿……」

アシュマは少し絶句しかけたが、

「分かりました」

と、返した。

ルーランは、

「まだ、酔ってはおらぬぞ」

訴えていたが、アシュマが行きましようと言つと、洪々アシュマに手を預け、

「それでは、皆さん御機嫌よう」

そう言つて、出て行つてしまった。

アーチエルは、アシュマの空いた手を取つて、一緒に出て行つてしまった。

少しはにかんで、嬉しそうだった。

「いいなあ、姉様。……じゃない！ お姉様ったら、なんてはしたないのかしら！」

キュポアは、半分羨ましがっていつていた。

「まあ、いいじゃないですか。アーチエル様は、あの様にお幸せそうなのですから」

ヨディが言った。

「じゃあ私がもし、ああなったなら、私と手を繋いで頂けますか？」  
キュポアは、悪戯っぽくヨデイに訊いた。

「勿論ですとも王女様」

「これキュポア。なんととはしたない事を！ 申し訳ありませぬ、ヨデイ殿」

エースティーが妹を叱った。

「申し訳ありませぬ。兄様、ヨデイ様」

キュポアは、兄エースティーと、ヨデイに謝った。

「いえ、謝る事じゃありません。大歓迎です」

ヨデイも調子に乗った。

三人がいなくなり、なんとなく場が白けて来た頃、エースティー王子が、

「さて、宴もたけなわですが、そろそろ、宴をお開きにしたいと思います。どうぞ皆様、この後も御ゆるりとお寛ぎ下され」

この場の解散を宣言した。

「さ、父上」

エースティーに肩で担がれる、エドス王。

「それでは、皆さん失礼します」

王も退出していった。

あの様子では、王も、相当酔っているらしい。

「はあーっ。食べた気しなかったあ」

アルミナが言い、

「俺もだぜ」

オルバニアンが、受け応えた。

「アンタは、ずーっとアタシを見てただろ？ そんでもってアタシの事、気にしてただろ？ 解ってたんだから」

「なっ！ 何を馬鹿な事を！ アーチエルの姫さんだったらいざ知らず、アルミナが着飾ったって、別にいつもと、変わりやしねーよ！」

「そう？」

「そ、そうさ！」

「二人は仲良くなったわねえ。いつの間に、仲良くなったんだか？」  
エファールが、淡々と言った。

「なっ、仲良くなんて」

「別にしてねえよな？」

アルミナとオルバニアンは、二人して抗議してた。

「ほら、息ぴったりじゃない」

エファールが、これまた淡々として言う。

「それにしたって、エファールだって、キュポア姫に、対抗心むき出しだったじゃない？」

と、アルミナが応戦してた。

「なんでヨデイの為に、あんな小娘に、対抗心燃やさなきゃならなのよ？」

エファールが言い放った。

「おっと、今度は、僕らが標的ですか？」

ヨデイがおどけて言った。

「『僕ら』あ？」

オルバニアンが来て覗くと、キュポアがヨデイの膝を、枕にして寝ていた。

「……！」

驚くオルバニアンに対し、ヨデイは口に手をあてて、静かにするよう皆に促していた。（もう……！　ほんと、ロリコンなんだから……！）

エファールは、小声でそう言っていた。

（じゃあ、僕はキュポア様を、寝かしつけてきますから）  
ヨデイも、小声で言った。

（私もついて行くわ。この変態と二人つきりにすると、キュポア様が危ないもの）

（信用無いですね。僕も）

（当たり前じゃない）

一方ルーランの部屋。

アシュマは、ルーランを寝かしつけようとしていた。

アーチエルは部屋の外に居る。

「陛下。ルーラン陛下。このまま寝ては風邪を引くぞ?」

ルーランは全くの酩酊状態だった。

アシュマはこのままではいけないと思い、寝巻きがあつたのでルーランを寝巻きに着替えさせようと、タキシードの上着を脱がせにかかった。

その時、ルーランが、くわつと眼を見開き、

「無礼者! 誰が余の体に触れて良いと申した!?」

すごい剣幕で怒り出した。

すると、

ぱん。

と、横合いからルーランは平手打ちを食らった。

「ぶれ……」

ルーランが言いかけたのを、

「そんなに触れられるのが嫌なら、こんなになるまで酒を飲むな」

アシュマが言い放ち、そして、

「少し風呂にでも行つて酒の気を抜いて来い」

そう言つて、ルーランの部屋を出た。

多少の違和感を覚えつつ、ルーランに割り当てられた客間をでた。

ルーランは、

「そうか、酒の気を抜け……か」

そう呟いた。

ルーランは寝巻きに着替えて湯殿へ向かった。

アーチエルは部屋を出た所で、

「どうかなさいましたの？」  
そう問うた。

「なんでも無い、大丈夫だよ」  
アシュマがそう返す。

「そうですか」

アーチエルは少しなんだろうと思う。  
が、次の瞬間には忘れた。

アーチエルの部屋の前に来る。

アーチエルの部屋の前では侍女のアンが待っていた。

「まあ、アーチエル様」

侍女のアンが出迎えた。

「侍女殿……一度、お会いした事があるな？」  
アシュマが言う。

「ええ、ノリトレアの塔の中で。あの時はこんな事になるとは夢にも思わず……」

「そうであつたな。まさしく」

アシュマが同意する。

「ほほほ……」

「まあ、アシュマさまつたら、アンにまでお手を出して！」

アーチエルは、アシュマの手の甲をつねってみせる。

「いたっ！ アーチエル」

「もう！」

「わかった、わかった。侍女殿には手を出さないよ。アーチエルだけだ」

そついいながらアーチエルをアンに渡した。

「侍女殿、後は任せるがよいか」

「はい」

アンはにっこり微笑んで引き受ける。

「アーチエルよ。今宵は此处までだ」

「分かりました。アシュマさま？ お耳を」

「何だい？」

アシュマはアーチエルに合わせて腰を折る。  
ちゅっ。

アーチエルにキスをされた。

「お休みなさい。アシュマさま」

アーチエルは照れて、部屋の中へ入って行く。

「まあ！ アーチエル様！ なんとはしたない！」

侍女のアンはアーチエルを叱った。

アーチエルのは『口付け』と言っても、彼女は舌を絡める事すら知らない稚拙な物だが、初めて、アシュマの方がどきまぎしてしま  
った。

「でっ、では、侍女殿後を頼む」

アシュマがうるたえ気味に、アンに頼む。

「はっ……お、お任せ下さい」

何故かアンもどきまぎしていた。

アシュマに頬を叩かれ、

「少し酒の気を抜けと」

と、言われ、その気になった、ルーラン。

ルーランの行く先は湯殿だった。

しかし拳動が不信だった。

あたりに人の気配が無い事を確かめると、そつと湯殿へ入って行  
く。

脱衣所で、衣服を脱ぎ始めた。

オルバニアンは湯殿へ向かっていた。

今日は汗をかいたなと思い、湯殿を使おうと思ったのだ。

オルバニアンは、湯殿へと入って行った。

キュポアは、眼を覚ました。  
そうだ、宴の途中で眠ってしまったんだわ。  
思い出した。

お風呂に入らねば……。  
そう思い湯殿へ向かった。

ルーランは、湯船の中で思い切り伸びをして、体を伸ばした。  
久々に伸び伸びとした、気分を味わっていた。  
また、許されて、開放された気分も噛み締めていた。  
ただ、今日、アシュマに頬を張られた。

こんな事は、今まで無かった。

それだけが、悔しい出来事だった。  
しかし矛盾するようだが、何故か嬉しいような気もした。  
そこへ、鼻歌交じりにやって来た者がいた。

「だ、だれだ!？」

ルーランは狼狽え気味に誰何した。  
すいか

「おうっ!？ 先に入っているのは、陛下かい？」

「ばっ、馬鹿ッ！ 無礼者!! 入ってくるなあっ!!」

「よう！ 陛下元気？」

入ってきたのは、オルバニアンだった。

オルバニアンは臆面も無く、前をさらけ出して入ってきた。

「ばっ、馬鹿！ 一体何をぶら下げて……はっ、入ってくるなと言  
うに!!」

ルーランは叫んでいたが、急に黙り……

（おっ、お兄様……）

ルーランは小さく呟いた。

オルバニアンは、湯を何杯か被った後、



「おう、何か言えよ。男同士、裸の付き合いだ。こう言う下々の生活つてのを、知っておくのも悪か無いぜ？」

そう言つて、同じ湯船にざんぶと浸かった。

見るとルーランは身を縮め、太腿と体の前面の間に手ぬぐいを挟み、両手で両肩を掴んでいた。

それがまた、何ともいえぬ色香を放つていた。

「何だよ、陛下。そんな女みたいななりをして……つて……え？」

……まさか……女みたいになつて、おまえ……」

オルバニアンは、ルーランが男でなく『女』だと言う事に気付かされた。

オルバニアンは大慌てで湯船から出ると、その場で平伏し、額を床に付けんばかりにして、

「陛下におかれましては、大変失礼な事を致し、真に申し訳なく、平に平に御容赦を」

只ひたすらに謝罪していた。

「まっつて、兄様。謝らねばならぬのは、わたくしの方で御座いまする」

そう言つてルーランは、湯船から上がった。

「えっ？ 『兄様』？」

オルバニアンは面を上げた。

「はい、私と兄様は双子の兄妹。私達が生まれた時、兄様はハグム・マグマイヤーさまの元に、私はガルマインの元に、分けられたのです。私の本当の名前は『サーナリア』……『サーナリア・リア・テルドリニアナ』と言います」

「そうだったのか、ルーラン。ならば、急いでこの湯殿から離れた方が良い。誰が入つて来るか分からんからな」

（いけない！）

何と脱衣所にキュポアが居た。

キュポアは、ここでの会話を全、聞いてしまったのである。

「『サーナリア』で御座います。兄様」

「それはいいから、早く仕度して。俺は外の様子、見てくるから」  
キユポアはそつと抜け出し、急いで湯殿から離れた。

三拍程おいて、オルバニアンが、頭をひょっこり出した。

「よし、大丈夫だ」

二人はすばやく湯殿を去っていった。

一方のキユポアは、余りの事の重大性から、どうして良いのか解らなかった。

とぼとぼと王宮内を歩いて回る。

その時、月の見えるテラスで一人、月を肴に、ぶどう酒を飲む若者を見つけた。

アシュマだ。

キユポアは最初、ヨデイに話そうかと思った。

が、こんな事で、愛しいヨデイの心を、煩わせて良い物かどうか迷った。

他家の秘密を話すのであるから、勿論、家の者等以ての外である。しかも、これをアーチエルなんかに話そうものなら、烈火のごとく怒るであろう。

しかし、アシュマなら……怪獣なら話しても、構わないのではないのか。

なにせ、相手は『怪獣』なのである。

『人間ではない』のである。

話しても良いではないか。

決めた。

決心した。

怪獣に話そう。

キユポアは勇気を振り絞って、怪獣の所へと話しに行った。

「怪獣」

「あゝ？」



「そうか……」

「まだ何か？ 王女」

「おぬしはこの真夜中、王女を寝所まで送って参ろうとか、その様な心配りは出来んのか？」

「こんな怪獣の付き添いで宜しいので？ 送り狼になるかも知れませんか？」

「もう、よい！ この意地悪怪獣！」

「まあ、それは置いておいて……でも、話して少しスッキリしたでしょう？」

「ああ。そちはそこでまだ呑んでおるのか？」

「眠る気が起きませぬゆえ」

「呆れた吞兵衛怪獣じゃ」

そう言ってキュポアは消えてしまった。

そして、まるでキュポアがいなくなるのを待っていたかの様に、エースティーが現れ、アシュマに話しかけてきた。

この、エースティーなる若者、レキシタリアの王子で次期国王の第一継承者である。

目元涼しく、細身ながら、凜々しい顔つきで、スラリと背が高く、聡明な感じのする若者だった。

背の丈はアシュマぐらいだろうか。

どちらかと言うと、母方似で優しい顔を持っていた。

「月を肴にお酒……ですか風流ですな」

「別に風流を求めて、ここで呑んでいる訳じゃない」

アシュマが言い放つ。

相手は仮にも権威ある国の王子である。

乱暴な事この上ない。

「でもここの風景を求めて、呑みにいらしたのでしょう？ 十分風流ですよ」

だが、その王子はそのことに関して言えば聞き流した。

「……………故郷くにに似ているんだ。どことなくここは」

アシユマが自分のことを話す。

レキシタニアの景色がそうさせたのか、それともアシユマの気まぐれなのか。

初対面の人間に対しては異例の事である。

「故郷はどちらなんですか？」

エースティーが興味を持つ。

「言っても分かん」

そしてまたアシユマは突き放す。

「それでは話が続きません」

「……東の小国イーハンの……」

「ああ、イーハンなら、表敬訪問をした事がございます」

「イーハンの、オモロ諸島の、一番小さな島、タマン」

アーチエルにも教えた事のない話した。

だが、会話はそこで途切れる。

「……………」

思わず、エースティーは黙ってしまう。

「……………」が、俺の故郷だ」

アシユマが取ってつける。

「そうでしたか。流石にそこまで行くと、分かりませんね」

（本当は違うのだから）

アシユマの本当の故郷はカプセルの中。

自分は人間でない。

アシユマはそう思いながら、酒瓶から直接ごくごくりと、喉を

鳴らして酒を呑んだ。

アシユマはふと気が付き、

「一本いかがか？」

酒を勧めた。

「い……、いや、私は下戸なので、結構……」

「そうか」

アシユマが酒を引っ込める。

「貴方は、妹の仰つてた通りの人物ですな」

「アーチエルが？」

「ええ、分け隔てなく、何でも話す方だと」

「それは良い意味だろうか？ 悪い意味では？」

アシュマが訊いてみる。

「ええ、誰にでも『タメ口』と言う話が……」

「ははは。言いえて妙だ。……だがそんな話をする為に、ここに来た訳ではあるまい？」

「分かつておいででしたか。ではお言葉に甘えて、言わして頂きます。私はあなた方を悪く言うつもりはありませんが、あなた方といれば、妹が危険な目にあうのは必至。あなた方にとって、我が妹が大切なと同じ様に、私や国にとつても、妹は大事な存在。出来ればこれ以上妹を、危険な目に合わせたくは無いです。妹に何かあれば私も悲しいし、国民も悲しむでしょう。妹を行かせたくないと言う私のこの気持ちを、汲んではくれ無いでしょうか？」

アシュマは酒を一口ごくりと呑んで黙った。

「駄目でしょうか？ アシュマ殿」

（エドス殿の話と違う。伝わってないのか？）

アシュマが思う。

エドス王ならば『番<sup>っ</sup>い』の話は知っていよう。

アシュマとアーチエルを引き離すような事はしないと思われるが、このエースティーと言う男はそれをしようとしている。

アーチエルの生まれの謂われを知らないのか。

知らないのだろう。

でなければ、このような物言いは出来ない。

「アシュマ殿」

（しかし、確かにアーチエルは俺と一緒にいると危険なのも事実）

アシュマはそうも思ってみせる。

アーチエルを危険な目に合わせるわけにも行かない。

「アシュマ殿」

「アーチエルの気持ちはどうなる？」

最後に引つ掛る点を問い質した。

「アーチエルのためです。納得してもらうしかありません」

「そうか……わかった。了承した」

「え？」

「了承したと言っている」

「そ、そうですか。分かって頂けましたか」

「分かったから、何処かへ消えてくれ。酒がまずくなる」

アシュマはそう言っ、また一口酒をぐくりと呑んだ。

エースティーも、

「では」

そう言っ、消えてしまった。

アシュマはテラスで呑み続けた。

どこか不機嫌だった。

明け方近くになって、アシュマはヨディの部屋の戸を叩いた。

「うゝん、誰ですかこんな朝早く」

「俺だ。アシュマだ」

ヨディは扉を半分開け、

「なんですかこんな朝っぱらから……うわっ、お酒臭いですねえ、アシュマ君」

「そんな事は、どうでもいい。この国を出るぞ」

「え？ だって今日はアーチエル王女の帰還を祝つての村人とのパーティーと、ルーラン陛下の表敬訪問と、その他諸々……」

「全部キャンセルだ。ルーランについても話があるが、今は『アーチエル以外』の全員を銀龍号に乗せるんだ」

「それは何故です？」

アシュマはつい先程の、エースティーとの会話を掻い摘んで話した。

「成程ねえ。そりゃ、国民を引き合いに出されちゃ、打つ手無しですな。今回はこちらの負けです。潔くこの国を離れましょう。アーチエル王女には申し訳ないが、これが永の別れと言う訳で無し、また来ればいいじゃないですか」

「そういう事しておく」

と、だけアシユマは言った。

こうしてアーチエルを除いた銀龍のクルーの面々は、朝もやの中、荷物を持って銀龍へ向かった。

アシユマにとって見れば、いつもの事だ。

こうやって、いつも親しい人達と、別れてきた。

大人の事情。

国の事情。

家族の事情。

そんな声が頭の中で響く。

……事情、事情、事情、事情！！

いい加減にしてくれ。

そんな『事情』で一緒くたにしないでくれ！！

もういい。

うんざりだ。

アーチエルは運命の人ではなかったか？

守らなければならぬ存在ではなかったか？

違ったのか？

結局、アーチエルも、その一人に過ぎなかったんだと、そう自分を納得させた。

銀龍号のハッチを開ける。

いつもの機械油の匂いだ。

妙に懐かしい。

通路を歩いていって、ブリッジを見てみると人影があった。

「ア……アーチエル!?」

アシユマは驚いた。



そこにはひっそりと佇む、アーチエルの姿があったからだ。

「なんだってえ？」

最初に反応したのはアルミナとオルバニアンだった。

「アーチエ……」

飛び込もうとしたオルバニアンを制したのは、アルミナだった。

そしてアシュマの尻を、ぽん、と叩いてやった

「アーチエル……」

アーチエルは少し怒った表情を作り、

「もう、皆さん酷いです！」

そう言っていた。

「な、何故？」

アシュマは問うていた。

「『何故』？ それは、エースティール兄様の言う事は、大体想像がつきますし、その後のアシュマさまの取る行動も大体分かりますので……。お願いです。もう一人にしないで下さい」

「一人？ 君には家族がいるじゃないか？」

「いいえ。私がここに残れば、ガルマインがきつと来ます。その時、私を守っていただけの方はここにはいません。どうせ村から去らねばならないのなら、皆さんと一緒に、そしてアシュマさま、貴方と一緒に……」

そうだ。

そうだったのだ。

アーチエルも同じ想いだったのだ。

「アーチエル……」

「もう、のけ者は、無しにして下さい」

アーチエルは今にも涙を零しそうにしながら、アシュマと口付けを……。

「…… アシュマさま……！ お酒臭う御座います。少し酒の気を抜いてきて下さりませ」

アシュマは苦笑した。

ルーランがアシユマの側にやってきて、

「少し酒の気を抜かねばな」

にんまり笑った。

「あと、紹介したい人物がいます。……こっちにきて……この方です！」

アーチエルが言った。

紹介を受けた人物が、改めて自己紹介を始めた。

「初めてで無い方もいらつしゃいますが、初めまして。アン・デボンと言います。この度、皆さんの身の回りのお世話をさせていただきます、同行いたそうかと思えます。微力ではありますが、頑張ります。宜しく願います」

侍女のアンは初々しく挨拶をした。

朝。

朝食前の時間。

侍従以外まだまどろみの中にある時、小さな小さな台風は、やって来た。

「兄様、兄様！ おきて、兄様！！」

ドアの外で、キュポアが騒いでるのが聞こえた。

エースティーは、まどろみの中も少し、眠っていたいと思った。夕べは遅くまで、政務の整理をしていたのだ。

「通してー！ 兄様ー！！」

「なりませぬキュポア様。エースティー様は夕べ遅くまでお仕事を

……」

外ではキュポアと、侍女が押し問答をしているらしい……。

「『いちだいじ』なのじゃー！！」

キュポアが、ボタンとドアを押し開けて、入ってきた。

「ねえねえ、兄様おきて！ おきるのじゃー！ 一大事なじゃあー  
ー！！」

「なんだい？ キュポア。朝っぱらから……」

「だから一大事なのじゃ！！」

「だから、なにが？」

「銀龍号がないのじゃ……！！」

「そういえば、朝発進音を聞いたな……あれがそうか……」

「呑気にもう、兄様つたら……！！ ヨデイ様も居なくなつたのじやからな！」

「そりゃ、銀龍号が居なくなれば、ヨデイ殿も居なくなるだろうさ  
ここまでではエースティーは頭から布団を被って、妹の言う事等ど  
こ吹く風で聞いていた。

「もう、兄様の得意な、『せーじてきばーりやく』のせいじゃ」

「おいおい、なにも私は、政治的謀略なんて使って無いよ」

「こんなだから、アーチエル姉様も、出て行かれたんじやのう。今  
頃はきつと怪獣と何処ぞの空？」

「……………なにっ!？」

「がば、と起きたエースティーは、

「きゃあ」

と、驚く妹の両肩を掴み、

「それは本当の事なのか!？」

そう訊いた。

「だってこれが」

アーチエルの物らしい手紙を手にしていた。

エースティーは中身を粗方読むと、

「やっぱりしたか。私の言う事に素直に従う様な妹だったら、苦労  
はしないのに……この事を父上は？」

「知って無いと思う……」

「そうか。お前は手紙の内容を忘れてくれ。あと、父上には私から  
言上奉る。お前は何も言うな」

「はい。……いいな」。アーチエル姉様。ずるいのじゃ。私もヨ  
デイ様と、一緒に行きたかつたのじゃ」

漆黒の闇。

全てを飲み込む闇。

闇は静寂、全てを癒す。

その闇がざわついた。

闇の静寂さが破られようとしていた。

俄かに点る光。

スポットライトの様に限定的に照らされた。

照らし出したその先には影が出来た。

それは人の形をした物が複数個あった。

それらは皆フードを被り、お互いがお互いを確認する事さえ、出来ないで居た。

ただ、その影は数だけは確認できて、自分を含めて七つ確認できた。

一人が喋る。

「この所、事がスケジュール通りに、運んでいないではないか？」

「それは私も考えて居た所だ。実際はどうなのだ？」

「これは、弱りましたな。オリジナルナンバーがもう一体の素体を連れ出して、これでは何も行動を起す事はできませんからな」

「然様。それはその通り。二人雁首揃えられて、はちと厄介」

「それより問題なのは、聖櫃を何処で開くかだ」

闇の問答はまだまだ続く様である……。

## 第二節 スコラ編入試験

操縦桿を握る手が、重い。

スロットルを取る手が、だるい。

皆もその様な倦怠感で、一杯だ。

誰もがその理由を知っていた。

「皆、そろそろ、オロ邸だ」

とうとう禁断の言葉を、ヨディが口にした。

「だーーーーっ！！ 帰りたくねえ！！」

オルバニアンが叫んだ。

「ひーーーーっ！！ 蕁麻疹が出来る！！ その名前、聞きたくなえ！！」

アルミナが悲鳴を上げた。

エファールや、アーチエルも、妙な脱力感に襲われていた。

侍女のアンは、この妙な雰囲気は一体何事かと思い、アーチエルに、オロとは何者が聞いてみる事にした。

「あの、アーチエル様。その…… オロ様と言った方は、どのような方で……？」

「ああ、オロ様ね。オロ様は、この船のオーナーで、エバス財団のトップを張られるお方よ……」

アーチエルはそう言い、

「はあ」

と、ため息を一つ吐いて、その話を閉じてしまおうとした。

「あつ、あの？ アーチエル様？ オロ様の人となりをお聞かせ願えないでしょうか？」

アンがアーチエルに食らいついた。

「ああ、オロ様ね。誰にでもお話してくれるお方よ。でも、申し訳ないけれど、私は少し苦手ね。これでいいかしら？」

アンはアーチエルをして、

「苦手」

そう言わしめたオロと言う人物は、相当性格が悪い方なのだった。

無線に連絡が入る。

『こちらはエバス特設空軍である。貴船の所属と船名、船の責任者の名前と、目的を言ってもらおう』

「あゝ。こちらはエバス財団・貿易部所属、銀龍号。責任者はヨディ・ヨフル。母港への帰港を望む」

ヨディが応対した。

『了解した。護衛しよう』

「感謝する。通信終わり。……ついだ。オロに連絡でもしておこうか？」

「え？ 誰が連絡入れるのさ」

アルミナが、辟易していった。

「しょうがない。僕が対応しよう……」

ヨディが、通信機を合わせる。

オロ直通の回線だ。

「オロ、僕だ。ヨディだ。聞こえるか？」

『聞こえますわ、アル……ヨディ様』

聞こえてきた声音は男のものでなく女の声。

しかも、少女特有の心地よい高い音域。

果たしてその声の主とは。

「……？ ……アリア？」

『そうですわ。ヨディ様』

アリア。

何物か？

「アリアお嬢ちゃんかい？」

『そうですわ。ヨディさま。ですが、もうお嬢ちゃんと言う歳では

……』

「そうか。幾つになりました？ アリア嬢？」

『十八に相成りました』』

「そうか、もう十八か……あれから八年も経つのか。早いもんだ。じゃあ、これからそちらへ伺うから、オロの奴には、宜しく言うておいてくれ」

『分かりましたわ。その様に伝えます』

「ふふふ。あの、アリア嬢が十八とはな……」

「このロリコン！」

エファールが、額に十字の血管を浮かべて、言っていた。

「な、何をいきなり言うんですか？」

ヨディが何事かと怯む。

「ロリコンをロリコンと言って、何が悪いのよ？」

「な……なんか、棘……ないかい？」

「いえ、私は身も心もアシユマの物ですから？ 貴方が何しよう  
と、ぜんぜん関係ないですから」

「な、何でそこにアシユマ君が、入ってくるのかなあ？」

『こちらエバスコントロール……』

「ほら、管制誘導。ちゃんと仕事仕事！」

ヨディはエファールに、仕事を促した。

「はい、はい……」

エファールは、不機嫌そうに返事した。

エバス特設空港にやって来たが、今回はここには止まらないで、  
直接御館の方へ言うてくれとの事だった。

指示にしたがって、オロの屋敷を目指した。

相変わらず豪華な造りの邸宅を横目に、オロ邸の庭に銀龍を着地  
させた。

すぐさまメカニック要員が、アシユマ達と入れ違いで入ってきた。  
庭のドッグへの入り口が開き、銀龍はゆっくりドッグ内へと入っ  
て行く。

アシユマ達は裏門から、オロ邸に入っていた。  
そこにオロは居た。

「君達は何かね？ おとないも入れずに、勝手に裏口から入って。君達は盗賊団かね？」

オロはヨディ達に会うなり、そう言った。

「兄上、おやめ下さい。恥かしい」

そう窘めた少女が居た。

その少女はオロを、

「兄」

と、呼んだ。

「やあ、アリア。元気かい？」

「まあ、ヨディ様。お久しゅう御座います」

アリア。

先程通信に出た少女の名前だ。

そこに居たのは、褐色の肌に包まれ、髪の毛は濃い黒で少し巻き毛にて光沢を放ち、瞳は黒く二重の瞼には長い睫毛を湛え、唇は濡れた様な光沢を放ち、どこかエキゾチックな香りのする美少女、アリア・エバス嬢、その人が居た。

「アリア……君があのアリアなのかい？ 随分と大きくなって、間違えたよ……」

「まあ、ヨディ様。お上手です事。それではさぞや女性の方々は、放って置かないでしょうに」

「そこで、人の妹を口説かない。アリア、お前もだ。男はもっと慎重に選ぶべきだ」

オロが、友人と妹に注意をした。

「これは、失礼を」

ヨディは形ばかりに謝った。

「いけませんでしょうか？ 兄上？」

妹は何がいけないのか、分かりかねるといった表情をみせた。

「いかな」

兄は即座に決め付けた。

「それでは……」



アリアが『物色』しているとアシュマと目が合った。

「では、この方はいかがでしょう？ 貴方が、アシュマ・アトー様ですね？ 是非私と……」

「なりませぬ！ アシュマさまは、私の大事な想い人に御座いまする」

流石に場数を踏んだのか、こう言う事に慣れたのか、アーチエルはすぐさまアシュマの腕を取った。

「そうですか……残念ですわ。では……」

また物色を始める。

アリアはオルバニアンと目が合った。

……が、素通りして、

「残念ですわ。もう殿方がおりませぬ」と、言った。

「俺は、殿方の内に入らんのか！」

オルバニアンは訴えたが、誰も聞く者はいなかった。

「なによ、いいじゃない、オルバニアン。ルーラン陛下も、御めがねに適わなかったんだから」

何故かアルミナはご機嫌だった。

（そうだ、ルーラン陛下がおられたんだった！）

オロは思い出し、ルーランの前でひざまづき、

「ルーラン陛下におかれましてはご機嫌麗しく、このオロ、恐悦至極に存じます」

挨拶をした。

ルーランはどこか上の空で、

「うむ。大儀」

と、だけ言った。

その後で、

「湯殿はどこか？」

等と訊いた。

「は？ 湯殿で御座いますか？ ……湯殿と呼べる程の物でもあり

ませんが、各部屋に一つづつ……」

「で、余の部屋はどこじゃ？」

「それ、メイド共。皆様を案内あないせえ！」

いつものオロらしからぬ親切ぶりで、皆を案内していた。

ルーランが案内されたのは、館の内で最も広い客間だった。

確かに湯殿と呼べる程広くはないが、一人ではいるには、十分すぎる程広かった。

早速湯に浸かろうと思い、上着を脱いだ。

この上着が曲者で、元々小ぶりのルーラン……いや、サーナリアの胸を覆い隠し、男に見せていたのだ。

その上着も脱ぎ去り、シャツも脱ぎ、晒をを解きほぐしかけたその時、部屋にノックする音が響き渡った。

「だ、誰じゃ！？」

「陛下、アーチエルで御座います。少しばかり、御用の議が御座います」

ドア越しに、アーチエルの声が聞こえてきた。

「あ、後にせえ！ 余は今……」

サーナリアはうるたえた。

いま、自分が女である事が、ばれてはいけけないのだ。

「陛下にとって、悪い話では御座いません。失礼します。これ、ア  
ン、早よう！」

二人は部屋の中へと、滑り込んで来た。

「そなただけではないのか！？」

サーナリアは驚いた。

「陛下。御免下さいまし」

アーチエルは、部屋へ入ってきた。

「来るな！ 入るな！ ……見るなあつ！！」

サーナリアは、窮地に落された。

「陛下、ご案じめさらぬようお願い申し上げます。私は決して陛下の敵ではありません」

アーチエルは、言い切った。

「敵でない？ 何を言うとするのじゃ？」

サーナリアは、一生懸命胸を隠そうとした。

「陛下。陛下は女性で、あらせられますね？」

アーチエルは、ずばり核心を突いてきた。

「なっ、何を……」

サーナリアは、言葉に詰まった。

「隠しても分かります」

「おっ、おぬし何が言いたいのじゃ……」

「この様に不便な時に、この者を御使い下さい。口は硬う御座います」

アンを連れてきた。

「ふ、不便とは……？」

「女は女同士。女でなければ分からぬ不便な時に、御使い頂ければ」

アーチエルはやわらかく言った。

「そ、そうか。で、いつ余が……いえ私が女であると？」

「イルドリアでの攻防戦の折、アシユマさまが陛下を抱き上げられた時の、声と仕草にて……」

「そうですか。良く見ておられますね」

観念したのか、サーナリアは女の言葉を使った。

「いえ、そんな事は……」

アーチエルは照れた。

その時、ノック音がした。

三人は慌てて、事もあるつか、全員風呂場に隠れてしまった。

「陛下、入ります」

入ってきたのは、エファールだった。

「エファール！ そなたか！」

サーナリアは、叫んだ。

「はい、陛下」

エファールは、いたって平静だ。

「何用か！ 余はいま入浴中であるぞ」

大音声に言った。

が、エファールは、やはり平気そうに、

「いえ、陛下の身の回りの世話を、仰せつかって」

そう言つてのけた。

「身の回りの世話等要らん！ 余一人で十分だ」

「いいえ、そういう訳にも行かないでしょう？ 女性ならば尚更」

エファールは、驚愕すべき事を言った。

「貴様、何故余が、女であると……！」

「ヨデイに話を聞きました。またその折、陛下の御世話をしると  
正直な所を言った。

浴室の扉が開き、皆がそろそろとでてきて、エファールが、

「アーチエル様……一体ここで何を……」

驚いた時、ノック音がして皆を驚かせ、事もあるうか、全員風呂  
場に隠れてしまった。

「何故、皆ここに隠れるのじゃ？」

そう言つてみた物の、もう遅い。

「陛下ー！ オルバニアンから、陛下の身の回りの世話をしろつて、  
言われて来たんだけどさあ……」

扉の向こうから、アルミナの声が聞こえてきた。

結局、ルーランが女であるという事は、公然の秘密になった。

また、サーナリアの本名等は、折を見て銀龍クルーにのみ話す事  
にした。

ただ今、オロ邸に居る時は、ルーランで通す事にした。

晩餐会である。

オロ兄妹も出ていた。

銀龍クルーの半分は、相変わらずの食事風景だった。

アシュマはマナーを気にしない豪胆な食べっぷり（ただし、なぜ

か下品には見えないのは、人徳か）だったし、アルミナと、オルバニアンもいつもの通りマナーがなっていない食事風景だった。

その中でルーランがヨデイを見て、

「何だ。そちは、昨日の晩餐会といい、今日のといい、ちゃんとマナーどおりに出来ていないか？」

そう揶揄した。

「それはそうですよ。だから言っただけじゃないですか。やれば出来るって」

ヨデイも返した。

「そうだったか？」

「そうですよ」

エファールはなぜか鼻が高く、嬉しかった。

本人はその事に、全く気付いていなかったが。

「さて、諸君。諸君らは『魔法』と言う言葉を、聞いた事があるだろうか？」

オロは突然話し出した。

あまりの唐突さに皆目を丸くした。

何を話したすのか。

そんな感じだった。

「近年、『スコラ』なる組織が、兵士になる者を養成していると言う。しかも、合法的に。大っぴらにだ。これが、ドートネーゼの手で運営され、彼らの兵士にされているという。これを諸君は、看過する事が出来ようか？ いや、私には出来ない！ 特に彼らは古代の技術『魔導法術』……これを略して『魔法』と、言うらしいのだが、これの復興に力を注いでいるという」

「『魔法』？ 『スコラ』？ 『ネルファベージェ』ではなくて？」

アシユマは自分のもっている情報を出した。

「流石はアシユマ殿。ネルファベージェはドートネーゼの実働部隊。養成所も兼ねている。そのうちの養成期間の一つが『スコラ』。表向きは学校法人を名乗っている」

「学校なのか」

オルバニアンが妙な感心の仕方をする。

「舐めて掛かつては困る。ドートネーゼの一機関なのだ。スコラは」  
オロが忌々しげに言う。

「ドートネーゼかあ。厄介だなあ」

ヨデイがぼやく。

「さて、魔法について少し解説しよう。魔法は特殊な魔導石により引き出された力を魔方阵、若しくは言語魔方阵……所謂呪文の詠唱と言う奴らしいが、それによって形にした物であるという。他には属性と言う奴があるらしく、火、水、土、風、聖、暗黒、の六種類に属すると言う。また、魔法には、召喚魔法なる法術があつて、魔方阵によつて様々な『召喚獣』を呼び出す事が出来ると言う。ここまではいいかな？」

オロは回りを見回すと、頭がぴーまんの者が約二名いた。

オルバニアンとアルミナだ。

オロは、彼等に関わると話が進まないと思つたのか、彼等を見無視して話を続けた。

「さて諸君らに頼みたいのは、『スコラ』へ教師として、または生徒として潜入し調査・報告をして欲しい。余りにもドートネーゼ寄りの経営をしているならば、即刻攻撃してこれを排除する。そうであれば、学校法人ごと買い取つて、わがエバス財団の軍に組み入れる」

「結局はそういう事かよ！ やり方が汚えぜつー！」

オルバニアンは叫んだ。

「オルバニアン様、お兄様は汚い方等ではありません。現に長い地道な下調べの後、最も人命が尊重されるべき方法を……」

アリアが立ち上がつて訴えた。

「やめるんだ、アリア。彼らには何を言つても分からない」  
オロが手でそれを制す。

「ああ！ わかんねえな！！ 結局は殺すか、殺さないか、そいつ

の判断を俺達の情報で決めるってんだろ？」

「良く分かっているじゃないか？ その通りだよ」

オロが平然と言う。

「うくっ！ おれはこんな人殺しの為の調査なんか、御免だぜ！」

オルバニアンは席を立った。

「オルバニアン。どこへ行くんだ！？」

ヨディが叫んだ。

もう一人、席を立ち上がった者がいた。

アーチエルだ。

「わたしも、オルバニアン様と同意見で御座います。はなはだ失礼かと存じますが、これにて」

アーチエルは退席した。

「アシュマ殿。君はどうするのかね？ 確か君はアーチエル様のナイトだと思っただがね？」

オロが揶揄した。

「……………俺はこの話、乗ってみてもいいと思う」

アシュマが応えた。

「アシュマ！」

席のあちこちから、非難の意味と、賛意の意味の、どちらとも取れる声が上がった。

「ほう、アーチエル様と違う意見とは珍しい。こういった風の吹き回しだね？」

オロが言う。

「この作戦は、意外と人道上、宜しい作戦なんじゃないかと俺は思う」

アシュマはそう言った。

「それは何故かね？」

「アンタは、俺達を使わずに、白だろうと黒だろうと、施設内へ踏み込んでいって、白黒はつきりする事も、出来た筈だ。ただ、白の場合は言うに及ばず、黒の場合には、相当数の犠牲者が出た筈だ。」

「アンタはそれを嫌い、最後の望みを俺達に託した。違つかない？」  
アシュマはそう切り出した。

「ん〜ん、美談だねえ……くつくくつ、でも、美談は嫌いだねえ。違うよ。コストの問題さ。そう、確かに僕には強襲ができるよ。だけどねえ、人的被害を考えるとその出費が馬鹿にならないのさ。これが答え。まだまだだねえ。アシュマ殿？」

オロが、皮肉交じりに答えた。

「お兄様はどうして、直ぐ天邪鬼におなりあそばすの？ 今の答えにしたって、アシュマ様の仰る通りでは御座いませんか？」

アリアが非難した。

「……………」

相手がアリアだと、オロは何も言えなかった。  
ただし、嫌な顔はしたが。

「だが、危険な任務である事に変わりはないね？ どうする？ アシュマ君。ドートネーゼの懐に入り込むようなもんだよ？」

ヨディが言った。

「俺は、ドートネーゼとの戦いで何度か『魔法』や『召喚獣』とやらに遭遇した。あれは甚だ危険だ。敵の手の内を少しでも知っておきたい」

「成程。じゃあ、賛成でいいね？ みんな？」

ヨディが訊く。

その場にいる者は皆、首肯した。

「じゃあ、あとは、オルバニアンとアーチエル様ね」

エファールが言った。

「じゃあ、僕が、オルバニアンの説得を引き受けよう」  
ヨディが引き受けた。

「じゃあ、俺がアーチエルを……………」

アシュマが言いかけたのを

「アシュマじゃ、心もとないわ。逆に言いくるめられそう」

エファールが、アシュマでは頼りないと言った風で、応えた。



「そんなに、アーチエルは性格良くないか？」

アシユマが困ったような顔になる。

「性格はいい子だわ。でも時々頑固になるのが、玉に瑕ね」

「分かった。エファ、任せる」

「まかせて、アシユマ」

そして、その夜、整備中の銀龍号内で、銀龍号会議が開かれた。細かい資料を受け取ったアーチエルは、取敢えず床に資料を並べた。

そしてその時の事を思い出し、

「オ口様に皮肉を言われました。元々私は反対派で、この作戦に参加しない筈じゃなかったのかつて。頭に來たけれど、『ええ、私の考えが浅はかでした』って言ったら、にんまり笑って、『これから良く吟味する様に』ですって。もうわたくし、情けないやら、悔しいやらで、泣きそうになりました」

そう言っている間にも、アーチエルは少し涙ぐんで、資料を並べ終えた。

そしてアシユマの隣に座ると、アシユマが優しく肩を抱いてくれた。

そして、資料の説明を始めた。

「ぐすつ。みなさん、失礼しました。先ず最初にこの学院は、教員、生徒共に途中編入は可です。で、先ずは、教員選抜の説明を行いましたと思います。今、教員で、欠員があるのは総合武術教諭一名、総合魔法教諭三名、召喚士教諭二名ですね。教員には、アシユマさまと、ヨディ様それにエファールさんの三名で行きたいと思っています」

説明をしていると、

「チヨツと待った！」

エファールが、待ったを入れた。

「何で、私が生徒でなく教師なのよ!？」

エファールが抗議した。

「年齢制限で、アウトです」

アーチエルがにべもなく言う。

「何ですってえ？」

エファールの顔が夜叉になる。

「エ、エファールさんお幾つですか？」

アーチエルがたじろぐ。

それ程怖い顔だった。

「わ、私？　そ、そんな女性に年齢を訊くのは、し、失礼ではなくって？」

一転してエファールが狼狽える。

「大切な事です。教えて下さい」

「十月二十四日の二十歳よ」

「本当の年齢を教えて下さい」

アーチエルの言葉は容赦が無い。

「アーチエル様、貴女、鬼？　少しぐらいサバ読んだって、良いじゃない」

「私だって、その気持ちは分かりますけれど……不正がばれたら、エファールさん学校にいらなくなりますよ？」

容赦のない言葉の元はエファールの事を慮つての事だ。

アーチエルは善意でそれをやっているだけにそのことに気が付かない。

「少しぐらいサバ読んだって、分わかりやしないわよ」

「ばれます。だって、エファさん……」

アーチエルが言葉に詰まる。

「だって何よ？」

「エファさん、大人の女性って感じします」

「ははっ！　こりやいいや。要するにアーチエル様は、エファールが老け顔だって言いたい訳だ！」

アルミナはズバリ言ってしまった。

「そ、そんなアルミナさん……」

アーチエルは取り繕うとしたが、エファールが後姿からゆっくりこちらを振り向いて、

「な〜ん〜で〜すっ〜て〜?」

そうやられた日には、アーチエルは怯え、アルミナは固まった。本物の夜叉の顔だ。

アーチエルは、すぐさまアシュマの胸にしがみつき、ぶるぶると震えていた。

アシュマは仕方なく、

「エファ、仕方ないだろ。大人しくして、教員試験受けたらどうだ?」

言ってやった。

「まあ、いいでしょう。その代わり子猫ちゃん?」

エファールはアーチエルの方を向き、

「一つ貸しだからね?」

静かに言われた。

アーチエルはがくがくと、頭を縦に振るしかなかった。

「あまりアーチエルを苛めるな」

アシュマが窘めた。

そして、

「次に進んでくれ」

と、言った。

「ぐすん。では話を続けます。ぐすつ。教員採用試験では、アシュマさまは、総合武術教諭、ヨデイ様と、エファさんは、総合魔法教諭が召喚士教諭のいずれかで、教員試験を受けて下さい」

「チョツと待ってよ、どうしてアシュマを、一番得意そうな総合武術教諭に持ってくる訳? 私だって、総合武術教諭受けたいわ!」

エファールがまた、難癖を付けてきた。

「うつつ」

ひるむアーチエル。

「アーチエル、構わん。思う所をぶつけてみる。後は俺が何とかする」

アシュマが擁護する様に言った。

「ホントですか？ 怒りませんか？」

アーチエルが訊く。

「大丈夫だ」

「では、エファさん、アシュマさまが他の教諭で、受かると思いますが？」

「うっ……」

これにはエファールも頭を抱えた。

「アーチエル……」

アシュマが呟いた。

「だ、だから言いたくなかったんです。アシュマさま怒るから。別にアシュマさまを馬鹿にして、こう言う選択をした訳じゃないんですのよ？ ただ、魔法とか、召喚とか、アシュマさまには不向きだと思ったから。それにアシュマさまは、頭の回転は速い方だと思ってますし……」

「びくびくするな。大丈夫だ。責めたりはしない」

と、優しい目をしてアーチエルの頭に、ぽんと手を乗せた。

途端に明るい表情を取り戻す、アーチエル。

「では続けますね！」

意気揚々として、話を続けた。

「では次に生徒、途中編入試験に関してですが、魔法剣士学科、一般魔法学科、召喚士学科の三つがあります。この中から、アルミナさんとオルバニアン様、お二方は魔法剣士学科を受験して下さい。私は一般魔法学科を受験します」

「おいおい、アーチエル様よう。魔法を使わない学科はないのかよ？ それこそ俺の頭はピーまんだからな、魔法でつまづいて、受験に失敗なんて事も、ありうるぜ。その時の責任はどーしてくれるんだ？」

オルバニアンがアーチエルを突付いた。

「こ、この資料によりますと、魔法剣士学科は剣術若しくは刀術と簡単な魔法の詠唱によって、選抜されると書いてあります」

「それこそ、『簡単な魔法の詠唱』が出来なかつたらどーすんだよ？」

オルバニアンがアーチエルを責めるように言った。

「そんなの、出来ない本人に責任があんだろう？　あまりアーチエル様を、苛めるんじゃないよ！」

アルミナが啖呵を切った。

「うううっ」

オルバニアンがたじろいだ。

（ううっ、今日は厄日だわ）

アーチエルは、泣き出しそうな顔になった。

これには、オルバニアンもびびって、

「い、いや、一般論だから、泣かないでくれよ？」

取り繕った。

「ぐすっ……はい。受験は五日後になります。それぞれに、魔導石をお渡しします。これは主に魔法用になります。普段の様な魔導石の使い方は出来ませんので、御注意下さい。ぐすっ。各々の問題集はここにあります。私からは以上です」

そう言った後、アーチエルはしょんぼりして、アシュマの隣に、ちょこんと座った。

「ご苦労さん」

アシュマはぽんぽんと、頭の上に手を置いて言った。

するとアーチエルは、無言でアシュマに抱きつき、顔をアシュマの胸に埋めてしまった。

アシュマはアーチエルの肩を抱き、アーチエルの好きな様にさせておこうと思った。

「さて、次の議題ですが、ルーラン陛下の事についてです」  
ヨディが切り出した。

ルーランは何処となく、むすっとした表情で中央に立っていた。若しくは、泣きそうだったのかも知れなかった。

「えー、周知の事実かと思いますが。ルーラン陛下は実は女性であられまして……」

「余が女性で何故悪い？ 余はルーランとして今まで育てられてきたのじゃ！ これからもそうであって、何故いけない！？」

ルーランが怒って叫ぶ。

「そこで御座いますよ陛下。陛下はそうやって自分に嘘をつき、御無理をしていらっしやる。それでは陛下もお疲れになってしまう。だからせめて、銀龍号の中にいる時だけでも、本当のお姿でいて貰いたい。それはここにいる全員の希望です。サーナリアさま」

流石はヨディ、相手に付け入る暇を全く与えず、一気にまくし立て、話を押し切ってしまった。

「そうか、ヨディ。相分かった。銀龍号内にいる時は、サーナリアとして振舞おう」

ルーラン……いや、サーナリアはそう言った。

「ありがたき幸せ」

「よせ、わらわは今、サーナリアだ。堅苦しい挨拶は、抜きにせよ」  
「そうでしたね。サーナリア様」

その言葉を聞いてサーナリアは、積年の鬱屈した心から、解き放たれたような気がした。

サーナリアが最初にした行動はといえば、アーチエルをまねて、オルバニアンの隣に座り、

「兄上」

そう言っ、て、オルバニアンの腕を取り、サーナリアは擦り寄った。これには、当のオルバニアンを含め、全員が驚いた。

「何故じゃ？ 何をそんなに驚く？ これがサーナリアじゃぞ？ 妹が、兄上に敬愛の情を抱いて何故悪い？」

「い、いや、これは、敬愛の情じゃなくて、男女のソレだってばよ」  
オルバニアンが辛うじて言った。

「？ 兄上、良く分かりませんが、それならそれで、宜しいではありませんか？」

サーナリアは、いたって平静だった。

代わって、オルバニアンといえば、パニック状態に陥っていた。

（い、妹だよな？ さっきまで男だったよな？ でも近くで見ると可愛いな。男女の仲って、やっぱりアレなのかな？ でもそういうの、近親相姦って言うんだよな？ やっぱ駄目だよな……）

スパン！

その時、アルミナがオルバニアンの頭を、スリッパで叩いた。

「そこ！ 変な雰囲気作らない！」

「いつてーな、何しやがんだよ？」

オルバニアンが言った。

そして、サーナリアが、

「アルミナ！ 兄上に対して何を致す！ この無礼者……！」

と、怒鳴った。

「何いってんだい！！ あんたら今、兄妹でキスしようとしてただろ……！」

アルミナが、それを止めた。

「そ、そうなのか？」

オルバニアンが、意外な顔して驚いていた。

「『そうなのか』じゃないよ！ なに二人で雰囲気作っているんだか。まるで僕達以外は皆ピーマンみたいな顔して、二人の世界作ってさ」

「じゃあ『アレ』は良いのか？」

サーナリアが怒りながら指差したその先は、肩を抱き合う二人、アシユマとアーチエルの姿があった。

「え？」

指差された、アーチエルが頓狂な声を上げた。

「あの二人は良くて、わらわと兄上がああする事は、間違っておるのか？」

「そうだな」

指差された当の本人、アシュマがそう応えていた

「なっ……」

言葉に詰まる、サーナリア。

「兄妹同士だからこそ駄目なのだ」

アシュマが畳み込んだ。

「い、いや、アシュマ。幾ら好きあった同士でも、衆目の中じゃあ、まずい事もあるぞ」

アルミナは言ったが、アシュマにも、アーチェルにも、そしてサーナリアにも、聞こえていなかった。

「うつ、うつ」

低く呻いたサーナリアは、アーチェルの反対側、アシュマの隣に座り込み、アシュマの腕を取って、

「これならどうじゃ？ 文句あるまい？」

と、言った。

流石のアシュマもこれには、ぐうの音も出せなかった。

が、反対側のアーチェルが、

「サーナリア様！ 駄目に御座います。アシュマさまは、わたくしの大事な、大事な、想い人に御座います。どうかわたくしから、アシュマさまを取らないで下さいまし」

必死に訴えた。

「……余興じゃ気にするな」

サーナリアはそう言つて、アシュマの腕から離れた。

「そういえば、わらわの入学試験用の試料が、見当たらんのか」

サーナリアは言った。

「今回サーナリア様は居残りに御座います」

アーチェルはさり気無く言った。

「なんと！ わらわを皆から引き離す所存じゃな？ アーチェル・ナヴィア・アップルトン！ 同じ王族の出だと思って、一目置いてきたものを、わらわを謀るとは言語道断！ そこへ直れ！ 成敗し



てくれん！」

刀を抜いて振り回し始めた。

「わ、私ですか！？ きゃっ！ あぶな……あぶないっ  
アーチエルが叫ぶ。

刀を振り回すサーナリアに対して、どこをどうしたのか、アシュマが刀をひいとり取り上げ、鞘に収めてしまった。

そして、

「サーナリアに居残りを決めさせたのは、俺とヨディだ」  
そうアシュマは言った。

「うつつ、おのれヨディ！ まちゃれ！」

何故かサーナリアは、ヨディを攻撃目標とした。

今度は持っていた乗馬用の鞭で、ヨディを攻撃しているようだった。

「わッ！ どうして僕なんですか！？ アシュマ君だって共犯なのに！？」

「黙れ、黙れ！」

サーナリアはヨディを追い回した。

「はあ、今日はホントに厄日だわ」

アーチエルは嘆いた。

闇に照らし出された人影は、揺ら揺らと揺らめいて、実体感が無かった。

闇に照らし出された人影は全部で七体。

前回と一緒だ。

皆フード付きのローブを纏っている。

誰が誰だか分からないようにしている。

「問題なのは聖櫃をどこで開くかだ……」

「月で聖櫃を開くのはどうだろうか？ 施設も装備も備わっている」

「おまけに人類を滅ぼす間のシエルターになつてくれる」

「問題はどのようにして月に行くかだが」

「後は月に行く人選だな必要かつ最小限度が望ましい」

「『携拳』ですな？」

「然様」

スコラへの選抜・編入試験が始まった。

場所はスコラの『特設会場』と言う事だった。

意外にも大きい校舎で、ビルの四階建てに相当するような大きさの校舎が、円周上に立ち並び、ドーナツ状になっていた。

後で、聞いた話によれば、この校舎の造り自体が印を組み、魔方陣の代わりをなし、外敵から守護していると言う。

校庭にも裏庭にも、緑が多く取り入れられ、見た者を和ませていた。

また、池も作られており、生徒達の憩いの場となっていた。

これらも、無計画にそこにあるのではなく、意味があって配置されているのだと言う。

選抜・編入試験は、アシュマ、ヨデイ、エフアールは、教師として。

アーチエル、オルバニアン、アルミナは、生徒として、それぞれ編入試験を受ける。

試験官にミス・ケリー・サトウと言う年配の女性と、ほか数人。

まず、通されたのが少し広めの部屋だった。

そこに全員集められ、椅子に座らされた。

真ん中にあるのは魔水晶。

所謂、魔力とか念導力と呼ばれる物の、測定をする水晶だ。

「これから貴方方の念導力が、いか程の物なのかを、測定します」

水晶の近くに測定等級紙が置かれた。

「では、アトーさん、どうぞ」

「いや、俺は一番最後でいい」

「？……では、アーチエル・ナヴィア・アップルトン王女お願いします」

「はい。んん……ん」

アーチエルが気を込めると、水晶球が明るく光だした。早速、等級紙と照らし合わせて、いか程の級が得られたか見てみる。

その結果は……。

「すごい。アーチエル王女は『超特級』ですね」

ケリー教頭は驚いていた。

「かーっ！ いきなりトップレベルかよ。参ったねー！」

アルミナが驚いていた。

「じゃあ、次の方……」

こうして測定された結果は以下の通り。

超特級 アーチエル・アップルトン。

特級 エファール・マーヤ・ソーファ、アルミナ・ラ・シア。

一級 オルバニアン・マグマイヤー、ヨディ・ヨフル。

さて、注目の的、アシュマは、

「本当に、全力でやらねばならんか？」

少し戸惑った。

「当然です」

ミス・ケリー・サトウが顔を澄まして言う。

「どうなつても知らんぞ？」

「あ、アシュマ君？ 離れた方がよさそう？」

ヨディが退避の用意をする。

「出来れば」

アシュマが応える。

するとケリー教頭を除く全員が卓から離れた。

そして、

「念を入れる」

言いざま念を掛け出した。

すぐさま魔水晶は光を放ちだした。

珠とアシュマの指の間に電光が走った。

ケリー教頭が、

「も、もう結構分かりました貴方の区分は……」

そう言いかけた時、珠が碎けて飛んだ。

「区分は？」

アシュマが訊いた。

「超・超特級……と、言う事にしておきましょうか」

「サイコ・フライヤーが悲鳴を上げる訳だ」

オルバニアンは言った。

その後、各々の試験会場へと向かった。

アシュマの試験場は、天井が高すぎるぐらいの広い……広すぎる部屋だった。

先ず、アシュマが、総合武術教師として試験に挑んだ。

「……で、貴方の経歴は、これで間違いない訳ね？」

ケリーと言う女性からの質問だ。

「はい」

「これが本当ならだけど、貴方はあの、閃光のアシュマ……最近で  
ブラッディ  
は血まみれアシュマと、いう事になるわね」

「はい」

「この項目の『イルドリア武道大会の非公式ながら優勝』と言うのは？」

「故あって他人の名前を借り、そのまま優勝いたしました。故に非公式と……」

「主に得意な武器は？」

「刀を主に遣いますが、剣、槍、棒、素手、等、大抵の武器はどれでも使いこなせます」

ケリーと言う人物が、ちらりと上を見た。

天井が高すぎるぐらいのその部屋の、上の方に突き出ている窓に、なにやら人影が映った。

その人物は何かの合図を、ケリー試験官に送ったように見えた。アシユマはそれに気付いたが、見て見ぬ振りをした。

「スチナ教諭、スチナ・アガネ召喚士教諭」

「はっ、はい」

「召喚詠唱を始めなさい」

「待って下さい」

スチナと呼ばれた女性の召喚士の教諭が、何かを言い始めた。

『総合武術教師』の選抜で召喚獣を使用するなんて、聞いた事がありません。下手をするとあの人の命を、奪いかねません!!」

（なんだそんな事か）

アシユマは思った。

その様な状況は、慣れっこだった。

その様な目には、何度もあっているからだ。

「で、武器は？」

アシユマは尋ねた。

すると、こちらに引かれて来たカーゴに、ボロボロのランスが一本入っていた。

「これだけです」

ケリーと呼ばれた女性は、言い切った。

（情けない話だ。こんなぼろぼろのランス一本で、何をしろと言うのか）

アシユマは、この学校の品性と言うものを、疑って掛かった。

「スチナ教諭。召喚を始めなさい」

再びケリーが命じる。

「……はい」

スチナと呼ばれた女性が呪文を詠唱し始める。

『その目、真っ赤に燃ゆる魂よ。』

汝の高貴な魂よ。

我の敵は汝の敵也。

出でよ赤竜、

レッドドラゴン！！』

すると赤い光が集まり、何かの形を成そうとしていた。やがてそれは龍の形と成り実態を表した。

それは詠唱の通り、レッドドラゴンだった。

アシュマはますます呆れた。

どだい、こんな錆付いたランス一本で、倒せと言う方が無理なのである。

どうあっても、受からせたくないらしい。

若しくは、自分の命を奪おうと言うのか？

考えられる事だった。

なにせ、ドートネーゼの懐に入るようなものである。

それならば、こちらにも考えがある。

「もう行ってもいいのか？」

アシュマが言う。

「いつでもどうぞ」

言うが早いか、アシュマはレッドドラゴン目掛けて走っていった。ボロボロのランス一本を持って。

アシュマはレッドドラゴンの吐く炎を掻い潜り、レッドドラゴンの後ろ脚を階段に、器用に上へと登っていった。

（速い！！）

スチナは、こんな動きのできる人間を初めて見た。

それは、ここにいる誰もが、感じていた事だった。

アシュマは召喚獣の腰から背中、そして首へと、登っていった。

そしてドラゴンが首を振る前に、『ぼんのくぼ』ヘランスを突き立てた。

それは途中まで入ったが、全て入った訳ではなかった。

しかもこの時、ランスの柄が、根元からぽつきりと、折れてしまった。

ドラゴンは案の定、首を大きく降り始めた。

苦痛に悶えているのだ。

アシユマは振り落とされないように、鱗をしっかりと掴んで、離さなかった。

そしてドラゴンが、首を振るのを止める、その一瞬を待った。その時は来た！

一瞬、ほんの一瞬だが、ドラゴンの動きが止まった。

アシユマはその隙を見逃さず、右の掌に気を集中させ、折れたランスの根元へと、発気の術を食らわせていた。

ランスは根元まで入り、入ったランスを中心に気が爆発的に膨張し、ドラゴンの首から先を粉碎していた。

ドラゴンは、その場に崩れ落ちるようにして、倒れた。

「とどめをさすか？」

「いえ、結構」

アシユマはその場で合格。

召喚獣の死体は、光の粒となって消えた。

スチナと言うまだ若い（と言っても、アシユマよりは一つ二つ年上の様だが）女教師が、アシユマを職員室に連れて行った。

「すまなかったな。大事な召喚獣を……」

「いいえ、いいのよ」

そう言いながら、頭を押さえたり、首を軽く横に振ったりしていた。

どうやら頭痛がするらしい。

「召喚獣の正体はまだよく分かっていないの。映像を伴った質量説、物質の再構築説、その名の通り召喚説。どれも高エネルギーを必要とするわ。アシユマさんは戦って、どのような感触持ちました？」

スチナと言う女教師は親しげにアシユマに声を掛けてきた。

「血の通った生き物だな。そうした感触を得た」

アシユマは淡々と答える。

「物質の再構築説、または召喚説。と言った所ね。でも凄いわあ。ドラゴンをあも簡単にやつつけるなんて」

「見た目程簡単ではない」

「またまた、クールに決めちゃって。今度お姉さんとお食事でもど  
う？」

スチナはアシュマを誘ってきた。

「結構だ」

アシュマはにべもない。

ケリー教頭が訊く。

「エファール・マーヤ・ソーフアさんね？」

「はい」

エファールは澄まして答える。

「志望動機は『古くて新しい技術、魔導法術を使って、次の若い世  
代の成長を、見守って行きたい』訳ね」

「はい」

「私から見ても、十分に若いけど貴女」

「有難う御座います」

ケリーは先程の高窓を見た。

もう誰もいなかった。

と、言う事は、普通に合否判定をしると言う事か。

「では、エファール・マーヤ・ソーフア。始めて下さい」

「それは、呪文の詠唱を始めると言う事ですよね」

「そういう事になります」

「では……」

そう言っで、エファールは木製の杖を鞘から取り出して、呪文を  
詠唱し始めた。

『あまねく炎、火の精霊よ。

汝ら、我が命に従い、

集いて、我が敵を焼き滅ぼすべし。

放て、その手で！

ファイヤーボール！！』



杖の先に三十センチ程の火の玉が現れそれを壁にぶつけた。  
忽ち起こる大爆発。

「ほう、中々ですね。次ぎ、行きなさい」  
アレだけの爆発もびくともしない壁。

ここはこういう事をする部屋なのだと気付かされる。

「はい」

『命の源、母なる海よ、

汝の子の危機救うべし。

浜辺に打つ波、敵、退けん。

無限の力、一滴となさん。

ウォーターフォール！！』

エファールが、呪文を詠唱した。

空中から現れる大量の水。

地面が吸収し切れずに、溢れ始めていた。

「これもいいでしょう。次へ進みなさい」

「はい」

『忘れよ止めよ解き放て。

我に一時の安息を与えたまえ。

我に枕とベッドを与えたまえ。

開放の彼方へ。

リムーブ・スペル。

安息は我とともに』

エファールは言つて、杖を一振りすると、空中から湧き出す水は  
無くなった。

これは呪文を途中で止めるための呪文だ。  
そして次の呪文の詠唱に入る。

『この地の最果て、まだ見ぬその地よ、  
我らの子らは、その地へ進まん。

その地、我らの約束の地とならん。  
行く手を遮る障害を打ち滅ぼさん！

グラウンドブレイク』

エファールを中心に地震波が発生した。

ケリー以下数人の受験監査官は、いすに座ったまま、立つ事も動く事も出来なくなっていた。

「も、もついいわよ。さて、次をお願い」

「はい」

『忘れよ止めよ解き放て。』

我に一時の安息を与えたまえ。

我に枕とベッドを与えたまえ。

開放の彼方へ。

リムーブ・スペル。

安息は我とともに』

杖を一振りした。

地震が収まった。

「済みません、鉄の棒を、御用意して頂きたいのですが」

エファールが言った。

「用意して差し上げて」

ケリーも言った。

台の上に立てられた直径四〇五センチの鉄の棒が運び込まれた。

「では」

呪文の詠唱が始まる。

『そよぎし風よ、癒せる風よ。』

草原渡りし、緑の風よ。

願わくばその風、刃となせ。

敵を斬り裂け！

ウインドスラッシャー！！』

そう言つと鉄の棒は、

キキキキン！

そう言つ金属音と共に、細かく寸断されてしまった。

「一応、これで合格ラインは突破した訳だけれど、どうします？」

ケリーが言った。

「一応、ヒーリングを試したいのですが……」

エファールが言った。

「怪我人なら事欠かないわ。誰か。一人、連れてらっしゃい」

ケリー教頭がいった。

早速、生徒が一人やって来た。

骨を折って、腕を吊るされている様だった。

「では」

エファールは患部に手をあて、呪文を詠唱し始めた。

『私の癒しは汝の癒し。

汝の為とは私の為。

私の為とは汝の為。

今ここに奇跡を見せん。

ヒーリング』

詠唱し終わると、掌から暖かく柔らかな光が放射され、それを五分も続けていると、骨を折った生徒は、

「直ったみたいだ」

自分でギプスを外し、ケリー教頭に腕を見せて、説明していた。

「良いでしょう」

ケリー教頭は言い、

「暗黒系の魔法はどうしますか？」

そう訊かれた。

「いえ、暗黒系の魔法は熟知していない物で」

「そうですか。まあ、良いでしょう。規定の四系統は、クリアしている訳ですし。採用です」

「有難う御座います」

「誰か、ミス・エファールを、職員室まで連れて行って頂戴」

「ヨディ・ヨフルさん……ね？」

ケリー教頭は言った。

「はい」

ヨディは、ニコニコしながら話していた。

「志望動機は……世界平和?!」

「はい」

ヨディは、ニコニコしながら答えていた。

「守衛! このお方を、校門まで連れて行って頂戴。丁重に」

「はっ!」

「ちょ、ちょちょ……待ったあ!」

ヨディが待ったをかける。

「な、何かしら?」

「折角ここまで来たんだ! 僕の法術、見せましょう。決して御期待に沿わない物じゃありませんよ?」

「そう? じゃあ、やって貰おうかしら?」

「宜しいので? では。スーズリ、スーリーズ、リースーズ……」

「こ、これは暗黒系の召喚魔法の詠唱……!」

ケリーは驚いた。

『全てを憎しむその牙よ。

全てを憎しむその爪よ。

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト!』」

空中に魔方阵が描かれ、中心に暗黒の珠が出来たかと思うと、暗黒の珠は形を成し、暗黒竜、ティアマツトへと変貌した。

「ティアマツト! いけない!! 暗黒系の召喚術は、召喚されたものの制御が難しい筈! 今すぐ召喚を解いて……」

ケリー教頭は慌てたが、当のティアマツトはヨディに頭を摺り寄せ、喉をごろごろと鳴らしていた。

「大丈夫。僕の『ウィンドム』は、そんな悪さはしません」

ヨディはティアマツトの喉をさすりながら、言った。

「合否は？」

「う、合格です」

ケリー教頭は腰を抜かしつつ、そう言っていた。

アーチエルは一般魔法学科を受験していた。

最初の時限は一般筆記試験だった。

魔法を理解する為の国数理社。特に理数系の問題に、重点が置かれていた。

アーチエルは一通り問題を軽くこなすと、首と肩をコキコキさせ、肩を大きく回していた。

「ミス・アップルトン？ 問題は終わったのですか？」

試験官が聞いた。

「あ、……はい！」

アーチエルが元気よく答えた。

「なら、解答用紙を渡しなさい。十分休憩。その後に魔法筆記試験に入ります」

アーチエルは、

「ふう」

と、ため息一つついて体を脱力させた。

「アシュマさま大丈夫かなー。他の皆はどうなのかなあ……」

そう、一人ごちた。

一方、アルミナとオルバニアンだが、一人づつ、ここの総合武術教師と対峙していた。

先ずはアルミナから。

アルミナは眼帯を外し戦利眼を使った。

背を向け、回転させて、遠心力を付けての戦法は捨てた。

今までの戦法上、隙が余りにも多すぎると、判断したからだ。

その代わり、いつでも、どの角度からでも、剣を振れる様に密かに鍛錬した。

前腕と手首、そして握力が異常に発達した。  
体の土台になる、足腰も鍛えた。

これらは全て、アシュマのアドヴァイスから来ていた。  
今、それを試す。

相手の得物は木刀だ。

それと引き換え、こちらは自前の木大剣だ。

「はじめ！」

の号令が掛かった。

相手が動き出した。

アルミナは、相手が、左脇構えから胴に抜くと見た。

相手の男は、以前どこかで、アルミナの戦法を見た事があるのだろつ。

アルミナが後を向いて、剣を回さない事をいい事に、反撃する機会を失ったと見て突っ込んできた。

アルミナは、肩に剣を担いだ。

そしてその位置から、剣を八双に構え、そして打ち下ろした。

相手の男は驚き、木刀を構えなおしたが、何の意味も持たず、木刀ごと鎖骨を粉碎された。

「豪儀ね」

丁度ケリー教頭がこちらに来ていて、そう言った。

アルミナはケリーに対して軽く会釈をした。

そして、オルバニアの所に行くと、軽く宙で、  
ぱん！

と、手を叩きあつた。

今度は、オルバニアの番だった。

相手も代わって、長身の男だった。

丁度、ヨディぐらいの背の高さだろうか。

相手は長木刀を持ってきた。

定寸より一尺程、長いだろうか。  
長剣だった。

それに対してこちらは定寸より、三寸程長いだけ。  
間合いでは、圧倒的にこちらが不利だった。  
だがそれは、普通の場合での事。

「はじめ！」

の号令と共に、試合が開始された。

同時にオルバニアンが、疾風の如く前に出た。

相手の男は、全く虚を突かれた感じで、慌てて木刀を振り上げ、  
打ち下ろしてきたが、オルバニアンはそれを掻い潜り、相手の胸を  
強かに打っていた。

「これもまた見事な」

ケリー教頭が言った。

「これで総合武術教師二人が、病院送りにされたわね。折角補充し  
たのに。ま、アシュマ先生に頑張ってもらいましょう」

（おい、アシュマ受かったぜ！）

オルバニアンが小声で言った。

（そうみたいだな！）

アルミナが受けた。

（でも待てよ？ 俺達が今、先生等二人を病院送りにしたという事  
は、俺達の先生にアシュマが来る事だつて考えられるぜ？）

（うつひゃー。先生となると、厳しそうだなアシュマ……）

「はい、そこ！ 私語は厳禁。喋りなくなっても、試験が終わるま  
で我慢！」

ケリー教頭が注意をする。

（ひえ……おつかねえ）

（静かにしなきゃ）

「さて二人には、次に、呪文の詠唱の試験を、してもらいます」  
呪文の詠唱の試験に入った二人だったが、これが、呪文一つ暗記  
していない、お粗末な物で、詠唱しきるところか、詠唱の『え』の

字も知らなかった。

二人は入試を諦めかけた。

「二人は、呪文詠唱は不得手と見える」

二人はしゅんとなった。

もう駄目だと思った。

そこへケリー教頭が、助け舟を出した。

「ただし、剣技が卓越しているしているので、これを手放すのはあまりに勿体無い。総合武術で単位を取るのを条件に、入学を許可しましょう」

「「やつ……たあああつ……！」」

二人は抱き合って喜んだ。

その後で抱き合っている事に気が付き、照れて直ぐ離れてしまったが。

「さて、最後の子でも見てみようかしらね」

コンコンと、ケリー教頭がノックをした。

アーチエルが試験をしている部屋である。

ケリー教頭は試験官に小声で、

（彼女の様子はどうです？ あれだけの問題量、やはり二日に渡って行っしかありませんか？）

と、訊いた。

（いえ、その必要はないかと。既に最後の小論文に入っています）試験官が答える。

（ほう！ そんなに早くですか！ で、得点の方は？ 速いばかりで点数が駄目では、意味がありませんからね）

（御心配には及びません。オール満点です）

「先生」

「なんですか？ アーチエルさん」

「出来ました」



「分かりました。では最後の簡単な魔導法術を。場所を移らなければなりませんね。え〜」

「先生。それならば、ヒーリングで行いたいと思います。患者さんか怪我人の方は、いらっしゃいますか？」

「先程、怪我人の方なら二人程、出来ましてよ」

ケリー教頭が言った。

「先生。ならば、わたくしをそこへ」

アーチエルは言った。

「ついていらっしゃい」

二人は、スコラ内にある、救急の医療施設へやって来た。教える内容が内容である。

命のやり取りを教えているのだ。

こう言う施設があっても、おかしくない。

「ここよ」

ケリー教頭は病室を訪れた。

「ヘネック先生、大丈夫ですか？」

「いや、お恥かしい所を見られてしまいましたな。私はこれが直つたら、潔くここを出て行こうかと思ってますよ」

「その話は後でゆつくり。アーチエルさんお願い」

「はい」

早速アーチエルは魔導石を握り締め、開いた手で患部をかざし、  
『私の癒しは汝の癒し。』

汝の為とは私の為。

私の為とは汝の為。

今ここに奇跡を見せん。

ヒーリング』

低く呟く様に、呪文の詠唱を始めた。

すると、暖かく柔らかな光が患部を包み込みこんだ。  
やがてその光が小さくなり消え去ると……、

「直った！」

患者が言い出した。

ケリーは注意深く、その様子を伺っていた。

「どうやら、直った様ですね」

ケリー教頭が言った。

（ヒーリング能力ではエファール女史よりも上か……）

ふと気が付くと、アーチエルがいない。

みると、アーチエルはあたり構わず、ヒーリングだけが人や病人を癒していた。

「あ、あなた、もういいのよ合格だから」

「はい？」

「こちらが、制服になります」

ケリー教頭が言つて、制服を示した。

女子は紺色のブレザーに赤いネクタイ、チェック柄の臙脂色のスカート、靴はローファー、靴下は白。

黒でも可。

そして、濃茶のローブ、魔法を振るう為の小振りな杖。

男子はやはり、紺色のブレザー、赤いネクタイ、灰色のパンツに靴はローファー、それに濃茶のローブ。

基本的にはこの様な形になるが、ローブさえ着ていれば下は自由と言つのが校風であるとした。

また、これから暑い季節になるので、ローブはそこまで強要しないとも言っていた。

つまりは私服でも構わない、と言っているのと同じだった。

アーチエルが取敢えず制服を着てみた。

着替え終わって、皆の前に出てきた。

「ど、どうですか？ 似合ってますか？」

アーチエルは恐る恐る訊いた。

感想を一言で言つなら『可憐』。

それよりアーチエル自体が可憐なので、何を着せてもそうなるのだが……。

そして『清純』。

純潔の乙女にのみ許された、形容がぴったり嵌った。

また、いつぞやの様に男共はアシユマを含め、皆、目がアーチエルに釘付けになった。

「そ、そんなに見ないで下さい。恥ずかしいです」

アーチエルは更衣室へ逃げ込んでしまった。

ケリー女史がオホン！ と一つ咳払いをして、

「生徒の皆さんは良いとして、問題は先生方ですね。先ずヨディさん、貴方はもう少しだらしなさを直してもっとピシッとして下さい」  
ヨディに釘を刺した。

「そんなにだらしないかなあ」

ヨディは少し落ち込んだ。

「そしてエファールさん、貴女のような先生に多い事ですが、挑発的な服装をして、男子生徒を悪戯に刺激しないで下さいね」

「はい」

こちらは悪びれもせず、答えていた。

多分本当に、そのつもりだったのだろう。

「最後にアシユマ先生。貴方はいつも、その不良学生のような、格好なのですか？」

「ただ単にタンクトップに革ジャン、ジーンズにブーツなだけです」

「それに刀！ 貴方は、いつも持ち歩いているそうですね？」

「はい。それが何か？」

「それが何かではありません！ 問題だとは思わないのですか？」

「いまや、全百九十九ある国のうち、百八十四ヶ国で、帯刀は許されています。別に問題だとは思いませんか？」

「生徒が真似をしたら、どうするのです！？」

「自分の責任で持てと指導します。ただし学校側も俺も責任は持た

ん。やるなら命がけでやれと指導しますが？ 何か問題でも？」

「……………分かりました。もう、何も言いません！ ただしその刀が元で何かあった場合は」

「分かっています。速やかに学園を辞める、でしょう？」

「そういう事になります。覚悟しておいて下さいね？」

そしてケリー教頭は態度を改めると、

「オ、オーダーメイド品が来るまで、と、取敢えず既製品で何とか凌いで下さい。後は教科書ですね、これは一般教育課程と……………」

こうして、アシユマ達が入学する準備は、着々と進められていった。

ケリー教頭が言った。

「何故、アシユマ以降の者達への、圧力をお掛けになるのを、止めてしまわれたんですか？」

既に夕闇が迫り、その部屋の主の姿は、闇に溶け込もうとしていた。

その主が言う。

「バラバラになるより、一箇所に集めて叩く方が、手間が省けて済みます。学園内に取り込み、折を見て殺しましょう」

「そうですか。どの差し金かは知りませんが、あの六人は同志ですよ。それにしても殺すだなんて穏やかでない。何故にその様な事を？」

「それはあなたの知る所ではない」

部屋の主はそう言った。

ケリーは何も言えずその場に佇んだ。

闇に照らし出された人影は、揺ら揺らと揺らめいて、闇に溶け込んでいた。

それを許さないかのごとく明かりがロープを照らす。  
闇に照らし出された人影は全部で七体。  
常に七体だ。

皆フード付きのロープを纏っている。

一人が口を開いた。

「アシユマがネルファベーズに飛び込んできましたな」

「正確にはスコラですがね」

「目障りになってきましたな」

「そろそろ殺しておきますかな？」

「いや、もう少し、様子をみましょう」

「最終兵器の力の片鱗もまだ見せておりませんしな」

「オロ様お食事が」

この家の執事長を勤めるバーグが、そう伝えた。

オロは丁度、自室で趣味の模型飛行機作りに、熱中していた。

「うむ今日はこっちで食べる。アリアにそう伝えてくれ」

模型に目が行ってこちらを気にも留めない。

「畏まりました。それと、オロ様」

それでも慇懃に頭を下げる執事長。

頭を上げて部屋を出るのかと思いきや、暫らくその場に止まった。

その様子を察したオロが言葉を発する。

「何だ？ バーグ」

まだ何かあるのか、と、言わんばかりだ。

「はい、ヨディ様達六名が、潜入に成功しました」

「そのぐらいの事で、私の大事な時間を割く積もりかね？ バーグ」

オロは自分の時間を乱される事を嫌う。

今も静かに執事長に注意する。

「いえ、それだけでは。その件でどうやら、ドートネーズが動いた様子なのです」

「何だと？」

宿敵の話した。

これにはオロも氣を向けざるを得ない。

「まだ、はつきりした訳では無いのですが」

「それが奴らの、いつもの手口だ。いつもそれで証拠を残さない」  
オロが吐き棄てる。

「いかなさいますので？」

「少し様子見だな。彼らの報告如何によつては、総攻撃もありえるし、有益ならばこちらに取り込んでしまえばいい」

オロはにやりと頬をゆがめて笑った。

### 第三節 蜘蛛

各々が入学したり、教師についたりして、既に一月になろうとしていた。

基礎錬金学の授業中だった。

先生は黒板に何かを書いては一生懸命講義していた。  
錬金過程におけるエネルギー対流と言う項目らしい

（出目金の講義って分かりにくいよねえ）

この教師は『目』がぎょろりと『出て』、基礎錬『金』学の教師からとって『出目金』と言う事になっているらしい。

（この授業に付いて行ってる生徒いるのかなあ？）

女子の一人がぼやく。

（いるじゃん、あそこ……）

一人が指差す。

（誰…… あー、アーちゃんねー。あの娘、良い子よー）

女子の一人が優しく目を細める。

（アーちゃんて、あの子、王族でしょう？ そんな言い方しちゃって良いの？ ミカさん）

（うん、王族だからって『様』を付けるのは、やめて欲しいんだってサー。そのくせこっちには様付けして来るんだよ？ 息苦しいから『様』付けはやめてくれて言ったら、『わかりました』って）

ミカと呼ばれた女子がにっこり笑う。

（そうか、ミカさん、アーチエル様と同室だったつけ。どう？ 普段の彼女って？ メイドとかいないと、何も出来ない子？）

女子が訊く。

（それはサクラコ。アーちゃん、そんな事ないよ？ 寝ている顔なんか、やっぱりお姫様って感じでさー。可愛いよー。男子に人気あるの分かるわ）

（で、サクラコって高ビーだよねえ。まあ、間違った事はしないか

ら、ありがたいんだけど)

(そうねー、サクラコ曲がつた事嫌いだもんねー)

(だれが、高ビーよ？ 聞こえているわよ？ それに私は、誰かに手伝ってもらわないと何も出来ない、何処かのおぜう様と一緒にしないでよ)

サクラコと呼ばれた女子が口を尖らせる。

(誰よそれ)

更に女子が訊く。

(ロミアよ)

(あはは。いえてる。それ)

女子が笑う。

(何だつてあんな娘、男子に人気あるかな？ あんなに性格ひん曲がっているのに)

(そんな事より、アーチエル様よ！ どんな娘なのよ)

(うん、いたつて元気だよー。ただ昼休みと、放課後のアレで、大分元気もって行かれちゃってるみたいけど)

『アレ』とはなんだろう。

元気を持つていかれるとはなんだろう。

(そう、あたしの可愛いアーチエルちゃんに、何かあつたら、ただじゃ置かないからね)

(あたしの可愛い、アーチエルちゃんって何よ？ サクラコ)

(だまらっしゃい。エミル。貴女にはあの方の儂さとか、可憐さとか分からないの？ 見えていると思わず護つてあげたくなる様な)

サクラコと呼ばれた女子は男気を見せる。

(あんだ、感覚、男のそれだわ)

(お黙りエミル！)

エミルと呼ばれた女子が怒られる。

(そうじゃなくて普段のアーチエル様よお)

(時間に正確……)

(わぁ、いたの？ リイナ)



リイナと呼ばれた女子がぼそりと呟く。

（あんだ、そりゃリイナが可哀相よ。普段から影薄いんだから。でも、あんまり時間通りにピシピシ動くのは困るわ）

（そうか、エミルもリイナも同室だったわね）

（そうなのよねえ。それで、みんなの朝食作っちゃったり、どこへもって行くのかしらないけれど、お弁当箱六個持って……六個よ六個！信じられる？で、皆に朝食食べさせて。まあ、助かるんだけど）

エミルと呼ばれた女子が何かと零す。

（エミル、アンタどっちなのよ？）

（ミカさん）

エミルと呼ばれた女子が何かを訴えかける。

（なによ？ あんだけ皆は世話になっておいて、出るのは愚痴ばかり！？）

ミカは頭に來たようだ。

（ミカさん！）

（だから何？ 大体エミルあんたは）

「君らは僕の授業を、何だと思っているのかね？」  
出目金が、女子達の後ろに立っていた。

「！！」

女子が驚く。

「だからミカさん言ったのに……」

エミルが後悔とともに言葉を吐き出す。

「エミル」

「ここら辺の女子！ 全員廊下に立つとれ！！」  
女子たちが席を立つ。

その時アーチエルとミカの視線が合った

アーチエルは微笑み、ミカは照れた様に笑った。

昼休み、アーチエルは弁当箱を包んである風呂敷を持ち、教室を出ようとした。

「アーちゃん！」

アーチエルに声が掛かる。

「ミカさん」

アーチエルが振り返って微笑む。

「手伝ってあげようか？」

ミカがアーチエルに歩み寄る。

「いいえ。大丈夫です」

アーチエルは微笑んで言葉を返す。

「そう？　じゃあ、いつもの所で待っているから」

「はい！」

「恋する男でもいるのかねえ。それにしちや、一つは自分の分だとしても残りは五つ。五人は多すぎるんじゃないかい？　アーちゃん」と、独り言を呟くミカ。

「ミカさん！　行くよー？」

「あー、まって、まって。行く、行く」

そう言ってミカは校庭の角にある池のほとりへ向かった。

アーチエルは先ず、オルバニアンの所へ向かった。

オルバニアンのいる教室を覗くと、オルバニアンが友人と話をしていた。

「オルバニアンさ……ん！」

アーチエルがオルバニアンの下へ行く。

「よ、姫様の御登場だぜオルバニアン！」

「憎いねえ。焼けちまうぜ」

友人がオルバニアンをからかう。

「ばーか、そんなんじゃないやねえっつーの！　アーチエルの姫さん、すまねえなあ。いつも、いつも」

オルバニアンが礼を言う。

「いえ、私にできる事と言ったらこれくらいですから」

アーチエルはにこやかに微笑む。

「アルミナさんは……」

そう、アルミナもオルバニアンと同じ学級なのだ。

このスコラでは学年の概念が無く、学級しか存在しなかった。

このスコラでは学級は全部で十八。

七百人強が寄宿舎生活をしながらか学業についていた。

本人が望めばいつでも単位取得試験が受けられた。

ただし一年間に最低十コマの単位を取得しなければならなかった。

全四十コマ弱で卒業を許された。

勿論それ以上の単位の取得も可能である。

校風は自由そのもので、ある程度は生徒会で運営が許されていた。

「アルミナさん」

当のアルミナも友人と話をしていた。

「お？ アーチエル！」

アルミナがアーチエルに気づく。

「お弁当です」

アーチエルがアルミナに弁当を手渡す。

「お、すまねえ」

アルミナが受け取る。

「では次に行きます」

アーチエルが挨拶をして出て行く。

「おう頑張れよー。弁当サンキューなー」

「次は職員室ね」

アーチエルが呟く。

職員室に来た。

まずはヨデイの所に行った。

「ヨフル先生……お弁当です」

「あー済みませんねえ」

ヨデイの机の上を見ると、召喚関連の本がうず高く詰まっていた。

「ヨディ……ヨフル先生も勉強なさっているんですね？」

「そうですねえ。生徒よりしょばい召喚しか出来なかったら恥かしいですし」

「では、私は次へ行きますね」

アーチエルはまた微笑んで次へ行く。

「あんまり無理しないで下さいよ」

「え、次はエファールさん……いた。……ソーフア先生お弁当……」

アーチエルが、エファールのところに来た。

「ああ、御免なさいね。これからチョツと面談があるのよ。机の上に置いておいて。ほんつと御免なさい」

「いえ、大丈夫です。さて最後は……」

アーチエルは弁当をエファールの机の上におく。

そして……。

（最後はアシユマさまだわ。ここの所、チョツと疎遠になっているからなあ。チョツと寂しかったりするのよね）

ぼそぼそと呟く。

「アシユマさ……アトー先生？」

アーチエルはアシユマの所に行く。

「なんだい、アップルトン君？」

「くすつ、なんか名字で呼び合うのって何か変ですね」

「そうだな」

「先生の机の上って、何も無いんですね。ヨフル先生なんかあんなに本が山積みなのに」

アーチエルがアシユマの机を見渡す。

アシユマの机の上には何も無い。

「ああ、総合武術の教科書は、アレはあって無きが如しだ。意味を成してない」

「ふうん……。先生、明日のお昼休み開いてます？」

アーチエルが上目遣いでアシユマを見る。

「ああ、開いてるよ」

アシュマが優しい眼差しで見返す。

「でしたら、明日お昼御一緒にしません？」

「ああ、いいよ」

「じゃあ約束ですよ？」

アーチエルが満面の笑みで返す。

「ああ、必ず」

アーチエルは、アシュマと昼食の約束を取り付けた事に、浮かれていた。

（久しぶりにアシュマさまとの時間だね。思い切り甘えちゃおうかな？ うふふ）

アーチエルは友人達が待つ、池のほとりへと向かった。

「おい、アレじゃないか？ 今度入ってきた編入生って」

「ああ、レキシタニアの姫君て奴だろ？ こうしてみると可愛いな」  
男子生徒達が話題にしている。

「ああ、変に威張り散らしてないからな。それにしてもなんか、オラ感じるよなあ」

「ああ、威張り散らすだけのサクラコお嬢様とは違うからな」

「別にサクラコ様、威張り散らすだけじゃないぜ？」

「でも、やっぱ、かわいいよなあ」

「頭も良いらしいぜ」。全筆記教科満点で入ってきたんだってさ」

「うを？ マジかよそれ。雲の上の人じゃん」

「だから最初から、そうだってば」

男子生徒の中で人気急上昇中のアーチエルであったが、影で、それを妬む者がいた。

ロミアと言う女学生だ。

ロミアは今まで、学校中の人気をさらっていた。

それが今やどうだ、学園中の人気はあの王女様だかなんだか知ら

ない馬の骨、アーチエルとやらに奪われてしまっているではないか。  
「きいーっ！ 気に入らないですわっ！！」

ロミアは職員室の前で叫んだ。

「ロ、ロミア様、落ち着いて……」

ロミアと言う少女の取り巻きの女学生が慌てて抑える。

「しかも、先程のアレは何？ あんなにもワタクシの、アシユマ・アトー様に対してデレデレ、ベタベタと。呪ってやるわ。ええええ。呪ってやりますとも！！」

「ロミア様！」

取り巻きが叫ぶ。

「なんじゃそなた達は、さっきから……」

「周りをご覧下さりませ！」

「なに？ 周りとな？」

ロミアが周りを見ると、人だかりが出来ていた。

「おい、ロミナって、あんな奴だったのかよ。幻滅だぜ……」

「呪うだなんて、穏やかじゃありませんわ……」

ロミアは周りの状況を、一遍に理解した。

「ほ、ほほ、皆様、ごめん遊ばせ……ほほ」

そう言うのが精一杯で、慌てて職員室の前から姿を消した。

「覚えてなさいよ、アーチエル・アップルトン！！ 王族だかなんだか知らないけれど、いつかあたしの前に跪かせてあげるわ！」

「ミカさーん！」

「ああ、アーちゃん！ もう始めてるわよー」

ミカは酒の席でもあるかの如く言った。

「遅くなってごめんなさい」

スカートを端折り右手で髪の毛を軽くかきあげた。

「うーん、色っぱいわー。アーちゃん、色っぱいって言われた事ない？」

「え？　ないと思うわ」

「さっきからカメラ小僧共が、アーちゃんの事狙ってんのよねー。気をつけた方がいいわよ」

「そうなの？」

アーチエルが目を丸くし、小首を傾げる。

「ええ、それでいい奴が撮れると、ブロマイドとして売るのよー」

ミカが注意を促す。

これはこれで馬鹿にならないのだ。

「それにキワドイ写真になると、闇ルートで通常価格の十倍は取るのよ」

エミルが解説する。

「その事に関しちゃ、アタシ達女子も、人の事、言えないけどね」

「何ですか？」

アーチエルが聞く。

「例えば、今、女子の中で人気急上昇中の、アシュマ・アトー総合  
武術教諭。そのアトー先生のブロマイドが今一番売れているのよ。  
女子の中じゃ。あたしは興味無いけどねー」

エミルは言った。

「なんで？」

アーチエルが訊いた。

「あー駄目駄目。エミルはへそ曲がりで、天邪鬼と来ているから」  
ミカが答えた。

「な、何言っているのよ。どっちにしたって、あの競争率じゃ勝ち  
目ないし、第一無愛想すぎるのよ。何を話せば良い訳？」

エミルが慌てて言い返していた。

「だが実はアシュマのファンは皆、そこがいいと思っていたりした。  
「そんなにアシュマさま、取っ付き難いかなあ」

アーチエルは言って、はっとして口をつぐんだ。

「あー？　『アシュマさまあ』？」

ミカが突っ込んだ。

「そー言えば、アトー先生と同時期に、入っていたわよねー。もしかして二人は出来ているのかなあ？」

「もうミカさんやめてよー。私達そんなじゃないからあ」

「私達？」

「もうミカさん、怒りますよ？」

「あー嘘、嘘」

「じゃあチヨツと早いけど、私行きますね」

アーチエルは立ち上がって行きかけた。

「また『御免なさい』なんだ？」

ミカは訊いた

「ええ、そうなの。それじゃ」

アーチエルは立ち去った。

「行っちゃったね」

リイナがぼそりと言った。

体育館裏だった。

「御免なさい」

そう言ってアーチエルは謝った。

ここに来て何人目だろう。

交際を断わったのは。

この言葉を言うたびに、胸が締め付けられる。

やってはいけない事に近い、背徳心のような感情が疼く。

それを言われた男子生徒は大抵、

「いや、良いんだよ。気にしないで……」

そう言って、去って行く。

最後の方では、本当に悲しくなって、涙を零しそうになって言う物だから、交際を申し込んだ生徒の方が、却って恐縮してしまう。

ちゃんと、生徒一人一人と向き合って交際を断わる。

やはり、胸にとげが刺さる。



そして始業のチャイムが鳴る。

基礎魔法学の授業中だった。

絶好調の雲雀達（うずく）がさえずる。

（何？ 目をあんなに真っ赤にして。可哀相に、アーチエルちゃん。どうしたのよミカさん）

サクラコが訊く。

（そんな、私に聞かれてもサクラコさん。多分例の『御免なさい』で泣いちゃうんじゃないかしら）

ミカが答える。

（だからなんで、あの娘が『御免なさい』で泣いちゃうのよ）

（貰い泣きしちゃうんでしょ）

（しかしまあ、良くもまあ男どもに返事書いたり、御免なさいしに行くわよねえ。アタシだったら、ほっばっちゃうけどな）

（それは、エミルの話でしょ。彼女、今多感期なのよ。ああ、見ていて可哀相になるわ）

（やっぱりサクラコって、男入ってるわ）

放課後の体育館裏だ。

今日は五時限で終わりなので、これで放課後と言う事だった。

アーチエルの憂鬱な時間だった。

また、断わらなければいけないのか。

手には十何通もの、手紙を持っていた。

体育館裏についた。

おかしい。

いつもなら、何人が並んでいる筈なのに……。

おかしいと頭を捻りつつ、帰ろうとする所へ……。

「待ち下さい、アーチエル王女。貴女のナイト、タルヤ・アガネ、

ただ今はせ参じました」

「はい？」

これには、アーチエルも面食らった。

何せ相手の言う事が、分かりかねたからである。

（ふふふ。動揺しているな。ここで一気に畳み込んで）

「ああ、王女よ。貴女は何故そんなに美しいのでしょうか？ ああ、

貴女は正に万華鏡。見ている者を、幻惑の彼方へと誘う……」

「あの、タルヤ様？」

アーチエルが思わず訊く。

「……え？ 何でしょう？ 姫？」

「ここに、待ち人が、何人が来ていた筈なのですが、御存知ありませんか？」

「ああ、王女の為に、そして僕の気持ちを王女に伝える為に、蹴散らしておきました。さあ王女よ。これで二人っきりの世界に」

「何ですって？ 私の為に追い払ったですって？」

アーチエルは我が耳を疑った。

「はい、仰せの通りに御座います。王女」

「喋るな下郎、下がりおろう！」

アーチエルは一瞬で怒りが頂点に達した。

「ひ、王女？」

アーチエルは、この手のタイプが、一番嫌いである。

自分の利益の為に、他人を蹴落とす者。

自分の利益の為に、他人を利用しようとする者。

または自分の為に、他人の事等何とも思わない者。

この手のタイプに、アーチエルは、容赦がなかった。

この手紙を書いてくれた人達は、一体どんな気持ちで書いてくれたのだろう。

この手紙を書いてくれた人達は、一体どんな気持ちで渡してくれたのだろう。

それを、この男は容赦もなく、踏みにじった。

自分の為だけに。

許されようか？

アーチエルは許せなかった。

「下がれといっておる。そちの顔等見とう無い！二度とその面、わたくしの前に晒すでない！」

「ひい、ひいっ！」

これが、王族の持つオーラなのか、タルヤは後退った。

タルヤはだらしくも、その場で失禁していた。

アーチエルは体育館裏から出ると、アシュマとばったりで出会った。

「アーチエル」

「アシュマさま」

「どうした？ 気分が昂<sup>たかぶ</sup>っているみたいだが？」

「いいえ？ その様な事は……」

アーチエルが慌てて否定する。

「尋常じゃない、気の膨らみ具合だったからな」

「駄目ですね。やっぱりアシュマさまには、分かつちゃうみたい」

アーチエルは少し元氣のない微笑をアシュマに返す。

「喧嘩でもしたのか？」

「少し嫌な事がって」

「そうか。あまり無理するな」

アシュマが優しく言葉をかける。

「はい？」

アーチエルがきよんとする。

「ま、今に分かる。おっと、ここからは女子寮だ。俺は入れん」

アシュマは女子寮の入り口で立ち止まった。

「アシュマさま」

アーチエルは軽く口を差し出したが、

「アーチエル、上、上」

アシュマに言われ、上を見ると、沢山の女子生徒・男子生徒に見

られていた。

顔が真っ赤になった。

アーチエルは大慌てで、女子寮内に入った。

下駄箱を開けると、中から十数通のラブレターが、零れ落ちてきた。

「ふう」

アーチエルは嘆息した。

寄宿舎の一室のドアを開いて、アーチエルは自室に入ってきた。

「み〜た〜わ〜よ〜」

ミカが早速アーチエルをからかう。

「きゃっ！ いやっ！ ミカさん、何を見たの？」

アーチエルは顔を両手で隠す。

「ぜんぶ〜。『愛してるよ、アーチエル』『ああ、アシユマさま。』

わたくしもお慕い申し上げて……」もがっ！

アーチエルは大慌てでミカの口を塞ぐ。

「あはは〜っ。ミカ、口ふさがれてやんの」

エミルが言う。

ドアが、

ぎっ。

と、鳴ってサクラコが入ってきた。

「あら、子猫ちゃん帰ってきてたの？ 元気になりましたか〜？」

サクラコのそんな言葉など無視して、

「お腹空いたなあ。今日の夕飯の当番誰？」

と、エミルがぼやく。

ところが、全員でエミルを指差していた。

「え？ そうだっけ？ じゃあ、しょうがないから学食いこ、学食にしてはおいしいバイキングがアタシャ好みだなあ」

「お金、もったいない」

ぼそりとリイナが呟く。

「わぁーった！ 分かりましたよ！ これから材料買  
いに行つて来るから、何がいい？」

男子学生の方はいざ知らず、女子学生寮の方は、入り口から中に  
向かつて二段ベッドが三基あり、部屋の真ん中には、大テーブル（  
所謂食卓）。

そしてテーブルの向こう側に、生徒達の為の勉強机があつた。  
目を転じて右側を見ると、そこにはユニットバスとキッチンがあ  
つた。

その他には冷蔵庫、電子レンジ、洗濯機、乾燥機、等々。

つまりは、生活してゆくのに、およそ必要な物は、何でも揃つて  
いる……と、言つた所か。

「いえ、冷蔵庫にある物で、何とかなりそうです。面倒なので、わ  
たくし、作っちゃいますね」

アーチエルが言つて、料理を始めた。

「わーいラッキー」

「エミルー！」

ミカが睨む。

「な、なによ？」

「まず、感謝と謝罪」

ミカがエミルに言う。

「わ、分かつたわよ、ミカさん。……アーチエルさん、どうも済み  
ません。有難う御座います」

「？ ……いいえ」

アーチエルは何を言われるのか疑問に思つたようだ。  
小首を傾げ微笑む。

「アーちゃん、アンタいい奥さんになるわ」

ミカが感心する。

「でも本当に王女様？ アーチエルちゃん」  
サクラコが訊いた。

「別に王女でなくても、いいんです」

アーチエルはニッコリしながら応えた。

それから食事をし、後片付けをし、シャワーを浴び、アーチエルに來た手紙を一通一通目を通し、返事で済む者はその場で返事を書き、その後、学業で、皆に遅れている部分に追いつく為勉強をし、眠りに入ったのが午前四時半だった。

そして朝六時に目を覚ますと、皆の朝食を作って、アシユマ達の弁当も作って、皆を起し朝食を食べ、そして講義に出て行く。

明らかにオーバーワークだった。

新聞部新聞では、

『アガネ家御子息タルヤ氏、校内失禁』

先日、アガネ家御子息タルヤ氏は、わが校のアイドルであり、かのレキシタニアの王族、アーチエル・アップルトン王女に対して御不興を買った模様。

王女はその無礼に怒り、即座に『下がりおろう！』と、王族の威厳を発揮した。

途端に氏はその威厳に圧倒され、その場で失禁した。

アーチエル王女といえば、どんな下々の者達の告白にも、ちゃんと返事をなさってくれる事で有名。

その姫を怒らせたのだから、タルヤ氏は一体何をしでかしたのか。今後の動向に目が離せない。

『アーチエル様、交際発覚！？』

先のタルヤ氏の騒動の直後、アーチエル様は、これまた女子に人氣急上昇中の、アシユマ・アトー総合武術教諭と偶然遭遇、楽しみに歓談された後、アーチエル王女自ら、アシユマ教諭にキスを求められた模様。

なお、この場面は全校で多くの者が目撃しており、かなり信憑性は高い物と推測される。

そう書かれていた。

この記事に、アーチエルは酷く動揺した。

どちらの記事も、的を得ているからである。

「アーちゃん、こんな記事、気にする事無いよ？ 行こう？」

ミカはアーチエルを氣遣った。

「そそ。次、総合武術だよ？ 早く着替えなきゃ」

エミルが、余計な事を付け加えた。

「こら、エミル！」

「なによう？ 何であたしばかり、怒られるのよう？」

「そうね、つぎ、いかなきゃ」

アーチエルは無表情に、下駄箱へ行った。

下駄箱を開くといつももの十数倍もの封書が入っていた。

「あら、こんなに……」

封書を集めようとしたら、大部分が封書ではなく、紙が折られただけの物で、『死ぬ』とか、『メス豚』、『淫売婦』、『公衆トイレ』、『肉便器』等と書かれた紙が、大量にあった。

「アーちゃん……こんな心無い紙ツ切れなんて、気にしなくていいよ。取敢えず授業行こう？」

ミカは、アーチエルに、何も考えさせない様にした。

「うん」

大量の紙切れは下駄箱に戻し、運動靴を履いて、校庭へと行きかけた。

「いたっ！」

「どうしたの？ アーちゃん？」

「画鋏が……」

アーチエルは、目を潤ませながら言った。

「どうしたのミカさん？」

サクラコが、正面玄関に下りてきた。

「いじめ。それも、結構陰湿な奴」

「ミカさんに？」

「アーちゃんに」

「まあ」

言った後に、アーチエルを抱き寄せ、

「私の可愛いアーチエルちゃんに、なんて酷い事を。可哀相にねえ」  
サクラコは言った。

その一部始終を、影から見て喜ぶ者がいた。  
タルヤだ。

「くくく……だいぶ参っている用だぞ。後もう一押しだな。おっと新聞部だ。隠れなきゃな。新聞部も、いずれ廃部にしてやる。パパの力をなめるなよ？ その前にアーチエルを、甚振るだけ甚振ってからじゃないとな」

新聞部はアーチエルを見つけると、

「アーチエル王女！ 昨日の事は真実なのですか？ 王女！ その所を一言！」

「アーチエル王女は、これから授業を受けるのよ？ 少しは遠慮なさい！」

サクラコが言った。

「そこを何とか……」

「ええい！ うるさい！ ……」

サクラコが切れ掛かった。

が、先に切れたのはミカで、

「ええい、下がりおろう！ このお方をどなたと心得る！ 古よりの由緒ある王国レキシタニアの王女、アーチエル・ナヴィア・アツブルトンその人にあらせられるぞ！ 頭が高い控えおろう！」

凄い剣幕でまくし立てた物だから思わず、新聞部も怯み、その間に、

「今の内、授業に行こう？」

ミカがアーチエルを伴って授業に出た。



この時限は、アシュマの担当の時限だった。

総合武術と言っても、要は自分の得意な得物で、自分自身を護れればいい。

それだけの授業だった。

アシュマが教科書等必要ないと言ったのは、正にこれで、自分自身を護るだけなら一番の方法は、その状況から逃げればいい訳だ。退路を確保できる状況を、常に作る。

これに勝る護身術は、ほかに無いと思っていたし、そう教えても来た。

だが、生徒の中や父母の中には、これを職務の怠慢だとし、授業内容の変更、それが受けられない場合、教師の罷免を要求してきた。

アシュマも、今このスコラから、去る訳には行かない。学校側も然りである。

結局アシュマが折れて、この時限からの授業方針を変えた。

「……と、まあ、この授業も、方針をかえざるを得なくなった訳だ。ここまでで、質問のある者」

辺りを見回して、アーチエルの所で視線が止まった。

半病人の様な顔をして、様子がおかしかったからである。

「アップルトン君、どうした？」

「い、いえ、何でも」

「なんでも無い訳、あるか？」

そう言つてアシュマは、アーチエルの額に手を置いた。

「！ 熱があるじゃないか？ 保険委員！」

「あ、アタシ達が運びます」

「君達はミカ君に、サクラコ君だったね。君達は確か……」

「はい、ルームメイトです」

ミカが返した直後、アーチエルは、ゆっくり倒れた。

「アーチエル！！ 暫し自習！」

もう形振りなんか、構っていらなかった。

アシュマは、アーチエルを抱き上げ、医務室を目指していた。

昼休みになり、全校生徒に『アーチエル姫、倒れる』の報が、一斉に知れ渡った。

これを聞いて喜んだのが、タルヤ・アガネとロミナ・アニタだった。

ロミナも、脅迫まがいの手紙を入れていた。

中には剃刀入り等と言う、手の込んだ物まであった。

アシュマは昼休みから、ずっと付きっ切りで、看病していた。いや、看病と言うより、付きっ切りでアーチエルを見ていた。見ている事しか出来ない自分に、歯がゆさを感じた。

医療専科の先生によると、過労が原因との事。

心身ともに、疲れ切っているとの事だ。

病室の窓と言う窓には、生徒達がひしめき合って、アーチエルの安否を案じていた。

アシュマは、部屋のカーテンと言うカーテンを閉めた。

それを見て、病室に入ろうとしていたヨディ以下五人は、

「暫く二人きりに、させて上げましょう」

退散した。

アーチエルは、

「御免なさい……御免なさい……」

ずっとうわ言を言っていた。

「何をそこまで根を詰めてまで……アーチエル」

ミカと、サクラコが、人ごみを掻き分け、病室に何とか入ってきた。

「先生、アーちゃ……アーチエルさんの具合どうですか？」

ミカが尋ねる。

「今、鎮静剤で眠ってるよ。二人とも、さっきは有難う」

「いえ、何もしてませんし」

サクラコが言う。

「二人は同室だろ？ アーチエル……君が、何でこんなになるまで、疲労しきったのか教えてくれないか」

「はい……」

二人は、これまでの経緯を、話し始めた。

「……そうか、それで最後は、虐めか」

「はい」

「虐めの方は、何とか出来そうだな」

アシュマがアーツチエルに目を落す。

「本当ですか？」

ミカが明るい表情をする。

「ああ。では、二人とも、ここを頼む」

「はい、わかりました」

アシュマは取敢えず、下駄箱に溜まった手紙類を、ザツと黒いビニール袋に入れて、下駄箱の前で、『秘剣・朧霞』を使った。

まさか、アシュマ本人も、こんな形で秘剣を遣う羽目になるとは、思っても見なかった。

ぽつりぽつりと、手紙を入れに来る生徒はいるものの、あの怪文書を入れに来る生徒は見当たらなかった。

もう暫く待とうと思った。

暫くすると、何やら手提げ袋を持った少年が、やって来た。

キョロキョロと、辺りを窺っているかと思えば、手提げ袋から大量の紙片を取り出し、下駄箱に入れ始めた。

（こいつだ！）

アシュマは、後から回り込み、肩にぽんと手を乗せ、

「何を詰め込んでいるんだ？」

アシュマは、一応訊いてみた。

「はっ……！！」

その少年は、こちらをゆっくり振り向いた。

恐怖と取り繕う笑みで、顔全体が引きつっていた。

「君はタルヤ君といったな。言い逃れ出来まい。職員室まで来てもらおう」

「くそっ！　こんなの何かの間違いだっ！　見ている！　お前らの首なんか、パパの一言で、幾らでも吹っ飛ばせるんだからな！」

「じゃあ、そうなった時には、お前の頭と胴体を、斬り分けさせてもらおう。簡単だぞ？」

「ひっひっひっ！！」

取り分け殺気を出した訳でも無いのに、タルヤは又も失禁してしまった。

「うわ~~~~ん、パーパーっ！！」

アシユマは、予め話を通してあった校長、ケリー教頭、ヨデイに後を託すと、元の場所に戻った。

又もや、『秘剣・朧霞』を遣った。

考えてみれば、これ程長い時間、朧霞を使った経験が無かった。

これも、いい修行になると考えていた。

放課後も、遅い時間となり、下駄箱に等、用のある生徒が、いる筈も無かった。

あたりを闇が覆い始めた。

そこへ誰かがやって来た。

女生徒だ。

女生徒は辺りを窺い、下駄箱に封筒を、せっせと入れていた。アシユマはそつと少女の後へ回り込み、

「何をしているのかな？」

と、訊いてみた。

すると女生徒は、

「きゃああああっ！！」

と、叫び声をあげた。

「痴漢！ 変態！ 強姦魔！」  
尚も叫び続けた。

「いや、怪しいのは、君の方なんだがね？」

「えっ？」

そう言つて、少女は振り向いた。

（たしか、この少女はロミナ・アニタといったな）

「ア、アトー先生……」

「この手紙を、入れる所を、見てしまったんだ。言い逃れ出来まい？」

ロミナはさーっと血の気が引いた。

そしてそのまま、倒れこむ様に気を失った。

目が覚めた時には、自分は職員室にいて、自分が何をしたかが、  
やつと解つた。

アシユマは、医療室へ向かつて行つた。

向こうでは、エファール、アルミナ、オルバニアンが、アーチェ  
ルを見ていてくれる筈である。

アシユマが医療室に来た。

蛍光灯が煌々と焚かれ、消毒薬のにおいがした。

並んだベッドの内、カーテンが掛かっている所へ行つた。何か様  
子が変わつた。

「またせた。で、具合はどうだ？」

アシユマが訊く。

エファールが、

「さつき先生と話してたんだけど、もう、このまま、意識、戻らな  
いかもしれないの」

「何！？ どういう事だッ！ それはッ！？」

アシユマの表情が変わる。

エフアールに食って掛かる。

「ここに運び込まれた時から、様子が変だったんだって。詳しい検査してみないと解らないけど、もしかして脳死状態かもしれないんだって」

アルミナも、オルバニアンも、声を詰まらせ、面と向えないのか向こうを向いて、肩を小刻みに震わせていた。

エフアールも声を詰まらせ、俯いて体を小刻みに震わせている。

「う、嘘だ……嘘だ！　あり得ない！！」

アシュマはアーチエルに覆いかぶさる様にして、

「嘘だろ？　アーチエル……」

言い終わると同時に、アーチエルの唇に口付けをした。

そして一粒、二粒、アーチエルの頬にアシュマの涙が落ちた。

「ねえ、もうやめようよ。アシュマさまが可哀相……」

アーチエルは目をぱつちり見開いて皆に、そう告げた。

途端に沸き起こる大爆笑。

少しご機嫌斜めな、アーチエル。

「ひーっ！　死ぬ！　死ぬ！　笑い死にしそうだぜ！　アシュマが

あんなに狼狽えるところ見たの、初めてだぜ！」

オルバニアンが笑い転げる。

「アタシもだぜ……あつはははは！」

「だめよ、みんな、そんなに笑っちゃ、アシュマに悪いじゃない……

でも、うふふ、あははははは！」

アルミナも腹を抱える。

「みんな……皆、嵌めたな！？　後で覚えているよ？」

アシュマが三人を睨みつける。

「ほら、皆様。アシュマさま、怒ってしまいました」

アーチエルは皆に注意をした。

「これはお仕置きだっ」

アシュマはそう言って、アーチエルの耳たぶに、自分の唇を押し当てた。

「ひゃう」

アーチエルは小さく叫んだ。

耳たぶにキスされるのは初めての経験で、背中にぞくぞくとしたものが走った。

「でもアシユマさま、さっきのキスは嬉しかったです」

アーチエルが応えた。

「今のは？」

アシユマが訊く

「今のは……」

「今のは？」

「背中に電気が走りました」

「そうか」

アシユマは、アーチエルの頭に手を乗せ、撫でた。

「最近エロいよ？ アシユマ」

アルミナに、叱られてしまった。

「アシユマ、程々にね。あ、後、あたしにもしてくれといいな」

エファールはアシユマにおねだり。

「大丈夫だ。任せなよ。他の女はみんな俺が面倒見てやるぜ。その代わりアーチエルの姫さん泣かすんじゃないぞ」

オルバニアンが言ってみせる。

「分かってる……で、医務の先生は何って言ってた？」

「まだ、熱が下がりきっていないから、明日は授業休めって。ちゃんと休ませてやれよ？ アシユマ」

そうオルバニアンが、言った。

そして、そのオルバニアンも、出て行った。

「そうか。その方が……いいか」

アシユマは何となく、一人呟いた。

「アシユマさま？」

アーチエルは、可愛く小首を傾げアシユマの表情を覗く。

アシユマは、優しく微笑み返す。

そのまま暫くの沈黙の後、アシユマはアーチエルの両手首を取って、ゆっくりアーチエルをベッドに押し倒していた。

そして唇へキスをし、耳たぶへキスをし、そこでアーチエルが口を開いた。

低く。

微かに。

「いや」

と。

アシユマはアーチエルを見つめた。

「いえ、嫌じゃない……です」

恥かしげに顔を背けながら、アーチエルは言った。

その時、突然何かの気を察知したアシユマは、

「！アーチエル！ベッドの下に隠れて！」

アーチエルを、避難させようとした。

殺気がこの部屋を急激に満たしたからだ。

「え？」

アーチエルは今ひとつ把握していない。

「早く！」

「はっ、はい！」

同時に、医療室の電気が落とされた。

勿論アシユマが落としたわけでは無い。

殺気の元が落としたのだ。

「俺も油断したよ。敵地だから油断すべきじゃ、無かったのにな」

アシユマは、闇の中に潜む何者かに向けて、声を発していた。

「……………」

闇に潜む者は、沈黙を守った。

「暗殺者か」

アシユマは一人ぼりと呟いた。

暗殺者は闇の中、一際黒く浮かび上がった。

全身黒タイツといった所だ



ひよろりとして、背が高そうな女だった。

暗殺者は他に、アーヌ達に酷似した仮面を付けて、表情を隠していた。

口元を除いては。

暗殺者はいきなりと言っていい瞬発力で、アシュマの眼前に迫り、完全にアシュマの虚を突いた。

暗殺者は大振りで、片刃の曲がった、ククリを二刀に、使用してきた。

暗殺者の左から一振り、アシュマは後にのけぞりかわして次に、暗殺者の右からの一振り、これも紙一重で交わした。

暗殺者の下の攻撃から、アシュマは反撃の逆手の居合いで相手を斬り付けた。

暗殺者は両の刃でこちらの攻撃を防いだ。

アシュマは逆手のまま、刃を振り下ろし、暗殺者はそれを一步後退させてかわした。

やっと、アシュマは、鬼虎を順手に持ち直し、反撃の態勢を整えた。

整えたつもりだったが、途端に暗殺者は消えた。目で追うと天井に張り付いて、そしてアシュマに斬り付けてきた。

アシュマは『万の眼』よろずのまなこ使った。

この『万の眼』は自分から見た目、相手から自分を見た目、そしてありとあらゆる角度から自分と対象を客観的な目で見る、驚異的な技だ。

一種の心眼である。

この万の眼で、見切れなかったもの等無かった。

今、これからの間合いを計る為でもあるが、次の一手を読む為である。

暗殺者は真上から一も二も無くアシュマ目掛けて跳んできて襲った。

アシュマは、その場からごろりと転がって、暗殺者の攻撃を待つ

た。

後の後で反撃する為だ。

が、これも来ず、空中でどう軌道を変えたのか、背面の壁に張り付いて、そこから一気に間合いを詰めてきた。

これは、アシユマは、振り向きざま、拝み撃ちにした。

これも、僅かに相手の面を、軽く傷つけた程度で、防がれてしまった。

だが、相手の女は、この変幻自在の攻撃を、かわされた事に、驚きを禁じえなかった。

相手の女は焦れて、何かを伝い、地上へぱとりと降りて、そして構えた。

アシユマは瞬時に糸が張られている、と思った。

そして思った事を相手にぶつけてみようと思った

「糸か。お前糸を遣うのか」

（そうだ。『オリジナルナンバー』よ）

消え入りそうな声でその『女』は言った。

「それを知っているお前は、ナンバーズか？」

（私はナンバーズ等では無い。イレギュラーナンバーだ）

「イレギュラーナンバー？」

（そうだ）

「厄介な。イレギュラーナンバーとは何だ？」

（ナンバーズの上位スペック版と考えてもらっていいかしら？）

「俺のコピーと言うわけか？」

（手は加えているけれどね。ちなみに私は『蜘蛛』。蜘蛛の意味はわかるわね。私が糸遣いだから。他にもイレギュラーナンバーが何体かいるわ）

「ちなみに何が俺のコピー品なんだ？」

（全てよ。影の者然り、黒尽くめの男然り、ナンバーズ然り……その中でも出来不出来がいてね。不出来な奴らはマナカードを使っているよ）

「アステルの隊か」

（そんなのも居たねえ。お喋りはこれくらいでいいだろう？）  
アシユマはこの間に、鬼虎に気を充溢させていた。

（いざ）

「参る！！」

ガキン！！

と、した音と共に、部屋の中央では、火花が散り、鏢迫り合いとなり、静かな中にも目に見えぬ暗闘が続いていた。

いつ離れて、いつ相手に攻撃すればよいのか、それがお互い、全く読めなかったのである。

「お前の持つククリも、おれの鬼虎では斬れぬ物か？」

アシユマの脳裏には、アーヌの鎧があつた。

「持ち主次第だというぞ？ 『鬼虎』の威力は」

「ならばこれでどうだ！！」

鬼虎が、急に白銀の光を増したかと思えば、『蜘蛛』は、  
「きゃあああああつ！！」

と、悲鳴を上げた。

あまりの眩しさに、上げた悲鳴であつた。

そこへ、アーチエルが姿を現し、

「殺してはなりません！！」

アシユマに言ってきた。

「！ ばか、出るな！ アーチエル！」

（アーチエル……）

蜘蛛は突然、窓を破って、外へ逃げてしまった。

「しまった。逃がした」

アシユマは下を見た。

「御免なさい、アシユマさま。殺しちゃ駄目だと思って」

アーチエルがうな垂れる。

「分かっているさ。でも、奴はこれまでの敵と、少し違うぞ？」  
アシユマは窓の外を見た。

「どういう事ですか？」

「手練れと言う事だよ。かなりのね」

「手練れ……」

アーチエルがアシュマに寄り添う。

「そう、アレだけの手練れは、エヴァイブ・エブルとアーヌ以来だな」

「まあ、そんなにお強いんですの？」

「俺が、決定的なダメージを与えない奴なんて、エヴァイブ・エブル以来無かった事だからね。そういえば、エヴァイブ・エブルとアーヌの戦い方はどこか似ている気がするな」

「そうなんですか？」

「そういう事もありうるって事さ。さて、アーチエル行くよ？」

「どこへ？」

「アーチエルの部屋さ」

アシュマがアーチエルに振り向く。

「！ はい」

アーチエルは、  
ぱっ。

と、明るい表情をして応える。

「その前に、職員室に行くよ？」

「えゝゝゝっ」

アーチエルは少し不服顔だ。

「此処の事、報告しなければ、いけないだろう？」

「……うん」

仕方ないとアーチエルは思う。

ここの状態をそのままにしておくわけにはいかない。

「まあ、ここでその様な事が」

ケリー教頭は、惨劇のあった医療室で、その様に述べた。

「ええ」

アシュマが頷く。

「アシュマく……アトー先生、ここは後は鑑識の人が入るらしいです。ここは引き払ってくれて構わないそうですよ？ ケリー教頭先生も、もうここらで……」

ヨディが控えながら言った。

「ふむ。貴方はただ襲われたと言うけれど、何か心当たりは無いのかしら？」

ケリー教頭は、テープが張られた医療室の入り口を、器用に抜け出てきた。

「ありすぎて困ってます。特にドートネーゼ関係にはね」

アシュマはカマを掛けてみた。

「ドートネーゼ？ ……まあどちらにせよ、気をつけて下さいね」ケリー教頭は、そのまま去ってしまった。

「アシュマ君、直球過ぎ。あれじゃあ、分かりませんよ」

ヨディに言われた。

「そうだな」

「でも、どうしてケリー教頭なんかにかマ掛けるの？ 何か心当たりあるの？」

「ああ、チョツとな」

アシュマはケリーの後姿を目で追っていた。

「それにしても、アシュマ君ともあろう者が、敵をそこまで、察知でき無いなんて……」

「俺も気づいた時には、もう、殺気の渦の中にいたよ。迂闊だった」

アシュマは後ろ頭を掻いていた。

「アーチエル様と、えっちな事、していたんでしょう？」

「それ程していない」

「ほんとですかあ？ まあいいや。まあこの件は、みんなに回しておきますよ」

ヨディは携帯を、取り出して見せた。

「頼む」

「アシユマ君も携帯ぐらい、使えるようになりましょうよ、せめて」

「……アーチエルを送ってくる」

アシユマはアーチエルの下へ。

「また、そうやって逃げる」

ヨデイが文句を言う。

「アーチエル。寒かったろう?」

アシユマはアーチエルを思いやり、訊いた。

「いいえ。毛布ありましたし。コーヒーもありましたし。大丈夫です」

アーチエルはにつこりと微笑みアシユマを見る。

「さあ、帰ろう。教頭の許可も取ってある。部屋まで送ろう」

「ホントですか? 嬉しい!」

アーチエルは、嬉しさのあまり、抱きついて来た。

「おいおい、そこまでは許可されて無いぞ?」

アシユマは多少驚いた。

「うふふ。御免なさい」

しかし、あまり反省の様子が無い、アーチエルだった。

階段を登って行くと、アシユマが、

「もう、ラブレターの事で、頭を悩ます必要は無いぞ」

アーチエルに向かって語りかけた。

「え?」

アーチエルが頓狂な顔をして振り向く。

「基本的に生徒会が管理するらしい。勿論内容は読まないそうだ。

それに、下駄箱の前に生徒会の名の下に、ラブレター投函の禁止の立て札を立てるそうだ」

アシユマが淡々と説明する。

「そんな、いいのかしら、きっと思い悩んで書いたに違いないわ。その生徒の人。その人の思いを妨げるような事して、構わないのかしら?」

アーチエルが気の毒そうに言った。

「それがいかん」

アシュマは言った。

「え？」

小さく訊きなおす、アーチエル。

「優すぎるんだよ、アーチエルは。例え相手がどんな奴でも、手を差し伸べてしまう」

「それは違います。幾らなんでもガルマイン等には、救いの手は差し出しませんし……」

「そうかな？ 果たして」

「アシュマさま、今日、意地悪うございますう」

アーチエルは少し拗ねた振りをする。

「まあ、まあ」

アシュマがアーチエルをなだめた。

アシュマとアーチエルは、アーチエルの部屋の前に来た。ふたりして部屋へ入った。

「アーちゃん、お帰り……ア、アシュマ先生!？」

声を大きくしたのはミカだった。

「お願い。あんまり大きな声を、出さないで。ばれたら、大変だから」

アーチエルはお願いした。

「何それ？ それより、アーちゃんそのなりは何？ 頭はぼさぼさだし、服だって体操着のままボロボロだし、シャワー浴びといでよ。体操着は洗濯にかけといてあげるからさ」

ミカがアーチエルを労わる。

「有難うミカさん。じゃあそうするね」

アーチエルが脱衣所に行く。

「さて、まだ八時前。このまま返しては、アーチエルちゃんに、申し訳が立たない。十時の消灯まで二時間ぐらい。ここでお茶しても、かまいませんよね？ せいせい？」

サクラコが念を押した。

「お前達が、明日、授業にひびかない程度ならな」

「やった！」

エミルが言った。

そのまま続いて、エミルが、

「先生と、アーチエルって付き合っているんですか？」

そう訊いた。

「それに関しては、答えられん」

「何ですかあ？」

エミルが不服顔をした。

「それは……駄目だ。答えられない」

「意外と口が堅いのね。ま、そこが魅力なんだろうけど。あの子に  
とって」

サクラコがにつこり微笑む。

「じゃあ、先生の出身国って、どこなの？」

「東の小国イーハンの……」

「イーハン！ ワタクシ、その家老の娘ですわ」

サクラコが胸を張って、答えていた。

「家老の！ ではセタ家の御息女であるか」

「でも、家格じゃ、アーチエル様に、及びもしないけれどな」

エミルが言う。

「先生！ アタシもイーハン出身です」

ミカも訴えかけてきた。

「でも、先生、知らないかも……」

「言ってごらん」

「イーハンの南にある、オモロ諸島の一番小さな島で……」

「タマン島」

と、アシユマが話をあわせる。

「何で知ってるんですか？ ……まさか先生も」

ミカが期待する。



「そう、タマン島出身だ」

「きゃー！ 何か運命を感じるー！！ 先生、アタシと付き合って下さいます？」

ミカが狂喜乱舞した。

しかし、

「しーーーーっ」

ミカは皆に言われた。

それは丁度アーチエルが、シャワーから出てきた直後でもあった。

「ミカさん？ 誰と誰が付き合うんですか？」

アーチエルが、言った。

この時のアーチエルの形相を形容するとすれば、それはまさに『夜叉』のそれであろう。

「わっ、ごめん、アーちゃん！ ほんの出来心！ 許して！」

「もう、油断も隙もあつたもんじゃないのね」

パジャマ姿のアーチエルは、腕を組んでそう言った。

いきなりエミルが、

「アシュマ先生から聞いたわよー。あんた達、結構進んでるのね」

等と、言い出した。

アシュマが何か言いかけるのを、サクラコが後から手で押さえて

た為、アシュマは、

「もがつもがっ」

としか言えず、アーチエルは、

「もう、言っちゃったの？ しょうがない人ね。アシュマさまと、わたしは……」

と言いかけ、この時やつと呪縛の解けたアシュマが、

「カマだ！ カマ！ 騙されるな」

と、言つたが、もう遅かった。

「ふうん、『アシュマさま』、ねえ」

サクラコはアーチエルの顔をしげしげと見つめた。

アーチエルは、ばつが悪そうに、照れて笑っていた。

「そう言えば、リイナ、全然起きてこないわね？」

アーチエルが不思議がり、皆に聞いてみた。

アシュマがベッドを見てみれば、背の小さな、まだ幼げに見える少女が、死んだ様に眠っていた。

「リイナは、何か今日は帰ってくるなり、疲れたって言ってベッドに入ると、そのまま寝ちゃったよ？ 起そうか？」

エミルは言って、起し掛かろうとする。

「いいわ、エミルさん。寝かせとこう？」

アーチエルが言った。

そして、

「でも、ばれっちゃった。もう駄目だね？ アシュマさま？」

全然、悲壮感もへったくれもなく、むしろアシュマの肩に手を掛け、にこやかに話すアーチエルがいた。

「学校に、バレなきやいいだろ」

アシュマも、堂々とした物である。

一向に、気にしていなかった。

「じゃあ、みんな、先生は行くから。夜更かしするなよ？」

「えー、もう行っちゃうの？」

エミルが駄々をこねた。

「アシュマさま」

アーチエルが呼び止め、椅子を使って、アシュマの頬にキスをした。

（きゅゅゅゅゅ）

皆は大声を出す訳には行かなかったので、皆『小声』で騒いだ。

「じゃあ、これまで見聞きした事は全て、この場だけと言う事で」  
「……………」

最後にアーチエルが、アシュマに、ぎゅっと抱きついて来た。

アシュマもきつく抱きしめてやり、そしてそっと離れた。

（それではな。アーチエル。皆も。今日は済まなかった）

アシュマは小声でそっと部屋から出た。

アシユマはアシユマの自室へと帰って来た。

途中の下駄箱に、今日も大量のラブレターが、アシユマに届いていた。

それを自室へと持って帰ると、ゴミ箱に一通捨てた。

そしてこれはこっち、これはゴミ箱と、分類していった。

「やあ、アシユマ君。今晚も『分類』作業かな？」

同室のヨデイが、聞いてきた。

「これをやらんと。まともに全部見ていたら、切りが無い」

「その選別方法の基準は？」

「『念』だな。無意識に人が発する。悪意のあるもの、何となく出してみた者は全部捨てる。ある一定値を超えた者だけ、内容を見る。今日は二通。らくちんだ」

アシユマは手紙に目を通し始めた。

「短い逢瀬はどうだったかい？」

「中々良かったよ。彼女も寂しかったんだろうな？ とても情熱的だったよ。いや？ 俺が寂しくて、情熱的になったのかな？ わakaran。とにかく人目が無けりゃ、最後まで行っていたかもしれない」  
教師らしからぬ言葉だ。

が、アシユマの偽らざる気持ちだ。

「きみは、とうとう、アーチエル様に負けちゃったね。乙女の一念、岩をも通すか……」

ヨデイが感慨ひとしおに言う。

「そつだな、負けたみたいだ。彼女の為ならこの命、惜しくは無い」  
「あゝ、痒い痒い。痒いから寝ちゃおうかな」僕

二人で一つのこの部屋は、生徒の施設と比べて雲泥の差だった。  
いや、アシユマとヨデイ二人一組だったから、この部屋を案内されたのかもしれない。

部屋はシングルベッドを二つ置いただけで満杯。

机は二人で一つ。

ユニットバスに簡単なキッチンが一つ。

しかし二人とも、特にストレスは感じなかった。

「しかしさっきの話しさあ」

ヨディが語りかける。

「ん？」

アシュマが返す。

「アシュマ君、何も話さなかったけど、相手を仕留めきれなかった  
って事は、アーヌ？」

「いや、違う。ある意味アーヌより恐ろしい敵さ」

「それは？」

「イレギュラーナンバー」

「え？」

「身体能力は俺以上。戦闘能力もな。それが後、何体かいるらしい」

「おい、そんな事、聴いていませんでしたよ？ 何故警察に報告…」

「…しても意味無いですかねえ」

「しかも今回の敵の名前は、『蜘蛛』だそうだ。ふざけてるにも程  
がある。生身でアーヌ並みの戦闘力……。勘弁して欲しいな、全く」

「いつもより饒舌ですね……。怖いのですか？」

ヨディが指摘する。

「……………ああ、怖い」

アシュマがぼそりと言葉を吐く。

「アシュマ君……………」

黙るヨディ。

「守るべき者が……………大切な者が出来たから……………」

アシュマは呟いた。

「もう寝ましようか……………」

「……………」

アシュマの返事はない。

ヨディは、電気スタンドの電源を落とした。

#### 第四節 戦場現地実習

朝、と、言っても、ほぼ夜明け前、アシユマは起きて外に出てきた。

そして、筋トレ……と言っても、アシユマの場合は特殊で、地面にぺたりと胡坐をかいて座り、体の筋肉を動かせ始めた。

アシユマは随意筋ならば、『自分の意思』で、全てを同時に動かす事が出来た。

十分もすると、汗を掻き始め、二十分もすると、体から湯気が出てきた。

約一時間の筋トレの後、鬼虎を抜いて、ゆっくりと形稽古をはじめた。

今までの積み重ねてきた物を、ゆっくりと、そして時には速く、思い出す様に空間になぞらえた。

それが約二時間。

そして、部屋に戻り、シャワーを浴びる頃、ヨデイが起きてくる。

これがアシユマの『日課』だ。

どこにしよう、銀龍内だろうと。

朝の、定例職員会議に出る。

今日の議題は、一つ。

今年度の、『戦場現地実習』に関してであった。

「えー、毎年行われている戦場現地実習ですが、年々生徒の死亡者数が、上昇する傾向にあります。これは半ば、遠足気分に参加している生徒が、年々増加している為と考えております。先生方には、くれぐれも、遠足やピクニックではない事を、生徒達に伝えていただく様、お願いします。なお生徒の中には、魔導石を紛失している生徒も見受けられます。そういった生徒には、今回特例措置として、

魔導石を再配布するので、火（赤）、水（水色）、土（茶色）、風（緑）、聖（白）、暗黒（黒）、各色の魔導石が、幾つ必要なのか、生徒に募らせる事。また、なるべくならより多くの生徒に、ヒーリング、シールド等の魔法を、習得させておく様に。ワタクシからは以上です」

朝、しよっぱなから、ケリー教頭の重たいボディブローが、教員全員のボディを抉った。

アシュマ自身はアーチエル自体の安全さえ図ればいいが、アーチエル自体が他人の安全を図るだろうから目が離せないと思った。  
「あ、言い忘れましたが、今年の戦場現地実習は、『マリク紛争地域』ですので、そのつもりで」

「教頭、それはあまりに危険なのでは？」  
とある教師が立ち上がる。

「教頭、候補地の再選抜を！」

教頭非難したり、候補地の再考を求めたりする声が上がったが、  
「決定事項です！！」

机を、

バン！

と、叩いた。

そして皆、黙ってしまった。

一拍おいて教頭が席を立とうとした時、

「誰の決定事項なんだ？」

アシュマが訊いた。

「まだ、貴方は、そんな事を言うのですか？」

教頭を怒らせたが、それには構わず、

「アンタが怒るのは、アンタ自身がこの件に関して、如何に危険かと言う事を知ってはいるが、もう介入できないからだ。つまり『上』からのお達しって奴なんだろう」

「……………」

ケリー教頭は怒りを顔に出しながら、何も言えないでいた。

アシユマは更に、追い討ちをかけて、

「その、アンタの上にいる奴らって、誰なんだ？」  
そう言った。

ヨディなんかは、一生懸命にアシユマに抑える様、ジェスチャーを送ったが、言ってしまったものは仕方が無い。

もう、矢は放たれたのだ。

が、ケリー教頭は、急に穏やかな顔になって

「貴方が知るべき事じゃありません。これで宜しいですね？ 校長」

「ええ、貴女が決めた事ならば」

この校長は年の頃は二十七、八とまだ若い女で、妖艶な美貌を持っていた。

特にプラチナブロンドの巻き毛は印象的であった。

黒のスーツの上からでも分かる、人目を引く様な、均整の取れた美しい身体をしていた。

二人は席を立ち、そして、去ってしまった。

アシユマも席を立ち、一時限目の授業を始める為、移動しようとした時……、

「まあ、今日も跳ねちゃって。でも、かつこよかったわよ。少しはらはらしたけど」

際どいミニのスカートと、襟元を大きく広げたブラウスで挑発する様にアシユマの行く手を遮った女性がいた。

スチナ・アガネだ。

「昨日は弟が、お世話になったようで御免なさいね」

「弟？」

アシユマは何かと思う。

「ええ、タルヤ・アガネは私の弟。お詫びのしるしに、今度お酒でもいかが？」

スチナは『弟』をダシに、アシユマを口説いていた。

「何、人の男、口説いてんのよ、ねえアシユマ」

エファールが横から割って入る。

「なにが、『人の男』よ、笑わせるわ。貴女にアシュマ先生が声をかけた所なんて、見た事無いわよ？」

「なによ、貴女なんて、見向きもされた事、無いじゃない」

「なにさ！」

「なによ？」

「いつから俺は、お前達の男になったんだ？ やつてられん」

当の本人のアシュマは、そう言つて、その場から立ち去つてしまつた。

「え？」

「へ？」

二人は肩透かしを食らつた形になつた。

「ねえ？ 良かったら今度、お食事でもどう？」

ヨディが二人を誘つた。

「アンタなんかと、誰が行くもんですかッ！」

機嫌を損ねたスチナは、何処かへ去つていつてしまった。

「可哀相にねヨディ。貴方は貴方で、結構いい所あるのにね。それが分からないなんて彼女もまだまだね。いいわ。お食事ぐらいだったら、今度付き合つてあげるわ」

「すいませんねえ。ううう」

「そんな泣く程の事じゃ、ないじゃない。面白い人ね。ヨディって、本当に」

エファールは優しく微笑んだ。

今日も尚、闇の中に影が蠢いていた。

闇に溶け込み、闇に紛れ闇に消ゆ。

相も変わらずお互いがお互いの顔を見せないようにして。

闇に蠢く者が言葉を発した。

「スコラは今年も戦場現地実習の時期を迎えましたな」

「戦場で人が死ぬは当たり前。ここらで、アシュマー党を葬り去る



のも一興」

「アーチエルは死んでもらっては困りますがな」

「まずは、アシュマとアーチエルを引き離すが肝要」

「然様」

「では、殺しておきますか？」

「出来ませうばな」

「しかし、一度位は『最終兵器・鬼虎』の力とやらを見てみたい物ですな」

「だがそうなつては、アシュマが、完全に覚醒してしまう事になる。そうなつてからでは鬼虎を奪い取る事、難しくなるのでは？」

「言う事至極尤も。覚醒せぬうちに奪い取るのが宜しかろう。しかし一度は見てみたいのもこれまた事実。矛盾した物よ」

「伝説の力、如何程の事か」

「それならば、此処なら実験場になり得るな」

「今回の候補地の事か？」

「然様」

「それともやはり、覚醒する前に始末するか？」

「この間の、なんと言ったか……そう、『蜘蛛』。『蜘蛛』は相当な効果を挙げたみたいではないか？」

「まだ、ナノマシンとの親和性が、上手く調整されていないみたいだが？」

「リクシルがデータを破壊さえしなければ」

「起きてしまった事を悔やんでも、何の益もなし」

「しかし、失われた物はあまりに大きく、あまりに多い」

「いかにも然様」

「アシュマ一党、殺せる時に殺しておく事が肝要かと思うが」

「どちらにしても、元来は今回の我々の尖兵足るべき子供達を、育成するのが目的ですからね。実力の伴わない子には消えてもらいましょう。その為のスコラです。そろそろネルファベーゼに送り込む候補も決めないと」

「オロも暗躍している事ですし油断は出来ませんね」  
そして闇は蠢き続ける……。

「さて皆さん」

ケリー教頭は、口火を切った。

「これから行く所は、マリク紛争地の真っ只中です。本当の戦地で  
す。一時も気を抜けません。決して遠足等ではないのです。遠足気  
分で行って貰っては困ります。これは、『貴方達の為』を思って、  
言っているのです。いいですか？ 戦地では生き残る事だけ考えな  
さい。たった四時間です。四時間耐えればいいのです。分かりまし  
たね？」

いつにもましてケリー教頭の厳しい態度に、生徒達も動揺を隠し  
切れなかった。

「それでは皆さん、各々割り当てられた機体に、乗り込んで下さい」  
生徒達は、サイコ・フライヤーに乗り始めた。

「では、校長……」

「うむ……」

「おい、あのむっつり校長も、来るみたいですよ？」

ヨデイが驚いていた。

アシュマと同じ機体に乗った男子生徒は、少し浮き足立ち、ア  
ーチエルと同じ機体に乗った男子生徒もまた然りだった。

アシュマと、アーチエルは、同じ機体に割り振られた為、その機  
体自体が妙に浮き足立った。

そして、生徒達を乗せたサイコ・フライヤーは、飛び立って行っ  
た。

「いかなこれは」

アシュマが言葉を漏らす。

「どうしたんですの？」

アーチエルが訊いた。

「ケリー教頭の言い方ではないが、皆、遠足気分だ。このままでは

……」

「このままでは？」

「多数の死傷者を、出してしまうだろう」

「それは困りましたねえ」

ヨディがそう言いながら、アシュマの元へやって来た。

この機体に乗っている生徒数は、二十九名。

それが同機体に乗る、教師の分担となった。

この機体担当者は、アシュマとヨディの二名。

アシュマは小振りのラバー製のボディーマー。

その上に革の丸首の革のジャケット。

ズボンの下にはコンバットブーツ。

これがアシュマの出で立ちだった。

ヨディは、普段着の上からオールアーマーとヘルメットと言う格好だった。

一般生徒に支給されているのは、市販のフルアーマーにヘルメットと言う形になった。

が、アーチエルはというと、例のヨディがアーチエルに送った、ヘッドギアにビスチエ型のボディーマー、それに吸湿性の良い防刃布（普通は吸湿性がよいと繊維自体が脆くなるのだが、アーチエルの着ている物は別）、手甲に膺当て、コンバットブーツと言ういつもの格好になった。

アーマー部分が、他人より少ないのではないか、と言う指摘が、教職員の間から起こったが、客観的測定実験では、他のフルアーマーに引けを取らないどころか、それよりも高性能である事が実証された。

しかし、ボディコンシャスなアーマーで、戦装束であるというのに、例によって、その姿は凜として可憐な乙女という感を、醸し出

していた。

その姿は、見る者の眼を奪うのに、難くは無かった。

ちなみに他の機体には、エファールとスチナが乗った機体に、オルバニアンとアルミナが乗っていた。

この機体も男子生徒は、浮き足立った。

二大セクシー教諭が乗っているからだ。

今日この日の出で立ちは、スチナがボディコンシャスなスーツにハイヒールなのに対し、エファールはヘッドギアにボディアーマーそしてコンバットブーツと、アーチエルと同じ姿形をしていた。

それに、一部男子で圧倒的人気のアルミナは、いつもの格好、即ち、革のホットパンツに皮のタンクトップ、外付け式の自前のボディアーマーに、コンバットブーツを履いていた。

数時間の飛行の後、機らは、マリク共和国側の最前線についた。  
機を降りて整列。

現地の士官がやってきて、校長と握手。

「どうぞ宜しくお願いします」

「話は聞いております。お氣を楽にして下さい」

頭を下げると、相手の士官はそう言った。

ずらりと並ぶ、百二十九名の生徒達。

その前で、士官が話を始めた。

「諸君。私はライリー大佐である。ここはマリク紛争の真っ只中、正にフロントラインに君達はいる。ここでは我々の指示に従ってもらう。さまなければ君達に待っているものは、『死』だ！脅しているのではない。実際そうなのだ！ここは戦場だ！人がいとも簡単に死ぬ所なのだ。それを肝に銘じて欲しい。以上だ！」  
ライリーと呼ばれた軍人は後に下がり、次に若い士官が現れ、話し始めた。

「諸君。私はモ八大尉だ。今回のナビゲート役を仰せつかっている。

概要はこうだ。ここから南西に進んで奥へ入りそしてまた戻ってくる。以上だ」

あちこちからブーイングが聞こえてきた。

「諸君！ 勘違いしてもらっては困る！ これはピクニックではないのだ！ 我々の言う事を聞いて貰わねば死ぬ、と、言った大佐の言葉を忘れたか！ いいか！ もう一度言う！ これは、ピクニックではない！」

丁度この頃から、アーチエルに落ち着きがなくなってきた。

アシュマはその様子を察し、アーチエルの所へ行った。

「どうした？ 気分でも悪いか？ なんだったら、ここで待機と言うのも、一つの手だぞ？」

「いいえ、行きます。大丈夫です」

「そうか？ ならいいが……」  
そう。

この時、アシュマはアーチエルの、このチョツとした異変に気付いていれば、後で面倒な事にならずに済んだのに……。

「では第一班より前へ……」

こうして行進は開始された。

生徒の周りをぐるりと、兵士が取り囲んで護衛していた。

一行は身を隠す場所が多い、森の中を進んだ。

森と言っても、熱帯雨林の森だ。少し離れてしまえば、忽ち自分が、どこにいるか見失うだろう。

「ここは……ついさっきまで、戦場だったな」

アシュマは独りごちた。

「よく分かりますね」

モ八大尉が言った。

「ああ、……臭いでね」

「相当の修羅場を、経験しているみたいですね」

「いえ。ついでながら言いうと、一キロ程先に敵が待ち伏せている。相当の部隊の様だ。魔導機兵も、何体かいそうだ。エンジン音がす

る」

モ八大尉はまさか、と言う顔をしたが、アシュマの真面目な顔を見て、モ八大尉は偵察部隊を残して、もと来た道を引き戻す為、列の一番先頭に連絡を入れていた。

アーチエルはやはり落ち着きが無く、あちらこちらを、キヨロキヨロと見回していた。

戦場だから、落ち着きが無いといってしまえば、それまでなのだが、アーチエルの場合は少し違った。

何がどう違うのかといえば……。

アーチエルは、突然走り出した。

「あつ！ アーちゃん！！」

ミカが叫んだ。

「サクラコさん、ここお願い。アシュマ先生の所へ言ってくる！」

ミカはアシュマの居る方へ向かって走った。

「お願いって、どうするのよ？ ねえ！？」

サクラコが叫ぶ。

ミカは列に沿って後ろへと走り、アシュマの所へとやって来た。

「せ、先生……アシュマ先生……はあ」

「なんだ、ミカ君？ こんな所までやってきて、何かあったのか？」

「アーちゃんが……アーチエルさんが突然走って森の奥へ……」

「何だつて？ それでどっちの方へ？」

「こ、こっちの方へ。早くしないと、戻れなくなっちゃう、アーちゃん！！」

「モ八大尉！ 皆を頼む！！」

アシュマは、密林の中を走りだした。

アシュマは全感覚を使つて、アーチエルを捜した。

匂い、息遣い、足音、氣の流れる方。

それらが頼りだ。

その頃、アーチエルが何をしていたかと言うと、怪我人をヒーリングで治していた。

片っ端から。

ここに降り立った時から、そうせざるを得ない気持ちになっ  
たのだ。

そういう何かが、衝動が、気持ち、アーチエルを突き動か  
せていた。

怪我人のいる場所は、何となく分かった。

後は捜して、ヒーリングをかけて、次へ行く。

その繰り返しだった。

そしてここにも。

『我の癒しは汝の癒し。

汝の為とは我の為。

我の為とは汝の為。

今ここに奇跡を見せん。

ヒーリング』

「ああ、嘘みてえだ。すっかり直っちまった。ありがとよ」

「はい、それじゃあ」

そしてアーチエルは、行きかけた。

それを男が、アーチエルの手を引っ張り、逆に組み敷いた。

「きゃっ！」

「ついでと言っちゃあ、何だけどよ。俺のこども、すっかりさせ  
ちゃあ、くれねえか？」

そう言つてアーチエルを、ガツチリ組み敷いて男は、そう言つた。

「あ？ え？ い、……いやあああつー！」

アーチエルは抵抗したが、女の力では男の力に、適うべくもない。  
ましてや、アーチエルは女性の中でも、非力な方である。

最早なす術は無かった。

「へへへ、頂きまゝ……」

「いやっ、アシユマさまあつー！」

アーチエルは、思わず目を瞑り、身を硬くした。  
ゴン！

鈍い音がして、男が倒れこんだ。

アーチェルは瞋った目を、恐る恐る開いてみた。  
そこにはアシュマがいた。

「アシュマさま」

アーチェルは、手を差し出した。

アシュマは男をごろんと転がすと、アーチェルの手を取り起して  
やった。

「有難うアシュマさま。わたくし、まだ行かなければならない所が  
……」

ぱんツ！

アシュマがアーチェルの頬を叩いた。

アーチェルは、信じられない様な顔を、アシュマに向けていた。  
「な……」

アーチェルは、何かを言おうとしたが、何も言葉が出てこなかつ  
た。

その代わりアシュマが、

「自分勝手な事をするな！ 仲間を危険に晒すな！ もっと自分を  
大切にしろ！！」

初めて、そして激しくアーチェルを叱った。

始め、無言だったアーチェルは、次第に泣き顔になり、終には泣  
いてアシュマに抱きついて来た。

アシュマは、そこで初めて優しい声音で、

「さあ、帰ろう。ここにはまだ危険が多い」

そしてアーチェルを優しく抱きしめてやった。

アーチェルは、

「御免なさい！ ……御免なさい！」

何度も泣いて謝った。

「もういいんだ、帰ろう」

「はい……」

その時、自分達のいた方向から、悲鳴が聞こえてきた。



「！アーチエル」

アシュマは自分の背を、アーチエルに向けた。

「はい！」

アーチエルは素直に、自分の身をアシュマに任せた。

アシュマは疾風の如く、走り出した。

敵は、やはり、アシュマの指摘どおりの位置と布陣で、来た。

一風代わっているのは、魔導機兵が『ハエトリグモ』の形をした物で、実験的な色合いが濃い事である。

まるでこのマリク紛争地帯で、トライアルするかの様に。

今の戦闘は、生徒達を護衛してきた兵士達が、行っていた。

戦闘が即、出来ない生徒は、来た道を戻っていったが、半ばパニック状態になっていた。

後は、本格的戦闘の出来る生徒達が、戦闘を行っていた。

アルミナとオルバニアン、ヨディも戦闘に参加していた。

アルミナとオルバニアンが、敵陣目掛けて突貫した。

アルミナはその大剣で影の者を粉碎し、オルバニアンはその刀で影の者を切り裂いていった。

「こんな時に『対魔導機兵用ライフル』があつたらなあ」

オルバニアンがぼやいた。

「ばやかない、ばやかない。アンタにはそれだけの腕があるから、いいじゃないか」

アルミナはそう言つてオルバニアンを元氣付けた。

「そうか……、そうだな！」

「そうよ。さあ、敵を蹴散らしちゃいましょう？」

敵の『ハエトリグモ』がアルミナ目掛けてミサイルを発射した。

「アルミナ！ 危ない！！」

「え！？」

アルミナは、反応しきれていなかった。

オルバニアンは、アルミナに突っ込んで行つて、アルミナを押し倒した。

二人の念導境界面が重なつて、より強固な物になった。  
が、ミサイルの破壊力の全てを、相殺するまでには、若干至らなかった様だ。

ミサイルの爆発音が、二人の頭上で鳴り響く。  
「ぐあっ！」

オルバニアンの叫び声は、ミサイルの爆発音に掻き消された。  
「……………」

「済まないオルバニアン。おかげで助かった。でもそろそろ退いてくれないか？ チョツと恥かしい……………」

そう言つてアルミナはオルバニアンを見てみると……

「……！ オルバニアン……！」

オルバニアンの背面には、無数の破片が突き刺さつていて、怪我をしていた。

幸いな事に、頭部に傷はなかった。

だが重篤な事に変わりはなかった。

「オルバニアン……！」

アルミナは叫んだ。

アルミナは剣を納め、オルバニアンを担ぎ撤収してきた。

「ヨディ！ オルバニアンが」

言いざまアルミナは、オルバニアンを、ヨディに診せた。

「これはいけません。一気にカタを付けてしまいましょう。アルミ

ナさんはオルバニアンと共に、ここを撤収して下さい」

「済まねえ」

『全てを憎しむその牙よ。

全てを憎しむその爪よ。

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト……！』

ヨディはティアマットを召喚した。

ティアマットは竜神バハムートと比肩出来る竜である。

ティアマットは、暗黒の炎と強力な顎そして力とその武器であった。

ティアマットがその暗黒の炎で、敵を焼いた。

兵士はこれで全て焼いた筈だった。

しかし、魔導機兵には効かない様だ。

「くっ、しかも『シールド』の魔法を付加してますねえ。こいつは厄介だ。僕の『ウインダム』じゃあ触れる事すら出来ない訳ですか……シールドの魔法？ スコラ関係者と言う事ですか？ それともネルファベーズ？」

魔導機兵達は守りが厚く生徒達がいらない所より、守りが薄く無防備な生徒達がいる方へ先回りをした。

「しまった！」

ヨディは言ってみたがどうなる事でもなかった。

撤収する生徒達の前では、一番後ろに行くミカの班があった。ただし、今ミカの班には、他にサクラコとエミルの合計三人しかいなかった。

リイナはパニックの中、途中で、はぐれてしまった。

そのミカの班の前に、魔導機兵達が現れた。

ミカ達を取り囲む魔導機兵達。

魔導機兵達が、ミカ達を襲おうとする正にその瞬間、全生徒達目の前に疾風の如く現れた黒い影。

アシユマ・アトーが、魔導機兵達の前に立ちはだかった！

「先生！」

ミカが叫んでいた。

「先生！ アーちゃんは？」

「大丈夫だ！ 列の前にいる！」

列の前ではアーチエルが、怪我人を癒していた。  
側には、アルミナとエフアールが付き添っていた。

「なあ、アーチエル。頼む。お願いだ！ オルバニアンを治してやつてくれ！」

アルミナは悲痛な声を出して懇願していた。

「分かっています。何とかします」

アーチエルが宣言した。

『聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール！』

清らかな光が舞い降りて傷ついた者達を癒していった。

ただし、オルバニアンは傷が半ば癒されたにとどまり、完治には至らなかった。

相当酷い怪我なのである。

「ザ・ライフを使うしかないわ……」

アーチエルが呟いた。

「ザ・ライフ……！！ いけないわアーチエル！！ 『禁呪』よ！  
それは！」

エフアールはアーチエルを止めようとした。

「禁呪？ それは一体何？」

アルミナがエフアールに訊いた。

「禁呪とは使つてはいけない呪文の事よ。それを使うと術者本人に相当なダメージを与えるの。下手をしたら命だって奪いかねない……ザ・ライフは、そう言った類の呪文なの。ザ・ライフは術者の全念導力と引き換えに被術者の生命を助ける魔法。念導力とは即ち生命エネルギーの事。下手をしたら、アーチエルの命だって奪いかね

ないわ」

「そんな術をアーチエルが……」

アルミナは止めて良いのか、どうしようか迷っていた。

「エリクリス、フアラ、メイリーフ……」

アーチエルが『ザ・ライフ』の呪文の詠唱を始めた。

「駄目よ！ アーチエル！ 詠唱をやめなさい！！」

『出でよ勇者、聖なる剣と。』

出でよ勇者、聖なる盾と。

汝の力誰が為に。

尊い命我らが為に。

黄金の途を一人行かん。

汝をして皆を護る。

ザ・ライフ！』

眩い光がオルバニアンを包む。

ミサイルの破片が、体から抜き出て行く。

そして傷口が塞がって行く。

「アルミナさん、これでオルバニアン様は……」

アーチエルはそう言うなり、草むらに倒れこんでしまった。

「アーチエル！」

エフアールが側に行き、アーチエルが息をしているかを確認した。

「姫様は大丈夫かい？ エフアール？」

「……大丈夫みたいよ。ちゃんとセーブして使ったみたい。今は気絶しているだけ。兵隊さんに頼んで運んでもらいましょう」

「ああ、良かった、二人とも……」

アルミナが胸を撫で下ろす。

「あら、『オルバニアン』じゃないの？」

エフアールがからかった。

「な、な、何を言ってるんだよ！ アタシや、ただ二人の身の安全が第一だと思……」

アルミナが狼狽える。

「うふふ。無理しなくていいのよ。気になるんでしょ？ 彼の事？」  
「う……今はそれ所じゃ無いだろう？」  
アルミナは顔を真っ赤にした。

一方アシユマは、魔導機兵達に囲まれていた。  
が、逆に言えば、生徒達は安全と言う事だった。

『ハエトリグモ』のうち一機の拡声器から、聞き覚えのある声がしてきた。

『一瞥以来だね。アシユマ・アトー』

「『蜘蛛』か！」

『覚えておいてくれて嬉しいよ。オリジナルナンバー。でももう直ぐお別れだね。アンタはここで死ぬのだから』

「さて、それはどうかな？」

アシユマが鬼虎の鯉口を切る。

少し離れた所で、ミカ達がアシユマを見ていた。

「無茶だよ。先生。やられに行った様な物だよ」

ミカが言った。

「それにしちや、随分堂々としてるけど？」

エミルが客観的に言った。

それが、ミカの気に障ったのか、

「何を言っているのよ？ 先生は命を張って、私達を守ってくれているんじゃない！ 軽々しく『堂々としている』なんて言わないで」と、喚いていた。

「あーだめだ。こりや、自分の世界に酔いしれてるよ」

『蜘蛛』が、アシユマに向かって言葉を発する。

『それじゃあ、さよなら。先生』

アシユマを取り囲んだ魔導機兵達が、一斉攻撃を開始した。

ミサイルを連続的に発射する。

爆発に次ぐ爆発がアシユマを攻める。

爆風と爆炎がミカ達を襲う。

「きゃああああっ!!」

ミカ達が叫んだ。

『撃ち方止め!』

『蜘蛛』の一声で、攻撃はやんだ。

『蜘蛛』はにやりとした。

もう、跡形も残っていまいと思った。

後は、残るスコラの生徒達を、殺して行くだけ。

だが、そちらの方が、『蜘蛛』にとって苦痛だった。

何故か?

それは、『蜘蛛』自身にしか分からないだろう。

話を元に戻そう。

爆煙が薄まり、もはや何も残っていないだろうと思われたそこには、人影が浮かび上がった。

それはアシュマだった。

「ミカ、ミカ! あれ!」

サクラコが言った。

「な、なに? サクラコ……!! きゃ~~~~っ!! アシュマ先生!!」

生徒達は、歓喜歓喜の嵐であった。

アシュマの右手に持つ鬼虎が、白銀の光を放っていた。

『蜘蛛』も動揺を隠せないでいた。

「馬鹿な! アレだけの攻撃を食らわせたのだぞ! 何故生きていられるのだ!? 糞! 全機砲撃用意!」

その時左手にある『ハエトリグモ』が爆発をした。

アシュマが『ハエトリグモ』目掛けて鬼虎を振ったのだ。

「なに、今の? ファイヤーボール……じゃないわよねえ」

ミカが疑問に思った。

『クソ! 全機散開!!』

「そうはさせるか!!」

アシュマが左右に剣を振るうと、三日月形に光る白刃が右と左の『ハエトリグモ』に飛来して行き、双方とも真つ二つにして、爆発を起こした。

「今のも、ウィンドスラッシャー……じゃないわよね？」

アシュマはとても不思議な事をすると思うミカだった。

『馬鹿な？ 念導境界面に、シールドの魔法を付加してるのだぞ？ それを……それを一撃か！ ……あれが鬼虎の力なのか』

今や、女生徒だけでなく、男子生徒も味方に付けた感のある、アシュマだ。

やんややんやの大騒ぎで、『ハエトリグモ』を追い詰めて行く。

『ハエトリグモ』は徐々にじりじりと後退していった。

どうやら、逃げる機会を、窺っている様だった。

アシュマは鬼虎の切っ先を、前へ寝かせた霞の構えで、『ハエトリグモ』を狙った。

アシュマの持つ鬼虎の刀身の部分には、白銀色の光球が纏わりついていた。

『ハエトリグモ』が動く気配を見せた。

アシュマは、すかさず鬼虎を突き出し、発光球を前へ飛ばした。その直後、『ハエトリグモ』から、筒状の物が真後ろへ発射された。

『ハエトリグモ』は爆発した。

『ハエトリグモ』から出て行った筒は、操縦ブロックだろう。

アシュマは、それを追おうとした。

が、

「先生え、アーちゃんが……」

ミカが泣きべそかいて、アシュマを引き止めた。

アーチエルは担架に乘せられ、ぴーんと真つ直ぐになっっており、およそ生气という物が感じられなかった。

「アーチエル！」

アシュマは担架の側へ寄り、アーチエルに呼びかけた。



「アーチエル！ アーチエル！！」

後から、エファールがアシュマに、声をかけた。

「大丈夫よアシュマ。大分『気』は減っているけれど、疲れているだけ」

「何故こうなった？」

エファールは、話のあらましを聞かせた。

「済まん、アシュマ。事の発端は、アタシからなんだ」

アルミナが泣きながら話した。

「泣くな、アルミナ。お前のせいじゃない」

アシュマが慰める。

「でも、あの時、オルバニアンが助かるなら……他の事はどうでも良いつて思ってたんだ……」

「アルミナ、俺もそういう所はある。誰にでもそういう所はあるんだ。アルミナの責任じゃない。さ、オルバニアンの側に、ついててやってくれ」

「……済まない、アシュマ……」

アルミナは、オルバニアンの方へと走って行った。

オルバニアンの担架の側まで戻ってきたアルミナは、

「……オルバニアン……アタシ……」

アルミナは一人ごちた。

何だか涙が溢れてきた。

涙が零れ落ちてオルバニアンの頬を濡らして流れた。

「……なんだ……泣いて、いるのか？……らしく、無い、ぞ……」  
オルバニアンが喋り始めた。

「！！ オルバニアン、意識が戻ったんだね？」

「あたり、まえ、だ……」

「オルバニアン！ 喋らなくていいよ。……良かった。……本当に、よかった」

アルミナはオルバニ안의頬を手でさすりながら、本当に嬉しうにしていた。

「禁呪……そんな物が……」

アシュマは呟いた。

そして、話を聞きながら、ずっとアーチェルの手を握り、『氣』を送り続けていた。

「ええ、そんな物まで使ってこの娘は、オルバニアンを助けようとエファールも少しくぐもった涙声で応えた。

「禁呪とは何だ？」

「……だめよ！ アシュマ、手を出したりなんかしちゃ！ 本当に危険なのよ！？ アシュマには、鬼虎があるじゃない？」

エファールは警告を発した。

「聞いてみただけだ。大体、俺が魔法を習得出来ると思うか？」

「それはそうだけど……」

「ただの興味から聞いた事だ」

「……そうね。アシュマの事だから、習得出来る訳でもなし、ただのお話だと思つて」

「ああ……」

「禁呪は、基本的にどの系統の魔法にも、存在するみたいなの。大抵は六行詩の呪文形式を持っているわ」

「六行詩？」

「あ、ええ御免なさい。普通の魔法は四行詩の形式を取っていて、その一行一行に言語魔方陣を描く、プロセスが込められているのよ。でもそれだけじゃ駄目。その呪文に合った魔導石を持っていないと駄目。それが、魔法の系統になる訳。で、その禁呪は六行詩の呪文構造を持っているわ。何故禁呪が危険かと言うと、破壊力が甚大な事や、呪文の影響が、自分自身に及ぶ事等、そういった事が挙げられているからなのよ」

「アーチェルの場合は、自分自身に影響が、跳ね返って来たと言う事か」

アシュマは言った。

「そう言う事になるわね」

エフアールはそう言った。

途中、木の向こう側から出てきた、リイナに出くわした。

見つけたのはミカで、

「リイナ！ どこ行つてたのよ？ 心配したんだから！！」

怒りを隠さなかった。

「リイナ、リイナじゃないか？ 今までどこに行っていたんだ。心配してたんだぞ？」

アシュマがリイナを叱った。

「本当？ そんな……」

リイナはアシュマが本気で心配してくれたのかを訊いた。

「ああ、本当だ。何処か痛い所はないか？」

アシュマは、優しく言った。

スコラの入学許可年齢は、十二歳からと聞いている。

初等教育が終わって、それからの入学と言う事になっている。

アシュマはリイナを、そのくらいの年齢と見ていた。

「せんせい……体中が痛い……」

リイナは訴え、アシュマにもたれかかってきた。

「！ それはいかん……衛生兵は……」

「いいの、せんせい……リイナ大丈夫だから。お願いだから側にいさせて……一人ぼっちはいや……」

リイナは、涙ながらに訴えてきた。

「分かったよ。リイナ」

アシュマは、リイナを安心させるように、優しく言った。

そしてリイナを、背負ってやった。

「アシュマ、私ヒーリング掛けましょうか？」  
エファールが言った。

「頼もうか……」

アシュマが言いかけた時、

「大丈夫です、エファール先生」

リイナはこちらにはにべもなく拒否をした。

「せんせい、アーちゃん目を覚ますよ」

リイナは不思議な事を言った。

「え？」

アシュマは驚いた。

ミカも声こそ出さなかったが、驚かされた。

「う……」

アーチエルは、目を覚ます予兆を見せた。

「ね？」

リイナは言った。

「うん、驚いた」

アシュマは、思った通りの感想を述べた。

「アーチエル……、アーチエル」

アシュマは、アーチエルの名を呼んだ。

「あ……、あ。アシュマさま……」

アーチエルは、目を覚ました。

「アーちゃん、私に分かる？」

ミカが、担架の反対側に回って言った。

「あ、……ミカさん」

アーチエルがミカの方を向く。

アシュマは握っていたアーチエルの手を、更に少し強く握ってやる。

するとアーチエルも握り返してくる。

今度はアシュマのほうを向く。

目と目が合う。

エファールは、それを見て思った。

もう、自分が入り込む余地の、無い事を。

「せんせい、私、眠るね」

「え？」

アシュマが振り向いた時には、もうリイナは寝息を立てて眠っていた。

「不思議な子だな」

アシュマが感想を漏らす。

「そうでしょう？ わたしもこんな不思議な子を見るのは、初めてアシュマとアーチエルは、目を合わせていたが、不意にアーチエルが涙を流し始めた。

「どうした、アーチエル、どこか痛むのか？」

アシュマは慌てて聞く。

「いえ、先程のアシュマさまの言葉、今になって痛感しました。私は、皆を危険な目に合わせ、仲間を傷つけさせて、それどころか死者まで出して……」

アーチエルは面を向こうに向けて、静かに泣き始めた。

「アーチエル、幸いにして、生徒の死者数はゼロだ。加えていうなれば兵士の死者数は五名と軽微だ。あの戦闘は避けられなかった。起こるべくしておきた戦闘だった」

アシュマはアーチエル自身を庇ったつもりだった。

だが彼女は、

「人の生命に、軽いだ重いだなんて、決める事なんて出来ないわ！ その五名の命はわたくしが奪ったも同然だわ。わたくしは何も出来なかった！」

アーチエルは、自己嫌惡の真っ只中にいた。

「……自惚れるな、アーチエル。『その五名の命はわたしが奪った』だと？ 兵士一人の働き如何で、戦局が変えられるものか。アーチエルがいれば、戦闘は避けられたのか？ アーチエルがいれば、五名の戦死者の命が救えたのか？」

アシュマは、アーチエルを辛辣に扱った。  
そこへミカが割り込み、

「アシュマ先生、酷いです！ アーちゃん、こんなに悩んで傷付いているのに、どうしてそんな酷い事が言えるんですか？」

アシュマに抗議した。

「……………」

アーチエルの瞳に力はなく、面を向こうにして、ただただ涙を流していた。

「『だから』…………アーチエルの責任じゃないんだ」

「アシュマさま……………」

アーチエルが再びこちらを向いた。

「だから、そんなに自分を責めるな」

「……………うっ、うわああああっ！！」

アーチエルはアシュマの手を両手で強く握り、顔の前まで持つてきて大声で泣いた。

周囲が何事かと、疲れた足を止める程に、泣いた。

暫く泣いて、落ち着いたのか、やっと言葉を発し始めた。

「アシュマさま……………わたくしは駄目ですね。アシュマさまにばかり甘えてしまつて」

アーチエルはまだ涙に濡れているその瞳で、真っ直ぐにアシュマを見つめた。

「いや、それは別に構わんさ」

アシュマは、アーチエルを、優しく見返した。

「ついでながら言うと、アーチエルは無力なんかじゃない。オルバニアンの命を救ったし他にアーチエルに癒された者も、沢山いるだらう？」

「はい。確かに。でも、それは……………」

アーチエルは躊躇いの中、答えてた。

「事実だ」

アシュマは静かに、しかし、力強く言った。

「……はい」

アーチエルは、少し気圧された感があったが、少しそれで救われた感じがした。

そしてお互いの手は強く握られていた。

「よかったね、アーちゃん」

ミカが祝福した。

「有難う、ミカさん」

アーチエルが礼を言った。

「それにしても、酷い顔になっちゃったわねえ、旦那様に嫌われちゃうよ？ このハンカチ使ってよ」

ミカがレースのハンカチをアーチエルに手渡した。

「だっ、旦那様って……？」

「そこにいるじゃない？」

ミカはそう言って、アシユマに目配せをした。

「そんなに酷い？」

アーチエルは真っ赤になって恥かしがり、ハンカチを受け取り涙をを拭いた。

「有難うミカさん、洗って返すね」

アーチエルはミカに感謝の意を述べた。

「旦那様……か……」

そして、アーチエルは一人呟いた。

「何か言ったか？ アーチエル」

アシユマはこちらを向いて、訊いて来た。

「いいえ、何でもありません」

「そうか」

そう言って、アシユマは再び前を向いた。

アーチエルは誤魔化したけれども、いつかそうなる事を……アシユマが自分の旦那さまになる事を、夢に描く様になった。

校長への報告はヨデイが代表して答えた。

全百二十九名の内、死亡零名、負傷者七名、戦闘発生により急ぎ帰還、今に至る。

と。

「分かりました。まあ、生徒に死亡者が出なかったのは、僥倖といえましょう。では、スコラに戻りましょうか」

校長は皆に帰る旨を伝えた。

生徒達は、乗ってきたサイコ・フライヤーに乗り込み、そして帰還していった。

フード付きの黒いローブを纏った者達の集会は、今日も行われていた。

暗い空間の中、ぼうつと光を受けて、その姿をぼんやりと現し、誰かが始めるともなく喋り始めた。

「アシュマ達は生き残りましたな」

「全く」

「危うくもう一体の素体……アーチエルが死にそうになりましたな」

「全く」

「先の実験は不成果でしたな」

「そうですね。オリジナルナンバー、最終兵器が中途半端な……中途半端どころではありませんな。全然覚醒していませんでしたし……」

……

「かといって、……『ハエトリ……グモ』でしたかな？ アレの性能も取れぬままに、破壊されてしまいましたからな」

「それは些細な事」

「しかし、それもこれも皆、『オリジナルナンバー』……いや、アシュマ・アトーと呼称しましょう。全ては彼奴の所為」

「やはり、アシュマを、亡き者にしましょうか？」

「皆さん、お忘れですか？ 今日アシュマの事を、話しに来たの



ではありませんぞ?」

「おお、そうでしたな。今日は、クーロン人民共和国の今後の情勢について、語り合うのでしたな」

「最終兵器は先ず置いておいて、最近クーロンの輩どもが、うるさいですな」

「何かとあれば、紛争地域に顔を出し、アヘイビアと衝突し、適当に引つ掻き回しては手を引く。本当に困った物ですよ」

「これが、ノーツ連邦だといいいんですよ。我々の息も掛かっているし、適当に悪役にもなってくれる」

「そうですね、これがクーロンだと、こうは行かない。我々の制御も利かないし、聞こうともしない」

「経済成長にも、目をみはる物がある」

「それにクーロンには、最大の資源がありますからな」

「それは?」

「人口ですよ。これに勝る資源は、ありませんからな」

「どちらにしても、一旦、絞めておきますか」

「そうですね。ある一国が成長しすぎでは、バランスに欠けますからな」

## 第五節 ファントム

学校に着いてから、アシュマの方から報告があるという事で、今は使われてない教室に、皆集まった。

アシュマから、皆にイレギュラーナンバーが、学校内に潜んでいると言う事。

イレギュラーナンバー、と、言う言葉に接するのが初めて、と言う者には言葉の意味する所を、掻い摘んで話した。

「じゃ、じゃあ。アシュマは、イムフレーレとか言う奴が残した『素体』……『オリジナルナンバー』って奴で、敵はそのコピーだったのかい？」

アルミナが驚く。

「そうだ」

「ショックだー。アシュマがそんなわけのわかんない『オリジナルナンバー』だなんて」

アルミナは上を向き、額に手をあてて、動揺を隠し切れないでいた。

「あたしも。でも、そんな大切な事、なんでもっと早く教えてくれなかったのよ」

エファールが抗議した。

「へー。『オリジナルナンバー』か。しかも人間より力もスピードもある。そりゃ強い訳だよ」

オルバニアンが淡々と言った。

「オルバニアン……チョツといいすぎ」

エファールが言った。

「そりゃ、多少驚きもするさ。だけど、アシュマはアシュマだろう？別に、今まで通りだろ？『オリジナルナンバー』とか言っ、アシュマを特別扱いしたり、敬遠するのはどうかと思うぜ？」

オルバニアンが言い切った。

「そうだな、オルバニアンの言う通りだわ」  
アルミナが同意した。

「そうね。私もチョツと、勘違いをしていたみたい」  
エファールも、自分の間違いを認めた。

「有難う、皆さん……」

そう言つて顔は微笑みながら、瞳を潤まし、言葉を詰まらしたのは、アーチエルだった。

「？　なんでアーチエルがそんなになつているんだよ？」

オルバニアンは不思議そうにしていた。

アシュマはここで大事な事を敢えて皆には言わなかった。

それはアーチエルが、アシュマと同じ、イムフレーレの残した生命体であること。

人間では無いことだ。

それは、そのままが良いのが。

それとも、打ち明けた方がよいのか。

アシュマには分からない事であった。

「さて一段落した所で、話を元に戻したいんだけど、そのイレギユラーナンバーはアシュマ君の話によれば、先日の『戦場現地実習』にも現れたらしいんだよね」

アシュマから話を引き継いだ形で、ヨディが話を始めた。

「知つての通り、当日行方不明になった人間はいない。勿論当日混乱が相当に酷かったので、途中はぐれてまた元に復帰する生徒は相当数いたが。……そこで、僕は当日このスコラを休んだ生徒の中に犯人がいると見ました。これならば戦地で行方不明になるうが、死亡しようが、関係ないですし、まさかスコラからここまで来る筈が無い、と言う相手の読みの裏をかく事が出来ます」

「いや、待てヨディ。俺は可能性を現地実習生まで、広げた方がいいと思う」

「だって、アシュマ君の言う『ひよろりとした背の高い女』に体格の合う女生徒は、いなかったんでしょ？」

「それはそうだが……」

アシュマは言葉に詰まった。

「それとも何か根拠でも？」

ヨデイが訊いた。

「……『勘』だ」

「『勘』ですか。アシュマ君の勘は、馬鹿に出来ませんからねえ……。しかし今回は客観的事実が無いので……パス！」

無残にもアシュマの意見は、ヨデイにより却下されてしまった。

「それでは皆さん。今の方針に則って、容疑者を絞り込んで下さい。以上、解散！」

「ヨデイ様」

アーチエルがヨデイに声をかける。

「なんですか？ 王女」

「あれでは、アシュマさまが可哀相です。何とかアシュマさまの意見も取り上げて下さいませんか？」

アーチエルが涙ぐみながら、ヨデイに訴えかけていた。

「そう言われましても……」

ヨデイは返答に窮していた。

それを見たアシュマは、

「アーチエル良いんだ」

と、普通に言っただけだったが、

「ご、御免なさい！ アシュマさま！ 出すぎた真似を……」  
過剰に反応した。

おかしい。

このアーチエルの反応の仕方は、明らかにおかしい。  
アシュマは咄嗟に判断した。

「アーチエル大丈夫だから。ね？」

優しく言った。

その晩、アシュマ達に割り当てられた部屋で……。

「なあ、ヨデイ。明後日の休み、空いているか？」

アシュマはヨデイに訊いた。

「空いてますけど何か？」

返答を返すヨデイ。

「明後日の休みに、アーチエル達を誘ってどこか……大勢で楽しめる所がいいな。そこにアーチエル達を誘って、皆で楽しませてやりたいんだ」

アシュマにしては珍しい事を言い始めた。

「何でまた急に？」

「アーチエル最近変だろ？」

「ええ、まあ過敏といえば、過敏ですねえ」

ヨデイが指をあごにあてて考える。

「気鬱の病になりかけているんじゃないかと思つて。元気付けよう  
とさ」

「気鬱の病の時は、あんまり外に出たがらないんじゃない……」

「その時は本物の病気だ。俺がアーチエルを医者に見せる。だがその  
うなる前に、治してやりたいんだ」

アシュマは、アーチエルを心配して言った。

「そんな、ここの調査の件は？」

ヨデイは調査の方を案じた

「そうなたらそれ所じゃ無い。俺はアーチエル優先で行く」

アシュマの意思は固かった。

「分かりました。そこまで言うのでしたら、付き合いましょう？」

ヨデイが折れた。

「で、具体案は？」

あるのかとアシュマに訊いてきた。

「ない」

あつさり具体案が無い事をアシュマは曝け出した。

「分かりました。当日の計画案も、僕が作っておきましょう」

「済まない」

ヨディはベッドにぐろんと横たわって、  
「それから、さっきから何読んでるんです？ 魔導書に見えるんですが？」

アシュマの手元を見た。

アシュマは、ベッドにうつ伏せになりながら、

「そうだ」

淡々と応えた。

「何を読んでいるんですか？」

ヨディが興味を持ったらしい。

「『魔導書と霊<sup>フアントム</sup>』」

「『フアントム』う？」

ヨディが怪訝な表情をする。

「ああ、トラップの一種なんだそう。掛かると情緒不安定になるんだそう」

アシュマが淡々と答える。

「何でまたそんな本を？ 魔導書だったら、なんか他にあるでしょうに……」

ヨディが呆れた表情をする。

「ん？ 面白そうだったから、つい……」

アシュマは本に集中している。

「こないだなんか、一般魔法学科の魔法の教科書、読んでませんでした？」

「あれは二時間で読んだ」

「身に、なってるんですかねえ？」

「そうだ、ヨディ」

アシュマが何かを訊こうとした。

「なんですか？ アシュマ君」

ヨディが受けた。

「白の魔導石と黒の魔導石、そして普通の魔導石が欲しい」

「珍しいですね。アシュマ君がそういう事に、興味を持つなんて」

「しかも、この粗悪品ではなくて、最高級な物が」

「分かりました。黒何級、白何級ですか？」

「分らん」

「まあ、どうせ両方とも、超特級でしょうけどね」

ここで言う、魔導石の等級だが、勿論術者の念の等級に比例する。ミス・ケリー・サトウが、アシュマ達に魔水晶を以ってして、念の等級を計らせたのを思い出して欲しい。

術者はそれぞれ念の等級を持っていた。

それに応じて強力な魔力を得るのだが、引き出す魔導石の方が術者の念の等級とつりあっていない場合、充分な魔力を引き出す事が出来ない。

術者の念の等級と魔導石の等級は、等しい事が望ましい。

だが、例外もある。

アシュマの様な強念者の場合だ。

彼の念の力は、凄まじい。

最高級の魔導石を以ってしても、アシュマの念の力を全ては引き出せない。

アシュマの能力を引き出せるのは、鬼虎以外に無いだろう。

「じゃあ、それで頼む」

「明日にでも届きますよ。アシュマ君、そろそろ寝ないかい？ 電気スタンド消していいかい？」

ヨデイがスイッチに手を伸ばす。

「ああ」

アシュマも本を閉じ眠りに入った。

次の日、アシュマが、アーチエル達のクラスを受け持って授業をしている時に、アーチエル達に、皆で遊びに行く事を提案した。湧き上がる歓声。

それを、押さえようとする、アシュマ。

「ヨデイとエフアールも、一緒だけだな」

「嬉しい！ アシュマさまと初デートだなんて……」

アーチエルが胸に手を組み微笑む。

「あたしら、なんなら次の機会にしようか？ 二人でゆっくりと……」

……

エミルが言った。

「いいえ、皆で楽しみましょうよ！」

アーチエルが即座に言う。

「そうですねえ、思いつきり楽しまない！ おほほ！」

サクラコは乗り気だ。

（先生、急にデートだなんて、何かあったんですか？）

ミカは勘の鋭い事を言う。

「何も無いよ。さあ、素振り、行って来い！」

アシュマはミカの背中をぽんと押してやった。

「きゃっ！」

声を出して、木刀の素振りに行った。

「アシュマさま？ オルバニアン様とアルミナさんは？」

アーチエルが訊いた。

幾らなんでも、仲間はずれは無いだろう、と、思ったからである。

「あいつら、デートらしい」

アーチエルの予想外な答えが、アシュマの口から漏れる。

「まあ！」

アーチエルは、顔を真っ赤にした。

「さ、そろそろアーチエルも素振りやって来い」

アーチエルの背中を、軽く押してやる。

「はい」

元気のいい返事が返ってきた。



その日の夜、アシュマとヨデイの部屋にて。

「アシュマ君、届いたよ」

ヨデイから手渡された物は、白の魔導石と黒の魔導石、そして普通の（銀）魔導石だった。

かなり純度が高そうだ。

学園内で支給される安物とは色艶が全然違う。

ちなみにアシュマの関係者は、全てオロが調達した、魔導石をつけている。

ヨデイの様な召喚士も、石は同じ物を持っている。

ただ、扱う呪文と相性の問題だけである。

つまりはこうだ。

火の属性の魔法を唱える者も居れば、火の属性の召喚魔法を唱える者も居る。

同じ赤の魔導石で両方唱える者も居る。

そう言う事だ。

話は変わるが、魔導石はこの世界では貴重な物だ。

産出国が決まっており、世界にはあまり出回っていない。

故に値段も高い。

「ああ、済まない」

早速紐を通して首に掛ける。

「こんな物が、ただ同然で手に入るとはな」

「ただ同然じゃありませんよ!? 一応我々はオロ財団と直接契約をしている、エージェントと言う立場なんですから……」

アシュマが指を、口に当てていた。

「壁に耳あり、障子に目ありだ、ヨデイ」

「御尤も」

そう、アシュマ達は立場上はオロ財団と直接契約を結んでいるエージェントで契約社員と言う事になっている。

大抵の物は経費で落せし、給料にいたっては一年働けば二十年は遊んで暮らせる金額をもらえた。

アーチエルなんかは貧しい故郷の為に仕送りしているし、アシュマは金の使い方がよく分らないから貯金しっぱなしだ。

オルバニアンは対魔導機兵ライフルを買って自分好みにカスタマイズしているが、それもたかが知れた物だし、アルミナも同様で自分好みの剣を作るのにしても同様だ。

困ったのはエファールで、ブランド品を買いあさっている。

これが結構な値段がするのだ。

それに宝飾マニアで、あれこれと物色しては買いあさり、かなりな筈の給料も全てそれに消えてしまい、なおかつ借金をこさえるという始末だ。

ただ救いなのは趣味が上品で良い、と言うのと、物持ちが良いのだ。

とにかく手入れをこまめにし、絶対に傷つけない。

最近では授業中によく着けている。

品が良い為目立たないし、今、身に着けているという満足感が堪らないらしい。

後は、男に貢がない。

貢ぐのは男の方だと思っている様だ。

謎なのは、ヨディでかなりな大金を持っているにもかかわらず、身なりは質素だし（冴えないと言った方が正解に近い）、いい車に乗っている訳でもなく、それなのに大金が動いているのである。

ヨディは他のメンバーと比べて、給料が二倍とも三倍とも言われている。

一説にはヨディ直々の諜報機関、若しくは戦闘部隊を持つといわれるが、真相は闇の中だ。

空中に浮遊する、埃の様に煙に巻くのか？

ダストモンキーたる、ヨディは？

ところでアシュマは、最近勉強熱心になったのか、休み時間や昼休み、はたまた放課後には魔法の本を手放さず、ずっと読みふけている事である。

それもかなり高位な魔導書である。

このスコラ秘蔵の物までである。

今も校舎の屋上で本を読んでいた所である。

そこにアシュマの後から、そつと手を伸ばし近付く人影があった。

アシュマにもう少しで届きそうという所で、

「アーチエル十点だ。まだまだ、気配の消し方が足りない」

アシュマに看破された。

「何で分かつちゃうのかしら。悔しいなあ」

そう言つて、アーチエルは、アシュマの隣に座る。

「そんな無理を言つなよ」

「しらない！」

アーチエルはむくれてみせる。

（これだけ元気ならば、心配するだけ無駄だったか？ それならそれで構わんが）

「アシュマさま。何読んでいるの？」

アシュマは本を見せた。

「『言語魔方陣とその具現化』？」

「やつて見せようか？」

「えっ本当？」

アシュマは左手をアーチエルの頭の上にかざし、

「ああ。やつてみるよ。ヒーリング！」

アシュマは呪文詠唱無しでヒーリングを掛けた。

「いやだ、アシュマさまったら。呪文詠唱しなければ、呪文は発動し……」

しかし、アーチエルは自分が癒されている事を、実感していた。

「やだ、凄いわこのヒーリング、活力が湧いてくるわ。アシュマさま。どうやったの？」

アシュマは、左手の掌に描かれた魔方陣を、見せた。

「この魔方陣は？」

「ヒーリングの魔方陣」

「ヒーリングの？」

「ヒーリング等は呪文の詠唱……言語魔方陣を使って、その力を發揮するだろう？　だけどそれは目に見えない。けれど存在するんだ。それを具現化したのがこの魔方陣」

「凄い！　凄いわアシュマさま。アシュマさまって本当は……ううん、やっぱり頭の宜しい方でしたのね？」

（喜んでいいのか、どうか微妙だな）

アシュマは、複雑な気分に陥った。

「他には何がありますの？」

「ない。後は呪文詠唱しなければ」

アシュマは本を閉じる。

「あ、さっきのヒーリング！　あれは凄かったです。先ずこの学校であれ程のヒーリングの出来る人を、見た事ありません！」

アーチエルがにつこりと微笑む。

「有難う、アーチエル」

アシュマも微笑む。

そう言ってアシュマは、アーチエルのうなじにキスをした。

「ひゃう！　……もうアシュマさまのえっち」

少しむくれてみせるアーチエル。

が、怒ってはいないようだ。

「いやかい？」

「いや……じゃないです。……困ります」

「困る？」

「……わたくし……よく知らないから、こう言う事……」

アーチエルの声は呟きに近く、よくは聞き取れなかったが、うなじにキスをする様な事を言っていたのであろう。

「アシュマさまのえっち!!」

突然言ってアーチエルは立ち上がり、向こうの出入り口に向かって走って行った。

「やっぱり情緒不安定だな……思春期か？ ……それともまさか……いや、それはあるまい」  
そう言ってアシユマは、独り言を閉じた。

次の日、校門前でアシユマ、ヨディ、エファールと、アーチエル、ミカ、サクラコ、エミル、リイナの八人が集合した。  
皆の装いは、アシユマがタンクトップに丸首の革のジャケット、ジーンズにブーツ、そして鬼虎と言う、いつもの格好。

ヨディは細縁のサングラスに、濃い茶のスーツ、革靴と決めてみた。

エファールは、ブランド物のボディコンシャスな黒のスーツと、上に白いジャケットを着ていた。

全体的に上品な感じにまとまっている。

ミカは、上着にサイケデリックなピンクの下地にロゴの入ったシャツ、ストーンウォッシュのジーンズ、そしてスニーカー。

スポーティーな感じた。

サクラコは、黒の下地にピンクのフリルのワンピース。

胸元が大きく割れていた。

地面には着かない物の少し長めで、おまけに日傘を持っていた。

エミルは、黄色い丸首のシャツを薄茶のパンツに入れて、濃茶のスウェットの上着を腰に巻いていた。

リイナは、ロゴ入りの渋い緑のシャツの上にデニムのジャケット、それにデニムのジーンズ、そしてやはりスニーカーを履いていた。

そしてアーチエルは、袖なしの白いワンピースを着ていた。

後ろには大きなリボンがあつて、体を引き締めて、腰のラインを浮き立たせていた。

足はローヒールの白い靴が履かれていて、一際可憐な感じを出していた。

全体的に白でまとめられているので、清潔で清楚な感じがした。

まるで花びらの様に。

アシユマにとっては、やはりアーチエルが一番眩しかった。

「おはようございまーす！」

皆が挨拶をする。

「お早う」

アシユマが言った。

すると皆がヒソヒソと何かを言っでは、こちらを見て笑ったり、信じられないような顔をして、またヒソヒソ言い合った。

「なにになに？ 僕も混ぜて？」

ヨデイも話しに加わった。

で、時々ヨデイの、

「なに、それは」

とか、

「それは犯罪ですよ」

等の短い言葉が、聞こえてきた。

そして、こちらを見て、にんまりしたりした。

「なんだ？ ヨデイ。ヒソヒソ、コソコソと」

アシユマが少し苛立ち、ヨデイの方へ行くと、生徒達が、

「きゃあ」

と、皆、ヨデイの陰に隠れてしまった。

アシユマは何事かと思った。

「この変態教師〜！」

ヨデイが言つと、

「変態教師〜！」

生徒が続いた。

「ヨデイ、何馬鹿な事を言ってるの？ 貴女達も、この人の言う事を、まともに聞くと、ろくな大人に……」

エファールが、生徒を諭そうとした。

「あいや待った。今回ばかりは、こちらに理あり」

逆にヨデイが、エファールを説こうとした。

「なによ、それ？」

暫くエフアールが聞いて、

「アーチエル様。ホントなのそれ？」

アーチエルが頷くと、エフアールが、

「アシュマ、見損なったわ。この変態教師」

言っと、

「変態教師」

皆が言った。

（な、なんなんだ？）

アシュマが困惑していると、アーチエルが皆より一步前へ出て、  
につこり笑った。

「アーチエル。これは、どういう事なんだ？」

アシュマはアーチエルに訊いた。

「おしおきです」

アーチエルが、につこりとした顔のまま、普段言うような言葉の  
調子で、言った。

「お、おしおき？」

アシュマは頓狂な声を出す。

「はい。最近のアシュマさまは『えっち』すぎます。だからおしお  
き」

「……………」

アシュマは顔が引きつった。

アシュマはこの微妙な感情を、どう表現していいか分からなかつ  
た。

「でも、おしおきはもうお仕舞い。これからは楽しみましょう？  
おもいつきり」

アーチエルはアシュマの腕を取って、車に向かった。

「ああ」

アシュマは自分が言うべき台詞を、先に言われて苦笑していた。

その頃学校の裏門では、オルバニアンがアルミナを待っていた。オルバニアンは時計を見ながら、少し苛ついていた。

アルミナが約束の時間を、三十分も遅れているからだ。

オルバニアンが業を煮やして、携帯を手にとり連絡を入れようかと思つてた所へ、

「おまたせー！！ 待った…… よね？ ごめん」

オルバニアンが振り向いて、

「ホントに、今、何時だと……」

言いかけて、そこで固まった。

アルミナが可愛いのだ。

髪の毛は、いつもみたいな、ぼさぼさ頭でなく、髪を整えて下ろしていた。

前髪は目の直ぐ上まで来ており、サイドは肩まで垂れていた。

服装は、薄紅色のワンピースに、白いストッキング、赤いハイヒールを履いて、手からバッグを提げていた。

紅い髪の毛とあいまって、全体的に『あか』で統一されていた。

それに、薄く化粧をしている様だ。

肌の肌理は整えられ、唇も薄く紅を刷いていた。

「ご、ごめん。こう言う事に慣れていなくて……。服も、これしかもって無いんだ。その化粧もよく分からないんだ。に、似合うかな？」

「に、似合ってるよ。俺には、もったいないくらいだ。か、可愛いよ」

そう言った後オルバニアンは、少し照れた。

「あ、有難う……」

こちらもまた赤くなって、下を向いて照れてしまった。

五分ぐらいそこで、二人はもじもじしていたが、

「い、いこうか」

オルバニアンがそう言うと、



「う、うん」

未だ照れたまま、二人は歩き出した。

アシユマ達は、車の中ではカードゲームに没頭し、お喋りに興じ、おやつ等を食べながら、車での行程を楽しんでいた。

助手席に乗った、エファールが、

「あんなはしゃいでる、アシユマをみるのは初めてだわ。どっちがホスト役だか分からないわね」

そう零す。

「いいんじゃないでしょうか？ 下手にホスト役に回って構えられるよりは、一緒になってはしゃいだ方が、皆も楽しいんじゃないでしょうか？」

「そうね。私も向こうに着いたら、はしゃいじゃおう！」

エファールは早速、光物を取り始め、バッグの中へしまい込んだ。  
「向こうで落しちゃ大変なもの」

「ヨデイさ……先生」

「なんですか？ アーチエル様」

「私達は、どこへ行くんでしょう？」

「行き先ですか？ それはですねえ、フェアリアーランドです」

「え〜っ！？ フェアリアーランド？ 今日みたいな行楽日和だと、人の山で一時間待ちとか二時間待ちなんて、ざらに出ちゃうよ？」

エミルが言った。

「果たしてそうかな？」

「えっ？」

エミルが、聞き返した。

そうこう言っている内に、フェアリアーランドまで来た。  
しかも正面出入り口の前にだ。

「せんせえ〜」

ヨデイに、アーチエルを除く生徒全員は、この教師の非常識さにあきれ返っていた。

「まあ、見てなさい」

と、意味も無く、自信たっぷりの様に言い放った。

それにしても、今日は如何したのだろう。

いつもだつたら人ばかりで、前もろくに見えないというのに、今日はまるで休館日であるかの様に入っ子一人いない。

よく見てみると、

「本日貸切」

と、ある。

「せんせー、駄目じゃん。本日貸切だってさ。中に入る事さえ出来ないヨ」

エミルが言った。

「本当に駄目かな？ 訊いてみよう」

ヨデイが受付嬢に訊いてみた。

「本日予約を入れてあるヨデイ・ヨフルだけでも、大丈夫かい？」

「はい、伺っております。どうぞ中にお進み下さい」

生徒全員はその事に驚いた。

こんな施設、貸しきるだけでも千万単位の金が動くだろうに、更にそれをしてのけたヨデイの底力（？）と言う物にである。

アーチエルとリイナが、アシュマと手をつなぎ、中へと進んだ。

ヨデイも、従業員に車のキーを渡して、自分達は中へと入って来た。

「ヨデイ、お前がここを貸切予約したのか？」

「ああ、オロに頼んでね。ここはエバス財団が運営している、アトラクションレジャー施設なのさ。ついでと言っちゃ何だが、これは特別ボーナスだってさ。日ごろの苦勞に報いるとさ」

「そうか」

「アシュマさま、行きましょ？ 先の三人が待ちくたびれてますわ」  
アーチエルがアシュマの腕を取る。

「何から乗りましようかしら？」

サクラコが張り切った。

「皆さん、フェアリアーコースターから行きましよう！」

サクラコが指を刺す。

「こうなったら、仕切り屋のサクラコに任せるしかないわね」

ミカは、アーチエルに向かって話した。

「そうね。でもそれはそれで、面白いからいいわ」

アーチエルはそう言った。

フェアリアーコースターを、乗った後からが大変だった。

次はこれ、次はあれと、目まぐるしく、行く先を変えるのだ。

ついて行く方は大変で、ヨディとエファールは、途中でダウンした。

「アシュマ君も元気ですねえ。年寄りを労わって欲しいですな」

「本当、元気ねえ？ 『オリジナルナンバー』だから？」

「そうでしょうとも」

次はティーカップだった。

アーチエルはアシュマと一緒にのカップで、二人きりになった。

ぐるぐると回りながらアーチエルは、

「今朝はあんな事して、御免なさい」

そう言った。

アシュマは、やはり気鬱の病か？

そう、思ってみる。

しかし、アーチエルの顔色を窺ったが、意外に明るい顔つきである。

少しホツとして、

「今朝の事？ …… ああ、変態教師の事か。気にしてない」  
そう言う。

「あのね、わたしは、少し困るんだけど、アシュマさまがそうしたいのなら……別に構いません。嫌でも無いし……あんまりさせないでくと、男の人って『爆発』しちゃうんでしょ？」

「『爆発』？」

「ええ、『爆発』。今朝ヨディ様が言っていました」

「アイツ、どういう教育をしてるんだ？ ま、まあ、言わんとする所は分かるが」

「やっぱりアシュマさまも『爆発』してしまわれるんですか？ わたくし、こう言う事、全然知らないから……」

アーチエルは顔を俯けてしまった。

見ると耳まで真っ赤にしている。

恥かしがっている様だ。

「『爆発』するかも知れないし『爆発』しないかも知れん。これからの俺とアーチエル次第だな」

ここで、ティーカップは回り終わった。

「アシュマさま。どちらでもわたくしは、アシュマさまの事が、好きですよ」

アーチエルは逆にお返しと言わんばかりに、アシュマの耳たぶにキスして降りた。

オルバニアンはアルミナと、映画を見ていた。  
恋愛物だ。

アルミナは、オルバニアンが退屈はしてはいないだろうか、オルバニアンの方を向いた。

「どうした？ アルミナ」

「う、ううん。なんでもない」

意外と退屈していない様だと、アルミナは思った。

一方オルバニアンは、迷っていた。

アルミナの手を、取るか取らまいか。

はつきり言って、先程アルミナに顔をじっと見られたのも、ばれたのかと思っただけだ。

ポーカーフェイスで、誤魔化したか、どこまで誤魔化しきれたか

怪しいものだ。

こうなったら、潔く覚悟を決めて……。

一方のアルミナは、普通、男の人はこう言う時は、手を握ってくる物だと思っていた。

だが一向に手を出してくる気配が無い。

自分は、やはり魅力が無いのだろうか、思い悩んでみる。

駄目で元々、いつそこちらから手を出してみようか？

アルミナも覚悟を決めて手を……。

途中、宙で手と手が触れた。

お互いが「はっ」となって手を引いた。

お互いが、なんだ、相手も手を繋ぎたがっているんじゃないかと思ひ、にっこり笑って手を繋いだ。

アルミナは手を取り、その上に更に自分の手を重ね、オルバニアンにもたれ掛った。

アルミナは言い様の無い幸福感に包まれていた。

園内を遊んでいたら、おなががすいた。

なので、園内レストランで食事をしよう、と、言う事になった。

「皆さん、どこで食べたいですか？」

ヨディが皆に訊いた。

「ミニーズ！」

ミカが真っ先に提案した。

「あそこ、安くておいしいのよねえ」

「あら、ワタクシはこの敷地内にあるのだったら、サン・グリエツペホテルにあるモナーク・サンタリエ・レストランをお勧めしますわ」

サクラコは対案を出してきた。

「でも、サクラコさん、先生方のお財布の事も考えなきゃ」

ミカが妙な所で、気を使う。

「あり難いのか、あり難くないのか、良く分かりませんねえ」  
ヨデイが頭を捻った。

「お馬鹿さんねえ。奢ってくれと、たかられているのよ」  
エファールがいった。

「え？ それは困った。今日、手持ち無いですよ？ 僕は？」  
ヨデイが慌てた。

「じゃあ、今日の所は、私が出すと言う事で……」  
アーチエルが財布を開きかけた。

「駄目！ それは絶対駄目！」  
ミカとエファールが同時に言った。

「仮にも教師たる者が、生徒に奢られるなんて言語道断！」  
エファールが主張した。  
変わってミカの意見は、

「お金が無いんだったら、安い所で食べて、皆で割り勘にしましょ？」  
そう言う物だった。

「あああ、僕とした事が、今日、お金を持ってないなんて……。エファールさん貴女、持ち合わせないんですか？」

「無いわ。カードは持っているけれど、いっぱいはいいのよ！」

「何でそんなに使ってるんですか？ 何に使っているんですか！？」

「大きなお世話よ！ ヨデイこそ何に使ってるのよ。どうせ女にでも貢いでるんでしょうけど」

「僕はそんな事しませんよ！」

「痴話喧嘩」

一言リイナが言った。

「え……」

「あ……あらやだわ、私ッたらこんな事で取り乱すなんて。リイナちゃん、先生とヨデイ先生はそんな関係じゃないのよ。『同僚』。

『ただの同僚』なんですからね。私が好きなのは……」

「うん、うん、『私が好きなのは』？」

エミル以下四人が興味津々で訊いた。

エファールが出した答えは、

「と、特にはいません……」

誤魔化しだった。

「あれ？ でもエファさんアシュマさまの事が……」

アーチエルが言いかけた時、

「あー……っ！ それ以上言わない」

エファールが、何とか誤魔化した。

アーチエルの笑い顔が、引きつった物になった。

「ところで金なら、多少は持っているぞ？」

アシュマが言った。

「そーよ！ アシュマがいるんじゃない？ 現金？ カード？」

エファールが正に的を得たりと、その様に言った。

「現金なら二十五万程持っているが？」

「さすがアシュマ！ 愛しているわ。さあ、わが生徒達、好きな物を頼みなさい！ おーっほっほっほっ！」

「別に、エファール先生のお金で食べるんじゃないのに、何で威張っているのかしら？」

エミルが言った。

「ま、いいんじゃない事？ これでモナーク・サンタリエ・レストランで、お食事が出来ましてよ？」

サクラコが言っているのをよそに、皆ミニーズへと入って行く。

「ま、待ちなさいよ！ ワタクシを置いて行かないで！」

サクラコが、皆の後を追いかけるようにして、入っていった。

オルバニアンとアルミナは、とあるビルの展望台に来ていた。

この近辺で一番高い、ビルの展望台だ。

それだけに、眺めは非常に良かった。

二人は展望台にあるバーに入った。

「ソルティ・ドッグを」

と、オルバニアンが、

「モスコミュールを」

と、アルミナがそれぞれ頼んだ。

この世界では、十八歳から成人と認められる国が多い。

国際法では、親同伴で、その許可の下ならば、十六歳からの飲酒も認められていた。

ちなみに、オルバニアンは四月十五日生まれの十九歳、アルミナは十一月二十八日生まれの十八歳。

「ねえ」

アルミナが言った。

「なんだい？」

オルバニアンが返した。

「どうしてあの時、飛び込んできたの？」

「あの時？ ああ、『戦場現地実習』の時のミサイルか。あれは、体が勝手に動いたから良く分からねえ」

「そうか。分からない……か」

アルミナはその答えに、少し気落ちした。

「……………ただ」

「ただ？」

ここから先は、オルバニアンは照れながら話した。

「ただ、大事なものを……かけがえの無い大事なものを、もうこれ以上、失いたくなかったんだ」

「だから、体を張って守ってくれたんだね？」

「ああ……………」

「有難う……………オルバニアン」

アルミナの胸の内に何か温かい物が生まれた。

二人の前にカクテルが置かれた。



園内の乗り物・アトラクションは、大体制覇した。

後は、名物のキャラクター物のパレードだけである。

派手でコミカルな音楽が流れ、派手な山車でパレードが始まった。夕闇の中、煌びやかに、華やかに。

それは、徐々に光と音の幻想的な物へと変わっていった。

皆、思い思いの場所からそれを眺めていた。

エファールとヨデイ、ミカ以下四人、アシュマとアーチエル……。幻想的ねえ。ねえ、又来ない？ 今度は二人つきりで……」

エファールはヨデイを誘った。

アーチエルは、そのパレードをアシュマにもたれ掛かりながら、見ていた。

「ねえ、アシュマさま」

「ん？」

「ドートネーゼなんかと戦わずに、ずっとこうしていられたら良いのいね」

「ああ、そうだな」

アシュマは応えていた。

アシュマは、アーチエルが元気で、本当に良かったと思った。

アーチエルは、アシュマとこうしてられるだけで、幸せだと思った。

アーチエルはアシュマの手を握った。

黒いフードの男達が集まった

今日もここで陰謀を繰り広げる為である。

「クローン人民共和国を絞めるにしてもどうするか……ですな」

「そうですね。いきなり絞めて全面戦争になっても困りますし」

「かといってじわじわ締めつけて、ある日いきなり暴発されても困りますし」

「しかし、それしか方法は無いでしょうな」

「それにしても、アシュマ・アトー達はどうしていますかな？」

「スコラにすっかり馴染んでしまったようだ」

「気楽なものよ。スコラの本当の姿も知らないで」

「全く。スコラはネルファバーゼ選抜機関だと言っ事を」

「いずれそれも分かるかも知れんですな」

「然様……」

朝。

アシュマ達の宿舎。

アシュマはトレーニングの後、歯ブラシを銜え、新聞を広げながら、

「ノリトレア、モニハ女王即位。ルーラン・ナル・テルドリニアナ元国王、アヘイビアに亡命、か……知ってたかヨディ？」

と、訊いていた。

「……………」

ヨディは黙ったままだ。

「ノリトレアでは、男しか国王になれなかったんじゃないのか？」

「法を曲げたんでしょう？ ガルマインが。ふあああ……。何で僕に聞くんです？ 僕だって、何でもかんでも知っている訳じゃないんですよ。それよりも少し寝かせて下さい」

「いや、ヨディだったら、知っていきそうな気がしてな。だって、オロ邸に置きっ放しにしたんだぞ？ それが、よりにもよって、アヘイビアに亡命したんだ。知ってたろ」

新聞を読みながらアシュマは更に言う。

「……はい、知ってました。入れ知恵したのは僕です。オロに色々動いてもらいました。オロの元が一番安全と判断しました。これでいいですか？」

「じゃあ、これは知ってるか？」

アシュマは頭をヨデイに向ける。

「なんですか、まだ何かあるんですか？」

「後十五分で、朝の職員会議だつて事を」

「……………！ なんですつて！？」

ヨデイはがばりと体を起し、時計を見た。

確かに後十五分で職員会議が始まる。

「何で、起してくれなかったんですか！？」

「起したじゃないか、それを後五分だの十分だのとこねたのはヨデイ、お前だぞ？」

「もう！ アシュマ君には、もう重要な情報、教えて差し上げませんからね！？」

「俺は今、お前に重要な情報を教えたぞ？」

「それとこれとは違います！」

ヨデイは歯ブラシを取った。

「どこが違うと言った？」

「ひほほはへはひはつはほつへはひへはひゅはふんほひょうひひはほづはんへふは」

「何を言っているのか分からないぞ、ヨデイ」

それに応えず、ヨデイは顔を洗った。

洗い終わって、

「よし、後七分！ まだ間に合うぞ！」

ヨデイは適当に食パンを口に入れて、服を着、そして部屋を出た。アシュマも一緒に部屋を出て、

「ちゃんと、お前を待ってやったんだ、いい友人だとは思わないか？」

ヨデイに言う。

「有難う御座いますー。今度から、もっと早く起してくれると、助かりますー」

「しょうがない奴だな」

アシュマが苦笑した頃、二人は職員室に到着した。

そこで職員会議が丁度始まった。

ケリー教頭が話し始めた。

「えー、皆さん。ルーラン・ナル・テルドリニアナ前国王が亡命の事は、今朝のニュース等で知っている方も多いと思いますが、その、ルーラン陛下が、このスコラに御留学いたします」

職員室内がどよめいた。

「ヨディ知ってたか？」

アシュマが訊いた。

「いや、これは流石に僕も……」

ヨディが困惑していた。

「ふむ……」

「陛下御留学は一週間後……つきまして、職員の皆様方には、生徒達に、くれぐれも粗相そそうの無い様に言い聞かせて下さい。これにも増して大切なのが、陛下御自身の安全です。これに対しては、校長との協議の結果、こちらから護衛を出す事にしました。アシュマ・アトー先生！」

「はい」

アシュマが立ち上がる。

「落ち着いてらっしゃいますね。さすがと言っべきか何というべきか。先生を到着当日の護衛役として任命します。それにヨディ・ヨフル先生！ エファール・マーヤ・ソーフア先生！」

「は、はいっ」

緊張して席を立ったのがエファールだった。

それに比べて、ヨディはアシュマにも増してだらしく、

「ふあい」

と、眠そうな声で返答していた。

「男性陣には緊張感と言っべき物はなさそうですね。もう少し自分を律して頂かないと……」

ケリー教頭は額に青筋を立てながらヨディの所へ来た。

「ヨディ先生とエファール先生には、アシュマ先生の、補佐をして

もらいます、つまり情報収集と車等の移動手段の確保、以上の事をしてもらいます。何かご質問は？」

「ふあい」

「なんですか？ ヨディ先生！？」

「あの、何でアシユマせんせと、僕と、エフアールせんせなんですか？ 何か作威的なものを感じるんですけど」

「アシユマ先生を中心に布陣を考えたら、こうなったまです。他意はありません」

（まあ、この形の方が、僕にとってもいいんだけどね）

「以上、他に何かありますか？ なければ今朝の職員会議は終わります」

こうして朝の職員会議は終わった。

「え？ ルーラン……いえ、サーナリア陛下が、おいでなさるの？」  
「ああ、でも今回はあくまで、『ルーラン』の立場で来るらしいけどな」

放課後の屋上でアシユマと、アーチエルは話をしていた。

最近どちらかと言う訳でもなく、アーチエルとアシユマの短い逢瀬に使われていた。

屋上には殆ど人がいない。

殆どどこか、いない事の方が多い。

しかし、大抵生徒の逢瀬に使われているのが、学校の四隅にある林である。

学校側はそこら辺におおらかなのか、見て見ぬ振りである。

が、事、妊娠に至っては、学校側から退学を言い渡す例が殆どである。

しかし、現在では副作用の少ない妊娠阻害薬が売られている。

それは、どの時点で飲んでも妊娠を阻害してくれる便利な薬品で、学校の薬局でもおおっぴらに売られていたりする。

どうやら見て見ぬ振りと言うのは、案外本当の事で、下手に取り締まり地下に潜られては、と、言うのが学校側の見解で、カップルの進行度合いを調査するのが生徒会、風紀委員の主な行動の一つであると、言えたかもしれない。

アシユマとアーチエルとの関係も、既に生徒会から担当職員、下手をすればあの頭の固い教頭に、連絡が行っているかもしれない。それでも構わないと思った。

唯一つ懸念されるのは『蜘蛛』で、既に何かしら、こちらの関係を掴んでいるだろう。

そしてスコラの生徒なり、職員に成りすましてこちらを伺い、アーチエルを人質にでもされた日には、目も当てられない。

そういった意味では、あの教頭も怪しい。  
少し警戒する必要がある様だ。

所で話は変わるが、アシユマの場合は、二人で逢うと、アーチエルの頭を撫でたり、髪の毛を撫でたり、キスをしたり、耳たぶやうなじにキスをしたりする。

それだけで、アーチエルは陶然となり、目をとろんとさせるのである。

そして文字通りに『抱いて』やる。

アーチエルはそれだけで満足といった表情を見せる。

幸せそうな顔を見せる。

時には感極まり涙を流す。

本人は気が付かない。

微笑んだ表情のままで、涙を流す物だから、こちらが対応に困る。

その時に始めて、自分が涙を流していたのだと。気付くらしい。

それならこちらでハンカチなり何なり差し出せばいい物を、こう言う所に頓着が無いアシユマが持っている訳が無い。

仕方ないのでアーチエルは、自前のハンカチで涙を拭う。

間抜けな話ではある。

兎にも角にも、『今』は幸せな二人だった。

今はと言えば、すべりの良いアーチエルの髪を手で梳きながら、話は冒頭に戻る。

「それで、教頭に護衛を仰せつかったよ」  
嘆息するアシュマ。

「ルーラン陛下の？」

アーチエルが訊き返す。

「ああ。でも大変なのはヨディだろうな」

「どうしてですか？」

「情報収集を一手に任されているよ」

「まあ」

「奴には丁度良い、リハビリになるだろう。教師ボケからのな」

「リハビリ……可哀相なサーナリア様」

アーチエルが指を可愛い唇に持っていく。

「そうだな……さて俺はもう行く」

アシュマは立ち上がった。

「も、もう、行かれてしまわれるのですか？」

アーチエルが慌てる。

「ああ、俺も俄かに、忙しくなったからな」

「せめて最後に『ぎゅっ』として」

「ああ、いいよ」

文字通り、アシュマはアーチエルを、ぎゅっと抱きしめた。

アーチエルもアシュマをぎゅっとした。

体の密着度が増す。

「アシュマさま、暖かい……」

アシュマはゆっくりアーチエルから離れて、アーチエルの目線まで膝を折り、キスをした。

「じゃあ……」

「はい……」

アーチエルは少し不安だった物の、心に何か暖かい物を抱きつつ、自分の部屋へと帰っていった。

アシユマは自分の部屋に帰ってきた。

ヨディがいた。

ヨディはひとつしか無い机を占領して、何やらブツブツ言っていた。

「どうだい、ヨディ？ アベニ爺は元気だったかい？」

アシユマが、アベニの事を訊いた。

「ああ」

ヨディは気のない返事を返した。

「警備プランが、上手く立てられないのか？」

「ええ、チョツと」

「俺でよかつたら、相談に乗るぞ」

「よかつたー。アシユマ君がそう言ってくれて」

「なんだ、何かあったのか？」

「そーなんですよ、アシユマ君。アベニに探らせていたら、とんでもない情報に引ッ掛つて……、なんとドートネーゼ直属部隊、ネルファベーゼ、黒尽くめの男達ブラック・メンがルーラン陛下を襲うらしい情報を得ましてね……」

ヨディが穏やかならぬ事を言った。

「何だつて？」

アシユマが訊き返す。

「これを我々だけで防ぐのには、チョツと無理があるんですよえ

……」

「人数は？」

「五十人程」

「なら、オルバニアンと、アルミナに頼むとするか」

「引き受けてくれますかねえ？」

「あいつらなら大丈夫だろ。それにオルバニアンは、妹を守らなきゃならん」



「そつだ。そうですよねえ！」

ヨディは再び、プランを練り直した。

「ヨディ、俺は先に寝るぞ？」

アシュマは、そう言った。

「あ、ええ、お休みなさい」

「あまり無理して、根詰めるなよ」

「……で、俺達の出番、と言う訳だ」

オルバニアンが、納得した調子で頷いた。

「具体的には、陛下の直ぐ近くに陣取って、お守りすればいいのね？  
アルミナが質問した。

「ええ、そうです。その通りです」

ヨディが答えた。

「俺は、先程の話どおり、遊撃部隊として動けば、いいんだな？」  
アシュマが確認を取った。

「ええ、それもそのままです」

ヨディがその通りに返した。

「エファールと僕はセカンドカー、サードカーとして、バックアップに入ります」

ヨディがプランを聞かせていた。

「あ、あの、わたくしは、どうしたら宜しいんでしょう？」

アーチエルが、不安な面持ちで聞いてきた。

「あ、あのですね……今回のプランには……その……」

ヨディは、最後の方は言葉を濁していた。

「……そうですか、分かりました……」

アーチエルは寂しそうに俯いた。

「アーチエル、おいで」

アシュマはアーチエルに優しく呼びかけた。

「はい」

アーチエルはついて行く。

「いいかい、アーチエル。人には向き、不向きと言う物があつて、今回はたまたま不向きな仕事が回ってきただけなんだよ？ 分かるね？」

「分かりますけど、納得いきません。まるで足手まといの様な扱いです！」

「誰もそんな事言つて無いだろう？」

「言つて無くとも分かります！」

「そんな事は思つてない。事実、俺は、アーチエルに命を救われたじゃないか」

「あの時と今回は別です！」

「別な物か。あの時、俺はどれ程救われたか」

「それは論のすり替えです！」

「論のすり替え等するものか」

アーチエルは何かを言おうとしたが、止めて俯いてしまった。

アシユマはアーチエルが泣いてしまったのかと思い、ゆっくりアーチエルの方へ近付いていった。

すると、アーチエルは、

「来るな！ ええい控えい！ 下がらっしゃいー！」

そう言つた。

そして……

「アーゲーゲー、ゲーアーゲー、ゲーゲーアー……………」

呪文を唱え始めた。

「！ アシユマ気をつけて！ 禁呪よ」

エファールが言つた。

「分かつた！」

『汝清らかなる声音持つ乙女よ。

我と血の盟約を結ばん。

幾星霜の刻超えて。

今、汝の声音貰い受ける。

サイレント!!」

なんと、アシュマが呪文を言い切った。

それに対し、アーチエルは……

『我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ……』

ここで、アシュマの魔法が発動し、アーチエルは言葉を失って魔法は発動しなかった。

魔法『サイレント』は、相手の喉の神経を麻痺させて、発生させなくする魔法だ。

言葉が発せなくなる。

と、言う事は言語魔方阵が構築できない。

故に、魔法を発動する事が、出来なくなるのである。

アーチエルはアシュマに近付き、黙って胸をどんと叩いて、大泣きしていた。

アシュマが、

「コーレルアハープだ、噛み締めるといい。声が出せるようになる」それを手渡した。

アーチエルはその葉をゆっくりと噛み締め、アシュマに抱きついて泣いていた。

「どうだろう？ アーチエルをどこかに配置しては、もらえないだろうか？」

「それは構わないけど、厳重注意、一ね。私の前で禁呪を二度も使ったから。正確言つと一、七五くらいだけど、禁呪は禁呪。厳しく行かないと」

厳しくエファールは言った。

「その前に、やらなければならぬ事が、あるだろう？」

「なあにアシユマ？」

エファールが訊く。

「スペル・ファントムチェック」

「私、スペル・ファントムにとり憑かれているの？」

アーチエルが不安げに訊く。

ハーブが効いたのか、アーチエルは言葉を取り戻していた。

「大丈夫。アーチエル。何も心配はいらない」

「でも……スペル・ファントムに効く呪文は、存在しないのよ？」

エファールが、不安げに言う。

「鬼虎がある。鬼虎はこの世の物ならぬ物をも、斬るそうだ」

「スペル・ファントムだのコーレルアハーブだの良く勉強したわね。貴方達知識だけなら、わたしよりあるわ」

エファールがアシユマ達をほめた。

だがアシユマは、

「俺の知識の幅は狭い」

そう言った。

「そのスペル・ファントムってのは一体なんでい？」

オルバニアンが訊いた。

エファールは、

「時たまあるのよ、呪文書の呪文に、呪いのトラップが潜んでいる事が。無意識に読むだけで、そのトラップに掛かってしまうのよ」  
そう言った。

スペルファントム。

一種の霊魂、悪霊の様な物である。

文字通り文字に潜ませて、読んだ者を無意識にとり憑かせる。

高度な魔法トラップの一つといえた。

とり憑かれた者は、鬱症状、情緒不安定、焦燥感、注意力散漫等の、精神的症状に見舞われる事がある。

「どうやって、そのトラップに引っ掛っているって、判断するんだよ？」

「ね、アシュマ、私もそれ知りたい」

「勘だ」

アシュマは言った。

「さあ、アーチエル。下へ降りよう」

「うん」

「あたしは、除霊室を借りる許可を、取ってくるわ」

エファールはその旨をアシュマに伝えた。

「俺達やどうすりゃ良い？」

「男連中はアーチエルも含めたプランで再検討を始めて」

エファールがそう言って、その場を後にした。

アシュマとアーチエルは、除霊室の前で、エファールを待っていた。  
た。

アーチエルはさつきから、頭がボーっとしたままだった。

アーチエルは、

「アシュマさま、私……」

そう言ったが、又、ボーっとしてしまった。

アシュマは、

（これが、アーチエルの戦場での奇異な行動や、気鬱の病の元だったか）

それに思い至り、

（なんと迂闊な）

と、自分を責めた。

特に戦場での行動は、スペル・ファントムが、原因かもしれないかったのだ。

エファールが帰ってきて、

「アシュマ先生。お待たせ。使用許可を貰ってきたわ。ただし……」  
言ったが後には、

「ケリー教頭！」

アシュマが言った。

「貴方達がどうやってスペル・ファントムを除霊するのか、見てみたいわ。今後の参考の為に。許可したのはその為です。で、除霊するのは、勿論エファール先生よね？」

ケリー教頭は念を押した。

「い、いえ、私ではなくてアシュマ先生が……」

エファールが困り顔で言った。

「まあ、それで大丈夫なの？」

ミス・ケリーに更に念を押され、

「た、多分……」

そうとしか言えなかった。

除霊室に入った。

丁度録音スタジオの様な構造で、ガラスに区切られて除霊する側と、それを見守る側と言う風になっており、除霊する側にはベッドが備え付けられていた。

アシュマは自分の両腕にアーチエルを抱き抱え、ベッドに寝かすと、

「大丈夫だから。信用して。楽にして」

アーチエルの頬にキスをした。

「まあ、なんてふしだらな！ 私の前で接吻等！」

幾ら性に開放的な学園とはいえ、教頭の前でキスは不味い様である。

そんな事、知っていようがいまいが、関係ないね。

アシュマだったらこう答えたろう。

だが、硝子の向こうの事等、それこそ知っちゃいないのである。アシュマは呪文を唱え始めた。

『出でよ、悪霊。この悪しき者よ。』

出でゆくべし。愛しい者から、我が子から。

出でゆくべし。敬いし者から、我が父母らから。

時を刻んで汝を癒さん。

スペル・ファントム、チェック」

するとアーチエルの体が、ぼうつと光り始め、それと共に黒い影が、アーチエルの上に覆い被さった。

「まあ、出ましたわね。で、これから、どんな除霊をするのでしょうか？ 確かスペル・ファントムを完全に取り除ける呪文は無い筈。さて？ どうします？ アトー先生？」

アシュマは鬼虎を取り出し、ゆっくりと抜いた。

そして、呪文を唱えながら、ゆっくり鬼虎を悪霊に十字に振るっていた

『聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール』

四つに刻まれた悪霊は苦しげにもがいており元に戻るうにも、娘の体には聖なる光が宿り、戻れない

アシュマはとどめを刺すべく、アーチエルの足元から鬼虎を構え、

「咄」

と、呟いた。

アシュマは鬼虎を前に寝かせた、霞の構えで、

「はっ！！」

と、気合を發し、鬼虎を前へ突き出し、気弾を發射した。

四分割された幽体は気弾によって、潰され、四散し、壁にエクトプラズム状の物が飛び散った。

ケリー教頭は、

「はあ」

だの、

「ほー」

だのと感心していた。

「アーチエル、どう……」

アシュマがアーチエルを確認しようと見ると、アーチエルは静かに寝息を立てて寝ていた。

「ケリー教頭」

アシュマが語りかける。

「な？　なんでしょう？」

「アップルトン王女がこの状態なので、このまま彼女を部屋まで送ってきます」

「あ？　え？　ええ。分かりました許可します」

「駄目よ。貴方は教師とはいえ、若い男子なのよ？　これがどういう意味を持っているか、分かるわよね？」

エファールが割って入った。

「おお、そうでした。危うく許可を出す所でした。アップルトン王女は、エファール先生にお願いします」

ケリー教頭はハンカチで顔を拭う。

「懸命です、教頭」

「では貴方をお願いします。エファール先生」

ケリー教頭が言った。

「はい。あら、この娘見た目よりも軽いわ」

アーチエルを背負った、エファールが言い、

「では行ってきます」

去って行った。

「さて、先生。私は魔法鑑識課に行きますが、先生はどうなさるのですか？」

ケリー教頭が言ってきた。

アシュマは、

「今日はもう、自室に戻ります」

そう言い残し去ろうとした。

そこへ、教頭が、

「それでしたら、お話があります。職員室までいらっしゃい」

釘を刺した。



エファールがアーチェルを担いで部屋に連れてきた時、皆、意外な顔をした。

「どうしたの？ みんな？」

「こう言う事って、アシュマ先生がするものとばかり思っていました」  
ミカが不思議がっていた。

「おのれ、アシュマ！ こんな所にまで毒牙を忍ばせていたとは、侮りがたし！ 奴こそロリコン魔王だったか！！」

エファールが、握り拳を作りながら怒っていた。

「先生、別にアシュマ先生、ロリコンって訳じゃないです。それより先生、アーちゃん、どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

ミカが心配をする。

「あ？ ええ。大丈夫よ。チョツとした貧血みたいな物。暫くすれば起き上がるわ。それから、今日は無理しない様、気を配ってあげてね」

「はい分かりました」

ミカが請け負った。

女子に優しいエファールは、男子生徒よりも、意外に女子生徒の方に人気があった。

ちなみにヨディは正反对で、やはり男子生徒に人気があり、全国助兵衛同盟なる物を密かに結成したりしている。

「じゃあね。先生はこれで戻るけれど、何かあったら、ここに連絡頂戴」

エファールは、自分の端末の番号をメモして渡し、去ろうとした。  
「先生、本当にアーちゃん大丈夫ですか？」

ミカが訊く。

「大丈夫よ。明日の朝には目を覚ますでしょう」

エファールは優しく、そう言った。

「じゃあね」

エフアールは部屋を後にした。

「有難う御座いました」

後からミカ達の声が聞こえてきた。

一方アシユマは教頭の小言を受けていた。

「幾ら、生徒達の自主性に任せてあるかといって、所構わず何をしても良いと言う訳ではありません！ 生徒の規範となる様、我々教師は切磋琢磨して行かねばならないのです！ それをあなたと言う方は……これ以上、アーチエル様に何かある様だったら、下手をすれば停学、悪くすれば退学と言う形になりかねませんよ？」

そう言う事だった。

別に学校側が性にオープンと言う訳ではなく、ただ、単に個々の状況を本当に把握して無いだけかもしれないかった。

それとも、性にオープンなのは風紀委員の方で、寛大に見てくれて、学校側に報告するといった事を控えてくれているのかもしれないかった。

（それならば、今までやって来た事を、今後も出来る訳だ。まあどちらでも良いが）

そうアシユマは思った。

「……………聴いているのですか？ アシユマ先生」

「途中まで」

アシユマは、はっ、として答えた。

「はあ、疲れました。貴方はこれが無ければ、非常に優秀な教師なんですけれど……アーチエル様も非常に優秀な生徒でいらつしやるのに、こんな不良教師の、どこに惹かれたんだか……もう、いいです。くれぐれも一線を越えない様に。教師として節度ある行動を期待します……と、言っても貴方には無理なんでしょうけれどね……」

「……」  
「教頭、もうこの位で良いでしょう。彼も反省しているみたいだし」

校長が言った。

「校長がそこまで言うのなら……今日はこれまで。行ってよし」「はい」

アシュマは一礼して校長室を後にした。

次の日の放課後、アシュマはいつもの屋上にいた。

アーチエルが、屋上にやって来た。

頭を左から右に巡らしてアシュマを見つけると、

「アシュマさま！」

アシュマの元へとやって来た。

「元気になったか？」

アシュマが優しく訊く。

「はい、もうすっかり」

「そうか、それならいい」

「アシュマさま、御免なさい」

「なにを？」

アシュマはアーチエルの髪を撫でながら訊く。

「アシュマさまに『下がりおろう』なんて、自分で言っていて、いけないって分かってたんですけど、言葉が止まらなくて」

「気にするな。それがスペル・ファントムと、言っものらしいぞ？」

「有難う、アシュマさま」

アーチエルはアシュマの胸に、屈託なく顔を埋めた。

アシュマはそんなアーチエルが愛しくなり、アーチエルの耳たぶにキスをしようとした途端、ひよいとかわされ、

「また、教頭先生に叱られますよ？」

巧みに逃げられた。

アシュマは右手を首の後に持って行き、やられたという表情を作り、アーチエルを見送った。

ルーラン護衛の日がやって来た。  
空港への出迎えにアーチエルと、オルバニアン、そしてアルミナと、若い者三人組でルーランを待った。

到着口からルーランがやって来た。

ルーランは、上下紺色のスーツで、タイは彩度を押さえた濃いブルーだった。

「陛下、遠路はるばるおいで頂き、恐悦至極に存じます」

アーチエルが到着を喜ぶ言葉で出迎えた。

「その様な、堅苦しい挨拶はなしじゃ……兄上！」

ルーラン……サーナリアはオルバニアンに抱きついた。  
スパン！

「いきなりそう来るか、この変態エロエロ兄妹！」

アルミナはサーナリアの頭に、スリッパをお見舞いした。

「いきなり何をする？ この無礼者！！」

サーナリアが怒った。

アルミナを睨む。

「何をするじゃないわよ！ 来るなりいきなり、兄にキスしようとする妹が、どこの世界にいるのよ！」

アルミナも負けずに返す。

「妹が兄に敬愛の情をもって何が悪い？」

サーナリアが睨みながらアルミナに顔を近づける。

「敬愛なら、他にも表現方法つてもんがあるだろ？ それに、オル

バニアン！！ あんたも悪い！！」

アルミナがオルバニアンに向かって声を荒げる。

「お、俺？ 何で？」

オルバニアンが意外な顔をして驚いた。

「隙が多すぎ！！」

「ぷっ……くくく……あはっ！ あははははっ！！」

ここでアーチエルが笑い出した。

「な、なんじゃ？」

サーナリアが驚いた。

アーチェルの顔を見つめる。

「いえ、済みません。アルミナさんがいった言葉、前にわたくしがアシュマさまにも言った事があったので、つい、思い出して……アシュマさまが直ぐ他の女性に、唇を奪われるのに腹を立てたわたくしが、いった言葉で……って、皆さんどうしました？」

アルミナとオルバニアンが真っ赤になってもじもじしていた。

「ま……、まさかお二人は、そういった御関係で！？」

アーチェルは何か思いつくところがあった。

「い、いや違う、まだ！」

オルバニアンが狼狽え、

「そう、ま、まだだ！」

アルミナも乗せられてしまい、

「『まだ』……」

と、サーナリアが愕然とした。

「ど、どうなされました？ お顔の色が優れない様ですが？」

サーナリアの顔色が良くない。

アーチェルがサーナリアに具合を尋ねた。

「わらわは……帰る」

サーナリアがぼつりと零す。

かなり元気が無い。

「何を仰います。公人たる者、みだりに私欲の為に、予定を変えてはなりません。それは皆が陛下の御到着を待っているからに御座います」

アーチェルがサーナリアを叱った。

「ならば問おう！ 兄上がアシュマと仮定して、そこなアルミナ……と、申したな……が、これから二人は愛し合う関係だと言われたら、どうする！？」

打って変わって泣きそうな表情でアーチェルに食って掛かる。

「お、おいおい、何を言い出すんだよ」

オルバニアンはサーナリアを押さえようとする。

「そ、そうよ」

アルミナも追隨する。

「いまは、アーチエル様に訊いておるのじゃ。兄上もそんな女も、口を挟まないで頂きたい」

「アシユマさまなら大丈夫です」

アーチエルが静かに微笑む。

「どうしてそうだと言いつける!?」

問い詰めるサーナリア。

「多少のハプニングがあるにしても、信じております故」

「おおっ!! 成程! 信じて待つのだな? 兄上、サーナリアは信じて待つておりますゆえ、必ず戻つて来て下さいまし。……では行こうか皆の者」

サーナリアは態度をころりと変えて先頭を切つて歩き出す。

「た、立ち直りが早いというか、何というか……まったく、我が妹ながら、疲れる奴と言うか……」

オルバニアンが頭を押さえる。

アルミナ、オルバニアン二人して既に疲労困憊ひろつじんぱいの呈を見せていた。一行は、待たせてあったリムジンに乗り込んだ。

運転手はアベニだ。

車は静かに滑り出し、スムーズに走り出した。

途中から高速道路に乗り、スムーズ度は更にアップした。

高速道路が郊外へと延び始め、車はそれに乗った。

「そろそろ来るな」

オルバニアンが言う側で、

「そうね」

と、アルミナも気を引き締めた。

「じゃあ、そろそろ防御体制を敷きましょうか」

各々十分程で戦闘服へ着替えると、アーチエルが、

『聖なる女神タテラム。』

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ。

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ・ファイヴ』

シールドを五重にかけた。

シールド。

別命アンチスペル。

物理、魔法双方の攻撃に対する、防御魔法だ。

ただし、シールドは術者の能力に強度を左右される。

攻撃魔法をかけてきた者が、シールドの魔法を発動させた者よりも、魔力が上ならばダメージを与えられるが、そうでない場合はダメージを与えられない。

しかし、防御に優れた魔法である事は間違いない。

敵がやって来た。

車が七、八台と、トレーラーが二台程。

「敵さんやって来たぜ」

「では悪いですが、先制攻撃させてもらいます。まだまだ未熟ですので手加減が出来ません。その分どなたかが命を奪われるかもしれませんが、御容赦を」

アーチエルが、誰に言うでもなく言った。

「姫！ それが普通なんですよ。誰だって好き好んで、人なんか殺しませんよ」

オルバニアンが言葉を返す。

「有難う御座います」

アーチエルが謝意を表した。

これがアーチエルにとっての初陣になった。

アーチエルはリムジンのサンルーフをあげ、

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。』

汝の顔に笑みは無し。

未来永劫繰り返される。

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！！』

と、呪文を唱えた。

呪文を詠唱すると空が暗雲を作り、雷を発生させ、車を次々と直撃して行った。

サンダーストライクはサンダーボルトのおおよそ十数倍の威力がある。

中の人間が大丈夫でも車が持たない。

事実、車の数台はコントロールを失って炎上していた。

すぐさま中から人がでて、車を消化したから人は死んではないのだろう。

「あと一息！」

アーチエルが叫んで、

『風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天駆ける。

汝に問おうその心。

風切る翼、剣とならん。

サイクロンスラッシャー！！』

と、呪文の詠唱をした。

サイクロンスラッシャーも、ウィンドスラッシャーの高位呪文である。

威力はウィンドスラッシャーの比ではない。

追っ手の車はズタズタに斬り裂かれた。

これで、トレーラーを除き全車両が使い物にならなくなった。どうやらトレーラーは対魔法呪文アンチスペルをかけている様だ。

先程も言った通り、アンチスペルとはシールドの魔法の事である。先程、アーチエルは自身の車にシールドを五枚掛けしていた。

トレーラーもシールドを何枚か掛けていたかもしれない。

アーチエル程の魔力の持ち主である。



シールドを掛けていても、無事な筈がない。

それが無事なのは、シールドを何枚か厚く掛けていたのかもしれない。

ただ、傍目には、それが分からない。

アーチェルの魔法が効かないと思ったかもしれない。

「なら、こいつだな」

オルバニアンが新調の対魔導機兵用ライフルでタイヤを狙って撃った。

がシールドの魔法で弾き返されてしまった。

「ありゃ？」

相当分厚いシールドを組んであるのだろう。

魔導機兵がトレーラーに各三台、計六台が収納されており、それが、今、発進しつつあった。

「おい！ 魔導機兵ツツーのは卑怯なんじゃねーのか？」

オルバニアンが声音も高く言う。

「そんな事言っていないで、攻撃しますよ！」

アーチェルが力む。

「姫さん今日やる気満々だなあ」

オルバニアンがアーチェルを見る。

「そんな冗談言っている場合ですか？ 攻撃しますよ？」

アーチェルが杖を掲げる。

『聖なる炎よ、火の粉らよ。』

集いて炎、我が壁よ。

汝の怒りで、我守れ。

包み滅ぼせ、汝の衣

ファイヤーウォール！！』

アーチェルが、ファイヤーウォールを掛けた。

「これで、敵の動きが牽制されれば良いんですけど……………」

その懸念は現実の物となり、対魔法呪文アンチスベルを施された魔導機兵には効き目が無かった。

「こうなったら、グラウンドクラッシュで……」

「おいおい、ヨディ達が追いついて無い今、それをやるのは危険すぎるぜ。バックアップカーも確保しておかないと……」

「そ、そうですね……魔法攻撃で物理的な攻撃といえればそれかな……って……」

『……魔導機兵は任せろ』

無線越しに聞こえてきたのはアシュマの声だった。

魔導機兵よりも後方からやって来たのは、重たいエンジン音を響かせて大型バイクに跨ったアシュマだった。

スピードを上げる。

『直ぐに行く。それに車の方が魔導機兵より速い筈だ。落ち着いて対処しろ』

「と言う訳だ。アベニ爺たのむぜ」

オルバニアンがアベニに指示する。

「畏まって候」

リムジンが加速し、魔導機兵を引き離し始めた。

変わって後ろからやって来たのは、大型バイクに乗ったアシュマだった。

ドドドドド！

低いエンジン音を響かせながら、アシュマは鬼虎を引き抜いた。

後の方にいた魔導機兵が反転して、マシンガンを打ってきた。

しかし、マシンガンの弾丸は、アシュマの念導境界面で光となり、鬼虎の本身に雷光として吸収されていた。

アシュマはその魔導機兵とすれ違いざまに、魔導機兵の膝関節を斬り裂いた。

次の魔導機兵はロッドで攻撃してきた。

別に念導境界面で、弾いてくれるので構わなかったが、わざわざ鬼虎でそのロッドを斬り裂き戦意を萎えさせた後、鬼虎でその膝関節斬った。

三機目、四機目、も同様に斬り伏せ五機目、六機目を斬り伏せ様

とした時に、魔導機兵が停止し、パイロットが、降りてきた。

アシュマもバイクを止めて降りる。

投降するのかもしれない。

「御高名なアシュマ・アトール殿とお見受けいたします。我ら兄弟、是非、アシュマ殿に一手御教示頂きたくお願い申し奉る」

そう言った。

「またの機会にしてくれ。俺はそれでも忙しい」

アシュマが応える。

「是非に。攻撃部隊は我らで最後。その願いを是非に」

「……よからう。『御教示』と言える程、大した物では無いがな」

「ありがたき幸せ」

言い終わると、二人はアシュマを中心に回り始めた。

そして、二人とも刀をすらりと抜いて左の脇構えに構えた。

アシュマは右手に鬼虎、左手には鞘を持った。

左手の鞘は基本的に鬼虎と同じ金属で作られていると思われ、  
『今』現在の望む重さになってくれた。

今回は何か予感がして鞘を手を持った訳である。

（双子か…）

アシュマがそう思った時、双子は同時に左の脇構えから相打ち、  
同士討ち覚悟で斬って来た。

（いかん！ やられる！！）

そう思った瞬間アシュマは背に鞘を、前に鬼虎を持ってきて、こ  
れを防いだ。

そして次の瞬間には、二人の間合いの外へ逃れていた。

二人は再びアシュマを中心に回り始めた。

（相打ち、同士討ち覚悟とはやっかいな。息もぴたりと合っている。  
同時に行動させてはいかん）

アシュマは自分から、横に回った敵に斬りつけた。

相手は驚いたが、相打ち覚悟で突いて来た。

その斬り付けてきた刃を鬼虎で弾きながら鞘で相手の右の側頭部

を叩き、ぐしゃりと潰した。

続いて兄弟の片割れが、拝みうちに斬り込んできた。それを鬼虎で受け、鞘でわき腹を強かに打ち付けた。

そして肋骨を折られ怯んだ所をアシユマは頭部を兜割りに斬った。

「ふーッ」

アシユマは大きく息を吐いて、鬼虎に血振りをくれて、鞘に収めた。

後の者は逃げ去った。

アーチエルが側までやって来て、アシユマにぺとりと抱きついた。アシユマは、アーチエルの頭を撫でて、

「良く頑張ったな。今日の功労賞はアーチエルだ」

「でも皆さんに今まで如何に大変な要求をしていたかが、分かりました」

「人は結局、出来る事しか出来ん。ただし、歯止めは必要だ。これから俺達の歯止めであつてくれ」

「お主は相変わらず強いな……感服したぞ」

ルーランが言ってきた。

「感服する程の物じゃ無い。ルーラン……いや、サーナリアかな？」

「仲間内の場合にはどちらでも構わん……お主、又、余を呼び捨てにしおったな!？」

「さあ、行こうか、アーチエル」

アシユマはアーチエルの頭を撫でた。

「はい」

アーチエルはそのままヘルメットを被りアシユマのバイクに乗った。

「ああー。こちらオルバニアン、バックアップの車両、どうぞ?」

「はいはい、こちらバックアップその一、ヨディです」

「敵は、全部撃退。こちらはこのままルーラン陛下を護衛、スコラへお連れする」

『分かったよーん。気を付けてだよーん』

『ヨディ、やめてよ、その変な喋り方。恥かしいから……』

エファールは本当に恥かしそうだ。

「ヨディ、敵に<sup>アンチスベル</sup>対魔法呪文を使う者がいるという事は、相当な高位のウィザードかウィッチがいるな」

『その様ですね。ま、それはおいおいと言う事で……』

「分かった。じゃ、こちらは発車する」

そして兎にも角にも、『ルーラン』陛下を無事に到着させる事が出来た。

## 第六節 ブースト

スコラの昼時。

ルーラン、ノリトレア元国王は、アーチエルの侍女アンと、教頭ミス・ケリー・サトウを引き連れて、校内を見て回っていた。

「これが学び舎と言う物なのだな」

廊下を歩きながら後ろを振り向きミス・ケリー・サトウに声をかける。

「はい、陛下」

ミス・ケリー・サトウが畏まる。

「ここで、余も学ぶのじゃな？」

「はい、陛下」

「少し待て。あそこにおるのは、オルバニアン・マグマイヤーじゃな？」

「はい。然様で」

ルーランは窓越しにオルバニアンを目ざとく見つけた。

見つけたは良いが近くに邪魔な女がある。

「あ奴は、アルミナ・ラ・シアじゃな？」

「はい」

「チョツと行つて来る」

「へ、陛下？」

「陛下、お履物を」

ケリー教頭と、アンが慌てて、ルーランの履物をかえた。

「そち達はここで待て！」

「はあ？」

ケリーは頓狂な声を出して、ルーラン見た。

「直ぐにもどる」

ルーランは校庭の隅の方へ、小走りに向かった。

今は昼休みだ。

「そこで、ニコの奴はなんといったと思う？　俺も混ぜろ」だぜ

「あはは、ニコの奴は鼻っ柱は強いけど実力が伴わないからね……」

「はははは……は？」

そこには憤怒の表情で、仁王立ちするルーラン……いや、サーナリアがそこにいた。

「兄上ええええ！！」

「兄上は、何故いつも、この男女と一緒にいるのじゃ？」

「何だとう!？」  
男女だと?  
言ってくれるじゃあねえか?  
テメ

「なにに？ この無礼者！ なおれ！ 手打ちにしてくれん！ 太

「おっ、おのれえ……」

「へっへっへっ——、誰もいねえじゃねえか！ 本物の太刀つて

アルミナが手を背に持って行き、例の大剣を手にしようとした。

校則で『生徒ノ校内武器所持ヲ禁ズ』の項目により、大剣を持つ

ていなかった事を思い出した。

「ほっほっほー。どうしたのじゃ？ ほれほれ」

逆にサーナリアに揶揄される形となった。

「こうなりや素手だ！！ 女なら素手で来い！！」

アルミナはサーナリアにからかわれ切れた。

「やーん、兄上、サーナリア、こわーい」

そう言ってしなを作り親指をかねて小首を傾げ上目遣いにオルバニアンを見た。

「こんの〜〜！！ 変態兄妹があ」

「まッ、待てアルミナ！！」

オルバニアンが言った所で、

「どうしたのです？ ミス・アルミナ」

後から声がかかり、振り向くと、ケリー教頭がこちらを見ていた。

「一体何事ですか？ ミス・アルミナ？」

ケリーが訊いた。

「い、いえ、特に、何事も！」

アルミナは悔しさに拳を固めている。

「本当ですか？ 陛下、御無事ですか？」

今度はケリーがサーナリア……ルーランに訊いていた。

「大丈夫じゃ、大事ない。気にするな」

「それで御座いますか？ それではそろそろお食事にしませんか」

「そうじゃな。参るか。オルバニアン、共をせい」

「え、行かないとまずいつすか！？」

オルバニアンが嫌がった。

露骨に嫌がるつもりだったが、それを見ると、サーナリアが泣きそうな気がした。

事実に関サーナリアは少し泣きそうな顔をした。

「これ、ミスター・オルバニアン！ 直々のご指名なるぞ？」

ミス・ケリーが叱り付ける。

反対にオルバニアンがアルミナを見てみると、少し眼を潤ませて



こちらを見ていた。

（どっちにすりゃあ良いんだよ？ あちらを立てればこちらが立たず。俺にそんな……そんな難しい事訊くない！）

アルバにアンはすつくと立って、

「……………だ……………っ！！俺にゃあ、わかんね……………」

オルバニアンは校庭の真ん中へと走り出した。

「お、オルバニアン。どこへ行くのだ！？」

ルーランが困惑した。

「オ、オルバニアン！？」

アルミナも驚いた。

「だ……………ッ」

オルバニアンは校庭の真ん中を走っていく。

さて。

ルーランにとって初めての授業が始まった。

ルーランは、アーチエルと同じクラスになった。

ルーランは真面目に授業を受け、分からない所はアーチエルに訊いた。

一度理解してみると、意外に面白く、ルーランの知識欲に火がついた。

授業の後も、アーチエルに質問をした。

そして素朴な疑問を、アーチエルにぶつけてみた。

「普通の魔導石の魔法にはどんな物がある？」

「それは……調べておきます……」

アーチエルは、そう言った事にまで、手を染め始めた。

それからと言うものの、ルーランはアーチエルにべったりで、魔導書片手に魔法談義を花咲かせるのである。

最近、アーチエルは、めっきりアシユマと逢っている時間が、少

なくなつた。

寂しいと思う事が増えた。

そんな時立つた噂が『ロイヤルカップル』

別に二人を揶揄して言っているのではなく、大方は二人のそんな様子を歓迎して立つた噂であつた。

確かに、ルーランの方が（女性にしては）背が高く線の細い美少年（風）だったし、アーチエルは可憐で清楚で儂げな美少女だったので、この手の事を好む女子連中から火がついた。

だが憤慨したのは当人達でアーチエルはアシュマを、ルーランはオルバニアンを好いているので、この噂は甚だ迷惑であつた。

この事を切っ掛けに、二人は暫く二人きりになるのを避けよう。そう言う事になって、事実そうした。

一時はロイヤルカップル破局か！？

とも報じられたが、すれ違つたり、ばつたり出会つた時等、以前と同じ接し方だったので、破局説の方が直ぐに立ち消えとなり、二人の関係は安定期に入つたとの大方の見方となつた。

が、アーチエルは、アシュマと二人きりになる時間が以前に戻つたので、喜ばしい限りだつた。

「……アシュマさま妬いちゃつた？」

前にアーチエル、後にアシュマが屋上の床石にぺつたりと座り、アーチエルがアシュマにもたれかかりながらそう訊いた。

アシュマは、

「ああ、妬いた」

そう言つて、アーチエルを後から抱え込んで、うなじにキスをした。

しかし当の本人は、少しも妬いていないが、そう言ってくれる様、アーチエルが望んでいる様に思えたので、そう言つてみた。

「あ……」

小さく喘いで、

「アシュマさまのえっち」

いつもの台詞を吐いた。

「何か、こうしてアシュマさまと二人っきりになるの、久しぶりで  
す」

「そうだな」

「ねえ、アシュマさま……」

「なんだい、アーチエル」

「普通の魔導石で出来る魔法って、何かあるのかしら？」

「アーチエルはもう使っているじゃないか」

「何を？」

「天然の『シールド』、念導境界面を」

「まあ、あれも魔法なんですか？ 魔方阵も言語魔方阵も使わずに  
？」

「魔導石の結晶構造が、魔方阵の代わりをしているのさ。後は起動  
キーに念を使いそれを持続させればいいのさ」

「まあ、アシュマさまって本当に凄い。みんなアシュマさまの頭脳  
を、過小評価していますわ」

アーチエルはアシュマの方を仰ぎ見ていった。

（どういう意味だ？）

そう思いつつ、

「ありがとう」

アシュマはアーチエルのおでこに、キスをした。

このキスは、アーチエルにとって、嬉しいキスだった。

「あはっ。他には？」

「他にはアーチエルが使おうとしていた禁呪……こら、そういえば  
エファ先生が怒っていたぞ？」

アーチエルの頭を軽く小突いてやる。

「いたっ……えへっ」

「アーチエルが使おうとしていた禁呪ウィング、ブースト、普通の  
呪文では、フォゲット、スペル・ファントムチェック……後は調査  
中だ」

「え？ ウィングとスペル・ファントムチェックがそうなの？ 暗黒系の魔法かと思ってた……」

「言うと思った。元来は、無属性の魔法なんだ。スペル・ファントムチェックの魔法が難しいって良く言われるだろう？ あれは無属性の魔法を、暗黒系の石を使って発動させようとしているからのさ」「凄い凄い！！ フォゲットは想像できるとして、後……ブースト、これはどんな魔法なの？」

「禁呪なので教えられません」

「ずーるーいー」

「ずるくないよ？」

「ずーるーいー」

そこでアシュマは、唇でアーチエルの唇を、塞いでしまった。キスを解いた時、

「やっぱりずるい……」

アーチエルに言われたが、アシュマは構わず、またキスをした。アーチエルは何も言わず、それを受け止めた。

### 『中間報告』

今の所、反国家的、反エバス財閥的な行動は示されておらず、また同教育を施された形跡は見受けられず。

隠されてマインドコントロールを施された形跡もなし。

ただし後ろ盾にはドートネーゼがついている事は明白也。

現状では静観しているも不気味な事に変わりなし。

相手が静観しているなら、こちらも静観するしか途はなし。以上。

『中間報告』を受けてオロは、

「随分と呑気な奴だ」

と、言い、

「これより重役会議を始める。会議の間に重役達を集めよ。議題は

スコラ接收に関してである」

オロはインターホンに向かって声を上げていた。

「よし、中間報告、終わり！　さて寝るかな」

オロへの中間報告も終わって、さあ寝ようという時にそれは現れた。

「ガオオオオオオンン！！」

雄叫びと、地をも揺るがさんばかりの、地響きを鳴らして……。  
アシュマとヨディは窓から外を見た。

すると、校庭のど真ん中に、ティアマットが出現していた。

アシュマとヨディのふたりは同時に違う行動を取った。

ヨディは放送室に赴き、

「全校生徒に告ぐ！　校庭にティアマットが出現！　魔法学科の生徒はクラス毎に屋上にて別命あるまで待機。召喚士学科の生徒もクラス毎に四階の廊下にて待機、魔法剣士学科の生徒はクラス毎に一階にて待機。各クラス委員は至急放送室に来る事」

そう命じた。

そしてアシュマは、校庭へ出て鬼虎を抜き、ティアマットに対峙した。

「クラス委員」

リイナがサクラコに呼びかける。

「クラス委員！　う~~~~んいい響きよお、何かしら？　言って御覧なさい。宜しくッてよ！」

「サクラコさん、真面目に聴い下さい。ミカさんがね、熱出しちゃったみたいなの。私、部屋まで送ってくるから」

「ああ、リイナね。一応二人とも出席扱いにしておくから。……珍しいわねリイナがあんな喋るなんて」

放送室の前でクラス委員を集めヨディは言った。

「召喚士学科は力を一つに集め、巨大な何かを召喚して、時間稼ぎをして下さい」

「巨大な何かって何ですか？」

「いや、それは……」

ヨディも言い淀んだ。

「竜神バハムート!!」

皆は声のする方向を見た。

「アーチエル様！」

そう、皆が見た前には、アーチエル・ナヴィア・アップルトン王女、その人がいた。

「私が依り代になって、バハムートを召喚します」

アーチエルはそう言い切った。

「召喚できるんですか？ それに貴方は一般魔法学科の生徒ですしヨディが困惑する。」

「やった事はありません、しかし出来ます。やらせて下さい。お願いします」

「おい、彼女が出来るってんだ。やらせてやっても良いんじゃないか？」

生徒の一人が言った。

「そうだな、やらせてみよう!!」

他の生徒も同調した。

「よし、召喚士学科全員とアーチエル様とで、バハムートを召喚して下さい」

ヨディが言った。

「次！ 一般魔法学科。これはチョツとややこしいですよ。火の属性魔法が得意な者同士、風の属性魔法が得意な者同士等で編成し直して下さい。これはお互いが同じ属性である事で、その力を増幅さ

せる事を狙っています。編成が済んだ所から、速やかに攻撃を開始して下さい。急いで！」

「エファ！」

ヨデイが叫んだ。

「ここにいるわ」

「魔法剣士学科の生徒達を見て下さい。アシユマ君は、どっかに飛び出しちゃいましたから」

「分かったわ」

エファールは脱兎の如く駆け出した。

「これは一体何の騒ぎですか!？」

そこへ、ケリー教頭がやって来て、言った。

「外からティアマットがやって来て、大変なんですよ」

ヨデイが言った。

「なんですって？」

ケリー教頭が、腰を抜かさんばかりに驚いた。

「こんな時に、校長は一体どこに……？」

アシユマが鬼虎の鯉口を切り、静かに気合を入れると、ティアマットに挑む気配を見せた。

「おや、暗黒竜にまで挑もうたあ、豪儀だねえ」

声が聞こえる。

聞き覚えのある声だ。

「『蜘蛛』かッ!！」

アシユマは掃き捨てた!

「おや? あたしの事を、覚えていてくれて、嬉しいよ」

蜘蛛は大振りのククリを構え、アシユマに突っ込んだ。

アシユマは鬼虎と鞘を抜き、迎え撃った。

蜘蛛とアシユマが切り結び始めた頃、ティアマツトが雄叫びを上げ前進を始めた。

アーチエルはティアマツトを前にして、呪文の詠唱を始めた。

『汝黄金の瞳を持つ者よ。

汝黄金の翼を持つ者よ。

罪びとどもが汝を仰がん。

今こそ正義を見せるべし！

出でよ竜神、

バハムート！』

呪文の詠唱の一周目が終わった。

召喚魔法のつらい所は、呪文の詠唱が済んだだけでは、終わらない事にある。

バハムートならバハムートを現世うつしよに置き止める為には、その分だけ、詠唱を繰り返さなければならない。

その間、召喚者は被召喚者と感覚をシンクロさせる。

余談として、入学試験でレッドドラゴンを召喚したスチナ・アガネは、レッドドラゴンをアシユマに倒された時、さぞや苦痛だったろう。

勿論その事を後で知ったアシユマは、詫びを入れに行き、逆に彼女に気に入られてしまうのだが……。

さて、いまはアーチエルが、バハムートとシンクロしていた。アーチエル本体は半ばトランス状態となった。

ティアマツトが前進を始めた。

バハムートも地響きを立てて前進し、校庭の真ん中で、がっぷり四つに組んだ。

ティアマツトがその巨大な腕で、バハムートの頭を殴りつけた。

アーチエルの頭に、重い衝撃が加わる。

アーチエルが、衝撃を振り払おうと、頭を振る。

するとバハムートも、同じ様に頭を振った。

バハムートは、口を大きく開き、灼熱の炎を吐いた。



それは見事に、ティアマットの顔面を直撃した。

『いまだ！ 一般魔法学科の生徒！ 攻撃開始！！』  
ヨディの号令が掛かる。

屋上に展開した、魔法学科部隊の攻撃が掛かる。

ティアマットが弱って行く。

バハムート……アーチエルは、何げに下を見た。

すると、バハムートとティアマットの直ぐ足元で、『蜘蛛』とアシマが戦っているのが見えた。

このままティアマットが倒れてしまえば、アシマ達を巻き込みかねない。

そこまで行かなくとも、ティアマットかバハムートの足にでも、踏まれたら……。

アーチエルは焦った。

口はつかえない。

召喚の為に、ずっと呪文を、唱え続けなければならないからだ。

口は相変わらず、召喚の呪文を唱え続けている。

サイクルスペルの呪文を掛けているから。

サイクルスペル。

それは、召喚魔法等、延々と呪文を唱えなければならない時に、重宝する魔法だ。

召喚魔法に用いる場合、呪文詠唱前に唱えてやればよい。

さすれば自動的に、永遠と言葉は紡がれる。

では、サイクルスペルの呪文をどうやって、止めればよいか？

それは簡単で、口を閉じればいいのだ。

今は出来ないが……。

アーチエルは取敢えず念じてみた。

通じるかどうかは分からなかったが……。

（アシマさま、聞こえる？ そこは危ないの。私の足元から引いて。お願い）

すると、アーチエルの声は増幅されバハムートの口から、

『アシユマさま、聞こえる？　そこは危ないの。私の足元から引いて。お願い』

音声となって聞こえてきた。

「バハムート……アーチエルか！！」

アシユマは叫んでいた。

しかし、動きたくとも、動けないでいた。

『蜘蛛』の糸に上半身と両上腕を絡め取られていたからである。

しかも『蜘蛛』の意図も、アシユマをティアマツト、若しくはバハムートの下敷きにしようと考えていた。

「アーチエル！！　俺に構うな！！　こいつを……ティアマツトをやれ！！」

アシユマは大音声に叫んでいた。

『そんな、出来ない。出来ないよ！！』

「大丈夫だ！！　俺を信じろ！！」

「はん！　この期に及んでまだ、俺を信じろだなんて台詞、よく言えたもんだね」

『蜘蛛』はアシユマを、あつちに引っ張りこつちに引っ張りして、アシユマを翻弄していた。

だがアシユマは

「そう言わしめる物を、持ってるって事さ。『蜘蛛』よ」

『アシユマさま……』

「アーゲーゲー、ゲアーゲー、ゲーゲーアー……」

アシユマが呪文を唱え始めた。

エファールが、

「まさか、アシユマまで禁呪を……！　だれか！　だれか止めさせて！！」

と、叫んだ。

アシユマは呪文詠唱を続けた。

『我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。』

我はそこに汝はここに。

無にして全、全にして無。

無限の力、その一端を見せん。

我を死の淵から救いたまえ。

纏え漆黒の羽根、

ブースト！！」

「？　なんだ？　聴いた事も無い呪文だぞ？」

『蜘蛛』が言った。

「『ブースト』ですって？　あたしの知らない禁呪だわ！」

エファールは驚いていた。

『『ブースト』ですって！？』

アーチエルも驚いていた。

ゆっくりとした時間が流れていた。

全てがスローモーションの様にみえた。

アシユマは殆ど動かない蜘蛛の脇を通り抜け、背中に回り後から体当たりを囓ます。

跳ね飛ぶ『蜘蛛』今度はそのまま正面から体当たりを……。

アシユマにはとてもスローモーに見えるこの動作も普通に見れば、超高速攻撃の連続だった。

『蜘蛛』ですら追いきれていない超高速運動・超高速攻撃、そして超強力な力による攻撃、それに耐えうる肉体、それらを全て制御しうる感覚器の異常発達。

これが禁呪魔法『ブースト』の正体だったのだ。

最早『蜘蛛』は完全に失神している。

ようやく、糸の戒めも解け『蜘蛛』へのとどめを刺そうかと言う時、ブーストの効果が切れた。

途端に起こる大激痛。

ブーストは術者に対し圧倒的なスピードとパワーを与えてくれるが、その見返りとして要求される物が大きい。

それが超人的な筋力であったり、並々ならぬ骨格の強度であったり、それらをつかさどる感覚器官であったり……。

巨大な負荷が掛かるのだ。

ブーストは。

その様な激痛を今アシユマは与えられていた。

叫んだ。

叫んでも、どうしようもない痛みであるのに、叫んだ。

アシユマの叫び声に、目を覚ましたのか、『蜘蛛』も起き上がった。

だが『蜘蛛』にも、アシユマにとどめを刺す力は残っていないかった。

『蜘蛛』は校庭内にある森の中へと姿を消した。

『魔法剣士学科の諸君はアシユマ先生の救出と、『蜘蛛』女の搜索！ 』  
ただし『蜘蛛』女は大変危険である為、探し出しても包囲する

に止められたし、追って先生方で捕えます。以上！』

ティアマットは首から上が炭化し始めていた。

抵抗もしない。

おそらく召喚主が、シンクロを解除したのだらう。

ティアマットは全体が光の粒に覆われ無に帰す所であった。

アーチエルは、

「御免なさい、後を宜しくお願いします」

その場を去ると、一目散に応急治療室へ向かった。

そこへストレッチャーに乗せられたリイナを見た。

「リイナ？ なんで……？」

アーチエルは、応急治療室へ入室した。

するとすぐさま、

「ここは関係者以外、立ち入り禁止ですよ？ 直ぐに出て行きなさい」

看護婦に言われた。

「あの、アシユマ先生の付き添いで……」

アーチエルは言ってみた。

「誰が誰の付き添いでもここは……」

その看護婦は言いかけたが、どうやら病院の先生に令、耳打ちをされたらしく、途端に、

「右の一番奥の部屋だから」

そう言われた。

急に態度を変えたのが、引っ掛る。

急いで行った。

ドアを開けた。

中に入った。

カーテンを開けた。

そこには、全身紫痣だらけのアシユマが、何の手当ても受けてないまま、点滴だけ刺されて横たわっていた。

「鬼虎は!？」

鬼虎は無事であった。アシユマの反対側の枕元にある。

アーチエルが、

「本当に、無茶ばかりするんだから。治す方の身にもなつてよ」

泣きながら、笑い、笑いながら、怒っていた。

「す……ま、ん」

「済まんじゃありません。じゃあ行きますよ?」

アーチエルは左手に鬼虎を、右手にアシユマの肌を、それぞれ握ったり触れたりした。

鬼虎がバチツと反応する

「きゃっ」

アーチエルは悲鳴を上げた

「うぐっ」

アシユマは触れられているだけでも、相当痛いらしく、思わずうめき声を発していた。

「ごめんなさい。アシユマさま、古代文字の言葉で、何か書かれていますけれど、どうします?」

「なん、て…… かけ……」

「なんて書かれているかですね？」

「ん」

『システム本体の肉体的構造が更新されています。このまま更新しますか？ はい、いいえ』

「…… はい…… だ」

「分かりました」

アーチエルは鬼虎の表面に浮き出た文字に触れた。

途端に起こるアシュマの肉体の修復。

青痣がなくなり体も綺麗になった。

「済まない、アーチエル」

「済まないアーチエル、じゃ、ありません！！ アシュマさまは今後、禁呪禁止です！」

「分かった」

「分かったと言つて、絶対使うんですから、この人は」  
その時壁越しに、くぐもった声が聞こえてきた。

「二六のリイナって子、危ないぞ」

「全身複雑骨折らしいからな。ティアマツトかバハムートにでも潰されたか、全身大鉄球に物凄いスピードで当てられたか」

「どちらにしても、長くないなあじゃあ」

アシュマとアーチエルは、お互いうなずきあった。

「アシュマさま。バックアップに回つて、私が、ザ・ライフをかけるわ」

「だめだ。アーチエルはバハムートを召喚した直後だ。精神力自体が持たん。ザ・ライフは俺がかける」

「わかったわ。メインはアシュマさまにお願いするわ。サブの私は何をすればいい？」

「俺の精神力の残量調整とブレーキ」

「分かりました」

二人は、中に誰もいない事を確かめると、内側から力ギを掛け、

呪文の詠唱に入った。

『出でよ勇者、聖なる剣と。

出でよ勇者、聖なる盾と。

汝の力誰が為に。

尊い命我らが為に。

黄金の途を一人行かん。

汝をして皆を護る。

ザ・ライフ』

アシュマから眩い光が放たれ、リイナを包んだ。

アシュマがへたれ、

「これで限界だ」

と、言った。

「リイナは？」

アシュマが覗くとリイナが目覚めた。

「うわああああああん！！ 先生、怖いよお！！」

途端にリイナは泣き出した。

リイナはアーチエルに抱きついた。

「アシュマさまあ、何したの？ リイナがこんなに怯えちゃって」

アーチエルが睨む。

「いや、俺は何もして無いぞ？」

アシュマが頓狂な顔をする。

「リイナちゃん、もう大丈夫よ。怖いドラゴンもいなくなったわ」

アーチエルがリイナを抱きしめる。

リイナは震えている。

「ホント？」

恐る恐る顔を上げるリイナ。

「ほら、先生も怖く無いだろう？」

リイナの顔を覗くアシュマ。

「う、うん…… せんせい、もうリイナに怖い事しない？」

恐る恐る訊くリイナ。

「ああ、しない」

「せんせい大好き」

その時、ドアの向こうから、どんと叩く音がする。

「空けるしかないか」

「そうですね」

ドアを開ける。

医者が入ってくる。

すると医者連中は、開口一番、

「何をしてるんだ」

と、怒鳴ってきた。

「ここには瀕死の患者がいるんだ！ それをその様に抱き上げて…

…え？」

「大丈夫よねえ」

アーチエルはリイナを抱き上げ頬にキスをした。

リイナは微笑んでいる。

「そ、そんな馬鹿な！ 瀕死の患者が………そういえば、貴方も瀕死だった筈……あ、貴女は一体？」

問われてアーチエルは、

「天使です」

そう言ったが、

「天使だと連れてく方だろ」

アシュマに突っ込みを入れられていた。

その後、見舞いにヨディ、エファール、オルバニアン、アルミナが訪れた。

そして、アシュマとアーチエルはこっぴどくエファールに説教を食らっていた。

今回の功労者は、なんとと言っても卓越した人事配置と、指揮能力を遺憾なく発揮した、ヨディ・ヨフルだろう。



人にも建物にも、殆ど被害を出さずに勝ったのだから、その功績たるや、目を見張る物があった。

それは校長にも認められ、功労第一の賞として写真を半永久的に、学校に飾る事を許された。

で、飾った写真が、この間の飲み会で、ぐでんぐでんに酔っ払った写真を飾ろうとした所、掲示を拒否され、校長に（たったこんな事で）食って掛かり、功労第一の賞を取り消された。

しかし、生徒達は、ちゃんとして見ており、アシュマが持っている女子の人気票の三分の一、男子の人気票のほぼ全部と票を取り、一大勢力となる。

しかし、根っからのセクハラ大魔神であるヨディから、女子の票が離れるのは、早かった……。

「第〓何回か分かんなくなっちゃったけど、銀龍号クルー会議〓ヨディの気だるい一言で、会議が始まった。

場所はいつもの廃教室。

今日も、アシュマを倒しに来たイレギュラーナンバーは、誰なのか？

そう言う所から、話は始まった。

「え〓先日イレギュラーナンバーは、当日スコラを休んだ物と定義して前回、今回と見てきた訳ですが、取敢えず候補は……」

イコ・デリアッシュ、十七歳、百六十八センチ、体重省略、魔法剣士学科二回生。

サイラ・ナイヴス、十八歳、百七十七センチ、体重省略、魔法剣士学科三回生。

ファイ・イングス、十六歳、百六十五センチ、体重省略、召喚士学科一回生。

「と、まあ、以上の三人が、アシュマ君の言った条件に、あった子が……」

「チョツと待つてくれ、ヨディ」

アシュマが話の腰を折る。

「なんですか？ アシュマ君」

ヨディが嫌な顔をする。

「多分この中に、イレギュラーナンバーはいないぞ」

「またあ、アシュマ君。折角調べ上げてきた物を、根底から覆す様な事いつてえ。根底から覆される者の身にも、なってよ。しくしく」

ヨディがおどける。

実際はあまりいい気分では無いようだ。

「実は、俺は、一人絞つてある」

アシュマは決めてあるようだ。

「え？ 誰？ 誰、誰よ？」

ヨディが身を乗り出す。

「気の波動パターンといい、時々見せる仕草といい、俺が基準としている物に、かなり合致しているんだが、果たしてそういう事が、出来る物なのか？ そこら辺がネックなんだが……もし、しているとすれば、俺はそうさせた奴を許さない」

アシュマは一人で思いつめた。

そして俯く。

「もしもーし、アシュマ君一人で、突っ走っちゃってませんか？」

ヨディが心配になり、聞いてみた。

「……………」

だが、アシュマは沈黙を守ったままだった。

今日も黒いローブの男達が、話し合いをしていた。

誰が誰とも分からずに。

まるでまだ見えぬ未来を、自分達が紡ぐかのように。

「さて、それでは一体どこの国を、クーロンにぶつけましようかな？」

「やはりアヘイビアでしょう」

「あの国も、どの地域にでも、首を突っ込みたがりますからな」

「困った物で。くくく」

「しかし、マリク紛争では、さぞや両陣営『核』があれば使いたいでしょうなあ」

「しかし、どこの国も依然として核開発に成功していませんからなあ。順番が逆ですからなあ。ドメル条約の影響もありますかな」

「そうですね。なにせ、条約が出来たのは、百五十年前。人々が核の何たるかを忘れて久しいという時に、突如ぶち上げられた条約でしたな。確か、あれは」

「しかし、まあ、あれのおかげで土地を汚されずに済みますからなあ、あながち悪いという事もありますまい」

「然様。核だけはいただけませんなあ。あれは自分で自分の首を絞める兵器ですからな」

「その点、最終兵器は土壌の汚染を引き起こしませんから、いいですな」

「その代わり、使いすぎて、『また』地軸が捻じ曲がったりしたら、目も当てられませんかね」

「それはそうと、今年のネルファベーズ候補者はどのような感じになっていますかね？」

「特級念者でミカ・タキオ。ルファ・ゼイン。アナス・アスイカ。剣士候補でジークフリート・シュヴァイツァー。リネル・ダース。要マナカードの者はスカイプ・ネイル。ハームドフラァ・エーネー  
ン……」

## 第七節 試験

いよいよ、期末試験が始まる。

二週間前から授業に出ずに、一人だけの自習が認められる。

その二週間前に突入。

今度の期末試験は進級試験も兼ねている。

この時点までに、進級する為の試験を一コマでも受けていない者は、ここで最低十コマの単位を取得しなければならない。

アーチエルは今までの総復習と、今まで習っていなかった部分の強化をした。

どれ一つでも落す訳には行かなかった。

基礎錬金学、基礎魔法学、魔法科学、魔法物理学……習得しなければならぬ事は沢山あった。

基礎召喚術、高位召喚術……受けた事の無い授業の物ですら試験に挑まねばならない。

アーチエルは山籠り状態になった。

「ただいまー、アーちゃん」

ミカが授業から帰ってきた。

「おかえりー、ミカさん」

明るくミカを迎えるアーチエル。

「ずっと、籠りつきりだね、アーちゃん」

ミカがアーチエルを気遣う。

「うん、ちよつとねー……あ、そうそう、夕飯のしたく出来てるから皆で食べてー」

テーブルの上には食事が並べられてある。

「あ、ありがとー。あ、あのね、アーちゃん、入学して四ヶ月に満たない者の進級試験と期末試験では十コマの内三コマ、それに平均点の四分の三を満たしていれば、仮進級できて、半年後に不足分を補える仕組みなんだよ？　うちの学校」

アーチエルの隣の来て鞆を置く。

「うん、知ってるー」

アーチエルはノートに落としていた目をミカに向ける。  
微笑みながら。

「なら……前みたいに根詰めると倒れちゃうよ」

ミカが椅子に座りながら心配した顔を向ける。

前みたいにと言うのはアーチエルがラブレターの処理をしたり、睡眠時間を削ってまで勉強したり、拳句の果てには倒れてしまった事を指す。

そのような事がまた起こるのではとミカは案じているのである。

「大丈夫、今回は、期限切られた短期決戦だし、前みたいにお手紙に振り回されるといった事もなくなるし」

アーチエルはにっこり微笑む。

「でも、『アシユマさま』に逢えなくて寂しいんでしょ？」

ミカが指摘する。

アーチエルは顔を真っ赤にし俯いて今にも消え入りそうな声で、

「そ、そんな事ありません」

そう言った。

「行つて来なよ。そのくらい神様も許してくれるから」

ミカはアーチエルの顔を覗く。

「そ、そうかなあ？」

アーチエルはもじもじしてその気になっている。

本人も逢いたい気持ちはあるようだ。

「そーよ」

ミカが背中を押してやる。

「じゃあ、お風呂入ってくる」

アーチエルはにっこり微笑んで立ち上がる。

「あら？ アーちゃん何日お風呂に入ってないのよ」

ミカが怪訝な顔をする。

「えーと、二・三日？」

小声で返す。

恥かしいのだろう。

「アーちゃんそれはチョツと入らなさすぎよ」

同じ女性としてはちよつといただけないのだろう。

注意をする。

「ゴ・ゴメン……」

アーチエルも不潔な事は好むところでは無い。

寧ろ清潔を旨とする彼女である。

本人もそれを恥じていた。

いつもの屋上に行くといつも通りアシュマがいつも通り本を片手に読んでいた。

アーチエルがアシュマを見つけると、アシュマもアーチエルに気付き、アーチエルはアシュマ目掛けて走ってきた。

「走るとアブな……」

アシュマが言い掛けた時……。

ぽてっ。

こけた。

アーチエルはぐすんぐすん言いながら、

「チョツとでも早くアシュマさまに、逢いたかったのに」

アシュマはアーチエルにヒーリングを掛けていた。

鼻とおでこを少しすりむいていたからだ。

今日も前にアーチエルが座り、アシュマが後からふわりと被さる様に座った。

ふとアシュマはアーチエルの髪の毛の香りに気がついた。

「お風呂に入ったんだね？ アーチエル」

アシュマがアーチエルに話した。

「え？ あ？ その……アシュマさまに逢う為に……」

アーチエルは誤魔化し言ってみた。

半分は本当だが。

まさか三日風呂に入っていなかったとは言えない。

「嬉しい事を言ってくれる」

アーチエルの耳の外側を食み食みした。

「あ……」

アーチエルは短く喘いだ。

背中に電流が走る。

「どうして耳ばかり、お責めになるの？」

「小さくて可愛いからさ」

アシユマはそう言うが、本当か冗談か判別がつかない。

「もう」

アーチエルはアシユマのほうを向いて睨んでみせる。

が、形ばかりだ。

嫌ではないのだ。

アシユマのする事が。

二人はそのまま口付けをした。

アーチエルが部屋に戻って来た。

「あつ、アーちゃんお帰り」

ミカが言った。

「うん、ただいまー」

アーチエルも言った。

が、アーチエルは半分上の空だ。

「アーちゃん、ごはんはあ？」

「うん、たぐべーるう」

「どうしたんですの？ 様子がおかしいですわよ？」

サクラコが怪訝な顔をする。

「うん、アーちゃんの気分転換に、アシユマ先生の所へ行かせただけだね」

ミカが事情を説明する。

「んまーっ！！　なんて事でしょう！？　あんな変態エロエロ教師の元へ、ワタクシの可愛い可愛いアーチエルちゃんを、一人行かすなんて。ミカさん、貴女の責任は重くつてよ」

サクラコがミカを責める。

「あ、あたしい？」

ミカが自分を指差して驚く。

「ま、まって、サクラコさん、ミカさんは悪くないよ。それに……アシュマさまには一杯幸せ貰って帰ってきたから、ぽへーっとなってるだけ」

アーチエルは惚気（おろけ）とも聞こえる様な事を、そうとは気付かずにつていた。

弛んだ頬を隠そうともしない。

「それがいけないのよ！　今から幸せボケで、何もやる気起きなくなっちゃ、何にもならないでしょ！　これから、アーチエルちゃんシフトを布きます。今までやって来たアーチエルちゃんのお仕事を、私達で一切合財引き受けます！」

サクラコが宣言する。

このお嬢様は言い出したら聞かない所がある。  
皆に有無を言わせないのだ。

「え〜っ、やだよ〜。めんどくさいよ〜」

エミルが駄々をこねる。

「私も賛成しかねるわ。面倒とかそういうのじゃなくて、アーちゃん（ア）の気分転換になる物全て奪って、勉強漬けにするのはどうかと思うわ」

ミカもサクラコには、賛同しかねた。

「おだまり！　私も愛しいアシュマ先生を取るか、可愛い、妹の様なアーチエルちゃんを取るかで、随分悩んだんだからね？　いい事？　このシフトは絶対守って貰いますからね？」

「なんだ、要はサクラコの嫉妬じゃん」



エミルが言った。

「聞こえてるわよ、エミル」

「あーあ、わたしのアシユマさまが……」

机に突っ伏してアーチエルはいじけた。

「貴女の為でもあるのよ？ アーチエルちゃん」

サクラコが説得にかかった。

「分かってますけど……はあ、アシユマさま……ええい！ こうなったら早く終わらせる為にも、ここは一つ頑張つて！」

アーチエルはシャープペンシルを持ってノートに向かった。

「そうよ、アーチエルちゃん、頑張つて。ワタクシはアシユマ先生の所へ行つて、この事を言つて来ますわ！」

「え？ いいよう。ちゃんと分かってくれてるよう。お願いだから、変な事言わないで」

アーチエルは驚いた。

そして困った。

アーチエルはアシユマに変な気を使って欲しくなかった。

これは却つてアーチエルにとって少し迷惑な事だった。

「信頼しているのね？ でも、殿方はこう言う事に疎いもの。きちり言わなくては！ では、行つて参りますわ」

「ああ」

アーチエルが嘆いた。

「アーちゃんこうなつたらしょうがないよ。アーちゃんシフトに、私達も協力するからさ。こっち来て食事にしよ？」

ミカが食事に誘った。

「うん」

アーチエルはしよげてそう言う。

元氣なく席を立てて食卓へ向かう。

「えー、シフトの話まだ生きてたの？ やだよー、メンドくさいよー」

エミルがまたこねた。

「何言ってるの！ 普段から、一番アーちゃんの事、頼りにしてる人が」

ミカが叱った。

職員宿舎にて、サクラコがアシュマの宿舎の前に来た。

こんな学校の端っこ、打ち捨てられた様な場所に、ゴミと一緒に建てられた様なぼろ小屋がアシュマとヨディの宿舎だった。それをサクラコは目の当たりにした。

「うっ、これは酷い……」

あまりの現実に、思わず顔を背けるサクラコ。

こんな所に、一人ならずも二人も住んでいるだなんて……。その時後から声が掛かった。

「サクラコ君じゃないか？」

サクラコが振り返ると、

「アシュマ先生！」

そこにはアシュマが、買い物袋を持って立っていた。

「どうしたんだ？ こんな所で」

突っ立っているサクラコに訊く。

「もう、アーチェルちゃ……様は、暫くいらっしやいません」  
アシュマに言った。

どんな反応が返ってくるか楽しみだった。

「分かってる。忙しいんだろ？ あんまり根を詰める様な事はしないでくれと伝えてくれ」

意外と普通の反応だ。

詰まらない。

「寂しくありませんの？」

重ねて訊いてみる。

「寂しいさ」

だが、アシュマは淡々と答える。

「我慢できますの?」

更に意地悪く訊く。

「するしかあるまい?」

なお淡々と答えるアシュマ。

サクラコは、アシュマはアーチエルの事を気にかけていないのかと疑いたくなる。

「随分物分りがいいんですね? 信頼しあっているから?」

実は少しアシュマとアーチエルの関係が妬ましい。

少し意地悪に訊いてみる。

「信頼し合ってるかどうかは知らんが、俺は彼女を信頼している。

それよりどうした? 今日のサクラコ君は、随分と絡むじゃないか?」

自分の意地悪さを指摘される。

「……い、いえ……別に」

急にはづが悪くなる。

そして俯く。

「部屋に上がって行くか? ヨデイも居るぞ?」

アシュマがドアノブに手をかける。

「い、いえ、結構ですわ……用も済みましたし、これで……」

しどろもどろになってその場を後にした。

「そうか。試験頑張れよ」

アシュマはサクラコに笑みを投げた。

「ただいま」

サクラコは自分の部屋に帰ってきた。

「サクラコさん、お帰りー」

ミカが応対した。

見ると、皆、勉学に勤しんでいる。

「なによ、急にみんなして勉強に目覚めちゃって」

少し驚く光景である。

「うん、アーちゃん見てたら、自分もやらないとまずいかなって？」  
そう言っただけに目を落す。

「何、皆で、抜き打ちにかけているのよ？」

サクラコも、期末試験にかけて、勉強に集中した。

期末試験まであと数日、アシュマは校庭の隅で仲良く談笑するオルバニアンとアルミナを見つけた。

たまには、声をかけてみようと思いついた。

すると、最初にアシュマを見つけたのはアルミナで、急に黙ったかと思えば、ばつが悪そうに、こちらとオルバニアンを上目遣いで見比べて、やがて目を伏せてしまった。

オルバニアンも、

「ほら、ク、クラスメイトじゃん、色々と話さなきゃなんない事があるんだよ。臨海学校とか学園祭とか、俺ってそういう経験無いじゃん？ 聴いたらアルミナもそうなんだよ。それで、こう言うのって、どうしたらいいんだろうって、二人で話してたんだよ」

と、やたら饒舌になっているし、何かおかしい感じがした。

別に、それはそれでいいのだが。

「随分とのんびりしてるじゃないか？」

「だって、アシュマの授業で単位一個とりゃ、良いだけでしょ？」

オルバニアンが呑気な事を言った。

「は？ なに頓珍漢な事を言っている？ お前達は最低三コマの単位とテストの平均点の四分の三を取らないと落第だぞ？……尤もこの学園に、学年の概念は無いから進級と言うのも変だがな」

アシュマが腰に手を当てる。

「おかしいぜ、アシュマ。だって編入試験の時、教頭先生が、総合武術で単位を取るのを条件に言ってたぜ？ あれさえとりゃあ、いいんじゃないの？」

呑気にもオルバニアンが言う。

「あれは、総合武術で単位を取るのを条件に、入学を許してもらったんだろ？ 進級するのはお前達の場合、最低三コマ、平均点の四分の三！ これが最低条件だ！」

それを聴いて、オルバニアンとアルミナは顔面が蒼白となり、

「じゃ、まずいじゃん、俺達……」

と、オルバニアンがアルミナを見、

「ああ、そうだなやばいよ……」

アルミナはオルバニアンを見返した。

「わりい済まねえ！」

「あたし達、行くから！」

アシュマは、

「まあ、駄目なら追試。それでも駄目ならレポートと、幾らでも逃げ道はあるのだがな」

と、言い、鼻で、

「フン」

と、笑った後、その場を後にした。

そして校庭の隅には誰もいなくなつた。

試験になつた。

試験当日・一日目、筆記試験

皆持てる力を振り絞つて、問題用紙にむかつて、ペンを立てた。

アーチェルの様にこれへ向かつて頑張ってきた者、オルバニアンの様に頑張つてこなかった者、様々な者に平等にそれは与えられた……。

喜ぶ者、嘆く者それぞれ居るに違いない。

「ねー、アーちゃん、どうだったー？」

試験の間の小休止。

ミカが声をかけようとしたが、アーチェルは眠っていた。

それを見たミカは、少しでも寝かせておいてやろうと、氣遣ってやった。

次の筆記試験に、ミカはアーチエルを起してやった。

「ありがとう、ミカさん」

礼を言うアーチエル。

ミカはその日一日中アーチエルを寝かしては起こし、寝かしては起こしを繰り返してやった。

その日、最悪な思いをしたのは、オルバニアンとアルミナだった。そしてその日の筆記試験は終了した。

「アーちゃん！」

ミカがアーチエルを呼び止める。

「ミカさん！」

アーチエルが振り向く。

「一緒に帰ろ」

ミカが微笑む。

「うん。何か今日は、ミカさんにお世話になりっぱなしだね。ごめんね」

上目遣いに美香を見る。

「いいのよー。それぐらい、大した事じゃないから」

ミカが手を振り何でもないことを現す。

「有難う」

アーチエルがはにかんだ笑顔を返す。

「今日どうだった？」

ミカが訊いた。

「うーん、まあまあかなあ？ ミカさんは」

唇に指を当て上を向いて答える。

「あたしー？ 全然駄目。全滅。あははは」

頭の後ろに手を持っていつて言う。

「帰ったら、お風呂入ろうかなあ」

等とアーチエルは、突拍子も無い事をいいだした。

「こんな時間に？」

「うん。今出来る、最大の気分転換なんだもの」

「そうしなよ、わたしは勉強かな」

「ここまで来たら、みんな一緒。アーチエルシフト止めにしない？」

アーチエルが言い出す。

「うーん、みんなと相談」

ミカはアーチエルの顔を見て微笑む。

「だってエミルさん、辛そうだよ？」

アーチエルもミカの顔を見る。

少し申し訳なさげな表情を作る。

「エミルはいいのよ。あの子、サボろう、サボろう、としか考えて無いもの」

実は少し冷たく言い放つ。

アーチエルはこのまま甘えて良いのか悩みつつ視線を下に落とした。

試験当日二日目・三日目も筆記試験。

これもつつがなく終わる。

そして、試験当日四日目魔法実技試験に入った。

一番最初にエフアールとヨディが採用試験に使われた場所だった。この席には、ケリー教頭も顔を見せていた。

そして、一般魔法の教員である、エフアールも顔を見せていた。

アーチエルの場合……。

「わたしはこの場にて、ヒーリングスフィアを発表したいと思います」

アーチエルは言った。

「ヒーリングスフィア……聞いた事も無い呪文ですな」

「もしかして禁呪なのでは？」

「あの娘は先の戦場現地実習で、禁呪ザ・ライフを使用しましたか

らな」

教師達は、ひそひそと、なにやら話し始めた。

この試験は何も新しい魔法を発表する場では無い。

日頃の魔法の鍛錬の成果を疲労する場である。

だから、新しい魔法を疲労すると言うのはいささか場違いな感じがしたにはした。

勿論新しい魔法を疲労しても構わない。

罰則事項では無いから。

兎にも角にもアーチエルは新しい魔法を発表する事にした。

「みなさん、聞いて下さい。このヒーリングスフィアは確かに五行詩ですが、禁呪ではありません。禁呪は六行詩です。それにこのヒーリングスフィアのよい所は、術者の精神力の強弱に関わらず一度形成してしまえば、術者の手を離れて緩やかではありますが、治癒を開始すると言う事です」

「つまり？」

「つまり戦闘中、術が切れるまで、断続的に緩やかな回復を行ってくれる、という所がこの術の画期的な所です」

「先ずは論より証拠。見せてもらいましょう」

と、エファールが言った。

「はい」

アーチエルが返事をした。

「だれか、枯れた花を持ってきて頂戴」

エファールが言った。

枯れた花は大きい植木鉢と言う形で、ヒーリング系で試験に臨む者達用に、学校側で用意してあった。

『砂漠で水を求むる者よ、

汝は今、癒されん。

極地で火を求むる者よ、

汝は今癒されん。

求むる癒し今与えられん。



ヒーリングスファイア』

アーチエルが呪文を唱える。

そして現れた光の球。

直ぐに光球の中に、植木鉢が置かれた。

ヒーリングのスピードは、むしろ通常人が使うよりも速かった。

枯れた花が、見る見るうちに、瑞々しさを取り戻して行く。

「天才だわ……」

エファールが、誰にも聞こえないように呟いた。

「あなた、これをどこで？」

ケリー教頭が、問い質していた。

「えっと、その……」

アーチエルが言い淀んだ。

「大丈夫です。禁呪に関わりが無いんだったら、このまま合格にします」

「じゃ、じゃあ……アシュマさ……アトー先生から習いました」

アーチエルは言い切った。

「アシュマが？」

エファールが驚いた。

他の先生達もざわついた。

「あ……あの……」

アーチエルが、困った面持ちで言っていた。

何か悪い事でもしたかの様な、錯覚に陥った。

「大丈夫よ。安心なさい。合格は変わりません。アシュマ先生にも何かあるという事はありません。さ、次の子を」

アーチエルは、小さな罪悪感を抱きつつ、

「失礼します」

そう言つて、部屋から出てきた。

その後オルバニアの試験で、オルバニアンは単純に多けりや良  
いだろうという事で……、

『ファイヤーボール！！ バイ、テン！！』

ファイヤーボールを連発させた。

多けりや良いだろう的な発想が裏目に出たのか、先生側の反応は何もなかった。

「はい、次」

オルバニアンはがつくりと肩を落として試験場を後にした。

「今の生徒、魔法剣士学科の生徒にしてはファイヤーボール十連発とは、やりましたな」

「そうですね。多少驚きましたな」

オルバニアンは肩を落としながら部屋を出てきた。

「オルバニアン……大丈夫？ 元氣ないみたいだけど？」

アルミナがオルバニアンの事を気遣って言う。

「だ、大丈夫だよ、アルミナ。チョツとヘタレたけど、君の顔を見たら少し元氣が出たよ」

「そう？ それなら良いけど……次、私なの。チョツと言ってくるわね？」

「頑張れ！」

「有難う」

アルミナは試験会場で、ファイヤーウォールの、同時三方包囲をやって見せた。

これも試験官達は無言だった。

アルミナは、がつくりと肩を落として、試験場を後にした。

アルミナが出た後で、試験官達は、

「今のファイヤーウォールの同時三方包囲も、見事でしたな」

「然様。今年の魔法剣士学科は豊作ぞろいですな」

等と、話し合った。

アルミナは肩を落としながら部屋を出てきた。

「どうだった？ アルミナ？」

出口で待っていた、オルバニアンが訊いた。

「オルバニアン、あんたの気持ちが、少しだけ分かった様な気がするよ」

「そうかあ、分かつちゃったかあ。分かつちゃうと、不味いんだよなあ、これが」

「アタシ達に、未来は無いって感じだね。こりゃ」

「酒でも飲みたい気分だぜ」

「ホント」

四日目魔法実技試験が終わって、アーチエルはやっと、肩の荷を降ろした様な感じがした。

校舎の屋上で、手すりに掴まって、校庭を眺める。

これで、今回試験があつた十四コマ中、十二コマで手ごたえを掴んだ。

残り二コマ。

その内一コマは、召喚魔法実技試験だが、この間の騒ぎでバハムートを召喚した功績でこのコマも満点合格をしていた。

この十三コマで進級……と言っても、ただ次の新しい授業が出来るだけだが……進級できるだろう。

明日の試験は先ず無理、とアーチエルは思った。

「だって、明日はアシュマ先生の、総合武術試験なんだもん」  
誰に言うでもなく言ってみる。

すると背筋を指が這い上がってきて……

「うひゃうっ！」

アーチエルは変な声を上げ、その張本人である彼の方を、涙目で睨んで見た。  
いた。

アシュマ・アトーである。

最近是最初出会った頃のイメージと違い、優しく……もとい、やらしくなつたとアーチエルは思った。

今じゃ、ヨディとどっこいどっこいだと、アーチエルは思う。

「俺の総合武術試験がどうしたって？」

これだ。

この笑顔だ。

ついこの間までは、ぶすつとして、無愛想で、それでいて今では優しいような顔をして……しかも私だけに……と思いつつ、いやいや、いけないとアーチエルは我に返った。

それがアシュマさまの、常套手段なのだから、とも思った。  
騙されないわよ。

アーチエルは警戒する。

アシュマの唇がアーチエルの首筋を這った……。

またいつもの様に、ずるずるとなし崩しに、アシュマのペースに乗ってしまう。

……アシュマの唇が……アーチエルの唇に……。

もう、アーチエルは何も考えられなくなっていた。

「アーチエル……」

アシュマがアーチエルの名を呼んだ。

五日目、総合武術試験。

グラウンドの真ん中で、女子達が雲雀の様にさえずっていた。  
その中にアーチエルがいた。

「私、この授業苦手だったのー」

「あー、わたしもー」

「むっ」

女子生徒の声に、耳を傾ける。

「センセ、カッコ良いんだけどなー」

「アシュマ先生ねー。いいよねー。誰か付き合っている人、いるのかなー」

（お生憎さまー。私が付き合ってますー）

アーチエルは心の中で呟いて得意になっていた。

「アーちゃん、何か後の方で旦那様の事で盛り上がっていますが、奥様として一言どうぞ」

ミカが、ご機嫌を伺ってきた。

「苦しゆない、よきに計らえってところかしら」

アーチエルが少しおどけて言ってみる。

「奥様、余裕で御座いまするな」

「こら、そこっ！ 喋ってないで話聞く！」

アシュマが注意する。

「はい……噂どりの地獄耳ね。アシュマ先生」

ミカがヒソヒソ声で言ってきた。

「油断しちゃ駄目よ、聞こえてるわ」

アーチエルが、思わず身を硬くした。

「はい、聞こえてるぞー。誰が地獄耳だってー？ ……はい、

第一班から前回り受身ー初めてー」

「うっわー、本物の地獄耳ね」

ミカが漏らした……。

一般魔法学科の総合武術の実技テストは防御の基本として、

後受身。

横受身。

前受身。

前回り受身。

後回り受身。

をし、

攻撃の基本として、

入り身投げ。

回転投げ。

四方投げ。

小手返し。

一教。

二教。

三教。

で、これらを基本技とした。

「あー……、これから、基本技をやってもらうが、四方投げは危険な要素も入っているの、技をかける方は気をつけて行っ様に」

アシュマが注意をする。

一通り、全員が終わって一般魔法学科、召喚士学科は、全ての日程を終えた事になる。

アシュマはこれで、午前中の予定を全てこなした事から、食事を採ろうとしていた。

アーチェルはアシュマを見つけて、食事に誘おうとした。

アシュマだ。

アシュマも、アーチェルを認めた様だ。

アーチェルが声をかけようとする。

すると横合いから、

「先生お弁当作ってきました。食べて下さい」

生徒がどこから沸いてくるのか、次から次へとアシュマを取り囲み、結局食堂の方へと向かっていった。

その際アシュマはポーズで、

「ごめん」

と、謝っているのが眼に見えた。

「あー、アーちゃん、ありゃ駄目だわ。私達もいこ」

ミカが言った。

アーチェルがどこへ？

と、いった、顔でミカを見直す。

「食堂よ。アーちゃん、今日お弁当もって来て無いでしょ？ だったら食堂に行くしか無いでしょ？」

「う、うん……」

「旦那の事は大丈夫よ、奥さんなんだから、デーと構えてりゃい

いのよ」

「そんなミカさん。奥さんだなんて」

言ってアーチエルは耳まで真っ赤にし、俯いてしまった。

でも、まんざらでも無いらしい。

アーチエルはミカに付いて行き、食堂へと足を踏み入れた。

アーチエルが始めて入るそこは、とても学食とは思えない程高級感があり、綺麗で落ち着いた雰囲気、まるでレストランの様だった。

一際、沸いている一群があつた。

アシユマを中心にした、生徒達の一団だ。

(なによ、結構楽しんでるんじゃない)

アーチエルは少し憤った。

アーチエル達は少し離れた席に座った。

アシユマ達の席のほうから笑い声が聞こえて来る。

「アーちゃん。気分は？」

ミカが訊いてみる。

「しりません！ もう、うわきもの」

アーチエルはそっぽを向いてしまった。

「かなりお冠のようで」

「アシユマさまも普通の男の人だね。つまんない」

アーチエルはナイフとフォークを持って食事を始めた。

「大丈夫よ。見てみなよ。アシユマせんせ、なんか、困ってるみたいだし」

「え？ 困ってる？」

「ほら、あの顔」

「ほんとだ」

アーチエルがきょとんとする。

「アシユマせんせ、苦手なのよ。きつと、こつ言つのが」

「ふーん」

アーチエルは頬杖つきながら少し微笑んだ。

アシユマが見せるあの笑顔はわたくしに対してだけなのだとアーチエルは思った。

そう思うと少しだけ嬉しくなった。

「奥様、一言どうぞ」

「うん。よきに計らえて所かしら？」

午後に入ると、魔法剣士学科の実技試験だ。

「さて、諸君の実技試験だが、俺から三十秒間逃げ通せれば、単位をやるう」

アシユマが、そいう。

湧き上がる歓声。

しかし、アシユマは手でそれを制して、

「ただし、逃げられるのは、校庭のみとする。俺に捕まえられたり、一本とられれば、即座に不合格とみなす。逃げる代わりに俺から一本とっても構わない。後、次の二名は別試験を課す。オルバニアン・マグマイヤー。アルミナ・ラ・シア。では、各員準備！」

と、言った。

「やった、楽勝だ！」

だの、

「今年は運がいい！」

だのと生徒達は喜んでいたが、この課題が非常に難しい事に、気が付いていなかった。

先ずはアシユマは竹刀を取る。

「はじめ！」

の号令でその瞬間に、アシユマに面をとられる者が大半で、五秒までに狩られる者が残りの大半。

十秒持てばまだ良い方。

これまでに、この試験にパスした者等、皆無であった。

「先生よう、俺達の中から合格者、出すつもり無いんじゃないか？」



誰かが、ぼつりと、言葉を漏らした。

するとアシュマは、

「甘ったれるなっ！！ お前達は守る側の人間で、守られる側の人間では無い！ お前達が守らずして、誰が仲間の魔法使いや召喚士といった者を守るのだ？ 誰が勝利を手に掴むのだ？ 与えられたものだけでお前達は満足するのか？ どうして誰も自らの手で勝利を掴もうとしないんだ！」

皆を叱咤した。

しかし、圧倒的な実力差の前に、次第に絶望感を募らせて行つた。  
「化け物だ……！！」

最後にはアシュマをして、そう生徒に言わしめた。

そして、オルバニアンとアルミナを除いて魔法剣士学科は全員失格した。

「オルバニアンとアルミナ、前へ」

アシュマは名を呼んだ。

「はい！」

「はいっ！！」

二人は前へ出てきた。

「お前達二人は剣技が卓越している。その事は、周りにも周知の事実だと思われる。よって、お前達とは試合をする。一人ずつでも良いし。二人一組で臨んでも構わない。どうする？」

アシュマが訊いた。

「チヨ、チヨツと待ってくれ……」

オルバニアンが言った。

「どうする？ アルミナ」

「アタシは構わないけど？ ただ二人一組の場合はさ……」

二人は、少しの間、話していて、

「アシュマ！ 二人一組の場合、途中一人が倒れてしまったら、そこでお仕舞か？」

オルバニアンが尋ねた。

「それが望みだったら、それでも構わんが？」

アシュマが答えた。

「なら、二人一組で行く」

オルバニアンが宣言した。

「よかるう。開始の号令はそちらで掛けるか良い」

アシュマは号令をオルバニアン側に渡した。

「くそっ！ 馬鹿にしゃがって」

オルバニアンは熱くなっていた。

「オルバニアン、熱くなるな。頭を冷やせ。アシュマの思う壺だぞ？」

アルミナはオルバニアンをクールダウンさせた。

「そうだな。済まん。アルミナ、号令はアルミナが掛けてくれ」

「わかった」

アシュマは右手にだらりと木刀を下げたいつもの構え……いや、構えといえるかどうか……。

地擦りの構えといえば言えなくもない。

アルミナは木大剣を右脇構えに構えた。

オルバニアンはアルミナの後に付いていて構えは良く見えない。

「行くよ！！」

アルミナが号令を掛ける。

アシュマは動こうとしない。

アルミナは前に走った。

そして剣を回した。

切っ先がアシュマを捕えようとした瞬間、アシュマは前へ跳びアルミナを頭上から襲おうとした。

その時、アルミナの背と肩を踏み台に、オルバニアンがアシュマ以上の跳躍を見せて、アシュマに攻撃をしようとした。

木刀で攻撃してくるのかと思い、アシュマも木刀を頭上に、防御の構えを見せた。

が、攻撃してきたのは『蹴り』で、これには、アシュマも意表を

突かれた。

アシュマは空中で両手を交差し、蹴りの攻撃を凌いだ後、オルバニアンの突きの攻撃を、木刀を回して凌いだ。

下ではアルミナが、アシュマが降りてくるのを、今か今かと待っていた。

アシュマの着地と同時に、剣を振り回すつもりなのだろう。

アシュマは着地と同時に、木刀を立てアルミナ目掛けて走ろうとしていた。

しかし、既にアルミナの剣は回転を始めており、アシュマの木刀ごとアシュマを粉碎せんが勢いであった。

だが、次の瞬間デジャヴとも思える光景を、アルミナは見る事になる。

アシュマの木刀が、アルミナの剣を受け止めたのである。

以前にも一回、似た様な光景があった。

アルミナが仲間になる前に、幾度かアシュマと剣を交えた事があった。

その時に、やはり剣の回転を、止められた時があった。

しかしあの時のアシュマの得物は、『鬼虎』だった。

今の得物は『木刀』である。

幾らアルミナの大剣が木製だとしても特注品、しかも質量と頑丈さが木刀とは雲泥の差がある。

そんな事が、あつていい筈が無いのだ。

そして思わず呟いていた。

「そんな、ばかな……」

そして、アシュマはアルミナの鳩尾に、突きをくれると、素早く反転して、既に上段の構えで攻撃しようとしているオルバニアンの喉元に、切っ先を付けた。

戦いは終わった。

アシュマの勝利だ。

だが、戦いの後でアルミナが、  
「その木刀には鉄芯が入っている！ 今の勝負は無効だ！」  
そう言った。

そこでアシュマは、今、使っていた木刀を、アルミナの前に放り  
投げた。

木刀は二本にぼつきりと折れた。

「こ、これは……」

アルミナが驚いた。

「木刀は確かに折れた。しかし気の力で一本に繋ぎとめていた」  
アシュマはそう言った。

「ま、負けたわ……」

ここに勝負は終わり、今年の魔法剣士学科の総合武術課程は、全  
員不合格と言う、前代未聞の事態に陥った。

この事態に、ケリー教頭は再考を申し入れたが、アシュマは頑と  
して聞き入れず、直ちに不合格者全員に『剣と私』と言うテーマで、  
レポートを提出する様、口頭、及び、掲示板で不合格者全員に伝え  
た。

今回の試験は異例続きであったが、最後にもう一つ。

アーチエルアップルトンが筆記テストオール満点。

魔法・召喚魔法両試験で満点。

カリキュラムの違い等で一概には言えないが、この時点で彼女は  
学園内首席を獲得。

特に魔法に関しては、新しい魔法を開発した功績は大きいとし、  
どれか一つ単位を取得する事を許された。

それに対し彼女は単位を落とし、レポート提出の旨を得ていた総  
合武術にこれを適用、入学して四ヶ月未満の者としては『異例』の、  
基礎過程の全単位取得と言う快挙をなした。

今日も賢人達の御前会議が始まった。

この中で一体誰が議長役なのだろう。

そもそも議長役は存在するのか？

いつから会議が始まったのか？

いつになったら終わるのか？

「クローンの件ですがね、アヘイビア単独ではつらいですな」

「然様ですか。では、国元連軍を組織させて……」

「いやいやいや、それは最後の手駒に」

「では、いかがします？」

「いい方法がありますぞ？」

「ほう、それは？」

「オロを使うのですよ」

「ほう、我らの宿敵、オロ・エバスを」

「確かに彼を使えば彼の力を削ぎ落とすだけでなく、クローンの力も削ぎ落とす事が出来ますからなあ」

「然様、アヘイビアの陸・海・空、三軍の力に匹敵するオロの軍勢力。これを使わない手はありませんからなあ」

「で、問題は如何にして彼の力を利用するかですが……」

## 第八節 恋人たち

「夏だ！！」

「おおっ！！」

「海だっ！！」

「おおっ！！」

「おっばいだっっ！！」

「おおっ！！」

ヨデイが乗る、男子生徒を運搬するサイコ・フライヤーは一路、海を目指していた。

スコラの臨海学校である。

サイコ・フライヤーはおよそ三百五十人ずつ男女に分けられて航行していた。

その内、ヨデイが乗る男子生徒側のサイコ・フライヤーは異様な盛り上がりを見せていた。

「諸君！ あれだけの大量のおっばいが、たった一人の男に全部搔つ攫われて良いものだろうか？ 否！！ 良い筈が無い！！ おっばいは皆等しく平等に分け与えられた物では無いだろうか？ 諸君！！」

「おおおっ！！」

演説ぶっているのは、勿論全国助兵衛同盟の創設者、ヨデイ・ヨフルである。

サイコフライヤーのキャビンの真ん前で、力強く演説していた。

「そこで諸君！ 私は提案したい！！ 七百ものおっばいが一人の独裁者、そう、アシユマ・アトーの手に渡る前に……」

その時、

ごん！！

と、言う鈍い音と共にヨデイはぐんにやりとして、床に崩れ落ちてしまった。

「男子生徒の皆さん。こんな変態教師の言う事等無視して、向こうに着いても勉強に勤しんで下さい」

エファールは、ヨディを向こうへ引きずり始めた。  
すると大量のブーイングが起こった

「あんた達私とやろうつての!? 良いわよ! 誰から!? いつでもかかっていらっしやいな! 相手になつてあげるわよ!」  
切れた。

それからのエファール不機嫌そのものだった。

「何よ、何が七百のおっぱいよ。そんなにそのおっぱいが拝みたけりや、拝むがいいわ。その代わりアタシのだけは、絶対に見せてあげないんだからね。見てらっしやい……って、何で私がこんな男の為に、イライラさせられなきゃならないのよ。はあ、それを考えるだけでもイライラするなんて。……やめたわ、もう馬鹿馬鹿しい」  
エファールは相当機嫌を損ねていた。

「あら、アナタ、こんな冴えない男に宗旨替え? それともアノ日?」

スチナ・アガネ教諭に指摘された。

「どっちでも無いわよ!!」

「ふう〜ん……そう、頑張つてね」

スチナは、意味深な発言をして去って行った。

「なんかさあ、エファール先生って、見た目は抜群なのに、切れるとおっかないよなあ」

生徒はヒソヒソとやっている。

「おっかないって言ったら、アルミナもおっかないよなあ」

「そついや、オルバニアンって、よくアルミナとつるんでるよな。怖くねえか?」

話題を振られてオルバニアンは、

「いや? 特別怖い事無いぜ? そりゃ怒りや怖ええけど? 普段なんてかわいいもんだぜ」  
そつ言つた。

「可愛い？ アルミナが？」

「いや、顔だけ見てりゃ、可愛いよなアルミナは。結構隠れファンいるぜ？ なあ、オルバニアン」

「あ？ ああ」

オルバニアンは曖昧に返事をしたが、

（そ、そーか。そーなのか）

内心焦りを感じていた。

一方、女子側の機体では……。

「へえ、アーちゃんの友達なんだ。私ミカ。ミカ・タキオ。宜しくね、アルミナさん」

ミカがアルミナに自己紹介を。

「アルミナ・ラ・シアだ。宜しく」

アルミナも返す。

「じゃあ、アルちゃん……だとアーちゃんと紛らわしいか……じゃあ、ミナちゃんだね」

「み、ミナちゃんか……」

アルミナは言葉を失った。

ミナちゃん。

そんなガラではない。

それは自分が一番よく知っている。

「ワタクシ、サクラコ・セタで御座いますわ。宜しく。アルミナさん」

「宜しく。サクラコさん」

二人は握手を交わす。

「ちなみにサクラコさんはイーハンの国のご家老の家の出ですわ」と、アーチエル。

「すると、サ、サクラコ『様』の方がいいのかな？」

アルミナは恐縮した。



「いいえ、『さん』で結構ですわ」

「そ、そうか……」

「アナタ、隻眼のアルミナ？」

「そ、そうだけど？」

「だから眼帯してるんだ。アタシ、エミル・フォルテ。宜しくね」

「ああ、宜しく。エミル」

また握手を交わすアルミナ。

「こら、エミル！ また何て言う事言って……」

ミカがエミルを叱った。

眼帯のことについて叱ったのだ。

失礼にあたると思ったのだろう。

「あ、良いつて、良いつて慣れてるから」

「リイナ・アナン」

リイナが手を出した。

「あ、ああ……。宜しく。リイナ」

「あなた、似非念者？」

エミルが訊く。

「エミル！」

ミカがまた叱る。

「ああ。いいいいいよ。アタシヤ一級の念者さ」

何の屈託もなくアルミナが答える。

「いいなあ。アタシなんか似非念者で、カード使わなきゃ、魔法も唱えられないし、魔導石で自分の身も守れやしない」

「ふーん。そうなんだ……。じゃ、あれ？ マナカードだが、マナのお札だか身につけてないと駄目ってあれ？」

アルミナもずけずけ言う。

「そう。サクラコもそうだよね？」

「エミル！ 余計な事は言わないの！」

「へえへ」

今、彼女達は何をしているかと言うと、はんじゅうさいさん飯盒炊爨の班決めをして

いるのである。

作る内容はカレー。

このカレ－の飯盒炊爨と言つ一種の科目は、まだ歴史が浅いものの、伝統(?)として女子がカレーを作つて好きな男子に食べてもらい、例え不味くとも「美味い」と言わせれば交際成立と見なされ、「イマイチ」といわれれば交際不成立と言つ、ある種過酷とも言える、女子にとっては命をかけた一大イベントでもあつた。

だから、男子はカレーを作らずに、来るのを待つのが暗黙のルールで、食べ溢れた生徒は夜、密かにカレーを作つて食すのである。

「へー……そんな意味合いがあるんだ……」

アルミナが感心する。

「ええ、そんな意味合いがあるなんて、私もさつき聞いたばかりですわ」

アーチエルが応ずる。

「アーチエル様はやっぱりアシュマ?」

アルミナが悪戯っぽく訊く。

「うん! もちろん!」

満面の笑みを漏らすアーチエル。

「アシュマ、競争率高いぞ?」

「でも、ちゃんとわたくしのおいしいっていつてくれると思うの。アシュマさま……。アルミナさんもアシュマさま?」

逆に訊く。

少し悪戯っぽく。

「いやいやいや、アシュマは競争率高いし、何にも貰えそうに無い、オルバニアンにしとくよ、アタシャ」

「ミナちゃん、オルバニアン君なの? 結構、競争率高いよ? 彼ミカが驚く。」

「ははは、ジョーダン!? アイツのどこに惹かれる女がいるって?」

冗談半分にアルミナは言つてみた。

「えー、ワイルドな所でしょう？ それでいて優しい所でしょう？ 顔もまずまずだし、それに誰とでも直ぐに打ち解けるでしょう？ 彼。だから意外とオープンな女子には、人気が高いのよ。確かサクラコさんもオルバニアン君狙いよねえ？」

ミカが解説した。

「そうですねよ？ おほほほっ」

サクラコが高らかに笑う。

「あははははっ。そ、そうなんだ」

笑って見せたは良いが、

（やばい、そうだったとは）

アルミナは密かに焦りだした。

「あと、競争率高いの、ヨディ先生かな？」

ミカは言った。

「ヨディが？ それこそ冗談だろ」

と、アルミナ。

「私もヨディ先生には悪いけど、冗談だと思う」

アーチエルもアルミナに賛同した。

「ちっ、ちっ、ちっ。甘いわね二人とも。先のティアマット騒ぎで、見事な采配を振るった事でヨディ先生の人気も馬鹿にならない所まで来ているのよ？」

ミカが続いて解説した。

「ふーん。で、ミカさんは誰にカレーを食べさせるつもりなんだい？」

アルミナが訊いてみた。

「私はジーク君に食べて貰うつもりなの」

「ええっ！？ ジーク！？」

「うん……」

ミカは照れた。

「ええっ！？ ミカさん好きな人いたの！？」

「ジーク……。私と同じあの魔法剣士学科の？」

アルミナは驚いた。

「う、うん。そうだけど……」

ミカは照れて言った。

「えーッ、あの生意気で無愛想な『アレ』？」

「え？ そんなに無愛想な方なんですか」

アーチエルは驚いた。

「まー強いし顔立ちも整っているんだけどね。いかんせん生意気だし、はつきり言ってアシユマと同じかそれ以上無愛想かもしれない」  
アルミナが人物評を始める。

「えっ、そうなんですか！？ ……はっ、だ、駄目ですよアルミナさん、ミカさんが好きって言ってる人の事をそこまで悪く言っではいけませんよ」

アーチエルはアルミナを窘めた。

「アーちゃん。そこまで気を使わなくて良いよお、そんな別に言われなれているし」

ミカは更に照れて小さくなった。

「臨海学校のカレーにそんな意味があるなんて……」

「何だ、オルバニアン。お前知らなかったのか？」

男子が驚く。

スコラの臨海学校に何しに来ているのか？

それはカレー。

カレーの為に来ているのだと言わんばかりである。

「あ、ああ。全っ然！」

オルバニアンは全然知らなかった。

「そんなんじゃない駄目だぞ。もらえないぞ？カレー」

「いや、こいつ密かに女子にもてるぞ？」

オルバニアンは、そんな事はもう上の空で、

（アルミナ、カレーくれるかなあ）

そんな事ばかり考えていた。

「いいですか？、先生。生徒と教師と言うのは、決して間違いがあつてはならないのです。近年、女生徒が意中の男子に、カレーを食べさせて告白とする様な、淫らな事が横行してますが、そんな事があつてはならないのです。それがましてや教師と生徒でそう言う事があつてはならないのです」

ケリー教頭は、アシユマを前にして、口うるさく道德論を語っていた。

「で、教頭は何が仰りたいのです？」

アシユマは訊いていた。

ケリー教頭は、もうこの機体に乗ってからこれまでの時間、飽きもせず延々とアシユマに説教を垂れていた。

もうアシユマはうんざりしていた。

この精神攻撃は他のどの拷問よりきついと思われた。

「……先生はチョツとカッコいいからといって、頭に乗らず、どの生徒にも節度ある行動をとって頂きたく……」

アシユマは、女子の機体であるにも拘らず、何故こちら側の機体に配置されたか分かった。

要するに『前科（除霊室でのアーチエルとのキス）』がある人間だから、目の届く所において置きたいのだ。

「……んせい、アシユマ先生！」

「……何でしょう教頭先生？」

「話はちゃんと聞いてましたか？」

「はあ、途中まで……」

アシユマはボーっとしていた。

「アシユマ先生……貴方は本当に、それさえなければ、非常に優秀な先生なのに……私は不出来な息子を持った母親の様な気持ちですよ。全く……」

「ケリー教頭は、息子さんをお持ちなので？」

アシユマはふと訊いてみる。

「何を言っているんですか？ 私は結婚すらした事ありませんよ」

「ああ、さいで……」

うんざりするアシユマを尻目に、機体は目的とする地点へと、降下を開始した。

砂浜に着陸した二機のサイコ・フライヤーは特注品で、縦に四階層あり、ホテルを兼用していた。

これから三泊四日の間、活動の拠点となる物である。

生徒達は、大抵は学校指定の水着を着用していたが、中には自前で水着を用意してくる生徒もいた。

特にそれは、女子の間でその傾向が強かった。

アーチエルも、そうした自前の水着を用意してくる、生徒の一人だった。

アーチエルの水着は、白のベアトップのワンピース。

ベアトップのフチは薄い藤色。

花柄のパレオを巻いていた。

カレーの行事（？）がある為か、露出を多くする傾向の中で、アーチエルは敢えて露出を控えめにする傾向が見られた。

一方、アルミナは学校指定の、紺のワンピースのスクール水着だった。

先生達、生徒達はそれぞれ天幕を張り、それぞれカレー作りの準備を始めた。

水は現地で調達するとして、材料を並べ調理を開始できる様にしておく。

シェフ役の者が材料を検分して、調理が始まる。

シェフ役の者は責任重大であった。

カレーの味が勝負を左右し、決する事もあるからだ。

乙女の戦いは既に始まっていた。

そしてアーチエルの班ではアーチエルがシェフ役を買って出ていた。

他の残りの者は、玉ねぎを微塵切りにしていたり、ニンジンの皮を剥いたり料理の下ごしらえをしていた。

アーチエルは最後に食感と、味を調える作業をする。

カレーのルーを作るのにスパイスのブレンドから始めていた。

「アーチエル、頼むぞ。お前に全てがかかっているんだからなあ」  
アルミナが頼み込んだ。

「あら、アルミナさん、やっぱりオルバニアン様に？」

アーチエルは少し悪戯っぽく訊いた。

「い、いや、そういう訳じゃねえけどよ……所で、他の班みたいに、シーフードカレーにするとか、そういう事はしない訳？」

アルミナは少し狼狽える。

「あまり奇をてらう様な事はしません。あくまでベーシックにまとめます。その代わりに、味に深みとコクを出します」

手早く調理が終わった班は、我先にとカレーを持って、目当ての男子の所へと急いだ。

当然アシュマの所にも来た訳であるが、ケリー教頭がアシュマの後ろに陣取り、女子達は中々アシュマに手渡せずにいた。

アシュマはサングラスを掛け、黒のビキニパンツと言う出で立ちだった。

鍛え抜かれたその体は、太すぎず細すぎず、程良いバランスを保ち、その表面には今まで潜ってきた修羅場の数を表すが如く、大小さまざまな傷跡が刻み込まれていた。

アシュマは、

「はあ」

と、溜息を一つ漏らすと、ケリー教頭の前に来た。

「駄目ですよ、アシュマ先生。認めませんからね」

ケリーは言ったが、

「認めてもらわなくて結構です」

アシユマは言つて、ケリーの前に行き、とんと、眉間を叩いて、ケリーを気絶させてしまった。

そしてまた、

「ふう」

と、溜息をつき、ビーチパラソルの下、クーラーボックスの上に腰掛けると、アシユマの前に、たちまち行列が出来た。

そして、一人めの生徒に、

「イマイチ！」

を出した。

ルーランは、傘持ち二人を従えて、カレー製作風景を見て回っていた。

周りを見ると妙にはしゃいでいる所や、逆に葬式でもあったのかと言う程落ち込んでいる所があった。

ルーランは臨時雇いの近習の生徒に訊いた。

「何故、あの様に、たかがカレー作りで、一喜一憂しているのじゃ？」

「はい、それは、我が校の伝統にございまして、女子が、好きな男子にカレーを用いて告白するのです」

近習が答える。

「カレーをどの様に用いて、告白するのじゃ？」

「ちょっと興味が惹いたのかルーランが近習に訊いてみる。」

「ははっ、それは女子が好きな男子にカレーを食べさせまして、『美味い』と言わせると告白成就と相成ります」

「好きでもない女子からの告白には、どう対処するのじゃ？」

「それはで御座いますな、男子がカレーを食した時に、『いまいち』と申さば、交渉不成立と相成ります」

「ふむ、成程」



そう言つてルーランは歩き出した。

「余も、カレーを作つてみたい物じゃのう」

「畏れ多い事で」

「お畏れながら、陛下」

少女がルーランを呼び止めた。

「これ、無礼者！ 下がれ！」

「良い、差し許す。言つてみよ」

ルーランが許した。

「ははっ。ありがたき幸せ。陛下におきましてはご機嫌麗しゅう存じ上げ奉ります。つきましては……」

少女は口上を述べる。

「よい。要点だけ申せ」

「はっ、はい……陛下に……陛下に是非このカレーを、食して頂きたく……」

その少女がカレーを差し出す。

「世迷言を！」

近習の者が、差し止めた。

「まて！ 良かろう。食して使わす」

「あ、ありがたき幸せ」

少女は思わず面を上げた。

『これは……』と、女のサーナリアが思わず息を呑む程、その少女は目が大きく黒眼がちで彫が深く、肌理細やかそうな肌を持つ、見目麗しい少女であつた。

スプーンを持ち、カレーを口の中へと運び込む。

たちまち溢れる、芳醇な香りと味とコク、そして適度に広がるスパイシーな味わい。

これ程、美味いカレーには、めったにお目にかかれる物ではない。ルーランは思わず、

「美味い！」

そう言つてしまった。

その直ぐ後で、

(しまった！)

と、思った。

「ルーラン・ナル・テルドリニア陛下『美味い』出ました」

カラン・カラン。

と、ベルの音が虚しく響く

「近う寄れ」

ルーランが近習を呼んだ。

「はっ。何で御座いますよう」

「もしもじゃ、もしも今の『美味い』を反古(ほん)にしたとなれば、余は  
なんとなる」

ルーランは本気で困っている。

「然様ですな、永久に卑怯者呼ばわりされるか、卒業するまで女子  
に、総スカンを食らうか、まあ、どちらかでしょうな」

近習に釘を刺された。

「へ、陛下？　もしかして陛下は……」

ルーランと、近習の様子を見て、少女は何かを察した様だ。

先程の少女は、目を潤ませ両手を口に持って行き、『いやいや』  
をして見せた。

「ま、待て。女子よ。勘違い召さるな。余に反古の意思等無い」

「ほ、本当に御座いますか？　なら、ルーラン様と御呼びしても、  
構わないでしょうか」

少女は喜んでルーランの下へ寄る。

「これ、無礼者！　陛下に対し、名前で御呼びになる等、言語道断  
！」

「やはり私の様な女子では、いけなかったんでしょいかあ」

一転少女は、泣きそうになる。

「だ、大丈夫じゃ。呼んでよい。ルーランと。さあ、好きな様に呼  
ぶが良い」

「で、では……ルーラン様」

少女は名を呼んだ。

「あの……、腕組んでもいいですか？」

やっと、アーチエルがカレーを作り終わった。

アルミナが味見してみて、

「こいつぁ、美味えよ」

舌鼓を打った。

早速アルミナやミカが皿にご飯とカレーとフクジンツケを盛って、意中の人の下へ急いでいった。

アーチエルも早速盛り付け、

「では、エミルさん、リィナさん。後を宜しく願いますね」

二人に断わり、

「はいよ、頑張つてねえ」

エミルに応援され、いそいそ出かけた。

アーチエルはアシュマの居場所を捜し、近くにアシュマがいないか、友人に訊いた。

すると、

「ああ、アシュマ先生ね。アシュマ先生へのカレーだったら、あそこの行列あるでしょ？ あれがそうだから」

そう言われて、

「有難う御座います！」

礼を言った。

この行列かと思ったそれは余りにも人数がいて、余りにも長かった。

取敢えず列の最後尾に着いたが、アーチエルよりもまだ後に付く女生徒がいた。

これとは別に、ヨディは何をしていたかと言うと、エファールの作ったカレーを美味しそうに食べていた。

別に教職員は、カレー等作らずに、ホテル・サイコ・フライヤー

から食事を持って来れば良いのだが、エフアールは気まぐれで……いや、本人は気付いてなかったが、ヨディに食べさせるつもりで作ってみた。

その証拠に、ヨディに連なる列に並び、ちゃんと一口食べさせて『美味しい』と、言わせたから偉いものである。

ヨディはヨディで、どこで『美味しい』を出すか悩んでいた。

（悩んで出す物ではないのだが）そこへ丁度、黙って渡されたカレーの美味しい事、美味しい事。

つい、『美味しい』と言ってしまった。

するとすぐさま、ヨディの横にしていた女生徒が、ハンドベルを、

カランカラン。

と、鳴らしながら、

「ヨディ・ヨフル先生！ 『美味しい』でました」

走って触れて回った。

今、ヨディは、エフアールのカレーを美味しそうに食べていた。

ヨディの側に座りながらエフアールは、

「私でよかったの？ 『美味しい』を出して？」

と、訊いていた。

「ん？ 良かったと思いますよ？ 僕も後悔して無いし」

ヨディは満足そうだ。

「そう」

「『そう』って、それだけですか？」

「そうよ？ 他に何かある訳？」

「『そう、良かったわ』とか『そう、嬉しいわとか』」

「全部内包してるから、いいの。野暮な事を訊かないの」

「有難う、エフアール」

ヨディは真面目にエフアールを見つめた。

「や、やめてよ。は、恥かしい」

「は、ははは。やっぱり僕には真剣な顔って、似合わないんです

かねえ」

「そ、そんな事無いわよ？」

「エファール……」

ヨディは優しそうな表情と声音で、エファールを見つめた。

「ヨディ……」

「なんだい？ エファール」

「生徒達が見てるんだけど？」

ミカはジークを捜していた。

アシユマよりも輪をかけて無愛想でぶつきら棒なこの青年は、意外に女子の気が高かった。

ジークを捜したが、どこにも見つからない。

そこいらの男子と言う男子に、ジークの行方を聞きまくった。

皆、

「知らぬ」

と、言う答えが帰ってきた。

ミカは焦った。

他の女子に、人気の無い所まで連れ出され、カレーを食べてそのままいい雰囲気にならなったら……。

「ねえ、その男子、ジーク君知らない？」

「ジーク？ ……ジークだったら、さっき女の子と二人で、この岬の先まで、二人で歩いていったぜ？」

「ホント？ アリガト！」

ミカは岬の先を目指して、進んでいった。

岬の先へと進んで行くと、途中女の子とすれ違った。

少し泣いている様だった。

ジークは岬の、先端で立っていた。

ミカがジークを探し当てると、ジークはミカの方を振り向いた。周りに女子の姿は無い。

ミカは、ジークに近付いて行つた。

「もう何人かの子からカレーを食べたと思うけど、良かったらあたしのカレーも食べてみてくれない？ 冷めてるけど……」

ミカは目を瞑って、カレーの皿を差し出した。

ジークは、目の前で緊張し、目を閉じたままカレーの皿を差し出している少女の姿を見て、ほんの少し他の人間が見ても殆どわからない位、口元をほころばせ黙って少女の皿を手を取った。

ミカは皿を持っていた手が軽くなったのを感じ、恐る恐る目を開けてみた。

すると、冷めているにも関わらず、気に入ったのか、美味しそうにカレーを食べているジークがいた。

ミカはジークがその後、何と言うのかドキドキしながら待っていた時、ジークは食べるのをやめてたつた一言、

「美味かったぜ」

と、言った。

ミカはその言葉を聞いて、嬉しさのあまり舞い上がってしまい、逆に何を言ったら良いか分からずに、その場に立ち尽くしてしまつた。

すると、ジークの方から、

「もう少し、ここに一緒にいないか？」

と、言いながらミカの肩を抱いてやった。

アルミナはオルバニアンを捜していた。

カレーを渡す為だ。

オルバニアンは容易に見つかった。

なんと、ベル持ちの女の子と仲良く談笑していた。

「何を頓珍漢な事をやっているんだ！？」

アルミナはオルバニアンの近くへ寄って行つた。

「おう、アルミナ。俺にカレーか？」

オルバニアンは、近付いてくるアルミナを認めながら、そう言っていた。

アルミナは、オルバニアンの手を取り、砂浜から岩場のある方へ歩いていった。

当然ベルもちの女の子もついてきたが、

「はい、その娘、野暮つたらしい事しない！　そこで待つ  
そう言った。

少し苛ついているようだ。

（何を、怒っているんだ？　アルミナ……）  
オルバニアンは少し困惑する。

「ま、全く嫌になっちゃうよねえ、もう少し落ち着いた所へいこうかな？」

一転して機嫌をころりと変えるアルミナ。

（何を取り繕う様に言っているんだアルミナ？）  
ますます混乱するオルバニアン。

「え〜とこっちの方かな？」

（こっちの方になって、人氣がどんどん無くなって行くぞ？）  
確かに辺りに人影はなく、岩場があるのみ。

アルミナはそんなところへオルバニアンを誘う。

「……………」  
（黙るなよ、アルミナ。ホントに人氣が無いぞ）  
「……………」

（アルミナ……）

「……………」

（アルミナ、後姿も……）  
「御免ねもう少しだから……………」

（笑顔も可愛い……）

「……………」

（アルミナ……俺……俺）

「はい、ここ。ここなら邪魔が入らないでしょ」

とうとうアルミナは誰も来ないような岩場の影へオルバニアンを連れて来た。

アルミナはそこでオルバニアンに笑みを向ける。

（そんな笑顔で俺を見つめないでくれ……）

「はい、カレー。お待ちどうさま」

（もう自制が利かない）

オルバニアンはスプーンを持って、カレーを一口食べた。

「どう？」

アルミナが訊く。

「美味い」

オルバニアンが返す。

「やった！」

アルミナはガッツポーズをとった。

が、次の瞬間、空が回っていた。

いや、自分が押し倒されたのだ。

それが証拠に、オルバニアンがアルミナの上に、馬乗りになっているではないか。

そしてオルバニアンは、アルミナに覆いかぶさりキスをした。

初めの内、アルミナは抵抗している素振りを見せたが、やがて、

オルバニアンを受け入れ、

「カレーの味がするぞ」

と、窘めた。

その言葉で少し余裕が出来たのか、

「アルミナ、好きだ……」

そう言い、アルミナは、

「……嬉しい、オルバニアン」

そう言って二人はキスをした。

さてアーチェルの場合であるが、アシュマへの行列で、ちゃんと



順番を待っていた。

アシュマはいい加減うんざりしていた。

誰だ、こんな企画考えたの？

一応、生徒の気持ちを少しでも汲んでやろうかと思って手を出したのが、間違いだった。

まさか、こんなに並ぶとは。

もう、お腹が一杯だ。

どこかに救いの女神はいないものだろうか？

すると少し向こうに、アーチエルがいるではないか。

この生涯の中で、これ程彼女の存在をありがたく思った事は無かった。

彼女の順番が来た。

「はい、アシュマさま。お待ちどうさま。カレーです」

アーチエルが微笑む。

アシュマはカレー皿を受け取り、カレーを一口食べた。

アーチエルが美味しい料理を作るのは知っていたが、彼女のカレーがこれ程美味しいとは……。

「美味しい!!」

アシュマは力を込めてそう言った。

「アシュマ・アトー先生『美味しい』でした」

カランカラン。

と、ベルが鳴り、ベルもちの少女が触れて回った。

暫くして、アルミナとオルバニアンは……。

「結局『最後まで』……しちゃったね」

アルミナが恥かしそうに言った。

「後悔しているか？」

多少不安になるオルバニアンだった。

「全然！」

「痛いかな？」

少しアルミナの事を労わる。

「……それは、チョツと……。アナタも始めてだったんでしょ？」  
微笑んでオルバニアンの方を向く。

「な、何、言ってるんだ。よし、帰るか」

照れて帰ろうとするオルバニアン。

「その前にカレー全部食べてよね？ アーチエル様特製のカレーなんだから」

「どおりで美味しい訳だ」

「言っただなあ、こら」

「あははは、嘘だよ嘘」

二人は仲良くじゃれ付いていた。

オルバニアンとアルミナは一頻り騒いだ後、仲良く帰っていった。  
帰った先では、律儀にベルもちの女の子が待っていて、

「お味はいかがですか？」

そう訊いて来た。

なのでオルバニアンが、

「美味かった」

そう言くと、ベルもちの女の子は、ちよつとがっかりした様子で、  
「オルバニアン・マグマイヤー君『美味い』でました」

触れて回った。

夜、ビーチで、カレーライスの敗残兵どもがカレーライスを作っていた。

ビーチより少し離れた岩場で、ルーランがやってきて、そこでルーランは衣服を脱ぎだし晒を取り、下着も取って、海にゆっくりと入った。

不意に懐中電灯の光が、辺りを照らす。

「誰だ？ こんな夜更けに」

男の声だ。

ルーランは身を硬くした。

懐中電灯を当てられて、眩しい思いをし、

「眩しい！ 寄るな！ 来るな！ 無礼者！」

そう叫んだ。

「なんだ、サーナリアじゃないか」

「そういうそなたは……アシュマか？」

「そうだ。アシュマだ、サーナリア」

アシュマは腰を落としながらそう名乗りを上げた。

「その名で呼ぶな。その名で呼んで良いのは兄上だけだ」

「わかった、わかった。ルーラン。これでいいか？」

「『陛下』が抜けておる。何故そなたは、わらわを呼び捨てにするのじゃ？ 呼び捨てにして良いのは……」

「兄上だけか」

「そ、そうじゃ……」

サーナリアは少し恥らう。

「まだ泳ぐのか？」

「悪いか」

サーナリアがそう言うと、アシュマ懐中電灯でルーランを照らした。

「アシュマ！ 何故、わらわを照らす？ まぶしい。止めよ！」

「いいえ、止めません、陛下の恩為に御座います」

アシュマは揶揄した。

「わらわの？ どう言う事じゃ？」

サーナリアはアシュマの揶揄に気付かず話の本質を聞いてきた。

「ここいら近辺はマーマンが良く出没するそうだ。マーマンは光を嫌う。昼に出没しないのはその為だ」

マーマン……半人半魚。

非常に知能が高く人を襲う事もあるデミヒューマンだ。それがこの辺りにいると言う。

「電灯はもうよい。消せ！」

「死ぬぞ？」

アシュマは懐中電灯を消した。

その上で、まわりに気を配り、辺りを警戒した。

向こうの方で、パシャツ、と音がした。

サーナリアは、びくりとした。

アシュマは鬼虎を抜いた。

（あれは、罠だ。本物はこちらに来る）

アシュマはそう読んだ。

「ア……アシュマよ。上がった方が、良いじゃろうか？」

サーナリアが怯えたのか、そう訊いてきた。

「そうした方が良いだろう。早く上がれ」

「う、うん。そうする。向こうをむもガッ！」

ザパツ！

サーナリアは、水の中に引きずり込まれた。

それと同時に、アシュマは鬼虎を口にし、海へと飛び込んだ。水

中では三、四匹のマーマンがサーナリアを取り囲んでいた。

夜の海の中は、真っ暗だ。

普通の人間ならば、直ぐ近くで無いと、何があるか、判別も不可

能だったろう。

アシュマは水中でも、マーマンと遜色の無い動きを、見せていた。

まるでイルカの様でもある。

見えているのである。

この真っ暗な水の中を。

それと同時に『気』を、レーダー代わりに也使っていた。

アシュマは、こちらへ襲ってきたマーマンに、鬼虎を突き刺した。

水中では突き刺す運動が、一番効率外良いからである。

一匹目は眼を突き刺した。

狙いは正確だ。

直ぐにそいつは、戦線から離脱して行った。

二匹目は横合いから襲ってきた。

そいつには鳩尾に、鬼虎を存分に突き刺してやった。

その間に三匹目も口の中を、思い切り突いてやった。

四匹目は、これは適わんと思ったのか、サーナリアを置いて逃げていった。

アシユマはサーナリアを抱き抱えると、夜の海へと上がった。

アシユマは飛び込む前に投げ捨てたパーカーを引っ掴みサーナリアにかけてやった。

そして息が無い事を確認すると、そのまま人工呼吸と、心臓マッサージを始めた。

幸いにも、人工呼吸数回目で水を吐き、むせながらサーナリアは覚醒した。

「げほっ、げほっ！　そ、そなたは何をしておるのじゃ？　げほっ

！」

「お前の気呼び戻していた」

「な、これは……わらわは裸ではないか？　みたな！？」

「それは陛下がそのままで、海に入られるので」

「なに、わらわの所為と申すか！」

「当たり前ではないか！！　無責任にもその様な格好で海に入り、マーマンどもに襲われ、俺がいなかったら、どうなっていたと思っているんだ！？　大体お前には王としての自覚があるのか？」

アシユマは怒鳴った。

幸い辺りに人はいない。

サーナリアはそれ以上恥を掻く事はなかった。

だが、問題はそこでは無い。

サーナリアの軽拳が問題となっているのであった。

「……そこまで……」

「？」

「そこまで言わんでも良いではないか。どうせわらは飾り物の王女を男と偽って祭り上げられた偽りの王じゃ。だから昼日向泳げず

に、こんな時間のこんな所でしか……」

サーナリアは感情を爆発させた。

今まで抑えていたものを吐き出していた。

偽りの日々。

抑圧された日々。

もう我慢が出来なくなっていた。

サーナリアは、最後には泣き声に変わっていた。

涙もぼろぼろと大粒の物を零して、砂浜を濡らしていた。

アシュマは、ぽんとやわらかくサーナリアの頭に手を乗せ、

「すまなかった。言い過ぎた。ただ、これからはもう少し気をつけてくれ」

声を掛けた。

「うっ、うわああああああ……」

サーナリアは泣き出した。

アシュマが柔らかく、そして大らかに、それを包み込んでやった。そして暫くしてアシュマがサーナリアの晒を巻いていた。

晒は巻き終わり、衣服をつけ、そしてサイコ・フライヤーへと戻っていった。

二日目は基本的に自由行動の日である。

泳ぎに行く者。

ビーチバレーをする者。

適当に海をぶらぶらし、海の家に住つく者。

ここいら近辺は、すべてスコラ関係者が買い取り、プライベートビーチの感を呈していた。

チョツとした、洋服や水着、アクセサリーはそういう売り場があり、購入求める事が出来た。

海の家にて。

御座を惹いた座敷。

ヨディとエファールはヨディがエファールに膝枕をしてもらって、なおかつ団扇で扇いでもらっているという、贅沢な一時を味わっていた。

ヨディは眠っていたが、時々うなされて寝汗を掻き、エファールにそつと優しくハンカチで汗を拭ってもらっていた。

そうすると、ヨディは少し安心した様に、また寝息を立てて眠る。そうして、また、エファールは団扇を扇ぎだす。

普段は女子に優しく、男子に媚びない事で女子に人気のエファールだが、男子にもそれなりの人気があり、何故、あの益暗教師で有名なヨディなんかにかレーを食べさせる様な真似をしたのか、納得の行かない所であった。

一日目カレーの救済措置その一、『決闘』と言う物があつた。

決闘は本人同士と（この場合はヨディと生徒との）合意と更に女性の（この場合はエファールの）合意の下決闘が行われる。

大抵、挑まれたら、その男子は決闘を受けざるを得ない。

なぜなら、男子が決闘を拒んだ時点で、『卑怯者』の烙印を押され、卒業まで罵られる事になるからだ。

そして勿論勝った方が、その女性を独占出来た。

どこかとあたりを蹴散らしながら乱暴な生徒が、乗り込んで来た。

そして一言、

「ヨディ・ヨフル！ カレーの救済措置により決闘を申し込む！！」

「んあ？」

ヨディは寝惚けた眼を擦る。

「いいのよあなたは寝ていて。この決闘拒否します。もう一つの救済措置『ナンパ』にでも行つてらっしゃい」

誰に言っているのか、行き所の無い怒りを、

「覚えてやがれ」

の捨て台詞を残して、去って行ってしまった。

「悪かったですかねえ」

ヨディは起き上がった。

「いいのよ。いい勉強だわ」

「そうですかねえ」

ヨディは生徒が気の毒に思えた。

が、代わってやるわけにもいかない。

「そうよ。さあ、耳掃除してあげるから」

ヨディは再びエファールの膝に頭を乗せた。

その時二人に影が落ちた。

影の先を目で追って行くと、そこにはスチナ・アガネ教諭がいた。

「ほほほ！！ みつとも無くてよ。エファール先生。誰にも相手にされない物だからって、そんな男に肩入れなんかしちゃって。ああ、みつともないですわ」

スチナは言った。

「大きなお世話よ。あたしがどんな男に、どんな風に尽くそうと、あたしの勝手でしょ？」

エファールが反撃した。

「ああ、取り繕う所なんて、ホントみつともなくてよ」

スチナが更に二人を貶めた。

「あら、なら訊くけど、アシユマ先生に振られたアナタは、みつとも無くないのかしら？ それにこの間のティアマット騒ぎ、彼のほかに誰が事態を収拾できて？」

エファールの反撃は辛辣だった。

「うっ」

「それに聞けば『カレー史上』初めて、『不味い』を出したんですってね？ この快拳には脱帽するわ。おめでとう、ミス『不味い』さん」

「うっ」

「しかも、『不味い』を出したのが、アナタの愛するアシユマ先生なんて、素晴らしいわ。運命のめぐり合わせとしか、言い様が無いわ」



「うつ、うわあゝん。おぼえてるよゝゝ」

スチナは泣いて逃げ去った。

スチナが去った後で、ヨディがエファールに、

「チョツとやりすぎじゃないの？」

訊いた所、

「あら、いいのよ。向こうから吹っ掛けて来た喧嘩なんだし。あれぐらいが丁度いいのよ」

そう、言い放った。

そこへ……、

「何が『丁度いい』のかしら」

と、やって来た者がいた。

「アナタまだ懲りて……」

エファールが声をあげようとしたがそこに居たのは、

「ミ、ミス・ケリー・サトウ……！！」

エファールが声があげた。

「え？ ミス・ケリー？」

ヨディとエファールはその場で正座した。

「どうして、アシユマ先生の関係者と言うのは、こつもまあ、ふしだらな方が多いんでしょうかねえ」

エファールが恐る恐るケリー教頭に向かって、訊いていた。

「あ、あの……膝枕をして耳掃除をするのが、そんなにふしだらな事なんでしょうか？」

「当然です！！ あたりまえです！！ その辺の認識はアシユマ先生と変わりませんね。誰が悪いのですか？ やはりアシユマ先生ですか？」

ミス・ケリーは額に血管を浮かべて睨んでいる。

「そうです」

「ちがいます」

ここで、ヨディとエファールの答えに差が出た。

「どちらなのですか！？」

ミス・ケリーが更に苛々とする。

「そうです」

「ちがいます」

埒があかないと思ったのか、ミスケリーは、

「では個別に訊いていきましょう。ヨデイ先生は？」

と、訊いてきた。

「そうです」

「理由を聞きましょう？」

「アシユマ君がエロエロ魔人でエロエロ、エロい事してるからです」

「それだけですか？」

「はい！！」

「ヨデイ先生……アナタは天真爛漫で宜しいですね、良くも悪くも

……」

ミス・ケリーは頭を押さえた。

痛いのだろう。

別な意味で。

「お？」

ヨデイは頓狂な声を上げた。

「ミス・ケリー少し失礼します。『お』じゃなくて。『はい』でし

よ？ お返事」

エファールは、小さい子に教育を施すように話をしてた。

「はい」

「はあ」

エファールは溜息をついた。

「お待たせしましたミス・ケリー」

「そ、そうですね。ではミス・エファール。ミス・エファールは違うという答えでしたね？ どういう事ですか？」

ミスケリーは訊いた。

エファールは少し戸惑った後に、答えはじめた。

「ここに来る少し前ですが、私が彼に『火』をつけました」

此処で言う彼とはアシユマの事だ。

「いつ？ 僕知らないよ？ そんな事。えっちしちゃったの？」

「えっち、えっちっていうなあ！ 大体えっちなんかして無いわよ！ オロ邸でキスただけよ！」

エフアールが憤る。

「そんだけ？」

「それだけよ？」

「それで、アシユマ君に火がつくかなあ？」

ヨディは甚だ疑問と言う顔をした。

「じゃあ、アーチエル様に火が点いたってのはどう？ それに絆されてアシユマにも、と言うのはどうかしら？ 実際あの夜、アーチエル様が私の部屋を覗き見たのは判っているのよ」

エフアールが当時の状況を思い出す。

「では、今の二人には火が点きつ放しで、その時以上の所まで進んでいると！？」

ケリー教頭が結論の先を急いだ。

「いやあ、あの二人の事だ。キスに毛の生えた程度の事しかして無いでしょうよ。ディープキスまで言ってるや御の字……いや、行つてないかな？」

ヨディが自分の推測を述べた。

「でい・でい・でいーぷ・きす。そんな、何てふしだらな。こ、こうなったら聴聞会を開いて……」

ケリー教頭は混乱した。

両手で頭を押さえている。

「ですから教頭、まだそこまでは行つて無いでしょうって」

ヨディがミス・ケリーをなだめる。

「判りませんよ。ディ……ディープ・キスまで行っているかも知れないじゃないですか」

ミス・ケリーは混乱したままだ。

「じゃあ、飯に行っているとして、そのどこが問題なんですか？」  
ヨデイが開き直った。

「その、せつ、せつ、せつ、……つまり、先生と教え子の一線を越えると言いましようか、なんと言いましようか」  
支離滅裂な事になってきた。

「それは無いでしょう。幾ら何でも」  
ヨデイは取り合わない。

アシユマはがつつくようなタイプでは無いし、アーチエルは晩熟<sup>おくて</sup>だ。

男女の關係に發展するとは思えない。

「あるかも知れないじゃあないですか？ 若い人達は短絡的ですか」  
ら

「短絡的なのは、教頭ご自身なのでは？」

ヨデイが指摘する。

確かにすぐ教師と生徒の關係をかんぐる。

短絡的といえば短絡的だ。

「私が短絡的だと！ そう仰りたいのですか、貴方は？」

「はい、少々。例え教え子がそうだったとしても良いじゃないですか？ 自活できるまで避妊をしつかりやっておけば」

「しかし、アーチエルさんは……アーチエル・アップルトンさんは本当に、良い生徒で、あれ程成績が優秀な生徒を、見た事が無くて……」

ケリー教頭はまだなされていない事に落胆し始めた。

落胆等今は無意味な事なのに。

「分かりました教頭、今日は飲みましよう！ とことんまで！！」  
エファも付き合ってくれ」

ヨデイが言い出した。

「え？ 私も？ いいけれど……」  
エファールが少し困惑する。

「ぐすつ、聴いて下さい教頭。ぐすつ。私だってアシュマの事が、好きだったんです。だって、一番最初に粉振ったの、私だったんですよ。それなのに、最後にこんなの好きになっちゃって……」

エファールは飲み始めたのはいいが、完全に絡み酒になっていた。

「エ、エファ……それは無いんじゃないかなあ？」

ヨディは、完全に困っていた。

「ですから、教頭。私はアシュマに捧げる筈だった乙女の純潔を、こんなだらしなない男に捧げちゃうんですよ。」

「そ、そんなにお嫌なら、別れるというのは、駄目なんですか？」

ミス・ケリーが困惑する。

それにも増して、えらい所へきてしまったと思い、後悔の念が湧き起こった。

「えへへ……駄目。好きだから」

そう言つてエファールは教頭の前で、

「ちゅっ」

ヨディにキスをしてまつた。

「ま！ エファ……ま・いいでしょう。今は大目に見ましょう」

エファールは、皆のぐい飲みを注いで回り、そして自ら、

「かんぱーい！」

言つが早い、一人大きめのぐい飲みを一気飲みし始めた。

「あー……エファールさん？ そんな飲み方は、拙いんじゃないかなあ？」

ヨディが言い終わるうちに、エファールはぐい飲みの酒を乾してしまつた。

そして、顔がにつこり微笑んだまま……ヨディがおでこをチョン、と叩くと、そのまんまの体制で、ゆつくりと後へ倒れ込み、泥酔し寝てしまつた。

「さて。あなた方には、あえて厳しく問い咎める事は致しません。ただし生徒の眼がある以上、今まで以上に気を配る様に。それにエ

ファール先生は、何だかんだ言ってヨディ先生の事が好きな様な  
で、優しくしてあげなさいな。私からは以上。後は任せましたよ。  
さて今度はアシュマ先生ね」

ケリー教頭はそう言って、去っていった。

## 第九節 キャンプファイヤー

アシユマはアーチエルと待ち合わせて、そんなに遠くない場所まで、散歩をしようという事になった。

アシユマはビーチの出口で待っていた。

アシユマの格好は黒のタンクトップにジーンズにブーツ、そして丸首の革のジャケットに鬼虎。

ジャケットは夏の間は暑いので、腰に巻いていた。

「アシユマさまあゝ」

アーチエルが来た様だ。

アーチエルは走って来て、肩で息をしていた。

今日のアーチエルはワンピースだ

白地に黄色とオレンジのギンガムチェックの柄が入り、襟と袖口は白で、下の裾からフリルが見えている。

腰のリボンで絞っており、ナチュラルに体のラインが見えて健康的な色気があった。

大きなストローハットとあいまって、とても可愛くみせていた。

肩で息してかがんでいる為、襟首から胸元が見える。

流石にこれ以上は不謹慎なので、覗くのをやめた。

「上るかい？ 下るかい？」

アーチエルに訊いたみた。

「上りましょう」

即座に決めた。

ビーチは水辺から離れた所に、コンクリート製の堤<sup>つみ</sup>があり、一種の空間を作っていた。

コンクリートの堤を超えると、そこには道があり、道を越えると、丘があった。

その大きな目の丘には、つづら折に途がくねって、頂上を目指していた。

アーチエルには、行きたい場所があつて、そこへ一目散に向かつていて、途中の景色を楽しむ余裕に欠けていた。

アシユマは途中の景色に眼をやり、アーチエルを呼び止めた。

「アーチエル？ アーチエル？ 止まって見てごらん？」

「え？ アシユマさま？ 目的地はもう少し先で……」

「ほら、見てごらん？」

「え？ ……わぁ！」

そこから見えた景色は水平線で区切られた藍と蒼で、蒼に光の反射で出来た銀の幕が掛かつていた。

空には雲の白があり、地には砂浜の白と岩場の黒とで眼を見開く様なコントラストがあつた。

左右の岩場の先にある緑が彩りを加えていた。

「わぁ、凄い！！ 綺麗……」

「だろう」

そういうアシユマ自身も、『綺麗』等と言つた感情を持つのは何年……いや、十何年ぶりだろう？

そんな事を思いながらアシユマは、アーチエルと、共に途を上つていった。

道を登り上つて行くにしたがつて、景色が微妙に変わつて行き、見る者の眼を飽きさせなかつた。

途を上りきつた所に、昔の聖堂があつた。

崩れかかつてはいるが、柱といい、ステンドグラスといい、何かの女神像といい、成程これは昔の遺跡だと思つた。

ここに来る前後から、アーチエルは押し黙つたままだつた。

遺跡の荘厳さも何も、今の彼女にとっては関係ないらしい。

アーチエルは人気の無い方へ無い方へと、アシユマを引つ張つて行つた。

アシユマは、成程と思い当たつた。

彼女は寂しいのだ。

そつえば、彼女に最後にキスをしたのは試験前だったか？



アシュマはそろそろ死角に入っただけ、頃合かなと思った所で、声をかけようと思い……、

「アーチエル」

「アシュマさま」

同時にお互いの名前言ってしまっただけ、二人は笑い出し、緊張感も何もなくなくなってしまった。

「変な事を、変な風に考えるから緊張してしまうんですね。くすつ。ずっと……ずっと不安で、アシュマさまに、まともに逢えなかったから寂しかったんです。……アシュマさまキスして下さいませんか？」

アーチエルは、心の底に溜まっていた不安といった物を、さらりと言った。

「喜んで。王女様」

アシュマは優しくアーチエルの頬を両手で包み込むと、優しくキスをした。

一通りキスをする、アーチエルはアシュマに抱きつき、

「寂しかったです。ずっと、こうしてここに来るまで、こうしてもらえるまで」

言っただけ顔を埋めた。

そしてアシュマはそんなアーチエルを優しく思い、アーチエルを強く抱きしめた。

アーチエルは一言、

「うれしい」

と、言葉を漏らした。

手を繋いで帰ってくると、アシュマは目の先にケリー教頭がいるのを認めた。

どうやら何かを待っているらしい。

嫌な予感がする。

大抵この手の予感は当たる物だ。

「アーチエル、逃げよう」

「ふふつ。はい！」

アーチエルは鬼ごっこか、隠れんぼでもするかのように楽しそうに言った。

顔が笑顔でほころんだ。

アシュマはミス・ケリーの目から逃れようと、無意識に気配を消した。

「アシュマさま、朧霞を使っておられます」

アシュマは、はっ、となつて、

「済まん、つい癖で……」

と、アーチエルに謝る。

つづら折の最初の曲がり角に来た。

「ここで、暫く様子を見よう」

「はい、でもお空が……」

確かにさっきはあんなにも晴天だったのに、今では、すぐにも降り出しそうな空である。

「降り出したら、海の家に行くよ。サイコ・フライヤーまでは遠い」  
アシュマが走る用意をする。

アーチエルはアシュマの顔を見て、黙ってにつこり頷いた。  
ぽつと、アーチエルの頬に何かがあたった。

「きた」

アーチエルが言ったか言わない内に、雨が土砂降りになって、

「これはいかん！」

アーチエルを抱えて、アシュマは海の家を駆け込んだ。

そこには似た様な理由で、ここへ駆け込んでいた者も多かった。  
そう、ケリー教頭も含めて。

しかもアシュマの隣に。

アシュマは、

「しまった。気配を読み間違えていたか」

そう呟いた。

アシユマも時たまそう言うポ力をする。

ケリー教頭は、

「あらま、貴方達！ 何てはしたない」

と、アシユマに素直に抱えあげられているアーチエルを見て、今にも卒倒せんばかりとなり、ケリー教頭は何とかその場にしゃがみこんで、それを耐えた。

そして……。

「アシユマ先生！」

「はい……」

「なんですか！ 気の無いお返事は！ もう一度！」

「はい！」

アシユマは、頭からやけくそになっていた。

「大体アナタはですね。生徒と教師と言うものを何だと心得て……」

「あ、あのう……」

「は、なんですか？ ミス・アップルトン」

「衆目の多い中、この様な話をされる方が、余程恥かしいかと存じますが……」

見ると周りの眼は、アシユマとアーチエルとケリー教頭に集まっていた。

「ご、ごほん！ で、では、アシユマ先生、後程、臨時の教頭室までおいでなさい。必ず。いいですね。ミス・アップルトンは……今回はいいでしよう。でも次からは容赦しませんよ」

「いえ、夫となる方の危難ですので、私も同席致します」

（あっちゃー！ 言っちゃったか）

アシユマは心の中で舌打ちをした。

「夫、夫となる……。王家の人間である貴女が……」

ケリー教頭が衝撃を受けていた。

アシユマは、この手の人間は、下手に弁解すれば弁解する程、深みにはまって行く事を知っていた。

（もう、何とでも言え）

アシュマは腹を据えた。

「では、あなた方の関係はどこまで進んで……」

ミス・ケリーが問う

「進んでも何もまだ、お父様に紹介しただけですわ」

アーチエルは、何を言い出すのかと思いつながら、答えていた。

「そうではなくて、肉体関係の事です」

「知り合いにボディ・ビルダーの方はいらっしゃいませんか？」

「そうではなくて！ あなた方はもうしたのかと訊いているんです！」

「教頭！ 御自分が何を仰ったのか、分かっているのですか！」

アシュマが叫んだ。

場は、暫くの間、しんとした。

「そうでしたねこれは私が間違つて……」

ケリーが言いかけるのをアーチエルが遮る形になって、

「アシュマさましたつて何の事ですの？」

アーチエルが言った。

場は一気に脱力した。

「……今の言葉で分かりました。今回あなた方が来るには及びません。このまま清い関係を保って下さいね。雨も上がった様なので、では」

ケリー教頭は立ち去ってしまった。

アーチエルはここで初めて自分がずっとアシュマにしがみついていた事に気がついた。「あ、ごめんなさい。アシュマさま。私つい、居心地が良かった物だから……」

「良かった。ついでに少しここで休んでいこうか」

「はい」

「しかし酷い目にあつた」

「雨に？ 教頭先生に？」

「両方にだ」

「今にして思えば、雨は、念導境界面で防げたのではないでしょう  
か？」

「あ……」

「うふ」

アーチエルはにつこりと微笑む。

「まあ、いい。ヨディ、あがるぞ」

「お」

アシュマは、ヨディの気を読んでいた。

「え？ ヨディ様がいるの？」

「あたしもいるわよ」

「え？ エファさん？」

「いらつしゃい、二人とも」

エファが優しく言った。

「何か飲むかい？」

ヨディが訊いた。

「じゃ、サケくれサケ」

アシュマは言った。

「はいよ」

ちやぶ台の上に、

デン！

真新しい一升瓶が置かれた。

「アシュマさま。お酒？」

アーチエルが言った。

アシュマは手酌でぐい飲みになみなみと注いだ。

「では友と、乾杯！」

「乾杯」

ヨディとアシュマで乾杯した。

「あたしも貰おうかしら」

エファールが言った。

「エファも駄目ですよ。さっき潰れたばかりでしょ？」

「私も何か飲みたい」

アーチエルが言う。

「じゃあ、なにかソフトドリンクだな。何がいい？」

アシュマが優しく受け止めた。

「じゃあ、アイランドコーラを」

「分かった」

アシュマが指をぱちんと鳴らして、バイトのボーイを呼んだ。

「アイランドコーラを一つ。後ぐい飲みをもう一つ」

「分かりました」

それは一分もしないうちに、やって来た。

そして、エファールも手酌で、酒をなみなみと注いだ。

「それでは乾杯」

「乾杯」

今度は女同士で乾杯をした。

「困りますねえ、アシュマ君。介抱する方の身にもなって下さいよ」  
ヨディが頭を抱えて言った。

「あら？ 私はアシュマに介抱してもらっても、一向に構わないけれど？」

先程ヨディの事を、好きだと言った女性とは、思えない発言をした。

「そんなア、エファさん」

「甘えた声出さないの。男の子でしょ？」

「うん……」

「エファさん、介抱はヨディ様にして貰って下さいね。私はアシュマさまと帰りますから。勿論、後ですけれど」

エファールは、アーチエルに先を越されてしまった。

「仕方ないわ。後で介抱してね？」

エファールはヨディの頬にキスをする。

「まあ」

アーチエルは真っ赤になって、顔を手で覆った。

「あら、これくらいの事は、あなた達でもしてるでしょう?」

「ええ、……まあ……」

「んふ。かわいい。本当に可愛いわね、貴女。食べちゃおうかしら?」

「エファさん……」

言ってる間にも、エファールはアーチエルの方へ、にじり寄って行った。

「アシユマさまあ……」

アーチエルは、アシユマの陰に隠れた。

「エファ、大概にせんとな」

アシユマは、一応エファールに注意した。

「ふん、いいわよ。ナンパを肴に、吞んでやるんだから」  
エファールはいじけた。

「人のナンパなんか見て、何が愉しいんだ?」

「アシユマ知らないの? このナンパはね、昨日の『告白カレー』  
の救済措置なのよ?」

「『救済措置』?」

アシユマよりもアーチエルの方が、興味を示した。

「そう、『救済措置』。昨日のカレーは女子から男子への愛の告白  
だった訳じゃない? 今日のナンパはその逆。男子から女子への、  
愛の告白なのよ。これにはルールがあつて、まず昨日カップルにな  
った者はナンパに『出場できない』。声をかけるのは、必ず男子の  
方からでなくてはならない」

「うん、うん」

アーチエルが頷く。

「掛ける言葉は『お嬢さんお茶でもいかがですか?』。OKの時は  
『喜んで』。NGの場合は『御免なさい』。でもまだ終わらないの」  
「うん、うん」

尚もアーチエルは頷く。

「OKして茶屋に来た二人が会話して、この人でいいわと思ったら、

会計の時、男子におごらせるの。この人イマイチだと思った場合、会計の時割り勘にするの」

「男の人って大変そう」

気の毒そうにアーチエルは零す。

「まだルールはあるわ」

「まだあるんですか？」

アーチエルが訊く。

「後は蛇足よ。一度、どんな形であれ、断わられた男子は、二度とその女子を口説く事が出来ないの。さり気無いルールだけれど、非常に重要なルールよ。女の子がその男の子をチョツといいなあと考えた時に御免なさいをしまい、二度と彼以上の男の子が現れなかったりしたら、目も当てられないものね」

エフアールが淡々と言う。

「まあ、それはそうかも……」

アーチエルが小首を傾げ考える。

「例えば、御覧なさい？ 彼女」

「あつ！？ サクラコさん！？」

アーチエルが軽く驚く。

「ああ、そういえば彼女、貴女と同じ班だったわね。いい？ 彼女を見ていなさい？ ……ほら、良い男が引つ掛ったわ」

よしず越しにサクラコ嬢がみえる。

「ああ、サクラコさん……」

アーチエルは心配になった。

確かに良い男だったが、軽薄そうに見えたからだ。

（お願いサクラコさん！ その人達は駄目よ！）

願いが通じたのか、サクラコは、その男達を振っていた。

「ほらね？ 良い男が引つ掛つても、あんな感じで振ってしまったって……二度とおいしいチャンスには廻り逢わないのよ？」

エフアールが嘆いた。

逆に、



「はあ、良かった」

そう言ったのはアーチエルだった。

「何で良かったなのよ？　良い男の方が、良いに決まってるじゃない？」

「だって、あの男の人には申し訳ないんですけど、軽薄そうに見えたから」

「『軽薄』だなんて、ナマ言っちゃって、この」

エファールは軽くアーチエルの額を小突いた。

「いた。ご、ごめんなさい……」

「で、訊きたいんだが、昨日、今日、と教職員まで巻き込んで、このカップルを作る為の乱痴気騒ぎは一体何なんだ？」

アシュマはこの異常な事態が、何であるか訊いた。

するとエファールが、

「知らないの！？」

訊いてきた。

アシュマが、

「知らん」

と、答えると、

「えええっ！！」

エファールに驚かれ、

「アーチエルなら知ってるわよね？」

そう訊かれて、皆の注目を浴びながら（そう、なぜか店中の注目を浴びながら）答えに窮して、

「な、何故でしょう？」

逆に訊いていた。

それを聴いていた店のマスターが、

「俺の奢りだ。ねえちゃん！」

イカ焼き四人分が奢られた。

どうやら、店のマスターに気に入られたらしい。

それはさておき、アシュマが、

「では」

と、訊きに掛かった。

一体なんであるのか？

と。

それに対しエファールは、

「それは明日のキャンプ・ファイヤーでのフォークダンスの為でしょう？」

と、言った。

「そのフォークダンスが、一体なんだと言うのか？」

アシユマが訊いた。

「そのフォークダンスを踊ったカップルは、永遠に結ばれると言う伝説があるのよ」

「ふぉーくだんすって何でしょう」

ヨデイが訊いていた。

「それよりその伝説ってのが、怪しく無いですか？」

アーチエルが訝しがっていた。

「そこ！！ 人の話し聴いて！！ ちゃんと！！ 最後まで！！」

そこで喉が乾いたのか、エファールはアシユマのなみなみと注がれたぐい飲みを取って一気飲みすると、今日二度目のニコニコ顔のままゆっくりと後へ倒れて、大イビキを掻き始め眠ってしまった。

「伝説、気になるわ」

アーチエルは言った。

「あー、フォークダンスの伝説ね、ホントみたいだよ。OB、OGの追跡調査だか何だかをしたら、九十六パーセントの確立でゴールインをしていたそうだよ」

海の家マスターは言った。

「有難う御座います！」

アーチエルは返事した。

「さて、そろそろ行くか。ヨデイ、サケの割り勘分ここにおいて置くぞ、あとコーラの分もな。あまり呑みすぎるなよ？」

アシュマが金をテーブルの上において行く。

「分かってますって」

ヨディが請け負う。

「毎度」

店の親父が愛想を投げる。

「どうもご馳走様」

アーチエルが頭を下げる。

入れ違い気味でルーランが、海の家に来て来た。

「ルーラン」

アシュマがルーランを認めた。

「ア、アシュマ……」

ルーランがそこで言い淀む。

「まあルーラン陛下、ご機嫌麗しゅう」

アーチエルが言う。

「と、通る！」

ルーランは、顔を紅くして中に入って行く。

「行こう、アーチエル」

「はい！……アシュマさま、ちとお酒臭う御座いますな。今日はもう、キスは厳禁で御座います」

「アーチエルがそれで良いのならな」

「アシュマさま。可愛くございませんよ」

それでもアーチエルは、何の屈託も無くアシュマについて行った。  
一方ルーランは、ヨディの前へ行き、何事かを頼んでいた。

「この、海の家から、移動するのでありますかあ？」

ヨディが顔をしかめる。

面倒なのだろう。

「そうじゃ。今すぐにじゃ」

ルーランは有無を言わせない。

「えゝ面倒くさいなあ。それにエファールさんも運ばなきゃならないし」

「だらしなない女子じゃな」

言つて、指をぱちんと鳴らした。

するとサングラスを掛けた筋肉隆々のビキニパンツ穿いた男達が現れ、エフアールを担ぎ上げた。

「マスター。お代ここに置いとくよ」

ヨデイがちゃぶ台に代金を置く。

「はいよ！ 旦那も忙しいねえ！」

「じゃ、どうも」

「挨拶等どうでも良いのじゃ。早く行くぞ！」

ルーランはルーランの宿泊するサイコ・フライヤーへと向かつて行つた。

ルーランの部屋は両サイコ・フライヤーに一室つつ割り当てられていた。

その内、今は男子側のサイコ・フライヤーの部屋を使う様だ。

つまりは、ヨデイ達が乗ってきた機体である。

どうやら、ルーランなりに気を使った様だ。

「お前達はもうよい。下がっておれ」

ルーランの側近に命じた。

静かにルーランの側近が下がると、ヨデイが、

「で、お話と言うのは、なんですか？」

と、訊いた。

「……サーナリアと言う。じ、実は……」

ルーランの立場としてではなく、サーナリアとしての相談事であるらしい。

「実は？」

「実は、好きなお方が出来たのじゃ」

「それは目出度い。後は告白ですな」

ヨデイは気楽だ。

人の一大事を軽く見る。

「事はそう簡単では無いのじゃ！-！」

サーナリアが大声を張り上げる。

「簡単ではないというと？」

「……好きなお方が二人できたのじゃ」

サーナリアが俯く。

「まさか、その二人と言うのは、アシユマ君とオルバニアンじゃ無いでしょうか？」

ヨデイが指摘する。

「な、何故それを？」

「分かりやすいお人だ。二人とも諦め……」

目を閉じて首を左右に振る。

「諦める事なんて無いのよ！」

エファールがベッドでむくりと起きて言った。

「少なくとも、アシユマに関しては諦めなくて良いのよ。好きな人なんだもの。諦める必要なんてどこにも無いわ」

目が据わっている。

そしてとんでもない事を言っている。

「じゃ、じゃが、アシユマにはアーチエルが……」

怯むサーナリア。

「そんな事関係ないの。当って、当って、当りまくるの！ 何もしないうちから諦めるよりはずっと良いわ！」

「あの、エファール？ 君はまだアシユマ君の事を？」

ヨデイは不安になり訊いてみた。

「あなたも相当の馬鹿ね！ 私は『あなたを選んだ』の！ ほかの誰でもない、ヨデイ・ヨフルと言う男をね！ わかった？」

そう言ってエファールはヨデイにキスをした。

特別濃厚な奴を。

そういうヨデイは、逆にエファールに覆い被さる形で、エファールにキスを仕返していた。

「うーん。ヨデイ……ああ」

「見てられん。この部屋は完全防音じゃ。シャワーも有る。好きに

するが良い。今夜は向こうで寝泊りするわ」

ルーランはこうして途方に暮れながら、向こうの……つまり女子側のサイコ・フライヤーへと、居を移した。

そう言っても、歩いて場所を変えたただけだが。

そのサイコ・フライヤーに乗ると、

「きゃ、ルーラン様だわ」

とか、

「ルーラン様よ」

等と黄色い歓声を浴びていた。

「ルーラン様」

そう呼ぶ声が聞こえたので、そちらを振り向くと……。

「おお、そちは昨日のカレーの……」

「フェリア・ファソーイに御座います。陛下」

昨日の美少女がルーランの前で頭を下げる。

「おお、そうであつたな。そういうば、わが故国ノリトレアにもファソーイ家があつてな……さて、そなたまさか……」

「はい、ノリトレアのファソーイ家の者に御座います」

「そうか……そうか！！ ファソーイ家の者は、良く余に仕えてくれた。感謝する」

ルーランが明るい表情を作る。

嬉しいようだ。

「いいえ、陛下、全ては国民の為、民の為に御座います。陛下お耳を」

「ん！」

ルーランが耳を貸す。

「いま、ノリトレアは、ガルマインの圧制に苦しめられております。民に重税を布き、半ば奴隷の様に民を『遺跡』なる所へ連れて行き、死ぬまで働かせております。こんな事は長くは続きません。民は経済面と身体・精神面とで追い詰められております。起つ時は『今』しか御座いません！」

「フェリア、近う寄れ」

「はっ」

「そう言うからには、余は勝たねばならん。余が戻った時に味方となる者の顔ぶれは？」

ルーランが声に出して訊く。

「まず、ミフシーヨ公に、我が父アラタ・ファソーイ、他には……」  
「まだ時期尚早だ。ルーラン」

そう言う声に振り返ると、そこにはアシュマがいた。

「『閃光』のアシュマ！ 時期尚早とはどういう事です？ 事と次第によつては許しませんよ？」

フェリアがアシュマを睨む。

「ルーランが帰った所で、集まる仲間は、何割ぐらいだ？」

「……………味方が少なくても、民が立ち上がるわ。そうすれば他の諸侯だって、立ち上がらざるを得ないわ」

「いや、違うな。先ず奴らが考えるのは、ルーランの暗殺だろう。そして国が二つに割れ、悲惨な内戦になるだろう」

「じゃあ、私はどうなるの？ 祖国の為に一生懸命勉強して、民の役に立ちたい一心で……………」

「それで良いんだ」

「え？」

「何が、民の為になるか、その為に勉強するんだ。その為のスコラだと思え」

三人の周りにはいつの間にか聴衆が出来ていて、アシュマの閉めの一言で、

「おお」

と、どよめいた。

ケリー教頭もその場におり、

「見事な『講義』でしたよ」

そう言った。

アシュマは、

「どうも」

一言、言っただけで、何事も無かったかの様にその場を去った。ケリーは、それが彼独特の、照れ隠しなのだと解釈した。

「そ、そうだ。あ、あっち行こうか。大事な話がある」

ルーランが照れ、

「は、はい……」

フェリアも照れていた。

「でも、『今』は楽しもうかなって、思っているんです。私。民の立場から楽しまないと、民の楽しみと言うものが分からないと思ってるんです」

「そうだね」

着いた先は、ルーランの部屋だった。

「え？」

フェリアは驚いた。

そして、

「あ、あの、私達そういう関係になるには、まだ早いのではないかと……」

「入って」

「でも、その、わたし……」

フェリアは、段々怖くなってきた。

が、ここまできたら一蓮托生。

意を決してルーランの部屋の中へ入って行った。

ルーランも続いて自室に入った。

そして上着を脱ぎだした

（あゝん！ やっぱりそうなんだゝん！ 分かったわこうなったら意地よ。ワタクシだって女の端くれ。みてらっしゃい）

フェリアも上着を脱ぎだした。

それを見たルーランは、

「そなた何をしている？ 暑いのか？」

「！ これは失礼を致しました。こう言う物は殿方が脱がすもので



したね。フェリアはお待ちしています」

「そなた、何か勘違いをしている様じゃの。まあ、見ていよ」

ルーランはワイシャツのボタンを外して行った。

思わずフェリアが手で顔を覆った。

「見ていよ！」

ルーランは強く命じた。

「は、はいっ！」

フェリアは、ルーランに命じられた通りにした。

フェリアは、ルーランの手の動きを、眼で追っていった。

ルーランの胸元が肌蹴て行く。

「え？ えええっ！？」

フェリアが見たのは、晒しに巻かれたルーラン……サーナリアの胸元だった。

「ル、ルーラン様……お、お、おん……」

「そう私は女……だからあなたの好意は受けられな……」

「分かりました！ たとえルーラン様が女子にても、私はそれを受け入れます！」

フェリアは言い切った。

「ええ！？」

今度はルーランが驚いた。

「ルーラン様……」

フェリアの柔らかそうな唇が、ルーランの唇に触れつつあった。

「え？ え？ えええっ？ ……ちゅっ」

ルーランの長い夜の始まりだった。

三日目、最終日。

基本的に午前中は自由行動。

アシユマとアーチエルは、午後に行われるトライアスロンのコースを、自転車を借りて見て回る事にした。

今日のアーチェルの格好はTシャツにスパッツ、つば付き帽子にサングラス、と言う出で立ちだった。

スパッツなので（当たり前だが）腰からお尻までのラインが丸分かった。

腰からお尻までのラインは、見事なまでに美しい曲線を描いていて、すれ違う男子学生の視線を釘付けにしていた。

二人は、二人乗りの自転車に乗って、コースを見回っていた。

「アーチェル。ここがレースの始まる場所だ」

アシュマが砂浜に立って、言った。

「スィム・バイク・ランのスィムね？」

アーチェルが応えた。

「じゃあ、バイクのコースも見ておくかい？」

「はい。……アシュマさま、あれ、なにかしら」

「ああ、うちの学校の放送部だな」

アシュマ達が見た物はボックスワゴンの車だった。

天井にはパラボラアンテナが付いている。

衛星放送対応らしい。

「あんな車、サイコ・フライヤーに乗ってました？」

「いや、乗ってなかっただろう。ここまでわざわざ車に乗ってやつ

てきたんだろうさ」

「大変ですね」

「そりゃあ、大変だろうな」

「くすっ」

「？」

「いえ、さも、大変そうに言うので、少しおかしくなって……つい。くすくすっ」

アーチェルが可笑しそうに笑う。

「そうか。じゃあ走ってみようか」

「はい」

コースの往路、右側ははじめ砂浜、徐々に岩場が多くなり、やが

て海岸となる。

ここら辺の海岸は溶岩石で出来ているようだ。

天然のトンネルまである。

視線を右に転じれば藍い海がどこまでも広がっていた。

変わって視線を左に転じれば、こちらは山の風景。

昨日小高い丘の遺跡に行ってきたが、そこが山の風景の始まりだったらしい。

今は岩壁があって、落石防止用のネットが、張られている。

往路の終わりまでやって来た。

「どうだった？ 感想は？」

「コースとしてみると道が平坦で、面白味に欠けると思いました」

「他には？」

「風景を見ると海の藍が綺麗で、結構ダイナミックで……とても良いです」

「ここは正午から、交通規制が始まるのか。それにしても車通りが殆ど無いな……さあ、残りの行程も見えておこうか」

「はい！」

アーチエルは元気に返事した。

復路、右手は岩壁になる。

暫く走った後に、往路侵入口より二、五キロメートル手前で、最後のランに入る。

そして往路侵入口と同じ地点で、ゴールに至る。

「と、まあ、こんな感じかな？ 御感想は？」

「短い行程に設定されたとはいえ、これらを全部走破するとなると、相当体力を消耗すると思うわ。アシユマさまと一緒に走ったとはいえ、これだけ疲れたんですもの。選手達の消耗度は、計り知れないものがあるんじゃないかと……」

「そうだな。そこら辺の所は、あとでオルバニアンなりアルミナなりに、訊いてみようか」

「はい」

その時、黒いスポーツセダンの車が止まり窓を開け、若い女性がその顔を出して尋ねてきた。

「そのあなた、チョツと訊きたいんだけど……」

アシュマは、その少し高圧的な態度に軽い反発感を覚えつつ、振り向いた。

「あら、アシュマ先生じゃないの！」

セダンの窓から顔を出したのは、スコラの校長だ。

正式な名前は教えてもらった事がない。

「校長。こんな時に、こんな所で、一体何を？」

「それは貴方でしょ？ アシュマ先生。こんな若い娘と逢引？ 隅に置けないわね。生徒に手を出すなんて」

「……………」

「あら？ 別に咎めだてなんかしないわ。ただ、トライアスロンを見に来ただけよ」

「そうですね。ならこの道を真っ直ぐ行くとスタート地点近くまでいけますよ」

「そう、ありがと」

杳として実体のつかめない女だ。

アシュマはある種の不気味さを感じつつ、そう思っていた。

海の家では、今日も今日とて不良教師が二人、お座敷に上がり、テレビを前にしてぐったりしながら会話をしていた。

テレビは、トライアスロンのチャンネルに、設定したままだ。

今は何も映ってない。

「あゝ、頭痛いわ。どうしてこの世の中に、二日酔いなんて物が存在するのかしら？」

エファールは痛そうに頭を手で押さえていた。

目を瞑っている。

「あゝ、全くですねえ……それより、エファ、君は初めてだったん

ですねえ」

ヨディは話を転じてきた。

「そ、そうよ。悪い？」

「いや、悪い事をしたのは、僕の方かな？ と」

「どうして？」

「いや、やめときます。また叱られるんで」

「途中でやめられると気持ち悪いわね。言いなさいよ！」

エファールはヨディの髪の毛を引っ張った。

「わあ、いたたた。分かりました。言います。言いますってば」

「最初からそうすればよかったのよ。途中でやめたりするから」

エファールは腕を組む。

「じゃあ、いいいます。……エファは今までアシユマ君に操を立てて、これまで何にも無かった訳でしょう？ それを僕が奪ってよかったのかな？ と……あ、言いたい事は分かりますよ。だから怒らないで」

ヨディは小さくなる。

「大丈夫よ。怒る気も失せたわ。分かっていると思うけど、これだけは覚えておいて。あなたは私が選んだ人なのよ？ だからもつと自信を持って」

「はい」

とは、ヨディは言った物の、エファが好きだったのが、あのアシユマとなれば自信を持つとうにも、その自信は直ぐに萎えてしまう。（これは、自信を持つのも一苦労だな）

早くも自信が萎えてしまった。

「それにしてもシートを汚してしまったわね。サーナリアには悪い事したわ。あのシートが元で、変な事にならなきゃいいけれど」

少し恥じつつエファールが言う。

「それは大丈夫でしょう。陛下のお世話係は、アンさんですからヨディが人差し指を立てて言う。」

「じゃあ、大丈夫ね。……あゝ、この頭痛いの何とかならないかし

ら。もゝヤケだわ！ マスター、ポン酒一升瓶で頂戴！ こうなつたら迎え酒だわ！」

エフアールが大きな声を出す。  
相当苛ついていたようだ。

「エフア、人の頭の上で、がならないで下さい。響いて痛いです」

「あら？ 御免なさい」

「ヨディ。いるか？」

アシユマの声だ。

「！」

二人は何故か慌てふためき始め、隠れようとし、一つの座布団に二人して被り頭をぶつけた。

「何をしてるんだ？ 二人とも」

「新しい遊びですか？」

声の主はアシユマとアーチエルだった。

その時、酒が一升瓶でやって来た。

「すいません、ぐい飲みもう一つと、コーラを」

アーチエルが注文をする。

「はい。畏まりました」

「ここにいるだろうと踏んで、正解だったよ」

アシユマが言う。

「そ、そう」

と、ヨディ。

少しよそよそしい。

「か、勘がするどいわね」

エフアールも、どこと無くよそよそしい。

二人とも、まともに視線をこちらに合わせようともしない。

「お前ら、デキだな？」

アシユマが、ずばり核心を突いた。

「な、何の事やら？」

ヨディは言つて惚けた。

「やっぱり、分かつちゃうのねえ。アシユマにはやっぱり」

エファールは思わず、本当の事を言ってしまった。

「わっ、エファールさん、カマですカマ！」

「えっ？ カマ？」

「いや、今は核心に近かったぞ」

アシユマが言う。

「もしかして、それはアシユマ君独特の判別方法、『勘』ですか？」

ヨディが漏らす。

「そうだな」

「凄いアシユマさま。で、『デキた』って何か出来たんですか？」

これには、ヨディもアシユマも慌てふためいて、何と答えてよい  
か困った。

そこへエファールが、

「出来たって言うのは、二人が愛し合う関係、つまり恋人同士にな  
ったって事なのよ？ でもあまり品の良い言葉じゃないから、あま  
り周りの人には言わないでね。勿論恋人同士になったという事も恥  
かしいから内緒にしててね」

と、丁寧に言う。

「はい」

アーチェルが返事を返した。

「じゃあ、わたし、アシユマさまとデキてるのかなあ？」

「アーチェルの場合はデキかけね。ハートはもうデキてるわ。後  
もうちョツとよ」

「そうかあ、デキかけかあ。早くデキないかなあ？ どうしたらデ  
キるのかなあ？」

それはアシユマに凄いプレッシャーとなった。

ぐい飲みとコーラがやって来た。

「それじゃ乾杯」

ヨディがトホホと音頭を取った。

「乾杯」

皆が言った。

砂浜にて、校長とミス・ケリーが、会話をしていた。

「校長、おいででしたら、もっと早くにお迎えの準備が、出来ました物を」

ミス・ケリーが言った。

「いい。気まぐれで来たのだ。実技が終われば直ぐ帰る」

校長が言う。

「せめて表彰式を」

「そなたが取り仕切るが良いわ。わたしはそれを見て帰ろう」

「そうですか？ それではその様にさせて頂きます」

「うむ」

「校長先生だ」

リイナが言った。

砂浜の端だ。

目敏い。

「え、どこよ？ どこ？」

エミルが搜した。

「ずっと先。わたし校長先生怖い。嫌い！」

そう言っで逃げた。

「リ、リイナ！！……と、言っでアタシも苦手なんだよねえ、あの校長。アタシも逃げようっ」と

エミルもその場から百八十度回転して逃げ出した。

「アルミナ、良い勝負をしような！」

オルバニアンがアルミナに言った。



「ええ、お互いに」

アルミナもオルバニアンに返した。

このトリアスロン競技は、有志の参加者で毎年行われていた。オルバニアンもアルミナもトリアスロンに出席していたのだ。放送部が、この中継をスコラ関係者と、スコラ本校に衛星回線を使って放送していた。

『えー、こちら実況放送席。実況放送は私イコ・フタル、解説には本校体育教師のガリ・イダセ、そして本校教頭のミス・ケリー・サトウが、あたります。宜しく願います』

『宜しく願います』

体育教師とミス・ケリー・サトウが頭を下げる。

『さて、今回の見所はどこにありますか？ ガリ先生』

『そうですね、最初のスイムですね。毎年ここで団子状態になり、有力選手が埋もれて上位に入れませんからね』

『ケリー先生は、いかがですか？』

『そうですね、今年有力なのが、アルミナ・ラ・シアさん。彼女は数少ない女子の出場者で、飛び抜けて実力があります。そして注目したいのが、オルバニアン・マグマイヤー君。彼は全校の中でも、トップクラスの運動能力の持ち主です。期待したい所ですね』

『さて。間も無くスタートです！』

変わってスタート地点。

オルバニアンとアルミナが火花を散らしていた。

「あんたにや負けないよ。オルバニアン。河童のアルちゃんの腕の見せ所だね？」

「なんだいそりや？ それを言うなら、韋駄天小僧のオルちゃんの、脚の見せ所ってか？」

「まあ、見てなよ。我に秘策有りってね？」

「位置に着いて、用意……」

パン！！

開始の号砲が鳴る。

『さあ、今年も始まりました、第六回スコラ杯トリアスロン。今、選手達は最初のスイムに入り……あーっと、スイムで初っ端から、選手は団子状態！前に進みたくとも進めない！今年もこれで、有力選手は消え去ってしまうのか？……おや？一人だけ、大外を回っている選手がいるぞ？はい！これは早い！この選手はどうやら、アルミナ選手の様です。他の選手を尻目に、どんどん差を広げて行くぞ！』

アルミナは集団に巻き込まれるのを嫌い、集団の大外を回り集団から一歩前へ出た。

それは驚異的な速さで集団を引き離していく。  
泳ぎが得意と言ったアルミナの言葉に嘘はなかった。

（アルミナ。そういう事か。それなら）

オルバニアンは、一旦水面から下に潜り、選手達の流れから離れると、そこから離れて泳ぎだした。

『アルミナ選手、独走状態！既にスイムを終え、バイクに入っている！これに追いつく選手は見当たらない……いや、又もや一人、大外からぐるりと回って、団子状態から抜け出た選手がいるぞ！？

この選手は……オルバニアン・マグマイヤー選手だ！早い、早いぞ、これは早い！並み居る選手をこぼう抜きだ！』

オルバニアンも、アルミナに倣い、集団の大外から回り、集団を引き離し始めた。

「アシユマさま。この勝負、どちらが勝つと思います？」

アーチェルはアシユマに、後ろ向きながら寄りかかって訊いた。  
「普通なら、アルミナだろうがな……。それじゃあ面白くない」

アシユマはサケを一口ごくりと呑む。

「面白い、面白くない、の問題なんですか？」

アーチェルがむくれる。

「そうだな……端的に言ってしまうば……そうだ」

それには無視してアシュマが言う。

「じゃあ、わたしはアルミナさんに、勝って欲しいなあ」

アーチェルは面白くないのか、アルミナを応援すると言った。

「じゃあ、俺は、オルバニアンにしておこうか」

アシュマは反対の事を言った。

『オルバニアン選手、やっとバイクに乗ったが、アルミナ選手との距離は、相当離されているぞ。間に合うのか？　オルバニアン選手ようやく走り始めた。その他の選手もあと少しで浜に上がるぞ。さて、現在のアルミナ選手的位置ですが、バイクを始めて千五百メートル。もはやこれは独走態勢といって良いでしょう。視線を元に戻しましてオルバニアン選手は……バイク開始位置より四百五十メートル。速い！　かなり速い速度です！！　が、レースにしてみると、かなり微妙な位置関係となっております』

「微妙な位置関係だって」

と、アーチェル。

「面白くなって来ただろう？」

アシュマが受ける。

「微妙な位置関係だって。あなた達みたいじゃない？」

エファールが言う。

「私達が微妙な位置関係なの？」

アーチェルが訊いた。

「そうよ。早くアシュマに、大人にしてもらいなさい」

「何勝手な事言ってるんだ。アーチェルにはまだ早い」

アシュマが困惑して、そう言った。

「何が早いのか？」

アーチェルが訊いた。

「大人になるには、まだ早いつて事さ」

「？ ……ふん……」

アーチエルには分からないらしい。

アルミナが、折り返し地点を曲がって直ぐに、オルバニアンとすれ違った。

アルミナは、

（オルバニアン……もうこんな所まで……）

そう思い、オルバニアンもすれ違った時、

（アルミナ……やっとここまで。いや、まだまだこれからだ！）  
そう思った。

『……レースも折り返し地点を越え、後半戦に入りました。アルミナ選手とオルバニアン選手の差は五百メートル程までに縮まりアルミナ選手の優勝も危うくなってきました。さて、ミス・ケリー。この二人の優勝争いとなりましたが、これをどう見ますか？』

『そうですね。最初はアルミナ嬢の作戦がぴたりと当たりましたが、オルバニアン君が柔軟に対応し、なおかつ持ち前の運動能力を生かして、アルミナ嬢に迫ってきています。この勝負、分からなくなってきました』

『有難う御座います。さてレースは、バイクハキ口地点まで進行しています。差はなおも縮んでいます』

「あゝ、アルミナさんがあぶない。アシユマさま何とかしてあげてー！」

アーチエルはアシユマに、妙な事をせがんだ。

「何で俺が？」

「アシユマさまが、『その方が面白い』なんていうからあ」

アーチエルがアシユマに文句を言う。

「おいおい、俺のせいなのか？」

「そうよ、アシユマさまのせいなんだから。大体、こんな真昼間からお酒なんて、この不良教師！」

無茶な事を言う。

アシユマがそう思いながらまた一口サケを呑む。

「アーチエル、キュポアに言い方、似てきているぞ？」

「姉妹ですもの、似ていて当然です！」

アーチエルは少し起こっているように見える。

「これは困ったな」

アシユマは手を後ろ頭に持つていく。

「アシユマ。あんまり女の子は、怒らせない方が良くわよ？ 怖いんだから」

エフアールが忠告をした。

「いえ、分かつてるのよ？ わたくしだって、アシユマさまのせいじゃない事ぐらい。でも、ちょっと、甘えてみたくなっただけ」

アーチエルの機嫌は一変し、

「分かつてるよ。アーチエル」

アシユマも、それを承知していた。

「はゝ、暑い、暑い。妬けちゃうわ。全く……ねえ、ヨディ、甘えさせて……」

エフアールはヨディに甘えてみる。

「構いませんよ？」

と、ヨディ。

「じゃあ、今わたしが抱えている借金、二千六百万、立て替えてゝ甘えた声を出した。」

「それは出来ません、えゝ、出来ませんとも！」

「ちえ。ケチ」

『レースは終盤、『ラン』に入ろうとしています。先頭は依然とし

てアルミナ選手。続いてオルバニアン選手となっております。その差は約百メートル。これは微妙な距離となりました。ここでアルミナ選手、バイクを降りてランに入りました。ガリ先生、これは益々分らない情勢となってきた訳ですが、先生はいかが見ますか」  
『そうですね。オルバニアン選手はスイム・バイク・ランの内、ランを最も得意としていますから、まだまだ勝負の行方は分かりません』

『有難う御座います。そして今ここで、オルバニアン選手、バイクからランに入りました。いよいよ最後の一騎打ちになりました！』

「アシユマさまあ。この戦いの行方は、どうなっちゃうの？」

アーチエルが、アシユマに寄り掛かりながら訊いた。

「それは俺にも分からないよ」

アシユマは答えた。

「アルミナさんは勝つう？ アルミナさんはどうなるのお？」

「勝つかどうかは別にして、ただ走ってそれで終えるだろうさ」

アーチエルは焦れながら、

「そうじゃなくてえ……じゃあ、アシユマさまの勘は、何と言っているんですか？」

と、訊いた。

「そうだな……オルバニアンかな？ ギリギリの所で」

「ぶうっっ！」

アーチエルは、アシユマが自分と同じ、アルミナを応援しない事が、癪に障るらしい。

「いいじゃないか。個人個人が、自分の好む選手を応援する。しくく尤もな事だと思うがな？」

「ぶうっっ！」

「ふふふ」

エフアールが笑った。

「？」

「二人はホント、仲が良いのね」

エファールが言った。

「そ、それは……え」と、その……はい」

アーチエルが最後の方は、消え入りそうな声で応えた。

「そう言うエファだって、今、手を繋いでいるじゃないか」  
アシュマが指摘した。

何故手を繋いでいるのが、分かったのと言わんばかりに、

「そ、それは、こ、この人が、て、手を絡めてきただけよ」

エファールはテレながら、手を離した。

「あつ、それはひどいなあ。手を繋いできたのは、そっちじゃないですか！」

ヨディが言った。

「なんですってえ？」

エファはもう、臨戦態勢に入った。

「お二人も、仲、宜しいじゃないですか」

アーチエルが指摘した。

「夫婦喧嘩は、犬も食べないって言うし。今夜のフォークダンスに響かない程度に、して下さいね」

二人はアーチエルの指摘に毒気を抜かれたのか、もう、喧嘩する気も失せていた。

「さ、見てごらん。もうラストスパートだ」

アシュマはTVに注意を促した。

『オルバニアン選手ラストスパートをかけました！ アルミナ選手もスパートをかける。かけるが、精彩にイマイチ欠ける。意地だ！ 両者共、意地と意地のぶつかり合いだ！ ゴールラインはあと少しだ！』

アルミナとオルバニアンが走る。

アルミナが先行する。

オルバニアンが追い上げる。

その差が縮む。

（負けられない、ここまで来て負けられない！）

アルミナは思い、

（勝ってやる！　ここまで来たんだ、絶対に勝つ！）

オルバニアンは思った。

ゴールまであと少し、ほんのあと少し。

二人の距離は僅差となった。

ゴールラインを超えて二人は……。

『た、大変な事になりました。ここ放送席では、ほぼ同着に見えましたが……写真判定が行われる模様です。大変な事になりました。』

ミス・ケリー、今までこう言う事は、ありましたか？』

『いいえ、わたしの知る限り、と言ってもたったの五年間ですが、こう言うケースはかつて無かったですね』

『お、写真判定の結果がでた様です……。これは……全くの同着！同着であります！　これによりスコラ史上初の同着一位、そしてスコラ史上初の二人のチャンピオン、そしてスコラ史上初の女性チャンピオンが、誕生した事になります！！』

表彰式、二人はわざわざ二人して、表彰台の一位の座に乗り、メダルと表彰状、そして冠を貰った。

こうして、今年のトリアスロン大会は、幕を落とした。

オルバニアンとアルミナは、今夜のキャンプファイヤーでの再会を約して、キスを交わして分かれた。

「さて、アシユマさま？　私達も、そろそろ行きましょうか？」

アーチェルがアシユマを促した。

「どこへ？」

アシユマが訊いた。



「アシユマさまはシャワー。少し酒の気を抜いて下さい。そして夜のフォークダンスの準備をして下さい」

「準備？ 準備つつたつて何がある？ 正装する訳でもあるまいし」

そう言いながらも席を立つ。

「じゃあ、また後程……ヨディ様、エファさん。では、失礼します」

「はい、また」

「またね」

ヨディとエファールも挨拶をする。

「さて、我らもお開きにしますか」

ヨディも席を立つ。

「じゃあ、お先に」

アシユマが暖簾を潜る。

「では、また」

アーチエルも立っていく。

「じゃあ、後でね」

エファールが見送る。

アシユマはサイコフライヤーの方に。

アーチエルは浜の方に。

アシユマはサイコフライヤーのシャワーでサケの気を抜こうと思っ  
っていた。

アシユマは海を何となく見つめながら歩いていた。

校長の車が目に留まった。

（まだ校長いるんだ。明日生徒と一緒に戻るのか？）

等とボーっと思っていると、海に漆黒の体が現れ、実像を成して  
いった。

（あれは……）

「ティアマツトだ!!」

浜のあちこちらから、

「ティアマツトだ!!」

「ティアマットがでたぞ!!」

そう言う声が聞こえてきた。

すぐさまヨデイがでてきて、拡声器で、

『前回と同じ戦法を取るぞ。左から火、水、風、土、聖、暗黒の順に並べ! アーチエル様いらっしゃいますか!? 至急放送席まで来て下さい。あと、放送部! 至急放送席まで来て、ここいらのスピーカー、音出る様にセッティングして!』

二三分して、アーチエルが息を切らして、やって来た。

「ご苦労さん! やる事はわかっていますね?」

ヨデイが確認する。

「わたくしが要となつて、バハムートを召喚する事ですね?」

アーチエルが答える。

「はい! 良く出来ました。その通りです」

「あの、アシュマさまは?」

「こんな非常時にもアシュマ君かい? アーチエル様は、少しアシユマ君離れをした方がいいですね」

ヨデイが少し難しい顔をする。

「違つんです。この間の様に、『蜘蛛』と足元で戦われたら、戦いに集中出来ないんです!」

アーチエルが必死な顔をする。

「それは尤もだ」

納得。

確かにそれは困る。

「俺はここにいる」

アシュマがやって来た。

「アシュマさま! 今回はわたしが頑張りますから、アシュマさまは、ここで見ていて下さいね?」

「分かった」

「じゃあ、幸運のお呪い……まだお酒臭いですね。じゃあこっちにちゅっ」

アーチエルは、アシュマの耳たぶにキスをして行った。

「やっぱりアシュマ君離れが必要だな」

ヨディは言った。

「俺に何か出来る事は？」

アシュマが訊いた。

「僕と一緒に、いて下さい」

ヨディは放送席についてそう言った。

『汝黄金の瞳を持つ者よ。

汝黄金の翼を持つ者よ。

罪びとどもが汝を仰がん。

今こそ正義を見せるべし！

出でよ竜神、

バハムート！！』

アシュマには、アーチエルの呪文が聞こえた気がした。

海上に、バハムートの白金色の体が、形を成して行く。

二体は、ほぼ同じ大きさだった。

ただ、前回と違うのが、俊敏さだった。

バハムートが現れたのとほぼ同時に、ティアマットは攻撃を始め、左の首筋にかぶりついた。

『あうっ』

アーチエルは首筋に痛みを感じた。

ティアマットは尚も左の首筋に、かぶりついた。

放送席前にエファール、オルバニアン、アルミナが集まった。

「戦況はどうなってる？」

オルバニアンが言った。

「見ての通りだ」

アシュマが言う。

「見ての通り……つつたって、やられてんじゃねーかよ」

「あたし行くわ」

アルミナが言い出した。

「アルミナさん。行くとっても、何をするんですか？」

ヨディが訊いた。

「そりゃ、アーチエルへの援護に、決まってるじゃねーか！」

「どうやって？」

「そりゃ刺し違えても……」

「馬鹿な考えはおやめなさい。刺し違えるどころか、逆にやられてお終いですよ！」

ヨディが指摘して行くのをやめさせる。

「でも、親友がやられる所を、黙ってみてる事なんて、出来ないよ……」

アルミナは、そうヨディに訴えていた。

「戦況はどうですか」

そこへミス・ケリーがやって来て訊いた。

「見ての通りだ。芳しくない」

アシュマが言った。

「まあ、なんて事でしよう。あのバハムートは、アーチエルさんなのでしょう？ こう言う時こそ、恋人の貴方が、側に付いてあげなくて、どうするのです？」

「……分かった。そうする」

「アシュマ……！！」

ついオルバニアンが叫ぶ。

ミス・ケリーは、何も言わなくとも、皆がアシュマを頼りにしているのだと、気付かされた。

アシュマは召喚士集団の真ん中に行き、アーチエルの所までやって来た。

アーチエルは全身汗だくになって、必死に敵と『戦って』いた。

アシュマはアーチエルの側までやって来て、

「言葉で答えなくて良い。格闘戦のアドバイスをしてやる。いいな？」

アーチエルはこちらを見、頷いた。

「じゃあ先ず、敵の肩口にこちらもかぶりつけ」

アーチェルのバハムートは、敵のティアマットの首筋に噛み付いた。

敵のティアマットは、激痛に思わず口を離した。

「よし、敵の肩口を加えたまま、ブレスを吐くんだ」

アーチェルはこちらを見て、につこりした後、ゆっくりと頷いた。

アーチェルのバハムートはブレスを吐いた。

ティアマットの肩が焼けて行く。

苦痛に悶えるティアマット。

ティアマットは堪らず、バハムートの肩口を狙って、再び咬みに行こうとした。

「アーチェル、反時計回りに回ってかわすんだ。

アーチェルが頷く。

バハムートは回って、ティアマットをいなした。

「口を離すんだ」

ティアマットは、そのままたらを踏み、海面（海底）へ激突した  
「そのままジャンプして、お尻からティアマットの頭へぶち当たるんだ。

アーチェルは、頬を赤らめながら頷いた。

アーチェルのバハムートは、言われたとおりジャンプして、お尻からティアマットの頭へと、ダイブした。

ごりつと、嫌な感触がお尻から広がった。

（いやああ、なんか、ごりつて、言ったあ。ごりつてえ）

アーチェルは心の中で叫んだ。

『いやああ、なんか、ごりつて、言ったあ。ごりつてえ』

それはバハムートの口を通じて、アシユマの耳に届いた。

浜辺は、チョツとした津波となった。

このチョツとした津波での被害者数は、いなかった。

「アーチェル、もう一度」

（いやあ。あの感触。もういやあ。ゆるしてえ）

『いやあ。あの感触。もういやあ。ゆるしてえ』

アーチエルは目を潤まし嫌々をした。

「今がチャンスなんだ、やれ！」

（分かったわよ。アシュマさまのばか）

『分かったわよ。アシュマさまのばか』

バハムートはもう一度ジャンプして、ティアマットの頭上目掛けて、ダイブした。

パキ、ぐちゃっ。

今度は完全に何か、がつぶれる感触を、自分のお尻で味わった。そんな感覚を、得てしまった。

ティアマットは、また光の粒となり消えていった。

「クソッ！ クソ、クソッ！！……一度目はテストだとしても、二度目の今日はアシュマ達を皆殺しにする予定だったのに！ 意外とやりおって、あの小娘め！ それにしても『蜘蛛』の奴が見当たらなかった。どこへ隠れていたんだ、『蜘蛛』の奴め！ あ奴がおらんんだから、個別に対応できなかったのだ！ あ奴さえおれば……！」

これまでの被害状況や、様々な事象に鑑みて、今年のキャンプファイヤーは中止……と言う所だったが、生徒会以下過半数を超えた生徒達の署名により、今年もキャンプファイヤーの開催の運びとなった。

やはり、キャンプファイヤーの伝説にあやかりたいと言うのが、本音だろう。

恩恵は何もカップルだけに限らないそうだ。

キャンプファイヤーに参加すれば、来年の飯盒炊爨のイベントでカップルになれると言われていたし、何よりもキャンプファイヤー

その時に告白をすると言う者まで居たのだから。

カップル成立、不成立は別として。

「うーん、やっぱり何か、催し物があるって言うのは、良いですね」

ヨデイがコンクリートの壁に寄り掛かりながら、しみじみ言った。  
「そうねえ。何といつてもキャンプファイヤーと言うのが、ロマンチックよねえ」

エファールがうつとりする。

「ねえ」

そう言つて、エファールが眼を瞑る。

ヨデイが、口をゆっくり近づける。

二人の口が重なった。

エファールがヨデイに抱きついて来た。

ヨデイがそれを受け止める。

「おほん」

咳払いに二人は、はっとして離れて、声の主を捜した。

声の主は、コンクリートの壁の上、ヨデイの目線がその人物の膝にあつた。

それはミス・ケリーだつた。

ミス・ケリーは、向こうの石段を回つてこちらにやって来た。

「そんなに硬くならなくても良いわよ。ティアマツトも撃退できたし。今夜は特別。キャンプファイヤーが終わるまではね」

「は、はあ」

ヨデイはそう応えるにとどまつた。

「若い人は良いですね。無限の力を感じます」

「教頭も十分若いですよ。まだまだいけます」

「何がまだまだいけるのか分かりませんが、一応礼は言っておきます。有難う」

「あ、陛下ですわ、まあ、可愛らしい子と仲良く……」

エファールが言つた。

「まあ、本当に。あら、陛下もおいたして。女の子とキスしちゃって」

ケリーが目を細めて言った。

「あら、本当に……って！ ヨディ！！」

「い、今は何も出来ません。見守るしか……！！」

ヨディが言った。

「どうかしましたか？ 陛下が」

ミス・ケリーが訝しがった。

「いえ、いえ、いえ。ふる、ふる、ふる」

ヨディが慌てて取り繕った。

言えるわけがなかった。

しかし陛下はいつあんな事になったんだ？

しかも、相手は女子と来ている。

事情を知る者にしか分からない、驚くべき出来事ではある。

そう思った。

「あれは、ミス・サクラコと一緒に踊っているのは……印象にありませんねえ……」

と、ミス・ケリー。

ミス・ケリーの指摘どおり、相手の男は、見た目は今一つ精彩を欠いたが、その分誠実そうな青年だった。

「ほら御覧なさい。あそこで良い男を引っ掛けそこなったから、あんな男と……」

エファールが、それ見た事かと言い放った。

「でも、誠実そうな人じゃないですか」

ヨディは頷いてみせる。

それはそれで良いと思っていた。

そのサクラコより三組後ろを、ミカがジークと二人で踊っていた。

「ああ、あつちはミカさんですね。でも相手がジーク君だとは驚きました」

「へえ、ケリー教頭にとって、あの二人は意外なカップルって事



ですか？」

ヨディは言った。

「ええ、あの二人が一緒にいる所なんて、今まで見た事なかったですし、特にジーク君は一人でいる事が多い生徒でしたからね」

「この臨海学校で、今まで募らせていた想いを、一気に爆発させたって所なのかしら？ ロマンチックでいいじゃない？」

エファールは、ミカと踊っているジークの品定めをし、

「それにしてもあの彼、中々の美形じゃないの。なんで、今まで気がつかなかったのかしら。惜しい事したかしら？」

冗談なのか本気なのか、わからない風に言った。

「ちょ、ちよとエファールさん、いきなり浮気はナシですよ。ぼ、僕の立場がないじゃないですかあ」

ヨディは、ケリー教頭が近くににいるのも忘れた様に、慌ててエファールに抗議した。

「あら、冗談に決まってるじゃない。やあ〜ね〜。ヨディーったら、本気で狼狽えちゃって」

「まあ、最近の若い人達と来たら……おっと、今晚だけはその話は無しでしたね」

「オルバニアンだ……」

ヨディが無感動に言った。

「そうねアルミナと一緒にいるわね」

同じくエファールが無感動に言った。

この二人にとって、オルバニアンとアルミナにはサプライズが無い限り、興味も何も無かった。

が、そのサプライズが起こった。

オルバニアンとアルミナがキスしたのである。

「！！　ありやりやりや！　あの二人は、いつあんな関係になったんだ??」

「そうね、そうよね!?　まあ、仲は良かったけど、いつの間に??」

「あの二人がどうかしましたか？　今宵は無礼講だと行っただじゃありませんか？」

「いえ、弟と妹がキスしている様な、そんな錯覚に陥って……」

エファールが壁に手を着き、早くなつた動悸を覚えながら、そう言った。

大体にして内側の輪で踊っている事自体が不自然だったのである。カップルは内側の輪を踊って回るのが暗黙の了解として成り立っていた。

当然カップルのいないリイナや、エミル等は外側の輪で、一曲ごとに相手を変えて踊っていた。

それで言えばルーランの時も、気付いていなければならなかったのであつたが……。

キャンプファイヤーは赤々と燃え上がって、回りにいる者をオレンジ色に染め上げていた。

それは幻想的な時間と空間で、周りで踊る者を、愉悦と幸福感に包むのであつた。

他愛もない音楽にあわせて、愛する者と一緒にただ簡単な踊りを踊って回るだけ。

それだけなのに、である。

踊っている者達は、何物にも変えがたい幸福感を享受していた。

「アシユマさま？」

アーチエルが呼びかけた。

「？　なんだい？」

アシユマが訊き返した。

「先程は有難う御座います」

「ティアマツトの事かい？」

「はい。あれは、わたくし一人じゃ勝てませんでした。アシユマさまに側にいていただいて、こんなに心強く感じた事はありませんで

した」

「いや、あれはアーチエルのバハムートがいたからこそ、勝てたんだ。俺はただ手伝ったにすぎんよ」

アシュマはアーチエルに微笑む。

「有難う。アシュマさま」

「アーチエル……。」

アシュマとアーチエルは唇を重ねた。

アーチエルが、体全体で震えているのが分かる。

こんな衆目の多い中での、初めてのキスである。

震えて当然だった。

その上でアーチエルにキスをした。

「アシュマさま……」

アーチエルは、アシュマの胸に、顔を埋めていた。

恥かしいのだろう。

耳たぶまで真っ赤にしていた。

「さあ、踊ろうか」

「はい」

そこへスチナ・アガネが立ちはだかった。

かなり露出度の高い服を着ている。

「アシュマ・アトー！ わたしと踊りなさい！ そうすれば、いま

までの非礼を許してあげても良くてよ？」

「……………」

アシュマは黙っている。

「ど、どうしたの？ 何か言いなさいな」

何も話さないアシュマに、スチナは不安を覚えた。

「スチナ。俺の答えはこうだ」

アシュマは言って、アーチエルの耳たぶにキスをした。

「きゃっ！」

アーチエルは少し驚いた。

でも少し嬉しいと思った反面、スチナの事が気の毒に思えた。

それを見たスチナは、その場にへなへなと座り込んでしまった。

「悪いが俺は、アンタに非礼な事を、した覚えはない」

アシユマは言い切った。

そしてスチナは眼を虚ろにし、何かをぶつぶつ言っていた。

アーチエルとアシユマは、そのまま踊りに興じていた。

「僕らも踊ってこようか？ スコラの伝説って奴にあやかっただろ？  
こんな僕でもないよりましだろ？」

「そうね、チョツとあやかっても良いかも」

「それじゃあ、教頭、僕らも踊ってきますので後、宜しく」

ヨディがエファールの手を握り、

「それでは失礼します」

エファールがミス・ケリーに挨拶をし、二人は手に手をとって、輪の中へと走っていった。

「良いわねえ。若い人達は。でも特別なのは今日限り。明日からは  
ビシビシいきますからね！」

キャンプファイヤーは夜更けまで続き、そして次の日、サイコ・  
フライヤーは一路スコラへの帰路へと就いた。

黒い宴はまだ続く。

きつと、この世の終わりになっても、止めはしないだろう。

人の世から隠れての密かな陰謀。

それがこの者達の『仕事』であり『生業』だった。

さて今日の題目は……。

「オロの使うのに丁度良い物がありましたよ」

「ほう、一体それは何かね」

「我らの宿敵オロが、極度の人間不信なのは周知の事実」

「ふむ」

「そんな彼が唯一心を開ける人間は……」

「そんな者がいるのかね？」

「ええ、いますとも。それは、彼の妹、アリア・エバス」

「成程。その女を使うのですな？」

「使いどころは、おいおい決めましょう」

「所でアシユマ・アトーは、いかが致しますかな？」

「そろそろ決着を着けさせますかな？」

「蜘蛛にももう少し働いてもらいましょうか」

## 第十節 漆黒の門、裁きの扉

「さて、二学期も後十日程で終えようとしている今日、とうとう、敵の姿を捉えられず……か」

ヨデイがある種、途方に暮れて呟いた。

いつもの廃教室でヨデイ達は集まって、今日も、ドートネーゼ対策会議をしていた。

「一昨日のティアマット騒ぎに、更に以前のティアマット騒ぎ。敵は二人と言う可能性が出てきました。勿論イレギュラーナンバーが一人で召喚までこなしているという可能性も否認ません。それは一昨日のティアマット騒動で、イレギュラーナンバーが目撃されていないからです」

ヨデイが、これまでの経過を説明した。

「で、こないだ三人まで搾れた生徒は、どうなんだよ？」

オルバニアンが言った。

「それは比較しても意味がないでしょう。それは一昨日は、イレギュラーナンバーが出現してないからです」

「でもよ……」

その時……、

『アシユマ・アトーと、その一党出て来なさい！！ 勝負よ！！』

オルバニアンの言葉を遮って、まるで拡声器の様な大音声で、アシユマ達に挑む者がいた。

「校庭だ！」

アシユマの一声で、皆一斉に駆け出し校庭へと着いた。

「校長！」

ヨデイが叫んでいた。

「ドートネーゼ、ネルファバーゼからの命令により、決着を付けさせてもらっわ！」

校長の腕には少女がガッチリ捕まっていて、逃げ出せないでいた。

「リイナ!!」

アーチエルが叫んだ。

そう、捕まっているのはリイナだった。

「いやああああああっ!! たすけてえ!!」

リイナが叫ぶ。

「人質のつもりか？」

アシュマがゆっくり近付いて行く。

「せんせいいい! たすけてえ!」

「人質だと? そんな愚かな手を使うか？」

校長だった女が、それを否定して言った。

「何？」

「これを使うのさ」

その女はアンブルの様な物と圧力注射器の様な物がセットされた物を用いて、すぐさまリイナにそれを注射した。

「ぎゃっ」

リイナが悲鳴を出した。

暫くすると、リイナの体が成長し始めた。

無残に服が破けて行く。

「ま、まさか……」

アシュマは絶句した。

「その『まさか』で、多分正解だと思うけどねえ」

校長と呼ばれていた女が言う。

「貴様、一体何者だ？」

「ふははははははっ!! よく聴くが良い! わが名は『アビス』」

「!! イレギュラーナンバーの統括責任者だ!!」

「……そして私が『蜘蛛』さ」

「今までの十倍ナノマシンを注入したんだ! それなりの仕事をしなさい」

アビスが言った。

「はい、マイ・マスター」

『蜘蛛』が言った。

「ちっ、外道め！」

アシュマは舌打ちをした。

「まだまだ驚いてもらうよ……ズーズーリー、ズーリーズー、リーズーズー……」

アビスが呪文を唱え始めた。

「アシュマ！！ 禁呪よ！！」

エファールが言った

「分かっている」

アシュマが鬼虎の柄に手を添えて、アビスの方へ向かっていこうとした時、『蜘蛛』が邪魔をした。

「アンタの相手はアタシさ。時間が無いんでね。直ぐ行かして貰うよ」

『蜘蛛』が、例の二つの大振りなククリで、攻撃してきた。

その時……。

『我との盟約、血の契りよ、

我が名に寄りて、開けよ地獄の七つの門。

七つの戦車に七頭の馬。

汝は来たれり、鎌を持ち、

あまねくとがびと、滅ぼさん。

出でよ、我が名の下に。

セブンス・ゲート！！』

「『セブンス・ゲート』だと？」

アシュマは、蜘蛛の攻撃を受け止めながら、呟いていた。

「訊いた事がない呪文だわ」

エファールが言った。

「攻撃魔法なの？ 召喚魔法なの？」

アーチエルは困惑していた。

「要は操ってる本人をやれば良いって事だろ！？」

オルバニアンが、対魔導機兵用ライフル（改）から十四・五ミリ



弾を発射した。

アビスはこちらを見ていない。

完璧にアビスを捕えたと思ったその瞬間、弾が弾かれた

「クソッ！ 強念者か！ それなら直接！」

オルバニアンはアビスめがけて、直接刀で切り込もうとした。

「来たか」

アビスが呟いた。

「！！ オルバニアン上だ、上！！」

ヨデイが叫んだ。

「上？ ……！！」

オルバニアンは急停止し、慌ててこちらに戻ってきた。

同時に上からアビスを守護する様、にアーヌ、カシア、ウルク、

カフルが降って来た。

アシュマは依然『蜘蛛』相手に挺子摺っていた。

「ちいつ、次から次へと……」

アシュマが舌打ちをした。

ヨデイ、オルバニアン、アルミナ、エファールは、アーチエルを

護る様にして陣形を整えていた。

そして中心のアーチエルが魔法を唱えようとしていた。

ウルク、カシア、カフルが攻撃を加えようとしていた。

何故かアーヌが、アシュマ側にもアーチエル側にも、攻撃を加え

ていないのが不思議だった。

『聖なる女神タテラム。』

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ。

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ・ファイヴ！！』

アーチエルがシールドの魔法を重ね掛けした様だ。

横目にそれを見てアシュマは一安心する。

「来た！！」

全ての声を制止して、アビスは何かが来る事を明言した。  
そしてそれは来た。

上空にぼつかりと開いた黒い穴が一つ。  
それが空を覆いつくさん程の大きさに、急速に育った。

「『漆黒の門、裁きの扉』……」

アーチエルが呟いた。

「何ですって？ それは確か破壊の権化バヴェルの異名では。……  
では彼女は『バヴェルを召喚』したというのですか!？」

ヨデイが叫ぶ。

「これは、バヴェルの『漆黒の門、裁きの扉』を模した物。高重力  
の塊よ。そしてこれが起動すれば、全ての物を吸い込む事が出来る  
わ。そしてドートネーゼが望む姿の地球に……」

アビスが恍惚となって言った。

「そんな事をすれば、貴女も『漆黒の門、裁きの扉』に吸い込まれ  
てしまいますよ!」

ヨデイが牽制していた。

「だからこれは、最後の手段。私もあれに吸い込まれるのは御免だ  
わ」

「貴方も大変ね」

『蜘蛛』が言った。

「相手を殺してはいけないという不文律があるからな。リイナ、特  
に君の場合はね」

アシユマが返した。

「何!？ ふざけるな!! 馬鹿にするな!!」

「今はお前の相手をしていられなくなった様だ」

「何だと!？ 私より弱いくせに!!」

『彼方の潮騒、繰り返す者よ。』

煌く記憶、密の罟

真実なるかな、苦き記憶

汝を忘却の海へ沈めん……」

アシユマがゆっくり眩き、『蜘蛛』を跳び越して、アビスの方へ走って行った。

アビスが驚愕の表情をすると、アシユマは一瞬の隙を突き……

『フォゲット！！ バヴェルに関する全てを忘れよ！』

アビスに向けて呪文の詠唱を終えた。

「しまった！！ …… え？ 何を忘れたのかしら？」

そして、アシユマがアビスにとどめを差そうとした時、横合いから『蜘蛛』が飛び出してきて、

「あんたの相手はアタシだよ！」

『蜘蛛』が言い放った。

「アシユマさま！ 空の『漆黒の門』が閉じません！ 召喚魔法の一種らしいので永久詠唱をするか、永久連鎖魔方陣を使っているかと。しかしアビスは召喚中も会話をしていました。ですので、どこかに永久連鎖魔方陣がある筈！」

アーチエルが叫ぶ。

永久連鎖魔方陣。

召喚魔法が、呪文の詠唱を延々と続けなければならないのは、以前に話したとおり。

だが、それでは不便が生じる事もある。

その、サイクルスペルの代わりに、召喚魔法の魔方陣を体のどこかに書き込んでおくのが、永久連鎖魔方陣。

これを書き込まれていれば、最初の詠唱がトリガーキーとなり、あとは呪文の詠唱を続けていなくても、召喚魔法は発動し続ける。

「分かった。……リイナ。聞いての通りだ。お前の相手をしている訳にはいかなかった」

「その名で呼ぶな！！ ふざけるな！！ 行くんなら私を倒してから行け！！」

「仕方ない、……来い」

「うおおおっ！！」

『蜘蛛』は獣の様な雄叫びを上げてアシユマ目掛けて突進した来

た。

そして逆手に持ったククリを上から振り下ろす様にアシュマの脳天目掛けて打ち下ろして来た。

アシュマは一步下がって下段から鬼虎をすり上げた。

鬼虎とククリが交差する。

すると、『蜘蛛』のククリが粉微塵に砕けた。

『蜘蛛』はもう片方のククリを下からすり上げて、股間を狙った来た

アシュマは又もや一步下がって、上段から鬼虎を打ち下ろした。再び鬼虎とククリが交差する。

やはり『蜘蛛』のククリが粉微塵に砕けた。

アシュマの鬼虎が、上段に舞う。

そして、鬼虎の峰で『蜘蛛』の肩口を打ち据えた。

「ア、アンタ……前と別人……」

そう言うのと、『蜘蛛』は気絶してしまった。

「さて、アーヌよ、お前と一戦交えたいが探し物が……」

アシュマが断りを入れ様としたが、アーヌが、

「お前の探し物はあの女の掌にある」

そう教えてくれた。

「済まない」

「一つ貸した」

「アーヌ！ 貴様私の部下の分際で……」

アビスが怒った。

「貴様の部下に等、成り下がった覚えは無いわ」

アーヌは言い放った。

アシュマはアビスの前に立ち、どちらの掌か迷った。

アビスは頑なに両拳を握りしめている。

「右か……」

アシュマは断定する様に言った。

ほっとするアビス。

「左か！」

今度こそ断定した言い方をした。

そして、アビスが手を引くより早く、手の甲から掌までを、半分程斬り割った。

「うっ！」

甲を割られた左手を押さえた。

左手に、永久連鎖魔方阵が、描かれていたらしい。

空の『漆黒の門、裁きの扉』は掻き消えた。

「漆黒の門が消えたわ」

エファールがそう言う。

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される、

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！！』

アーチエルが呪文を唱えて、

ガガガガッ！！

と、カシア、ウルク、カフルの三者を痛打した。

しばらく三者は動かないでいたが徐々に動き出し、

「おのれ！ 卑怯な！！ 隠れていないで、出て来て戦わぬか？」

言ったのはウルクだった。

『……サンダーストライクっ！！』

アーチエルは、

ガガガガッ！！

と、再び三者に、雷の洗礼を浴びせた。

「お前達は見苦しい。暫く待て。直ぐにそちらに行く」

アーヌが言い放った。

「そう簡単に行かせはせんぞ、アーヌ！」

「その言葉を待っていたぞ。アシュマ・アトー」

「悪いが全開で行かせて貰う……アーゲーゲー、ゲーアーゲー、ゲ

「ゲアー……」

「何をする気だ？」

「アーヌは訝しがった

「！ 禁呪！！ アシユマさま止めて！」

アーチエルが悲痛な声を上げてアシユマを止めようとした。

「そうよ止めるのよ！ アシユマ！」

エファールもアシユマを止めた。

『我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無。

無限の力、その一端を見せん。

我を死の淵から救いたまえ。

纏え漆黒の羽根、

ブースト！！』

「ブースト？」

アーヌが訝しがった。

「ブースト！ 一番使ってはならない呪文を」

エファールが言った。

「アシユマさまあ！！」

アーチエルが叫んだ。

音も動作も光でさえゆっくりとした時。

全てはゆっくりと流れる。

しかし時間はない。

ゆっくりとはしていられない。

時間はおよそ一分三十秒。

時は待つてはくれない。

鬼虎を振りかぶってある一点のみを叩くだけ。

何回も、何回も……。

「すげえ、これが『ブースト』の威力かよ！ あのアーヌが手も足も出てねえぜ」

オルバニアンの指摘通り、アーヌの攻撃を紙一重で交わすだけでなく、超高速でアーヌの額から眉間のあたりを正確に叩いていた。

「勘違いしないで、オルバニアン。『ブースト』は確かに強力だけれども、それは体を限界まで酷使して得られる力。いわば諸刃の剣なのよ。一体、アシユマはどこでこんな呪文を見つけて来るんだか」  
エファールが、ブーストの使用を、厳しく咎め立てしていた。  
それだけブーストは、危険なのである。

見える。

アーヌの剣の軌跡が読みきれる。

全てが分かる。

何秒たったのだろう。

後何秒残っているのか。

それまでに、アーヌを仕留めないと。

アーヌの額に、初めてひびが入り始めた。

「うっ、おのれ！ ちょこまかと！」

アーヌは確実に焦り始めていた。

アーヌの額のひびが、確実に大きくなり始めていた。

アシユマはなおも超高速で、アーヌの額を叩き続けていた。  
ぴしっ！

遂に額の傷は鎧を突き破った。

そして額から流れ出す、緑色の液体。

同時にアシユマの動きが止まる。

ブーストの効力が切れたのだ。

たちまち起こる、体中の大激痛。

「うつ……うわあああぁっ!!」

地の底から搾り出す様な、悲鳴を上げるアシュマ。

「いけない、アシュマさま!!」

アーチエルが声を張り上げた。

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。

汝の顔に笑みは無し。

未来永劫繰り返される、

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!』

アーチエルがアーヌに追い討ちをかける。

ガガガガッ!!

と雷鳴が轟きアーヌに雷が落ちる。

「ぐぐ、おのれ卑怯な……」

アーヌはアーヌで、内部がこげでもしたのか、水蒸気を発して、

「皆の者、撤収だ」

と、言った。

しかし、ウルクが、

「今のアシュマ・アトーなれば、倒すのはいとも簡単な事。それを

撤収とは納得いかん」

そう決め付けた。

「ならば試してみるか?」

アシュマが体を震わせながら、ゆっくりと立ち上がった。

「知れた事! この場で貴様を倒し、ドートネーゼ様に献じるのみ

!」

『我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無。

無限の力、その一端を見せん。



我を死の淵から救いたまえ。  
纏え漆黒の羽根、

ブースト！！」

「そんなブーストの二度掛けなんて、体がもたないわ」  
エファールが悲鳴を上げた。

「ア、アシユマさまぁー！！」

アーチエルが絶叫した。

アシユマは自分の限界を明らかに超えて、肉体を酷使していた。

（一体、後何秒保つんだ？ そんな事を考えている暇等ない……か）  
アシユマは手近のカフルの左脇をすり抜けながら、左のわき腹を斬り割り、そしてカシアの右脇を斬り付けながらすり抜け、そしてウルクを袈裟に斬り付け、そしてすり抜けた。

（アー又より柔らかいな）

そんな事を考えながら、三対の脇をすり抜けた所で、時間が切れた。

「……………！！」

今度は絶叫を上げる暇も無く、アシユマは気絶した。

「アシユマ！」

アーチエルは、全校生徒が啞然として戦いの行方を見守る中、気絶するアシユマの頬にキスをした。

「アーチエル、何してんだい！ 早くアシユマを医務室へ！」

アルミナがアーチエルを叱った。

「いえ良いんです」

そう言っている間に、ドートネーゼのサイコ・フライヤーが降下、黒尽くめの男達が出てきてアビスとアー又含め四天王を回収していた。

そしてリイナの『蜘蛛』を回収しようとした時、オルバニアン達にアーチエルが、

「お願い、リイナを助けてあげて！」

と、言った。

「分かった」

「任せときな」

オルバニアンが、アルミナが、黒尽くめの男達から、既に少女の姿に戻ったリイナを守った。

そして自分は、アシュマの脇に座り、鬼虎に触れながらアシュマにも触れた。

再び現れる古代文字。

『システム本体の肉体的構造が更新されています。このまま更新しますか？ はい、いいえ』

アーチエルは『はい』を選んだ。

この間の様に、途端に起こるアシュマの肉体の修復。

アシュマは、間も無く眼が覚めた。

黒尽くめの男達も、アーヌ達を連れ完全に撤収。

サイコ・フライヤーは、リイナを残し、直ちに発進した。

「う、うん……」

アシュマが、意識を取り戻した様だ。

「何とか片がついたようだな。アーチエ……」

ぱん！

響き渡る乾いた音。

アーチエルは、静かに泣いていた。

「おおおっ」

沸く低いどよめき。

アシュマは、自分に何がおきたのか、咄嗟に理解できなかった。

「嘘つき！！ もう、禁呪は使わない筈じゃあなかったの？ それを使って……。『自分勝手な事をするな！ 仲間を危険に晒すな！

もっと自分を大切にしろ！！』そういったのアシュマさまよね？ アタシにはそう言うておいて、自分は堂々と勝手な事をするの！

？ 何で自分を大切にしないの？ 幾ら鬼虎があるからって……治す方の気持ちも考えて！！」

アーチエルが泣きながら訴えてきた。

「済まないアーチエル。約束を破るつもりは無かったんだ。でもこれからの戦いで、きつとまた使う事になるだろう。でも、それは大切な……そう、とても大切なものを守る為に必要なものなんだ。わかってくれ」

アシユマはそうアーチエルを説得した。

「そんな……アシユマさま……そんな言い方をされたら、私……ずるいです」

アーチエルが俯く。

「済まない」

「ばか」

そう言ってアーチエルはアシユマに寄り添った。

すると校内から歓声の嵐が沸き起こった。

「ア、アーチエル、リイナの様子を見に行こうか？」

「う、うん……そうね」

二人は照れて、足早にその場を去って校内へ入って行ってしまった。

校内の廊下は人でごった返していた。

二人は医務室を目指し歩いて行くと、人の垣根が二つに分かれて、二人を通していった。

医務室に入った。

リイナはすでに少女の姿に戻っており、ベッドに寝て意識を覚醒していた。

リイナは二人を認めた。

アシユマはリイナに声をかけた。

「リイナ、大丈夫かい？」

「リイナ平気？　大丈夫？」

アーチエルも、リイナに声を掛けた。

「うん、医務室の先生がもう、大丈夫だって。先生、御免なさい。私、嫌だったの。本当よ。でも注射されると頭がボーっとして、半分ぐらいしか覚えてないの」

「いいよ、もう。もう、いいんだ。全部解決したよ」

「じゃあ、リイナの事、許してくれる？」

「もう許してるよ、リイナ」

「有難う先生」

優しく頷くアシュマ。

そこにオルバニアンがやって来て、

「教頭先生が御呼びだとよ」

告げて行った。

「じゃあ、リイナ。私達、行かなきゃ」

アーチエルが言った。

「わかった。アーちゃん。またね……………先生……………」

「じゃあ、またな」

アシュマはその手でリイナの頭を撫でてやった。

「うん」

ドアの手前で、アシュマは勤務医に病状を訊いた。

勤務医は、ナノマシンのせいで、病状がどう変わるか、予測が難しいと言う。

下手をすればまた、『蜘蛛』に戻りかねないという。

そうかと言って、アシュマは病室から出て行き廊下へと出た。

「ミス・ケリーが御呼びだそうよ。詳しい話が聞きたいんですって」

エファールが廊下でアシュマに告げる。

「分かっている」

アシュマが返す。

「先生、リイナは大丈夫なんですか？」

そこへ、ミカ、サクラコ、エミルが駆けつけて、訊いて来た。

「大丈夫だ。意識はある。ただ、俺も出来る事が見つからない。だから、せめて祈ってやっててくれないか？」

「ここで祈っていても良いですか？」

「ここは今、見ての通り汎用雑多だ。出来れば自室で祈ってもらう事の方が望ましい」

「分かりました。そうします」

「済まん、そうしてくれ。俺はこれから会議だ」

「はい」

ミカ達は何かを言いたげだったが、仕方がないので自室へ戻った。

「そうですか……大体の所は分かりました。このスコラが、『ドートネーゼ』と言う組織によって、管理運営されている疑い有りや無しや？　これが眼目と言った所ですね。そしてその証拠が確認されたと。まあ私も、変だ変だとは、薄々気が付いていましたが。では、その上で問いましょう。あなた方は、スコラに、どうあつて欲しいかを」

ミス・ケリー・サトウは尋ねた。

「ミス・ケリー・サトウ。我々は、スコラは今のスコラのままであつて欲しいと、願っています。たとえこの施設運営権を、オロ・エバス財団が買い上げるとしても。勿論スポンサーが変わるので、多少の無理難題は、言ってくるかもしれませんが？」

ヨデイが皆を代表して答えた。

ヨデイの携帯が鳴った。

そして携帯を取った。

「失礼。ヨデイだ。……オロか。で、どうなった？　……成功したか！　え？　僕が代理を……ふむ……場所か？　このままで良いだろう。……いや、君は挨拶しない方が良いだろう。話がかえつてこじれる。じゃあ、全面的にこのスコラの事は、全部僕に任せてくれるんだね？　分かった。じゃ」

ヨデイは携帯を仕舞った。

「ミス・ケリー・サトウ、たった今連絡が入りました。このスコラは、たった今オロ・エバス財団の物になりました。つきましては理事長も変わります。理事長はオロ・エバス。そして、理事長代理はこの僕になりました。で、実質的な運営は僕に任せられました」

「ええっ!？」

これにはミス・ケリーよりも、周りの人間の方が驚いた。

「なんか、ヨデイ、オロより無茶言いそう。もっと今より女子の体育の授業増やせとか」

アルミナが言う。

「そう、そう。女子は全員ブルマにしろ! とかね」

エファールが言う。

「そうだよなあ夏なんかは全女子の水泳の授業に出たりしてな?」

オルバニアンが言い切った。

「あり得るー」

アルミナとエファールが同時に言う。

「皆さん酷すぎます。精々気に入った女の子に正座させて、苦悶にゆがむその表情を楽しむとかぐらいの方が……」

アーチエルが、ヨデイを弁護したつもりだったが……。

「アンタのが一番えぐいわ」

他の三名に言われた。

「皆さん、僕の事を何だと思っているんですか? アシユマ君!

アシユマ君は味方だよな?」

ヨデイが最後の希望を、アシユマに託した。

しかし、

「……………教頭、こんなのが理事代理で不安じゃないのか?」

アシユマは言い、

「全部不安要因です」

教頭は頭を悩ませ、

「そんな、皆、酷いですよ」

ヨデイの希望も閉ざされた。

「じゃ、じゃあ、早速、理事長代理としての手腕を見せてやる!

まず、ミス・ケリー・サトウ。貴女を本日付で教頭より校長へ格上げし、実質的な学校運営の一切を任せます。それに僕の変わりに、事務と経理に明るい人間を二名、こちらに派遣します。どうぞこき

使っちゃって下さい。僕は外を飛び回って、忙しいですからね。以上ですが、何か問題はありますか？」

ヨディは意気揚々と言った。

「一つ二つ質問が。ヨディ先生。……失礼、ヨディ理事長代理」

ミス・ケリーが言う。

「何でしょう？ どうぞ？」

ヨディが言う。

「一つには、リイナの事なんですが……身寄りのない子なので、こちらに預かるにしても……いつまた凶暴化しないとも限りませんし……」

「それについては、エバス財団の最先端医療チームに、対応させましょう。こちらに医療チームを呼べば、向うに連れて行くより、リイナも寂しくないでしょう。大丈夫。人体実験等は一切致しませんから。もしその兆候が現れたら、すぐ、ここに連絡を入れて下さい」

ヨディが対応した。

「これは？」

「銀龍号への連絡先です」

「ぎんりゅうこう？」

「僕の乗るサイコ・フライヤーです」

「もう一つ質問宜しいかしら？」

「どうぞ」

「あなた方は、直ぐに旅立たれてしまうのですか？」

「とは？」

「皆さん方はいずれ劣らぬ、つわもの揃い。そして優秀な教師・生徒でありました。その中でも、アシマ・アト……貴方は問題も多かったけれど、魔法への造詣も深い、近年まれに見る大変優秀な教師でもありました。それを失うとなるとこのスコラにとっては大変な痛手。これは何とかならぬ物でしょうか？」

「それだけはどうにもなりません。直ぐに発つ訳ではありませんが……」

「せめて、リイナの事後の経過を見て発ちたい」  
アシュマは言った。

アシュマなりのオロへの牽制のつもりらしい。  
「分かった。今日から十日程ここに滞在してそれから発ちましょう」  
丁度二学期が終わります」

ヨデイが言った。

アシュマはゆっくり頷いた。

アシュマ等が教頭室から出てきた所で、ミカ達に遭遇した。  
ここで待っていたらしい。

早速質問がやって来た。

「アシュマ先生、アーちゃん、学校辞めちゃうんですか？」

ミカが悲しげな表情をする。

「それは本人に訊くと良い」

アシュマは答えをアーチエルに託した。

「アーちゃん！」

「ミカさん！」

二人はひつしと抱き合う。

「アーちゃん、学校辞めちゃうの？」

ミカは矢張り悲しげな表情でアーチエルに訊く。

「……うん、十日程したら……」

アーチエルも悲しげに俯く。

「嫌だよ！ 折角お友達になれたのに……嫌だよ……」

ミカは泣き出してしまった。

「そうですね。アーチエルちゃん。貴女みたいに良いお友達って、  
そう滅多に出会えなくてよ。そうになると、とても寂しいですわ」  
サクラコも寂しそうに言った。

「有難う皆さん。わたくしも別れるのは嫌。わたくしも……いやで  
す……」

アーチエルも泣き出してしまった。



二学期の残りの授業と言う物は、気の抜けたサイダーのような物で、試験には全く関係なかったから、レクリエーシヨンの事を……、特にアシュマの授業の場合はそうだった。

それがボール遊びだったり、鬼ごっこだったり……。

だが、アシュマが、他の教師達と違う所は、その遊び、その遊びに体術や格闘術、刀術の動き等が、さり気無く取り入れられている事だった。

これが最後の授業だと言わんばかりに……。

授業が終われば、リイナの見舞いだった。

医務室に静かに入って行く。

そしてアシュマが医療スタッフに経過を訊く。

医療スタッフはオロ・エバス財団の者だ。

「どの様な調子なんだ？」

「はい、ナノマシンの体内濃度は、一にまで下降しました。最初が十、まで投与されていたとなると、これまでに百分の一まで下降した事になります。順調に推移していると思いますよ」

「そうか。有難う」

そして病室の方へ行く。

アーチエルの方が、今日は先に来ていた様だ。

リイナはベッドの上に、起き上がっている。

アーチエルは、リイナの話し相手になっていた。

リイナがアシュマに、気が付いた。

「先生！」

「リイナ。元気になっていたかい？」

リイナと一頻り騒いだ後、リイナは疲れて眠ってしまった。

アーチエルとアシュマは、屋上に来ていた。

「アシュマさま……」

アーチエルがアシュマの脇に座り、俯きながら、  
「私、学校を辞めたくない」

本音をアシュマに言っていた。

「でも、アシュマさまとも、別れたくない」

もう一つの本音も言っていた。

「友達とは？」

「アシュマさまと同じぐらい、別れたくない」

アシュマはそんなアーチエルが愛しくなって、アーチエルのうなじにキスをした。

「あっ」

アーチエルは短く喘いで、声を出してしまった。

「もう、人が真剣に悩んでいるのに、えっち」

アーチエルがアシュマに少し怒った。

「もうここで、こう言う事も出来なくなるのよ？ 寂しくないの？」

「じゃあ、直談判に行こう」

アシュマは悪びれもせずに言った。

「え？」

アーチエルが訊きなおす。

「アルミナと、オルバニアンも誘おう」

「ええ？」

「と、言う訳で、四人でいらっしゃったのですか？」

「はい……」

アーチエルは少し恥かしそうに応えた。

アシュマは、アーチエルとオルバニアン、アルミナと共に校長室に訪れていた。

校長とは言わずと知れたミス・ケリー・サトウである。

「校長、この学校を離れても、折を見てまた復学できる方法は、無いものでしょうか？」

こうアシユマは提案した。

「失礼」

早速ヨデイも、入ってきた。

あの日以来、精力的に理事長代理の業務をこなしている様だ。

ヨデイには教師よりこっちの方が似合っているのかもしれないかった。

そして、

「失礼します。ヨデイ、B条項の三でどれよ？」

エファールが割り込んだ。

「それはですね、これの項目の三番目だから……これですか？ うん、これですね」

ヨデイが指し示す。

「ねえ、その事務と経理に明るい人って、いつ来るの？」

「今日の午後です。あと少しの辛抱ですよ」

「分かりました。失礼しました。全くなんで私が……ぶつぶつ」

エファールはあの日以来、ヨデイの僕と化<sup>しもへ</sup>している様だ。

「失礼しました。皆さん。さて懸案の復学の件ですが、いつにても、何度でも復学と停学が出来る様にしましょう、特別非常駐生徒として。教師に關してもその様に取り計らいましょう。特別非常勤講師と言つ名目で。校長これで宜しいかな？」

「非常に宜しいかと存じます。理事長代理」

「やったあ！」

アーチエルとアルミナは、抱き合つて喜んだ。

「俺は別に、どっちでも良かったんだよなあ」

オルバニアンが言った。

「何冷めた事、言っているのよ」

アルミナがオルバニアンに蹴りを入れた。

「いてえ！」

コン、コン。

ノック音がする。

「お？ 来たかな？ どうぞ」

ヨディが入室を許可する。

ドアが開く。

「失礼します。こちらに、ヨディ・ヨフル様が、いらつしやると訊いて来た者……ア、アシュマ様、アーチエル様、オルバニアン様！」

「おつ。おめえら、アルステインとこの役人、二人じゃねえか」

「名前ぐらいあります。わたしがエヌ・タタラオで、彼が……」

「エス・フンデーネです。十把一絡げにしないで下さい」

「久しぶりだな」

アシュマが声をかける。

「本当にお久しぶりで御座います」

二人が交互に声をかける。

「こつちだこつち」

「はい、王……ヨディ様。それでは皆様。失礼します」

「では諸君、これから会議があるので、これにて失礼」

三人は理事長室へ入っていった。

「名前、あつたんだ」

オルバニアンは呟いた。

アーチエルは早速自室に戻り、室内の皆に、

「わたし、学校辞めなくても、良いかもしれない！」

皆に告げた。

「本当？ アーちゃん？」

「うん、厳密に言つと、一回やめて復学するつて言う形になるらしいけれど……でも学校辞めて、はいお仕舞い、と、言うのはないみたい……」

そして事の詳細を、アーチエルは皆に話した。

「良かったね、アーちゃん。少しホッとしたよ」

ミカが祝福してくれた。

「良かったわね、アーチエルちゃん」

サクラコも、この事を喜んでくれた。

「よかったね」

エミルまでもが喜んでくれた。

「ありがとう、みんな。有難う」

アーチエルはその事を喜んだ。

いつの間にか、涙が出てきた。

「この事に心を砕いてくれた恩人の『彼氏』には、お礼を言ったの？」

ミカが言った。

「あつ！ 今からじゃ遅いかな……？」

アーチエルが慌てた。

もう、日も落ちて、夜になっていたのである。

「明日にした方が良くないんじゃない？」

ミカがそう言う。

「そうね。そうする」

翌日。

アーチエルは屋上にやって来た。

いつもの如く、本を読みながら、そこにアシュマはいた。

アーチエルはゆっくりやって来て、アシュマの側に座った。

「アシュマさま。昨日はどうもありがとう」

「昨日？」

「復学の件で」

「ああ、その事か。別にたいした事じゃない」

「アシュマさまにはたいした事じゃなくとも、私にとっては重大な事。だから、ありがとう」

ちゅっ。

そう言つと、アーチエルはアシュマの唇を奪った。  
アシュマは微笑みながらアーチエルの頭を撫でていた。  
アーチエルは少し照れながらアシュマに寄り掛かった。

日の流れは速く、あっという間にアーチエル達の出発の日となった。

皆が旅立ちを祝つてやつて来た。

ミカ、サクラコ、エミル、校長、スチナ……。

リイナは具合が悪いそうで、来れなかったのが残念だったが……。  
チョツとした騒動になったのが、ルーランとフェアリア・ファソー  
イで、

ルーランが、

「連れて行く」

と言い、フェアリア・ファソーも、

「ついて行く」

と、言うので、しょうがないので、つれて行く事にした。

ルーランとフェアリアの勉強道具一式は、後でアーチエルの物とを  
合わせて送ってもらう事になった。

ミカが代表で、アーチエル達に花束を渡した。

受け取ったのはアーチエルで、アーチエルはその花の多さに、埋  
もれそうになった。花束を持つのを、アシュマとヨディが手伝った。

ミカとアーチエルが抱き合い

「いつか必ず」

「きつと必ず」

約して別れた。

そして、アシュマがミス・ケリー・サトウと握手をして別れた。

クルーが皆、銀龍へと乗り込み、ハッチが閉まる。

「またいらっしやい。私を困らせた息子達」

銀龍号は空の彼方へと飛んで行った。

「あれ？ 約三十八キロオーバーだ」

ヨデイが重量形を見て言った。

「サーナリアかフェリアお嬢様の重量更新、し忘れなんじゃないの  
お？」

オルバニアンが実妹のルーラン……、サーナリアを呼び捨てにし  
て言った。

「うつつ。兄上は、我らのこの愛を、お認めになつては、下さ  
るんですな？」

サーナリアが言った。

「ならん！ 認めてなるものか！」

「うつつ、兄様」

「おかわいそうな陛下。……私達の愛を、お認めになつて下さい  
ませんか？ お義兄様」

オルバニアンは背中に悪寒が走った。

「ええい、そのお義兄様と、言うのはやめい！」

アーチエルは送ってくれた皆に、最後の別れと手を振った。

一頻り手を振り、何か一仕事終えた様な、そんな虚脱感がアー  
チエルを襲った。

アシュマは立ち上がり、カーゴルームへと足を向けた。

「アシュマ君どこへ？」

ヨデイが訊いた。

「チョツとカーゴルームへ」

アシュマが言った。

何か引つ掛る事があるらしい。

第一カーゴルームを開いてみた。

「誰かいるかい？」

がさりと音がした。

「怖くないよ。怒らないから、出ておいで」

そう言つと奥から、人影が現れた。

それは体操着姿のリイナだった。

「先生……怒らない？」

「怒らないよ。ほら、おいで」

「先生」

「何か聞こえたけれど何」

エファールがやって来た。

「まあ、リイナ――！」

「そう大きい声を出すなエファール。リイナが怯える」

「先生、私、大丈夫」

リイナが言った。

「そうか。でも腰に物騒な者ぶら下げてるな」

「これで少しでも皆の役に立てればと……」

少しリイナは照れた。

それは『蜘蛛のリイナ』が使っていた大振りのククリだった。

リイナのような少女には、既にククリと呼べるレベルではなかったが。

「アーチエル！」

アシュマが叫んだ。

「なに――？ アシュマさま――？」

アーチエルが訊き返していた。

「さ、お行き」

「はい……アーちゃん！」

「――リイナ……ああ、リイナ――！」

リイナはアーチエルの胸に飛び込み、アーチエルはそれを受け止めて、力強く抱きしめた。

「そ、そんなに強く抱きしめられたら、く、くるしい……」

それでもリイナは嬉しそうだ。

「ご、御免なさい、リイナ。これからずっと一緒なんですよ？」



「うん、そのつもりだよ？」

「嬉しい」

「うん、リイナも嬉しいよ」

「アシュマ君。今度は、リイナの分の教材を、取り寄せないとね？」  
ヨデイが言った。

「そういう事になるかな？　とりあえずオロの魔の手から、リイナは護られた訳だ」

と、アシュマが返した。

「それを訊いたら、怒るぞあいつ  
と、ヨデイが言った。

「それでも良いさ。あの笑顔には換えられん」

アシュマが微笑む。

アーチエルとリイナの、幸せそうな笑顔がそこにある。

これ以上の物が他に何がある。

アシュマはそう思った。

第四話　了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5571f/>

---

閃光のアシュマ 第四話 スコラ

2011年11月23日12時51分発行